

昭和 55 年度

浪岡城跡発掘調査報告書

# 浪 岡 城 跡 IV

浪岡町教育委員会

## 発刊にあたって

浪岡城跡の発掘調査も昭和52年から継続され、本報告書は昭和55年度調査における成果をまとめたものです。報告書の中にもあるように、北畠氏居館として青森県における中世史解明のために一石を投じるような遺構・遺物が数多く発見されております。とりわけ、本県の発掘調査では最初の出土と聞き及んでおります和鏡二面、鐔の鑄型などは、当時の北畠氏の文化水準や生産活動を知る上で、誠に貴重な資料と言わなければなりません。

また、当委員会で企画しました「児童による発掘調査」は、発掘調査という郷土学習の場を、幼い児童に開放し、文化財愛護の精神を体験によって学びとって欲しいという願いから始まったものであります。児童たちも、日頃学校生活では学ぶことのできない郷土の歴史を、ふきだす汗とともに実感として理解したようです。

今後、浪岡城跡は発掘調査と併行して「史跡公園」としての環境整備を進める予定になっております。関係各位には、旧に倍して御指導・御助言を賜わりますよう切にお願い申し上げます次第です。

昭和57年 3月31日

浪岡町教育委員会

教育長 村上良民



## 例 言

1. 本書は、史跡浪岡城跡環境整備計画策定のため、昭和55年度に行った発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、国・県の補助を受け、浪岡町・浪岡町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査および出土遺物の整理は、昭和55年6月2日から昭和57年3月20日までの約2ケ年にわたって行われた。
4. 本書は、本文9項目、写真図版(PL.)64枚、挿図(Fig.)97枚、付表(Ch.)76項目で構成し、執筆者は項目末尾に記した。なお、編集は工藤清泰が行った。
5. 遺構に関しては、城館期の遺構とそれ以外の遺構について、本文中で記述するように努め、主として城館期に主眼をおいた。
6. 遺物に関しては、分類は素材による方法を採用し、機能等は各項目の中で随意に行った。
7. 付表(Ch.)の中で出土区の記載は、発掘グリッド・遺構名・層位・遺物No.の順に行っている。

EX	<u>H54</u>	<u>SE31</u>	<u>フク土</u>	<u>P 452</u>
	発掘グリッド	遺構名	層位	遺物ナンバー

8. 発掘調査および遺物整理の段階で、以下の方々ならびに関係機関の御指導・御助言・御協力を賜わった。記して感謝申し上げる次第であります。(順不同、敬称略)  
文化庁・青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター・福井県一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所・東北歴史資料館・青森県立郷土館・弘前大学教育学部考古学研究室・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所・八戸市教育委員会・弘前市教育委員会・上ノ国町教育委員会・瀬戸市歴史民俗資料館・三上次男・岩本義雄・高島成侑・間壁忠彦・藤澤良祐・外沢武・三浦貞栄治・千葉嘉美・他
9. 本稿を草している間、多大なる御指導をいただいた平安博物館助教授岩本義雄氏は、昭和57年1月5日に急逝なされました。ここに哀悼の意を表するとともに深く御冥福を祈る次第であります。
10. 本書を作成するにあたり、遺構・遺物の実測、挿図の整理・清浄、写真撮影、原稿の浄書等に参加した人は以下の通りである。  
斎藤とも子、常田紀子、出町佳子・西塚ルリ子、鎌田るみ子、伊藤フサ、佐藤芙美子、伊藤圭子、成田満、成田浩靖、唐牛芳光、成田和佳子、葛西静枝、清野将彦、奈良岡淳、三浦寿徳。

# 本文目次

発刊にあたって

例言

I. 調査にいたる経緯	2
II. 調査の経過	9
III. 発掘区の層序と遺構・遺物	12
IV. 検出遺構と主な遺物	17
A. 掘立柱建物跡	17
B. 竪穴遺構	31
C. 井戸跡	71
D. 焼土遺構	84
E. 性格不明遺構	88
F. 溝跡	103
G. 堀跡	104
V. 出土遺物	117
A. 陶磁器類	117
B. 鉄製品	155
C. 銅製品	160
○浪岡城跡出土の銅製品とその製作について	166
D. 石製品	168
E. 木製品	172
○木製品雑考	185
F. 古銭	187
G. その他の出土遺物	189
H. 縄文時代・弥生時代の遺物	190
VI. 浪岡城跡出土の土師器と須恵器	193
VII. 浪岡落城をめぐる諸問題	199
VIII. 浪岡城跡の火山灰について	213
IX. まとめ	218

## 図 版 ( PL. ) 目 次

<p>PL. 1 浪岡城跡航空写真…………… 1</p> <p>PL. 2 ㊤㊤㊤児童による発掘調査スナップ…………… 11</p> <p>PL. 3 平場調査区南側全景…………… 16</p> <p>PL. 4 平場調査区北側全景…………… 17</p> <p>PL. 5 S B 02全景(北側から)…………… 18</p> <p>PL. 6 S B 06・S B 07全景(西側から)…………… 28</p> <p>PL. 7 M57区全景(北側から)…………… 29</p> <p>PL. 8 S T 50全景(東側から)…………… 30</p> <p>PL. 9 ㊤ S T 50覆土灰検出状況 ㊤ S T 51・S T 52・S X 12全景…………… 32</p> <p>PL. 10 S T 53全景(南側から)…………… 34</p> <p>PL. 11 S T 54・S T 55全景(北側から)…………… 34</p> <p>PL. 12 S T 56・S T 57全景(北側から)…………… 37</p> <p>PL. 13 S T 58・S T 78全景(北側から)…………… 39</p> <p>PL. 14 S T 60全景(北側から)…………… 41</p> <p>PL. 15 S T 62全景(北側から)…………… 44</p> <p>PL. 16 S T 63・64・66・67・68・79全景(南側から)…………… 47</p> <p>PL. 17 S T 64・66・67・68・79全景(西側から)…………… 47</p> <p>PL. 18 S T 65全景(西側から)…………… 50</p> <p>PL. 19 ㊤ S T 71全景(南側から) ㊤同集石状態 ㊤出土遺物(瓦器)…………… 54</p> <p>PL. 20 S T 72全景(西側から)…………… 56</p> <p>PL. 21 S T 75全景(北側から)…………… 59</p> <p>PL. 22 S T 81全景(西側から)…………… 64</p> <p>PL. 23 S T 81出土遺物…………… 66</p> <p>PL. 24 S T 82・S E 24全景(北側から)…………… 67</p> <p>PL. 25 ㊤ S E 20全景(北側から) ㊤馬歯出土状態 ㊤漆器被膜出土状態…………… 73</p> <p>PL. 26 S E 21全景(南側から)…………… 74</p> <p>PL. 27 S E 22㊤木枠出土状態(西側から) ㊤出土曲物…………… 75</p> <p>PL. 28 S E 31㊤集石出土状態(北側から) ㊤木枠出土状態(南側から)…………… 79</p> <p>PL. 29 S E 32㊤木枠と出土した曲物 ㊤同曲物…………… 81</p> <p>PL. 30 S E 33㊤底から出土した木材・桶底等 ㊤出土唐津皿…………… 83</p> <p>PL. 31 ㊤ S X 10全景(東側から) ㊤ S X 17・S F 01・02全景(西側から) ㊤ S X 32遺物出 土状況(南側から)…………… 86</p>	<p>PL. 32 ㊤ S X 37・38・39・40・S D 09全景(南側 から) ㊤ S X 48出土瓦器等 ㊤ S X 31出 土遺物…………… 101</p> <p>PL. 33 S D 05・07全景(K L 56区)(北側から)…………… 102</p> <p>PL. 34 S D 07他(H 56・57区)(北側から)…………… 102</p> <p>PL. 35 ㊤堀跡の発掘状況 ㊤堀跡の発掘調査参加 者 ㊤堀跡東壁断面図…………… 107</p> <p>PL. 36 ㊤堀跡完掘状況 ㊤木製品出土状態…………… 108</p> <p>PL. 37 堀跡遺物出土状態(1)…………… 109</p> <p>PL. 38 堀跡遺物出土状態(2)…………… 110</p> <p>PL. 39 青磁(1)…………… 118</p> <p>PL. 40 青磁(2)…………… 121</p> <p>PL. 41 白磁…………… 124</p> <p>PL. 42 染付(1) ㊤碗類 ㊤堀跡出土の染付…………… 127</p> <p>PL. 43 染付(2)…………… 130</p> <p>PL. 44 染付(3) 赤絵…………… 132</p> <p>PL. 45 美濃瀬戸(1)…………… 135</p> <p>PL. 46 美濃瀬戸(2)…………… 136</p> <p>PL. 47 ㊤天目 ㊤堀跡出土陶器…………… 139</p> <p>PL. 48 唐津…………… 140</p> <p>PL. 49 瓦器他…………… 144</p> <p>PL. 50 播鉢(1)…………… 148</p> <p>PL. 51 播鉢(2)他…………… 149</p> <p>PL. 52 溶解物付着土器(埴塙) 鋳型…………… 152</p> <p>PL. 53 かわらけ…………… 154</p> <p>PL. 54 銅製品(1)…………… 161</p> <p>PL. 55 銅製品(2)…………… 162</p> <p>PL. 56 石製品(1)…………… 167</p> <p>PL. 57 石製品(2)…………… 170</p> <p>PL. 58 木製品(1)…………… 182</p> <p>PL. 59 木製品(2)…………… 183</p> <p>PL. 60 木製品(3)…………… 184</p> <p>PL. 61 古銭出土状態…………… 188</p> <p>PL. 62 ㊤布出土状態 ㊤漆器の被膜…………… 189</p> <p>PL. 63 縄文時代・弥生時代遺物…………… 191</p> <p>PL. 64 土師器・須恵器…………… 198</p>
--	--



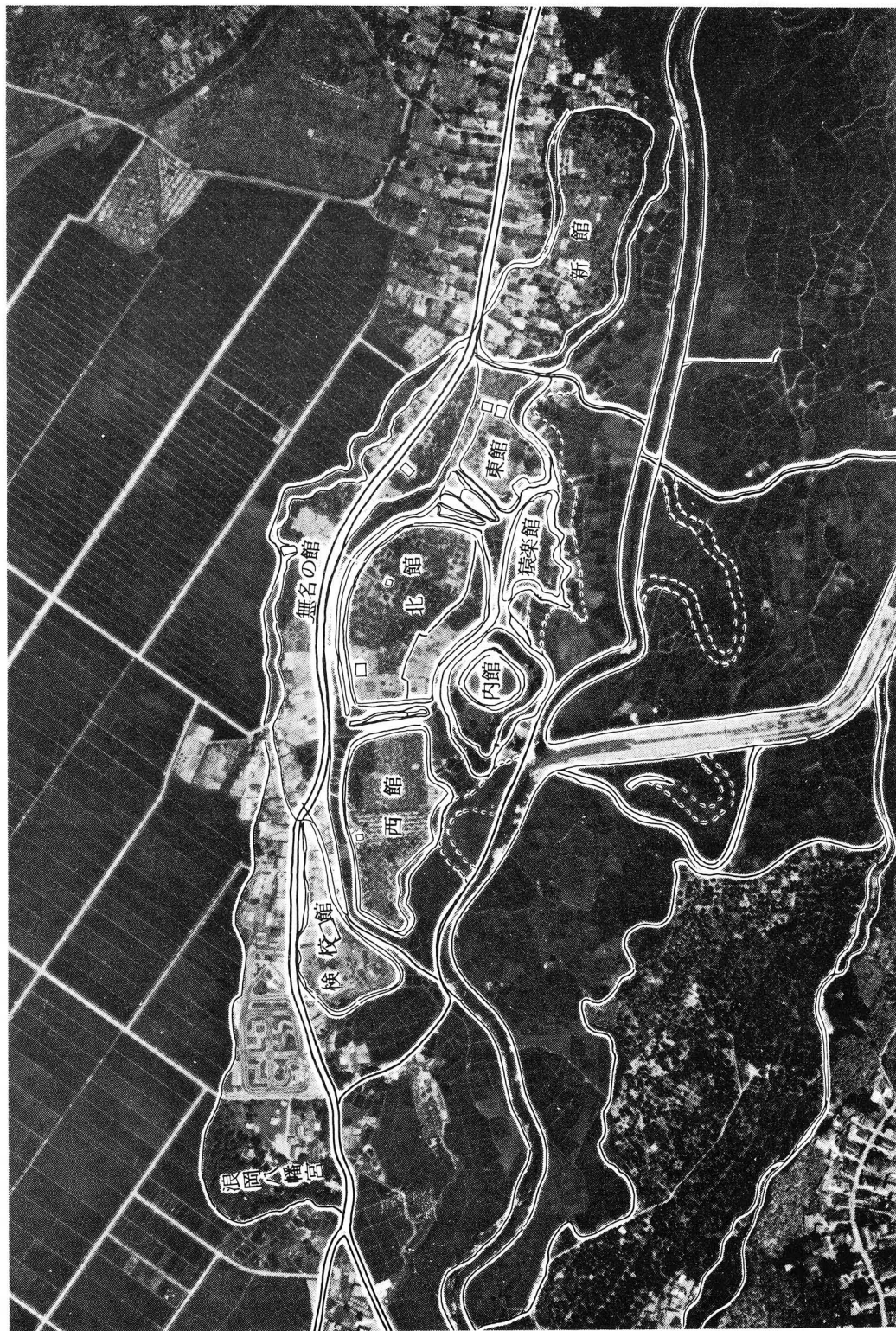
# 挿 図 ( Fig . ) 目 次

Fig. 1	浪岡城跡全体図	5・6	Fig. 50	S X 17遺物出土状況図	92
Fig. 2	グリッド配置図と年度別調査区	7・8	Fig. 51	S X 18実測図	92
Fig. 3	H 53～57南壁層序図	12	Fig. 52	S X 21実測図	93
Fig. 4	I～M 57西壁層序図	13	Fig. 53	S X 26実測図	93
Fig. 5	I～M 55西壁層序図	14	Fig. 54	S X 31実測図	95
Fig. 6	D～H 55西壁層序図	14	Fig. 55	S X 31出土遺物実測図	96
Fig. 7	遺構全体図 (A)	19・20	Fig. 56	S X 32実測図	97
Fig. 8	遺構全体図 (B)	21・22	Fig. 57	S X 33実測図	98
Fig. 9	S B 02実測図	23・24	Fig. 58	S X 37・38・39・40・S D 11実測図	99
Fig. 10	S B 03・04・09実測図	25・26	Fig. 59	S X 37遺物出土状況図	99
Fig. 11	S T 50実測図	30	Fig. 60	S X 46実測図	99
Fig. 12	S T 51・52実測図	33	Fig. 61	S X 48実測図	100
Fig. 13	S T 53実測図	35	Fig. 62	堀跡 ( P Q 55区 ) 東壁断面図	105・106
Fig. 14	S T 54・55実測図	36	Fig. 63	堀跡陶磁器出土分布図	111
Fig. 15	S T 56・57実測図	38	Fig. 64	堀跡鉄銅製品分布図	112
Fig. 16	S T 58・78・S E 23実測図	40	Fig. 65	堀跡木製品分布図	113
Fig. 17	S T 60実測図	42	Fig. 66	堀跡石製品分布図	114
Fig. 18	S T 61実測図	43	Fig. 67	堀跡獣骨類分布図	115
Fig. 19	S T 62実測図	45	Fig. 68	堀跡古銭分布図	115
Fig. 20	S T 63実測図	48	Fig. 69	青磁実測図 (1)	119
Fig. 21	S T 65実測図	49	Fig. 70	青磁実測図 (2)	122
Fig. 22	S T 66・67・S X 29実測図	51	Fig. 71	白磁実測図	125
Fig. 23	S T 68・S X 28実測図	52	Fig. 72	染付実測図 (1)	128
Fig. 24	S T 70実測図	53	Fig. 73	染付実測図 (2)	131
Fig. 25	S T 71実測図	55	Fig. 74	染付実測図 (3)	133
Fig. 26	S T 72実測図	56	Fig. 75	美濃・瀬戸実測図	137
Fig. 27	S T 75・S D 10実測図	58	Fig. 76	天目、唐津実測図	141
Fig. 28	S T 76・S E 30実測図	60	Fig. 77	瓦器実測図	145・146
Fig. 29	S T 77実測図	61	Fig. 78	播鉢実測図	150
Fig. 30	S T 80実測図	62	Fig. 79	溶解物付着土器 ( 埴塙 ) 鋳型実測図	153
Fig. 31	S T 81実測図	65	Fig. 80	かわらけ実測図	154
Fig. 32	S T 82・S E 24実測図	68	Fig. 81	鉄製品実測図 (1) 武具類	156
Fig. 33	S T 84・S X 27・47実測図	69	Fig. 82	鉄製品実測図 (2) 生活用具類	158
Fig. 34	S E 20断面図	71	Fig. 83	鉄製品実測図 (3) 建築具他	159
Fig. 35	S E 20出土遺物実測図	72	Fig. 84	銅製品実測図 (1)	164
Fig. 36	S E 22実測図	76	Fig. 85	銅製品実測図 (2)	165
Fig. 37	S E 22木梓実測図	77	Fig. 86	石製品実測図 (1) 硯	168
Fig. 38	S E 30実測図	78	Fig. 87	石製品実測図 (2) 砥石	169
Fig. 39	S E 31実測図	80	Fig. 88	石製品実測図 (3) 臼	171
Fig. 40	S E 32実測図	82	Fig. 89	木製品実測図 (1)	173
Fig. 41	S E 33遺物出土状況図	84	Fig. 90	木製品実測図 (2)	174
Fig. 42	S F 01・02・S X 17実測図	85	Fig. 91	木製品実測図 (3)	176
Fig. 43	S F 03実測図	87	Fig. 92	木製品実測図 (4)	177
Fig. 44	S F 04実測図	88	Fig. 93	木製品実測図 (5)	180
Fig. 45	S X 10実測図	89	Fig. 94	縄文・弥生時代石器実測図	192
Fig. 46	S X 11実測図	89	Fig. 95	土師器実測図	194
Fig. 47	S X 12実測図	90	Fig. 96	須恵器実測図 (1)	196
Fig. 48	S X 13実測図	90	Fig. 97	須恵器実測図 (2)	197
Fig. 49	S X 14実測図	91			

## 付 表 ( Ch. ) 目 次

Ch. 1 H 53~57南壁層序注記表…………… 221	Ch. 39 S E 22覆土層序…………… 230
Ch. 2 I ~M57西壁層序注記表…………… 221	Ch. 40 S E 30覆土層序…………… 231
Ch. 3 I ~M55西壁層序注記表…………… 222	Ch. 41 S E 31覆土層序…………… 231
Ch. 4 S B 02柱穴計測表…………… 222	Ch. 42 S F 01・S F 02層序…………… 231
Ch. 5 S B 03柱穴計測表…………… 222	Ch. 43 S X 17層序・柱穴計測表…………… 231
Ch. 6 S B 04柱穴計測表…………… 223	Ch. 44 S F 03層序…………… 231
Ch. 7 S B 09柱穴計測表…………… 223	Ch. 45 S F 04層序…………… 231
Ch. 8 S T 50層序・柱穴計測表…………… 223	Ch. 46 S X 10層序…………… 231
Ch. 9 S T 51層序・柱穴計測表…………… 223	Ch. 47 S X 11層序…………… 232
Ch. 10 S T 52層序・柱穴計測表…………… 223	Ch. 48 S X 12層序…………… 232
Ch. 11 S T 53層序・柱穴計測表…………… 224	Ch. 49 S X 13層序…………… 232
Ch. 12 S T 54層序・柱穴計測表…………… 224	Ch. 50 S X 14層序…………… 232
Ch. 13 S T 55層序…………… 224	Ch. 51 S X 21柱穴計測表…………… 232
Ch. 14 S T 56層序…………… 224	Ch. 52 S X 26柱穴計測表…………… 232
Ch. 15 S T 57層序…………… 224	Ch. 53 S X 31層序・柱穴計測表…………… 233
Ch. 16 S T 58層序…………… 224	Ch. 54 S X 31出土遺物注記表…………… 233
Ch. 17 S T 78層序…………… 225	Ch. 55 S X 32層序・柱穴計測表…………… 233
Ch. 18 S E 23層序…………… 225	Ch. 56 S X 33柱穴計測表…………… 233
Ch. 19 S T 60層序・柱穴計測表…………… 225	Ch. 57 S X 37・38・39・SD 11層序・柱穴計測表…………… 233
Ch. 20 S T 61層序・柱穴計測表…………… 226	Ch. 58 S X 46層序…………… 234
Ch. 21 S T 62層序・柱穴計測表…………… 226	Ch. 59 S-X 48層序…………… 234
Ch. 22 S T 63層序・柱穴計測表…………… 226	Ch. 60 P Q 55区北館・猿楽館間の堀跡層序…………… 234
Ch. 23 S T 65層序・柱穴計測表…………… 226	Ch. 61 青磁注記表…………… 235
Ch. 24 S T 66・67・S X 29層序・柱穴計測表…………… 227	Ch. 62 白磁注記表…………… 236
Ch. 25 S T 68層序・柱穴計測表…………… 227	Ch. 63 染付注記表…………… 236
Ch. 26 S T 70層序・柱穴計測表…………… 227	Ch. 64 美濃・瀬戸注記表…………… 237
Ch. 27 S T 71層序・柱穴計測表…………… 228	Ch. 65 天目・堀跡出土の陶器注記表…………… 238
Ch. 28 S T 72層序・柱穴計測表…………… 228	Ch. 66 唐津注記表…………… 238
Ch. 29 S T 75・S D 10層序・柱穴計測表…………… 228	Ch. 67 瓦器注記表…………… 238
Ch. 30 S T 76柱穴計測表…………… 228	Ch. 68 播鉢他注記表…………… 239
Ch. 31 S T 77柱穴計測表…………… 229	Ch. 69 溶解物付着土器(埴塼)・鋳型注記表…………… 240
Ch. 32 S T 80層序…………… 229	Ch. 70 鉄製品計測表…………… 240
Ch. 33 S T 81層序・柱穴計測表…………… 229	Ch. 71 銅製品計測表…………… 241
Ch. 34 S T 81出土遺物注記表…………… 229	Ch. 72 石製品計測表…………… 242
Ch. 35 S T 82・S E 24層序・柱穴計測表…………… 229	Ch. 73 木製品計測表…………… 243
Ch. 36 S T 84・S X 27・S X 47層序・柱穴計測表…………… 230	Ch. 74 古銭計測表…………… 244
Ch. 37 S E 20覆土層序…………… 230	Ch. 75 縄文・弥生時代遺物注記表…………… 255
Ch. 38 S E 20出土遺物注記表…………… 230	Ch. 76 土師器・須恵器注記表…………… 255

PL. 1 浪岡城跡航空写真





# I 調査にいたる経緯

史跡浪岡城跡は、青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所・林本、大字五本松字松本地内に所在する。昭和15年2月10日に国の史跡に指定され、浪岡町の歴史的所産として町民の精神的柱石となっている城郭である。その歴史的経緯については別稿を参照していただきたいが（「浪岡城跡」昭和52年度発掘調査報告書P1～P13）、南朝の名門北畠氏末裔の居城として、津軽地方における中世後半の歴史究明には不可欠の価値を有している。現在は、「史跡公園」化の方向に基づき環境整備計画策定のための基礎調査として発掘を実施している。

昭和55年度調査は以下の調査要項に則して行った。

## 昭和55年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

### 1. 調査の目的

史跡浪岡城跡は、多郭形式の中世城館として規模・歴史的な面から、津軽史の中で重要な意味を持つ城館である。浪岡町は「史跡浪岡城跡」の管理団体として郷土遺産の保護・活用を図るべく、浪岡城跡の史跡指定地内の87%におよぶ公有化を完了し、整備計画策定のため発掘調査を継続中である。

本年度は、当城跡の主郭と推定される北館を中心に、適正な記録保存の措置を講じて、城郭の歴史的究明・整備保存計画の一助となる目的で行なう調査である。

### 2. 調査期間

発掘作業 昭和55年6月2日～11月20日

整理作業 昭和55年11月26日～昭和56年3月28日（実質昭和57年3月20日まで）

### 3. 調査員等

特別調査顧問	虎尾 俊哉	弘前大学教育学部教授
〃	村越 潔	弘前大学教育学部教授
〃	佐々木達夫	金沢大学文学部助教授
調査員	宇野 栄二	浪岡町文化財審議委員
〃	葛西 善一	〃
〃	佐藤 仁	弘前高等学校教諭
〃	奈良岡洋一	藤崎園芸高等学校講師
〃	小笠原 勲	浪岡中学校教諭
〃	村上 巖	〃
調査事務担当	工藤 清泰	浪岡町教育委員会主事
〃	棟方 牧人	浪岡町教育委員会主事補

調査協力員 岡田康博(弘前大学4年)・新岡徹・一条秀雄・佐藤亮子・佐藤貴子・田中ひさ子(弘前大学3年)・徳差義男・西山剛・及川清隆・小野雅史・木村浩一・神篤志・亀山緑・西野緑(弘前大学2年)・奈良岡淳(弘前大学1年)・長谷川眞(八戸工業大学4年)・坂本拓郎(青森大学3年)・三浦寿徳(東海大学1年)

調査補助員 対馬桂子・工藤光子・出町佳子・西塚ルリ子・鎌田るみ子・斎藤とも子・伊藤フサ・成田富美子・常田紀子・佐藤芙美子・伊藤圭子・成田浩靖・成田満

調査作業員 坪田京子・三上ツヨ・品野則子・三上ときえ・成田昭子・猪股みつゑ・工藤ツツ・木村栄子・工藤初江・奈良岡英子・村岡せい子・山内ヤエ・長谷川ちよ・秋元ヨツエ・田川テツ・奈良岡昭江・工藤瑞枝・工藤光子・宇野テル・山田慶吉・木村元八・阿蘇依子・石沢ムツ・常田節子・小笠原昭子

#### 4. 調査地域

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内

#### 5. 調査主体者

浪岡町 町長 平野良一 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村 101 の 1

#### 6. 調査担当者

浪岡町教育委員会 社会教育課 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村 101 の 1

教 育 長 村上 良民

社会教育課長 小笠原武芳

社会教育係長 木村 鉄雄

同 主事 工藤 清泰

同 主事補 長谷川 理(現主事)

同 主事補 棟方 牧人

#### 7. 調査項目

##### a 北館平場

対象区域( E・F・G・H-54・55、I・J・K・L・M・N-54・55・56・57 )

昭和54年度調査区域において、土居・竪穴遺構・井戸・柱穴等の遺構と、陶磁器・金属器を主体とする多数の遺物が出土し、浪岡城跡における北館の重要性が増大してきた。

今後、城跡の環境整備を進める上で、堀跡を除いた平場の復元は遺構の配置と密接な関係を有しているため、本年度の調査にあっては名遺構間の有機的関係を明確に把握する必要が

ある。そのため、本年度は昨年度調査した地域に隣接する区域と、北館平場の中心部に向けて調査を実施するものである。

#### b 堀跡

対象区域（P・Q-55）

北館と内館の間には土塁が存在することをすでに確認しており（K・L-47、昭和53年度調査）、また北館と猿楽館の間にも同規模の土塁が検出され（O・P-55、昭和54年度調査）、井戸跡とともに柱穴等が存在したことから施設（覆屋、橋脚）も想定されるに至った。

堀跡は、浪岡城跡が整備されてゆく段階で、最も重要な対象となる部分であり、出土遺物が豊富な点は他の場所に類似をみない。今後、調査は堀跡の構築とともに、遺物の採集という面を重点に進める必要があり、本年度は猿楽館直下の堀跡を調査対象とする。

### 8. 調査の方法

- a) 発掘はグリッド方式により、グリッドの1単位は $10m \times 10m$ である。細分の場合の最小単位は $2m \times 2m$ である。
- b) グリッド表記は、南北線をアルファベット、東西線を算用数字で表わすものとする。（南北線は、N-26°-W）
- c) 実測は、遺り方測量と平板測量を併用する。縮尺は、原則として1/20を使用するが、目的によって使い分ける。
- d) 堆積層の表記は、ギリシャ数字とし、間層・遺構の覆土の場合は算用数字を用いる。
- e) 遺構の堀り下げは、四分法により、検出の早いものから通し番号を付ける。
- f) 遺構略称 建物跡（SB）、竪穴遺構（ST）、溝跡（SD）、堀跡（SH）、土居、土塁跡（SA）、井戸跡（SE）、性格不明遺構（SX）
- g) 遺物の取り上げに際しては、発掘区・層位（レベル）・日付を記載し、実測図にポイントを入れる。

### 9. 発掘作業終了後の整理

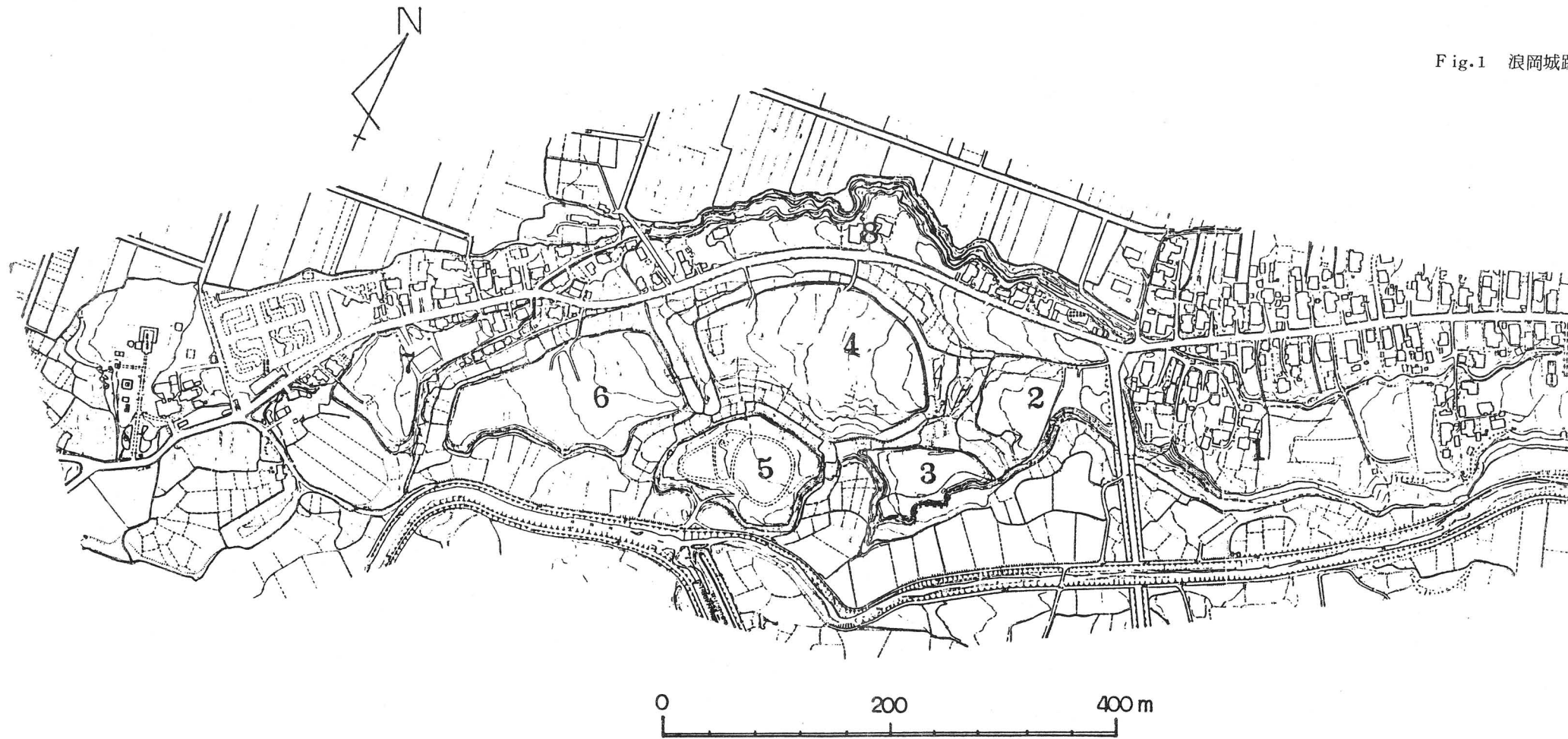
遺物の注記・写真撮影の後、遺構・遺物の実測図作製と清浄を行なう。

### 10. 報告書の刊行

浪岡町教育委員会が次年度中（昭和57年3月まで）に刊行する。



Fig.1 浪岡城跡全体図



史跡指定地……………215,800  $m^2$   
 公有地 188,300  $m^2$

1 新 館	15,480 $m^2$	5 内 館	7,890 $m^2$
2 東 館	5,400 $m^2$	6 西 館	13,830 $m^2$
3 猿 楽 館	3,750 $m^2$	7 検 校 館	8,550 $m^2$
4 北 館	15,450 $m^2$	8 無 名 の 館	

Fig.2 グリッド配置図と年度別調査区



## Ⅱ 調査の経過（調査日誌より抜粋）

- 5・30 第1回調査員打合せ会を開催。本年度調査区域を昨年度に引き続き北館とし、昨年度の調査区域に隣接する西側の区域と共に、猿楽館直下の堀跡を調査区域に加えることを決定する。
- 6・2 社会教育課職員の手で、グリッド設定のため杭打ちをおこなう。
- 6・3 I～M-56・57区の表土除去作業開始。
- 6・5 SX10より鉄鍋がほぼ $\frac{1}{2}$ 個体出土し、幸先のよいスタートとなった。
- 6・12 ST51を20cmほど掘り下げたところ、多量の灰が広範囲に広がることを確認。撮影・実測をおこなう。
- 6・13 SX10の床面よりベルト除去の際、6月5日出土の鍋と接合する個体が出土する。
- 6・17 久しぶりの雨で、出土遺物の整理をおこなう。
- 6・18 E～H-54・55区の表土除去作業開始。
- 6・30 M57区より多数のピット群検出。ST53～57の精査をおこなう。
- 7・1 ここ2週間ほど降雨がないため、地面が乾燥し、遺構の検出に手間取る。堀跡（P・Q-55区）掘り下げ開始。
- 7・8 現在までの検出遺構は、竪穴遺構（ST）15基、掘立柱建物跡（SB）1棟、井戸跡（SE）2基、溝（SD）3本、不明遺構（SX）5基、他柱穴多数。
- 7・9 K・L-54区（SD16周辺）から多数の土師器（坏・甕）片と須恵器片が出土しており、城郭期以前の遺構と推定された。
- 7・10 堀跡（P・Q-55区）の掘り下げも表土下60cmほどで、下駄等の木製品が多数出土し始める。
- 7・14 本日より弘前大学教育学部考古学研究室の学生が参加する。
- 7・15 K57区検出のST59は、竪穴遺構と考えていたが、掘り下げを進めるに従って井戸の様相を呈してきたためSE22へ名称を変更。
- 7・24 SE22の中央部に集石がみられた。
- 7・25 SE22から四方に隅柱を有する木杵が検出される。
- 7・28～30 児童による発掘調査を開催。この試みは、小学校5・6年生を対象として、実際に発掘調査を体験してもらい、文化財愛護精神の高揚を意図したものである。
- 8・6 SE22の木杵内部から、完形の曲物出土。堀跡からは、赤銅製筭・金メッキしたような耳搔き、漆塗り椀などが出土するようになる。
- 8・13～18 盆休み。

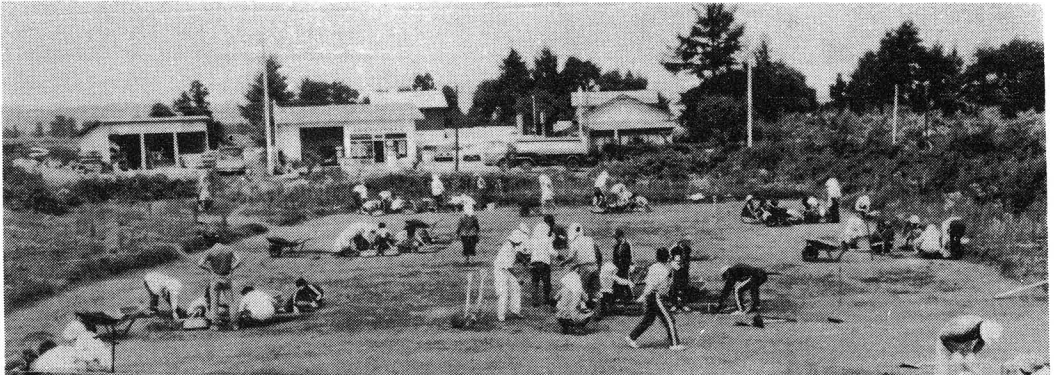


- 8・20 発掘調査作業員・補助員研修。青森県埋蔵文化財調査センターが調査中の今別町山崎遺跡を見学。
- 8・29 S B 02内にかまど跡と考えられる焼土遺構検出。周囲に炭化物も存在。
- 8・30 昭和55年度浪岡城跡発掘調査現地説明会開催。雨天にもかかわらず多数の参加があった。現在までの検出遺構として、掘立柱建物跡（S B）3棟、竪穴遺構（S T）22基、井戸跡（S E）7基、不明遺構（S X）12基、溝跡（S D）7本となっている。
- 9・2 K 57区、S X 17・S E 22の周囲に焼土遺構（S F 01～03）群検出。
- 9・12 J 57区、ピットから古銭17枚がまとまって出土。
- 9・13 I 57区、S X 31フク土から古銭が22枚まとまって出土。穴に炭化した植物繊維が付着していた。
- 9・16 S T 81から銅鏡（菊花双雀文様、外径9.75cm）が出土。他にこの竪穴遺構からは瓦質の手焙り・行火、鉄釘も多数出土している。
- 9・17 S T 81からもう一枚の銅鏡（菊花双雀文様、外径 11.3cm）が出土。前口のものとは一対のものらしい。
- 10・1 堀跡（P・Q55区）の掘り下げ終了。東壁セクションの写真撮影と、断面図の作成をおこなう。
- 10・6 H 54区、S E 31とF・G 54区、S E 33の掘り下げ段階で集石を検出。
- 10・7 E・F 54区、S E 30から炭化米が多量に出土。J・K 54区、S E 32から四本の隅柱を有する木枠を検出。また、S E 24では隅柱のみが残存していることを確認する。
- 10・8 S E 31から木枠を検出。S E 32木枠内から漆器が出土している。
- 10・9 S E 31・32の木枠内から曲物が出土する。また、S E 24の床面から硯（貝殻や波濤文が刻まれている。）が出土し注目される。
- 10・16 S E 33中央部から木製品（桶底・板など）や自然木がバラバラの状態です出土する。
- 10・18 文化庁・服部技官が視察にみえられる。
- 10・30 F・G・H-54・55区から検出されたS B 03は実測の結果、西側への拡張が予想された。
- 11・19 M 55区、S X 48の掘り下げ。羽口や瓦器大型手焙りの破片が出土。
- 11・20 時節がら、不順な天候に悩まされながらも、北館発掘区の遺構実測・精査をすべて終了する。
- ※ 整理作業は、昭和54年11月21日～昭和57年3月20日までおこなった。
- ※ 昭和55年11月24日～30日まで、浪岡町中央公民館三階大会議室において、出土遺物の展示会を開催。特に、発掘作業状況を撮影したビデオ映写は町民に好評を博した。
- ※ 出土遺物・遺構実測図は現在、浪岡町教育委員会で保管している。

（棟方牧人）

PL.2 児童による発掘調査スナップ写真

A



B



C



### Ⅲ 発掘区の層序と遺構・遺物

今回発掘調査した区域は、北館内のD・E・F・G・H-54・55区、I・J・K・L・M-54・55・56・57区、および北館と猿楽館間の堀跡のP・Q-55区である。いずれも昭和54年度調査区と連続するものであり、調査面積は約3,000 m<sup>2</sup>である。層序把握のためセクション図を作製した部分は4箇所である。

#### (1) H53～57南壁層序 ( Fig.3、Ch.1 )

H53区は、昭和56年度調査のため試掘した部分で、それを加えたHライン(東西方向)の南壁セクション図では、基本層序として3～4層が認められる。図上1層は表土、2層は当城跡における主要な遺構を検出する確認面、3層は2層よりも古い時期の確認面、そして4層は当城跡における地山である。H53・54区では2層が明瞭に認められているのに対し、H56・57区では3層が広い分布を呈す。このことは、昭和54年度調査区における遺構確認が3層とした黒色土上でおこなわれた事と同様な傾向を示し、西側から東側への傾斜を考えた場合、耕作等によって西側における2層の存在が失われた結果とも推定される。遺物の出土状態をみても、昭和54年度調査区より今回の調査区の方が数倍以上の出土量を示し、1層および2層を中心に全体的に出土する傾向がみられた。H53・55・56区に存在する11層はしまりが強く、2層直下

Fig.3 H 53～57南壁層序図

H-53

—38.00m

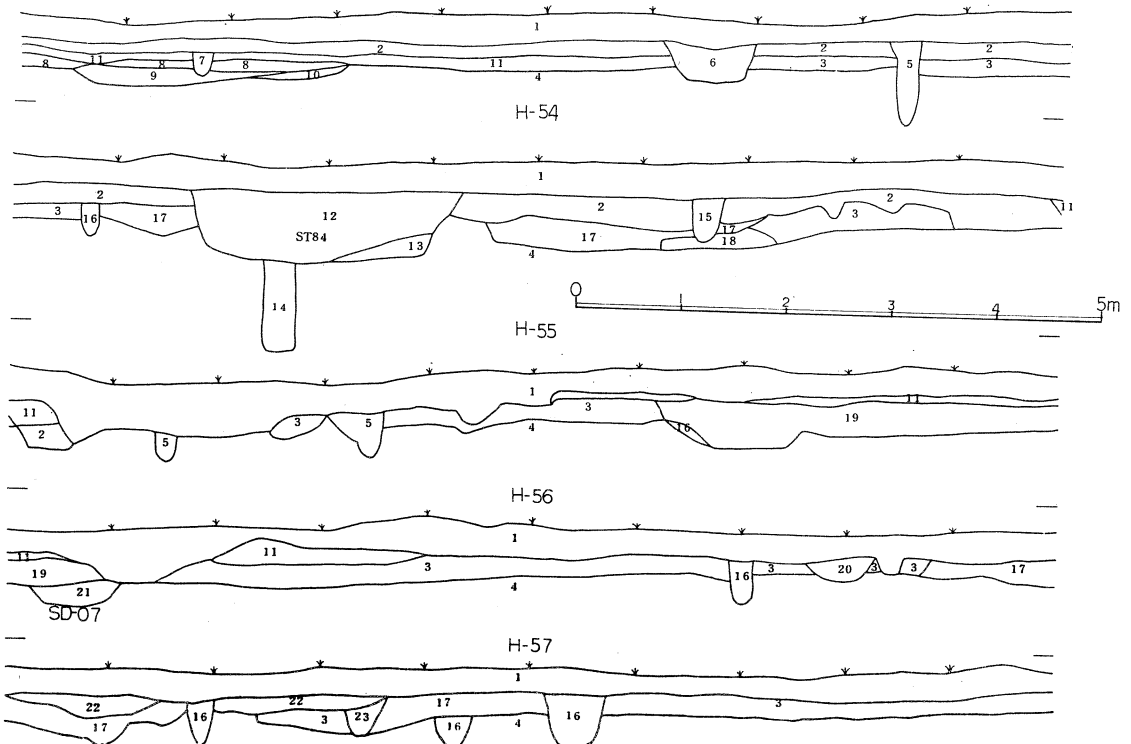
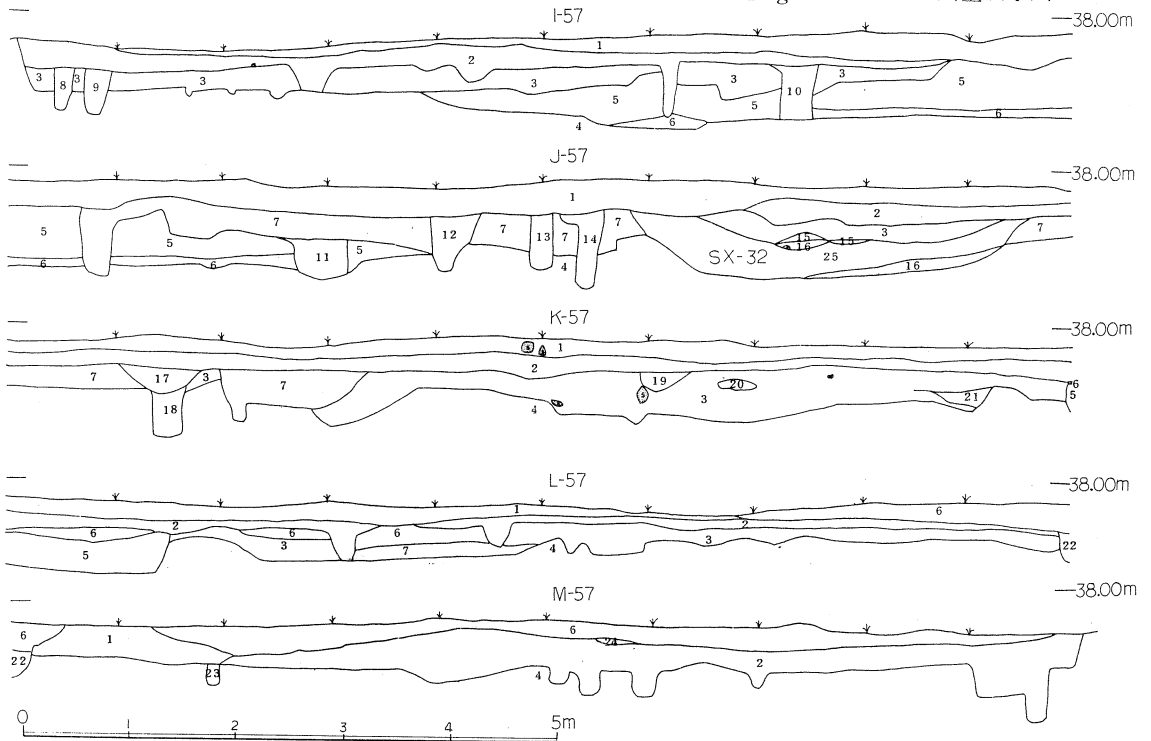


Fig.4 I～M57西壁層序図



あるいは2層に対応する層位に存在するところから、城館期の生活面の一部と推定される。また、2層は全般的に炭化物を含むところから、落城期の生活面の可能性が高い。

(2) I～M57西壁層序 ( Fig.4、Ch.2 )

本層序は発掘区西側の南北セクション図である。基本層序としては4層が認められ、1層、2層、3層、4層であるが、遺構の確認面は3層上面であり2層上面での落ち込みはない。前述したように、発掘区の西側は上面で攪乱を受けていた可能性が高く、さらに図上H57・J57区における5層、7層などは遺構改築や地業による攪乱土と考えられ、遺構確認面とした3層の範囲に含まれるものである。また、M57区のように北館南側部分になると3層が消滅し4層(地山)上面から遺構の確認がなされる。これは、耕作時に南側の堀跡を埋め戻すためかなりの土を移動した結果と考えられる。

(3) I～M55西壁層序 ( Fig.5、Ch.3 )

本層序の中で1層としたものは、表土削除後のため従来2層としていたものであり、Fig.3でみられた基本層序と対応する。J56区10層や13層は、1層からの落ち込みで城館期末期の遺構と考えられ、15層(SB02Pit5)や16層(SB02Pit6)などは3層からの落ち込みでそれらより古い時期に構築されていたことがわかる。ST63も同様である。また、Fig.4でみられたように南側(L56区・M56区)では遺構確認が4層(地山)上でなされ、前述したように

Fig. 5 I~M 55西壁層序図

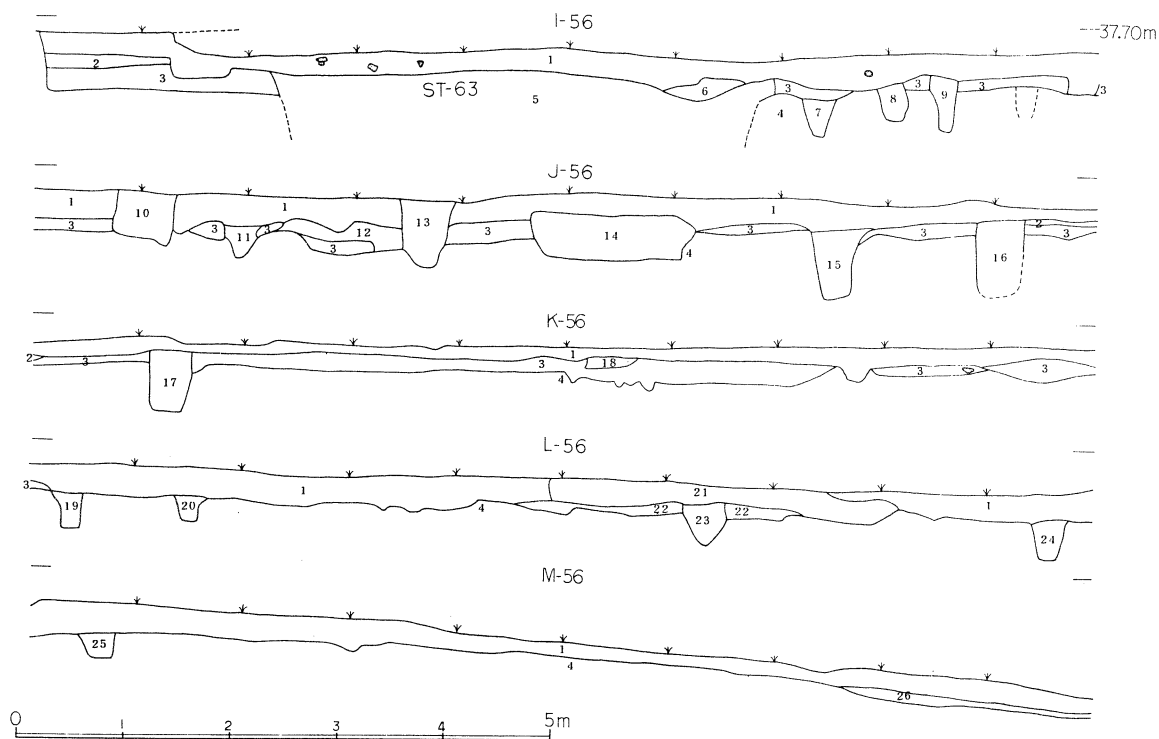
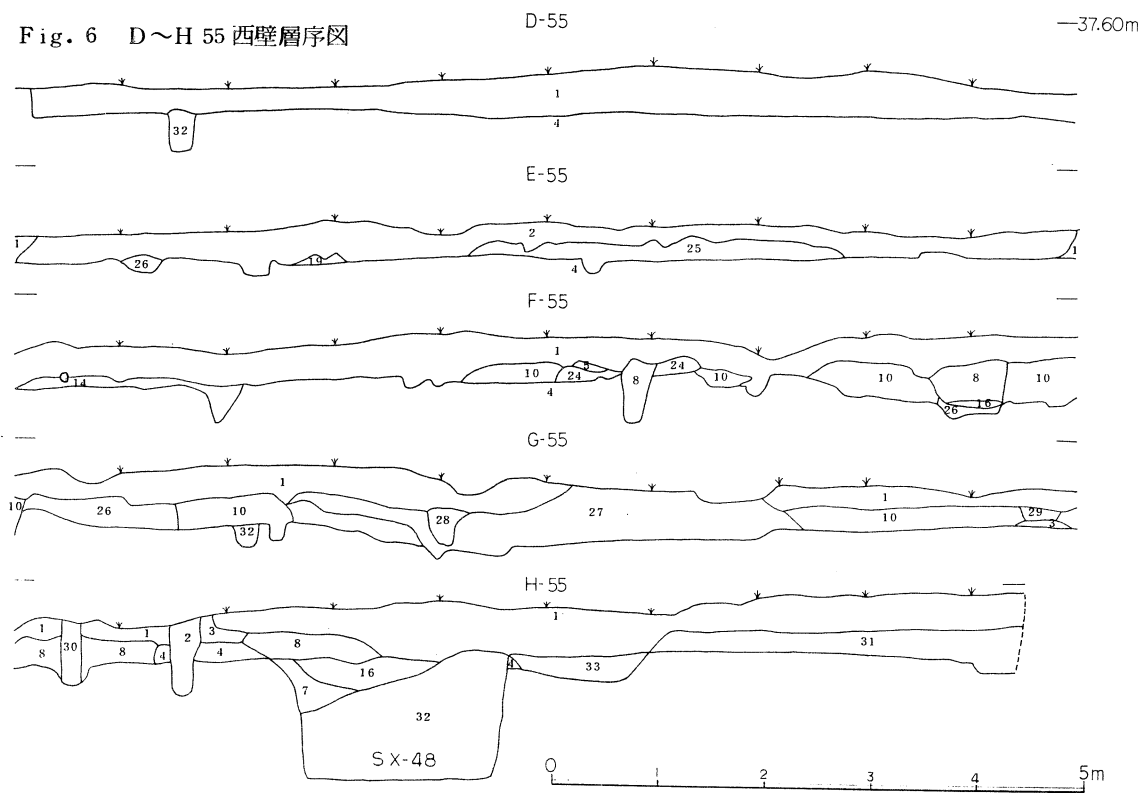


Fig. 6 D~H 55西壁層序図



堀跡への埋め戻しの影響と考えられる。J56区16層端にみられる2層は、掘立柱建物構築時の三和土的な意味を持つと思われる、Fig.3の11層と似た性質を持っている。

#### (4) D～H55西壁層序 ( Fig.6、Ch.1 )

D55区、E55区は北館における北側部分の層序で、南側と同様に表土下にすぐ地山が存在する特徴がある。また、F55区、G55区などは遺構の重複が繁雑で、土層の逆転や攪乱が顕著な所である。特に、H55区北側では土層上面から柱穴の落ち込みがみられ、近世・近代における畑作時の攪乱がかなりあるようである。1層と2層が明瞭に上下関係になっている部分が少なく、偏在していることからそのことがわかる。

#### (5) 浪岡城跡における層序把握

浪岡城跡の発掘調査では、遺構確認面と遺物の出土状況が明確に対応する箇所が少ない。遺物は表土下の2層とした暗褐色土層内から出土する事が最も多く、散在状態でみつかるところが、2層上面における遺構確認は土色と土質の差が明らかでなく、三和土状の部分が無い場合などは3層(一般的には黒色土)上面での遺構確認が大半を占めてしまう。

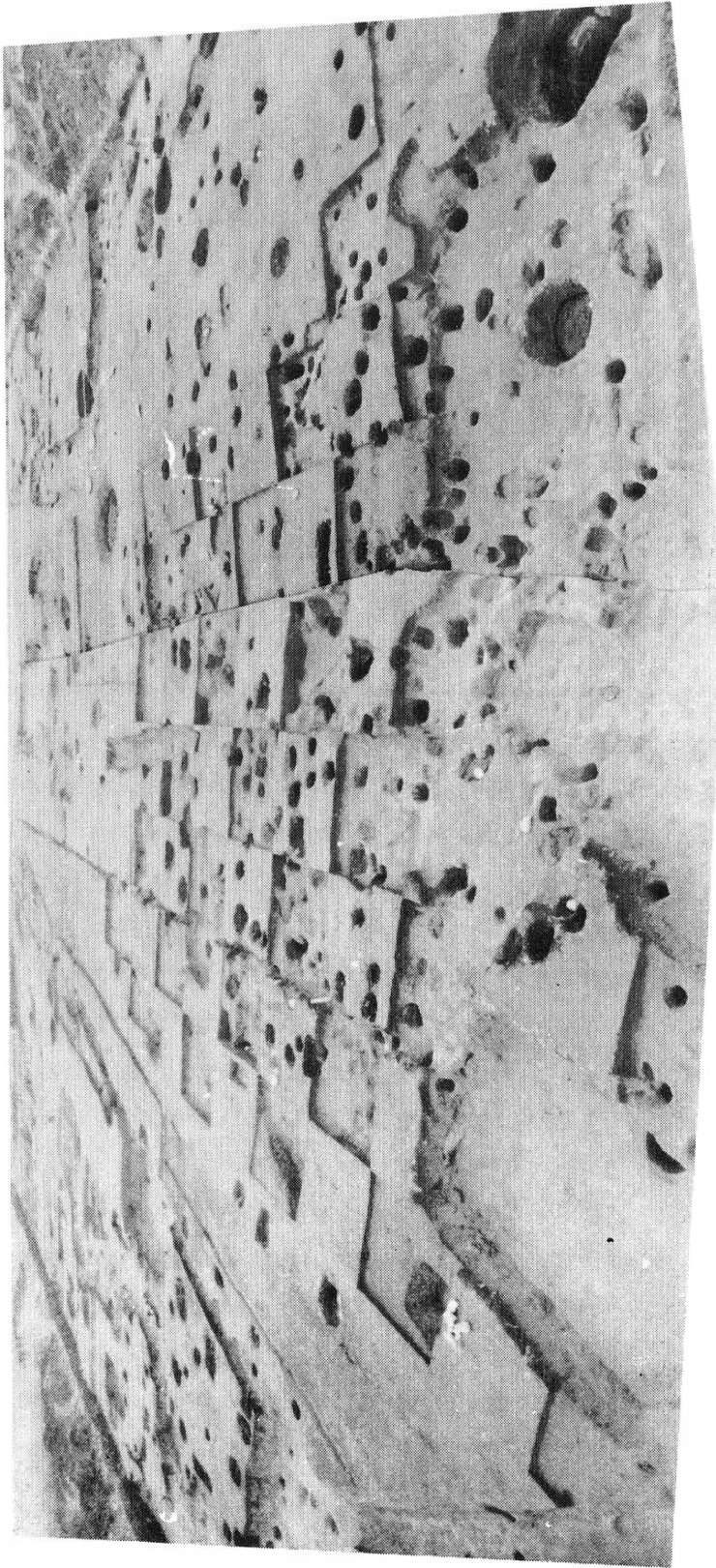
地域によって異なるものの、基本的には2層上面が城館期後半、3層上面が城館期前半の図式が成り立つけれども、現在まで層序関係から遺構の新旧関係を把握したものは前述したSB02など一部にすぎない。もっとも竪穴遺構については、その範囲の確認が容易であることから大部分が3層上面、城館期前半の構築であることが確認されている。その点で、井戸跡は2層上面と3層上面の2タイプ、そして近代以降のものが混在しているが、出土遺物の相違から時期差を明らかにできる可能性もある。溝跡については、一部を除いて3層下面で確認するものが多く、城館期以前の構築が多い。SD07、SD16などは土師器・須恵器を主体に出土し、平安時代末期頃の形成と考えられるが、それらに伴う竪穴住居跡が発見されていない現在、明確に時期決定をできない悩みもある。特に、土師器・須恵器等の遺物は、城館構築時の地業やその後の改修によって表土から最下層、遺構の覆土に至るまで広い範囲に渡って分布しており、陶磁器等を伴う城館期の遺構との差異を明らかにできない状況にある。

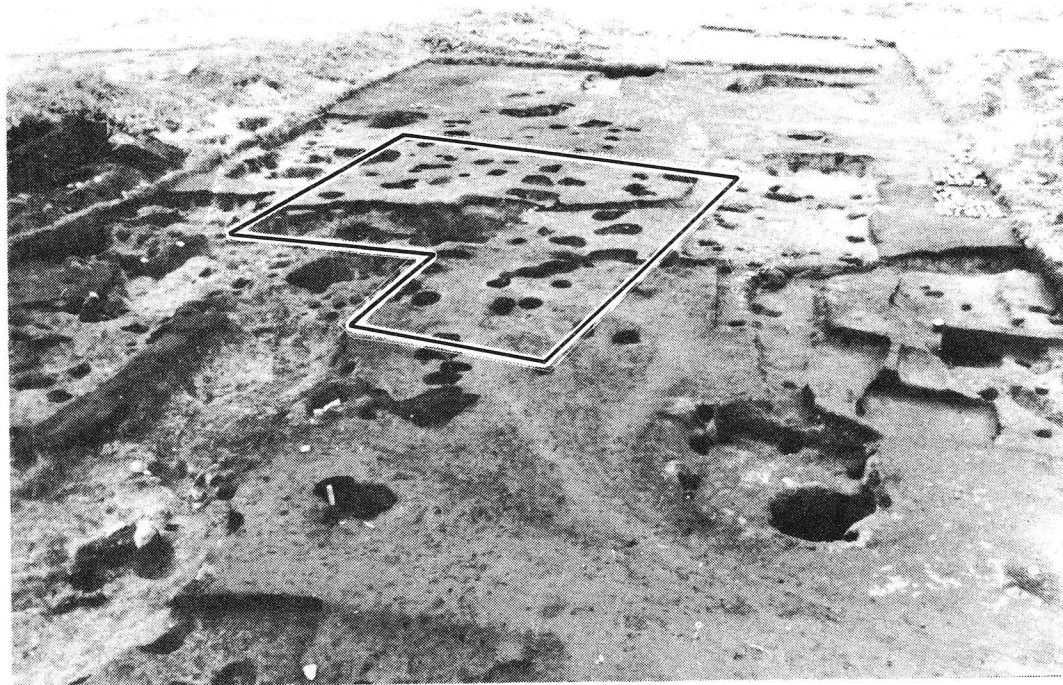
浪岡城落城に際して、建物跡が焼失したという記録は重要視される。1層および2層には少なからず炭化物・焼土・灰が認められ、3層上面ではそれらの痕跡が少ない点を指摘できる。ただし、建物跡自体が粗に立地していたためか全般的に焼土層はみられず、散在している事実と、堀跡出土の遺物(主に木製品)で焼失痕のあるものは廃棄遺物全体の割合から20%ぐらいと推定されることから、大規模な焼失は推定しにくい。また、井戸跡に廃棄された遺物の中で二次焼成にあったものが少なからずみられることは、落成後の廃棄場所として井戸が使われた可能性を高くしている。

( 工藤清泰 )



PL.3 平場調査区南侧全景





#### IV 検出遺構と主な遺物

今回の調査で検出された遺構としては、掘立柱建物跡5棟、竪穴遺構34基、井戸跡16基、溝跡16本、土壇1基、性格不明遺構42基、焼土遺構5基、堀跡1本が城館期のものであり、一部に土師器・須恵器を多量に出土した古代末期の遺構もあったが、遺構内から陶磁器も数片出土するなど明確に時代決定できない面があり、性格不明遺構の中で一括の取り扱いをしている。

掘立柱建物跡や、柱穴配列(柵状遺構)については調査区外に拡張することもあり、昭和54年調査区、昭和56年調査区に及ぶものは、可能な限り一緒に図化し把握に努めた。以下はその概略である。(PL.3、PL.4、Fig.7、Fig.8参照)

##### A 掘立柱建物跡

SB02〔I・J-54・55・56区〕(PL.5、Fig.9)

規模：桁行6間(1099cm)、梁間5間(902cm)、面積約99.13m<sup>2</sup>

方向：梁間(南北)方向がN-18°-W。

重複関係：ST50(新)

覆土：柱穴内は暗褐色土と黄褐色砂質土の混土が多く、部分的に炭化物を含む柱穴もみられた。

出土遺物：柱穴の覆土から青磁皿(Pit 17)、美濃灰釉皿(Pit 29)、鉄釘(Pit 26)など

の出土があった。

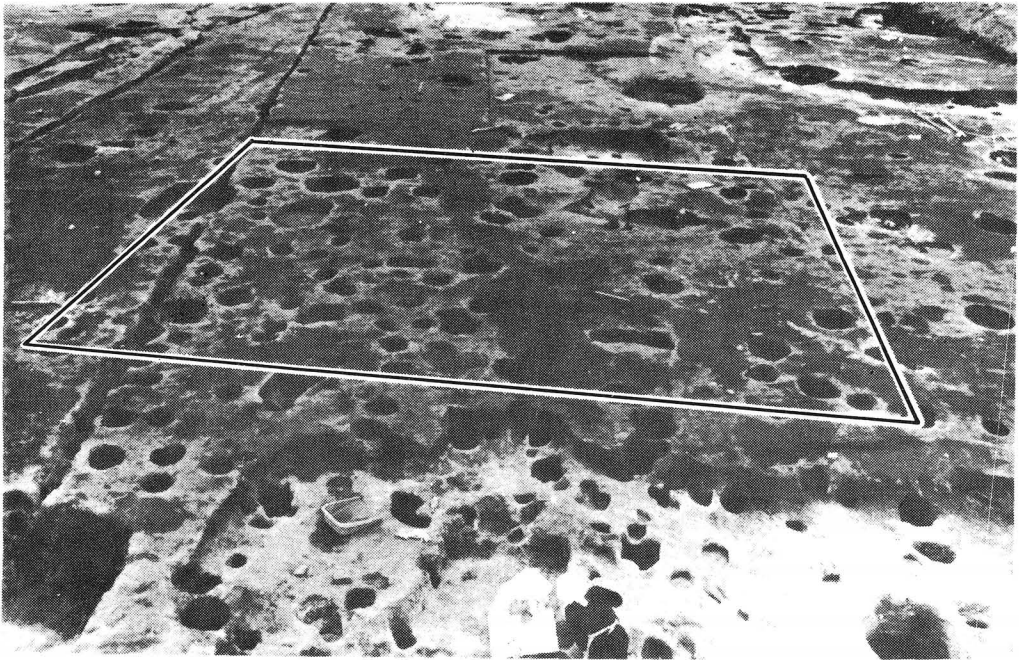
特 徴：本掘立柱建物跡は、柱穴の確認が比較的容易であったため、柱穴配置や範囲が明瞭に検出された。Fig. 9でも知れるように、3間×4間の母屋に四面庇という構造で、母屋部分の柱穴規模（形、深さ）と庇部分のそれとは相違がみられる。つまり、母屋部分の柱穴は形状がすべて方形基調で深さも平均80cm以上となるのに対し、庇部分は形状が方形、円形、不整形など統一性がなく深さも平均55cmと簡易な構築がなされている。（Ch.4参照）

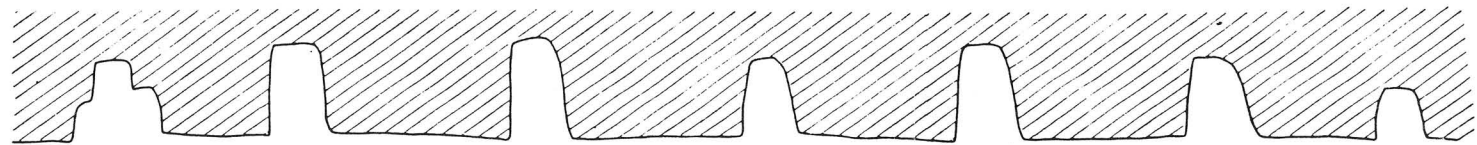
また、間尺も母屋部分と庇部分で相違がみられる。母屋部分は200cm（約6.6尺）を基準としているのに対し、母屋柱穴から庇柱穴までの間尺は160cm（約5.2尺）と明確に区別されるのである。

柱穴の位置関係から部屋割を推定してみると、東側に2間×3間、西側に2間×2間が2部屋となり、計3部屋が存在したと考えられる。ただし、西側南に位置する2間×2間の部屋は、庇部分に重複することや、南側中央の柱穴が検出されなかったため再検当を要するであろう。

なお、この建物跡と同規模の中世民家として、兵庫県箱木家が現存し上部構造を考える上で貴重な資料となっている。

PL. 5 SB 02全景（北側から）

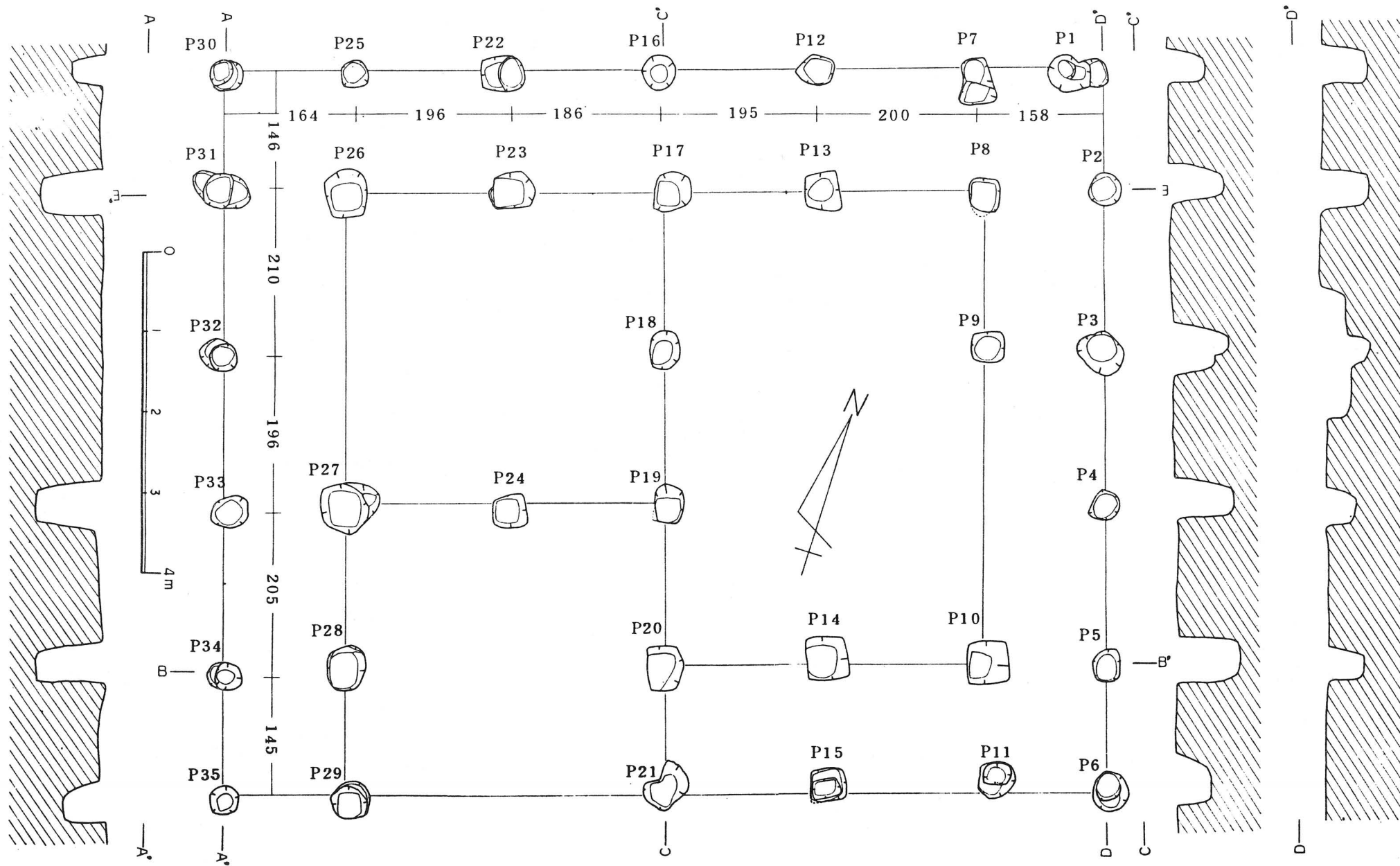




— 3 —

— 3 —

Fig.9 SB02実測図



柱穴断面図の標高は  
37.60mである。  
柱穴間の計測値単位  
はcmである。

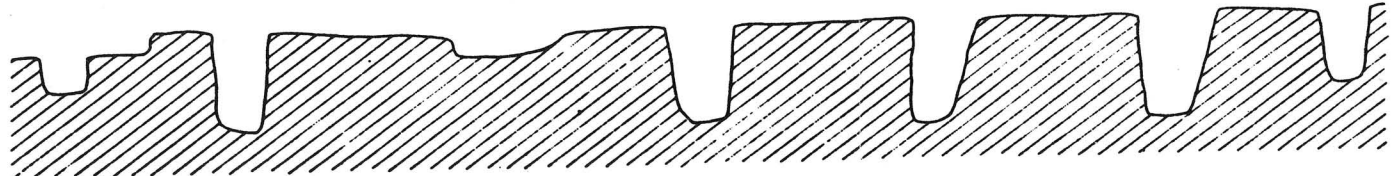
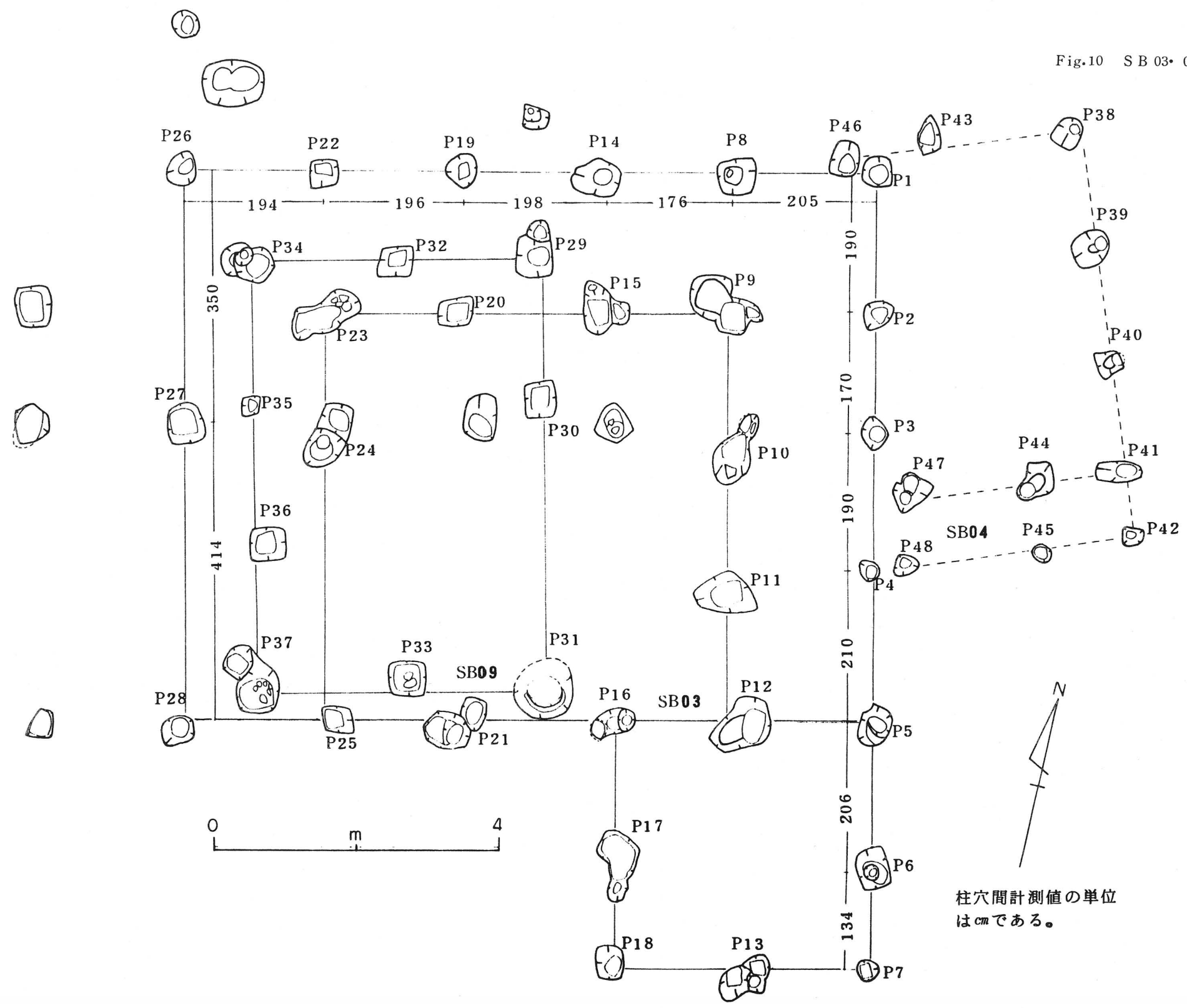


Fig.10 SB 03・04・09実測図



柱穴間計測値の単位はcmである。



SB03〔F・G-54・55区〕(PL.4、Fig.10、Ch.5)

規模：桁行5間(969cm)、梁間4間(760cm)と南東部の張り出し2間(340cm)×2間(360cm)。総面積約85.88㎡。

方向：梁間方向(南北)N-13°-W。

重複関係：SD09(旧)、SE33(新)、SB04(旧?)、SB09(?)。

覆土：柱穴覆土は暗褐色土に黄褐色砂質土を混在する土質である。

出土遺物：床面は攪乱が激しく明確に把握できなかったが、Pit10から瓦器(171)、Pit16から焼米、Pit21から鉄釘が出土し、他に古銭などもある。

特徴：東・北・西側三面に庇を有し、南側東部分に出入口と推定される2間×2間の張り出しが存在する。SB02のように母屋部分(3間×3間)と庇部分で柱穴の相違はみられず、間尺も、Pit27とPit28間の414cmを最長に、210cm(6.93尺)や190cm(6.27尺)など6尺~7尺に集中する傾向がみられる。部屋割は、柱穴の残存状態が不良なため明確ではないが、母屋部分の3間×3間一部屋のようである。

SB04〔F・G-55区〕(Fig.10、Ch.6)

規模：桁行4間(570cm)、梁間2間(320cm)と推定されるが明確でない。

方向：桁行方向(南北)N-22.5°-W。

重複関係：SB03(新旧不明)SD09(旧)

出土遺物：特になし

特徴：Pit38、Pit39、Pit40、Pit41などは、いずれも西側からの抜き取り痕があるように思われた。しかし、Pit39、Pit40などに対応する柱穴がない所から建物跡とは早断できないと考えられる。

SB09〔F・G-54区〕(Fig.10、Ch.7)

規模：桁行3間(600cm)、梁間2間(400cm)、面積24.0㎡

方向：桁行方向(南北)N-14°-W。

重複関係：SE33(新)、SD09(旧)、SB03(?)

出土遺物：特になし

覆土：柱穴覆土は、暗褐色土に黄褐色砂質土を混在する土質。

特徴：柱穴は方形基調のものが多く、深さも平均60cm弱と比較的深い。特にPit33とPit37には、根堅めと考えられる小石を置いた部分があり、しっかりした建物跡であったことが推定される。間尺は1間200cmを基準としており、SE33によって消滅している柱穴を除けば、明確な対応がみられる。

SB05 昭和56年度調査報告書にて報告の予定。

**SB06**〔J-56・57区〕(PL.6、Fig.7)

規 模：桁行3間(600cm)、梁間2間(400cm)、面積24.0m<sup>2</sup>

方 向：梁間方向(南北)N-20°-W。

重複関係：SB07(?)、SD07(旧)

出土遺物：柱穴内から、青磁碗、鉄釘が出土している。

特 徴：柱穴の形状は方形基調で、一部柱痕を検出した部分もある。拡張の可能性あり。

**SB07**〔I・J-56・57区〕(PL.6、Fig.7)

規 模：桁行3間(540cm)、梁間2間(400cm)、面積21.6m<sup>2</sup>。

方 向：桁行方向(南北)N-19°-W。

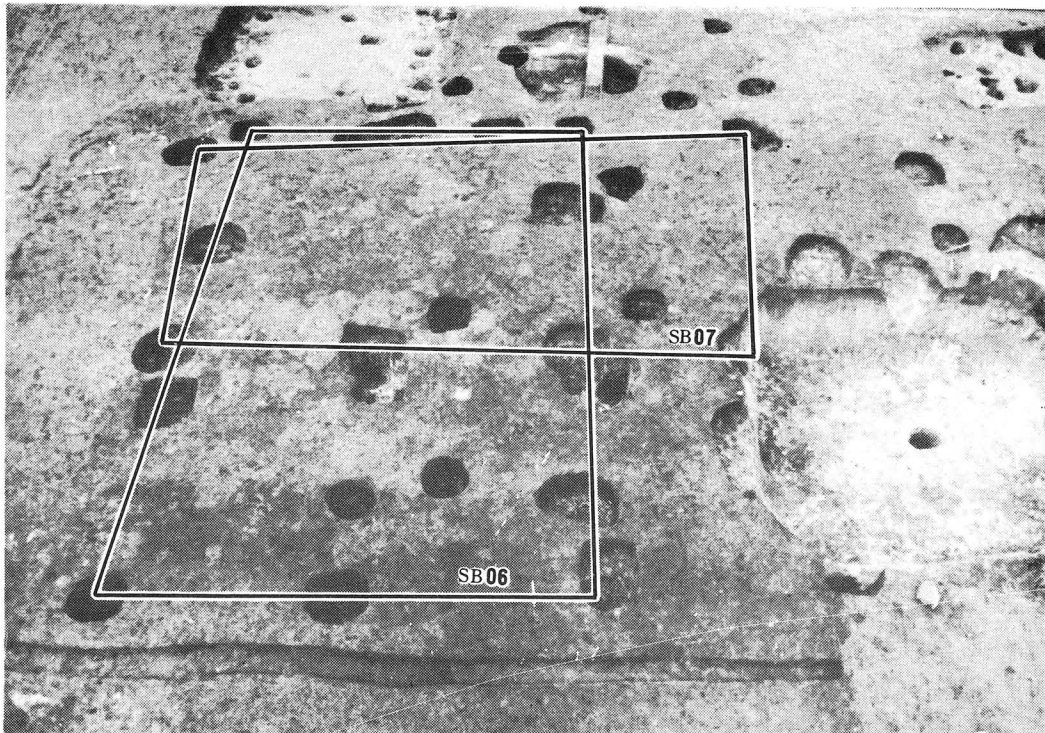
重複関係：ST60(新)、SB06(?)

出土遺物：特になし。

特 徴：梁間方向で中央に位置する柱穴が1個しか検出されていないため、建物跡としての認識は明確でない。また、東側への拡張の可能性も有している。

**SB08** 昭和56年度調査報告書にて報告の予定。

PL.6 SB06・SB07全景(西側から)





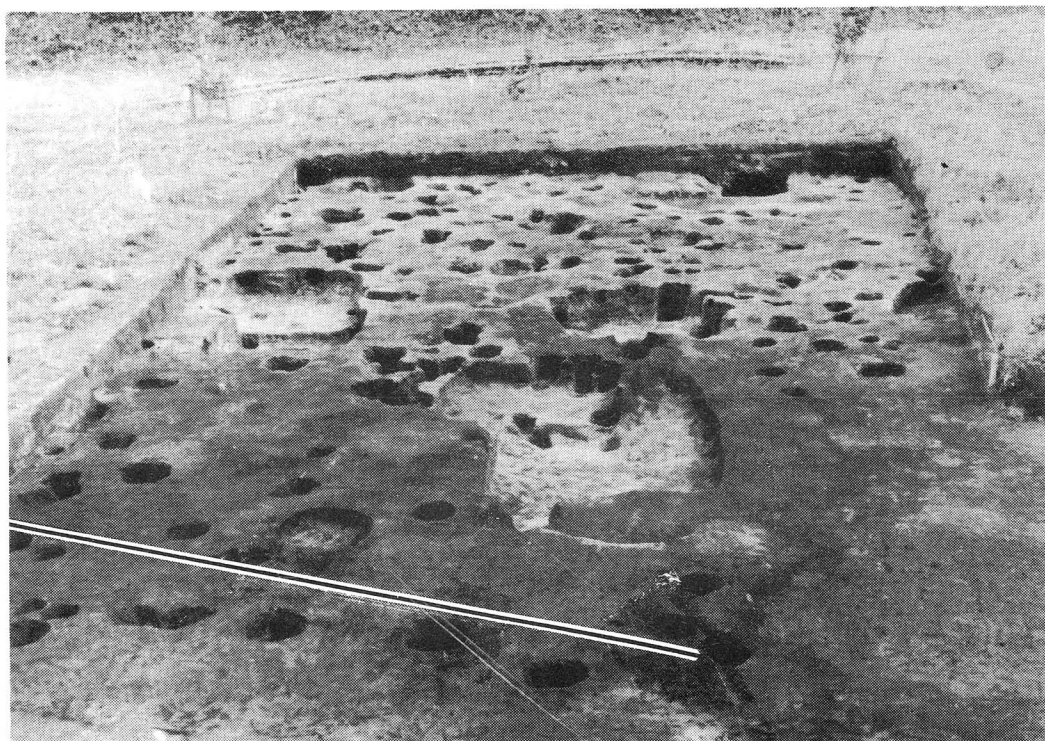
〔掘立柱建物跡、他小結〕

昭和55年度調査区における掘立柱建物跡を概観すると、SB03、SB04のように庇を有する大型の建物跡と、SB06、SB09のように2間×3間を基調とする建物跡に大別することができる。今回報告できなかったSB08なども、5間×7間という規模になることが確認され、前者の類に入ると思われる。このように、掘立柱建物跡の中でも規模の大きいものは、ある程度(20m)の距離を置き配置され、南北方向(一般的には梁間方向)の軸がN-13°~18°-Wと近似した値を示していることが注目される。それに反し、後者は南北軸が桁行あるいは梁間方向とも一定せず、配置も規則性がないようである。

建物跡として確認できた柱穴配列の他に、散在する柱穴が多数存在する。特に密な地域としては、L・M-57区があり、昭和54年度調査区L・M-58区と関連をもつ柱穴配列がみられた。Fig.7に示したL-57区の配列は、建物跡というより柵状のものと認定できるが大部分は不明なものが多い。(PL.7参照)また、L・M-54区で検出されたSB05と称した柱穴配列にしても、建物跡としての対応する柱穴がみられないことは、柵等の可能性を高くするもので、南北9間の規模から、屋敷等を区分する境界的役割も推定できる。

掘立柱建物跡については、今後調査面積を拡大する時点で規模・配置の確認が進展するはずで、期待できるであろう。

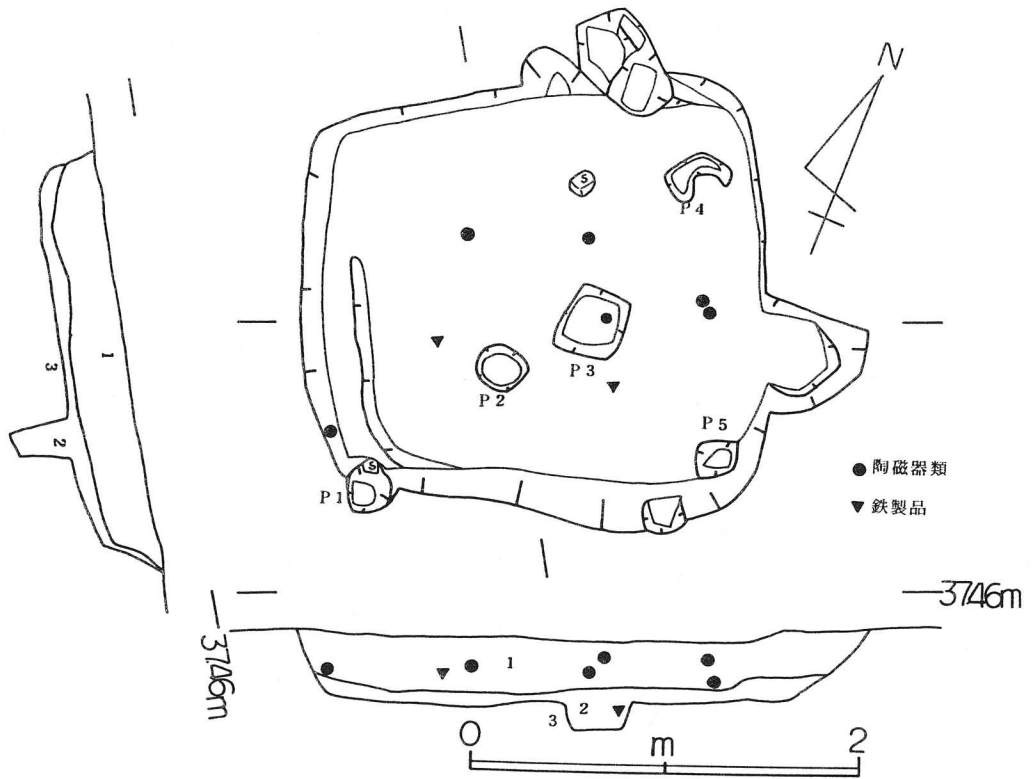
PL.7 M57区全景(北側から)



PL.8 ST50全景（東側から）



Fig. 11 ST50実測図



## B 竪穴遺構

S T 5 0〔 J 55区 〕 ( PL. 8、 Fig. 11、 Ch. 8 )

規 模：長軸 238 cm、短軸 234 cm、深さ 40cm

張り出し：なし。

覆 土：上層は炭化物、下層は灰を含むことから焼失等による人為的埋め戻しと考えられる。

重複関係：S B 02 ( 旧 )

柱穴配置：本遺構に直接伴う柱穴はないようである。

出土遺物：Fig. 11で知れるように、床面からの出土はなく、覆土から青磁碗・皿、天目碗、溶解物付着土器、鉄釘などの他、土師器片24個、須恵器片2個が出土している。

S T 5 1〔 L 55区 〕 ( PL. 9、 Fig. 12、 Ch. 9 )

規 模：長軸 552 cm、短軸 324 cm、深さ 62cm。

張り出し：なし。

覆 土：上層 1・2・3・4 は白灰を含む土層で ( PL. 9(A)、 Fig. 12スクリーントーン部分 )、下層暗褐色土と黄褐色砂質土の混層とは明瞭に区別できる。おそらく廃棄過程の中で全体が埋めきれないうちに白灰が覆ったものと推定できる。

重複関係：S T 52 ( 旧 )

柱穴配置：柱穴は壁面に接する状態で存在し、西壁 Pit 1、Pit 2、Pit 3、Pit 5 と東壁 Pit 13、Pit 12、Pit 10、Pit 8 が対応する。北壁中央に位置する Pit 14 に対応する柱穴が南壁に存在しないことは、出入口にあたる部分が北側にあった可能性を高くしている。柱穴は平均 43cm の深さを有するが、西壁に接する方がより深く東壁側は浅いものが多い。

出土遺物：床面からのものは鉄釘 1 本を除いてほとんどなく、灰の範囲に重なる覆土内から多数出土している。主なものには、青磁碗 ( 8・27 )、染付皿 ( 101 ) や天目、播鉢、溶解物付着土器、天聖元宝、景德元宝等の古銭 7 枚、石白片 1 点、小札 1 点、鉄釘 2 点がある。

S T 5 2〔 L 55 〕 ( PL. 9(B)、 Fig. 12、 Ch. 10 )

規 模：長軸 332 cm、短軸 310 cm、深さ 36cm

張り出し：なし

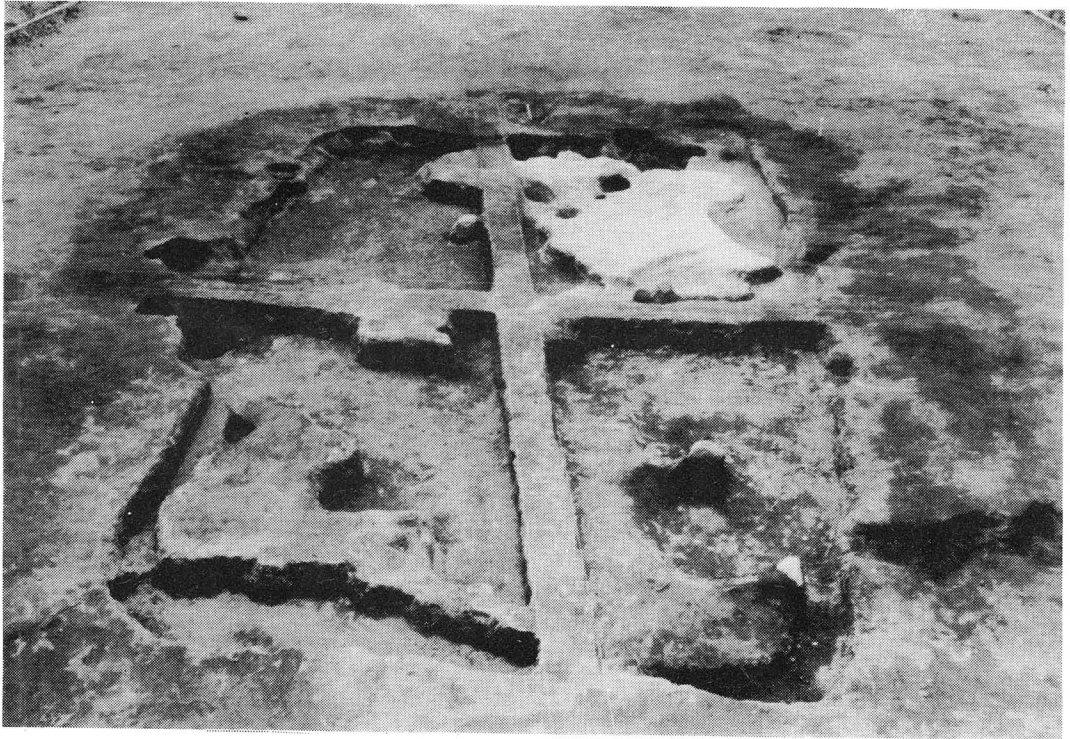
覆 土：上層に黄白色粘土と焼土が若干みられ、他は暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。

重複関係：S T 51 ( 新 )

柱穴配置：Pit 1、Pit 6 が本遺構に伴うと考えられるが、詳細は不明。

出土遺物：永楽通宝・他古銭 2 枚、不明磁器皿 1 点があった。

PL.9 (A) S T51覆土灰検出状況



(B) S T51・S T52・S X12全景

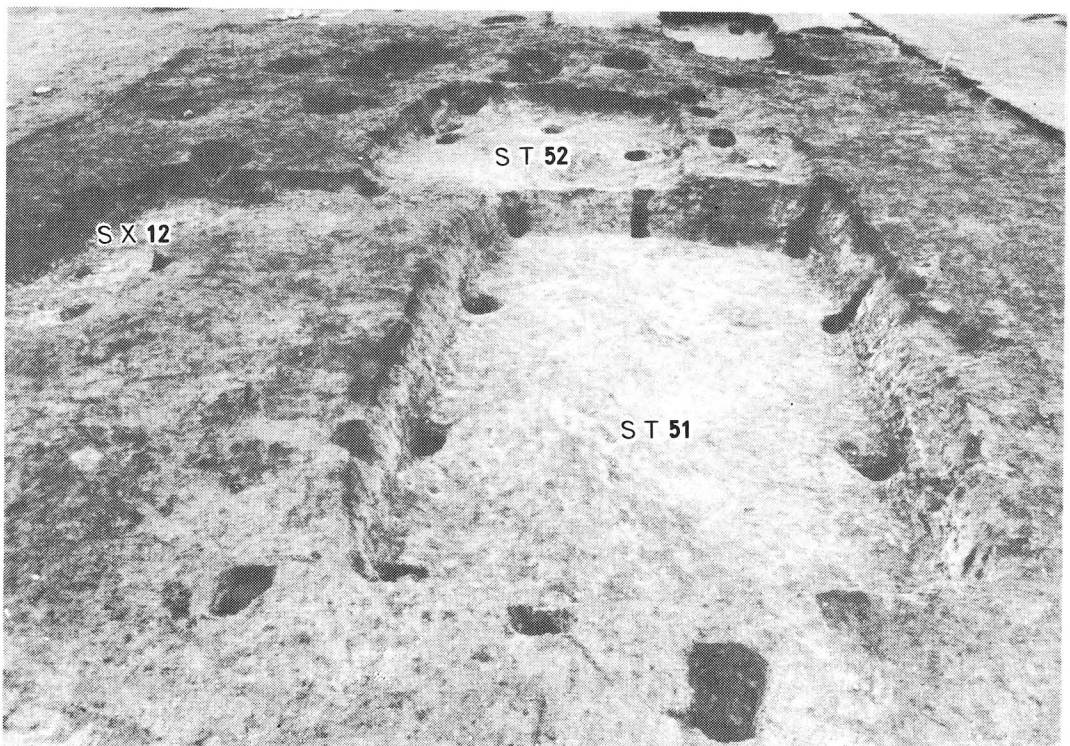
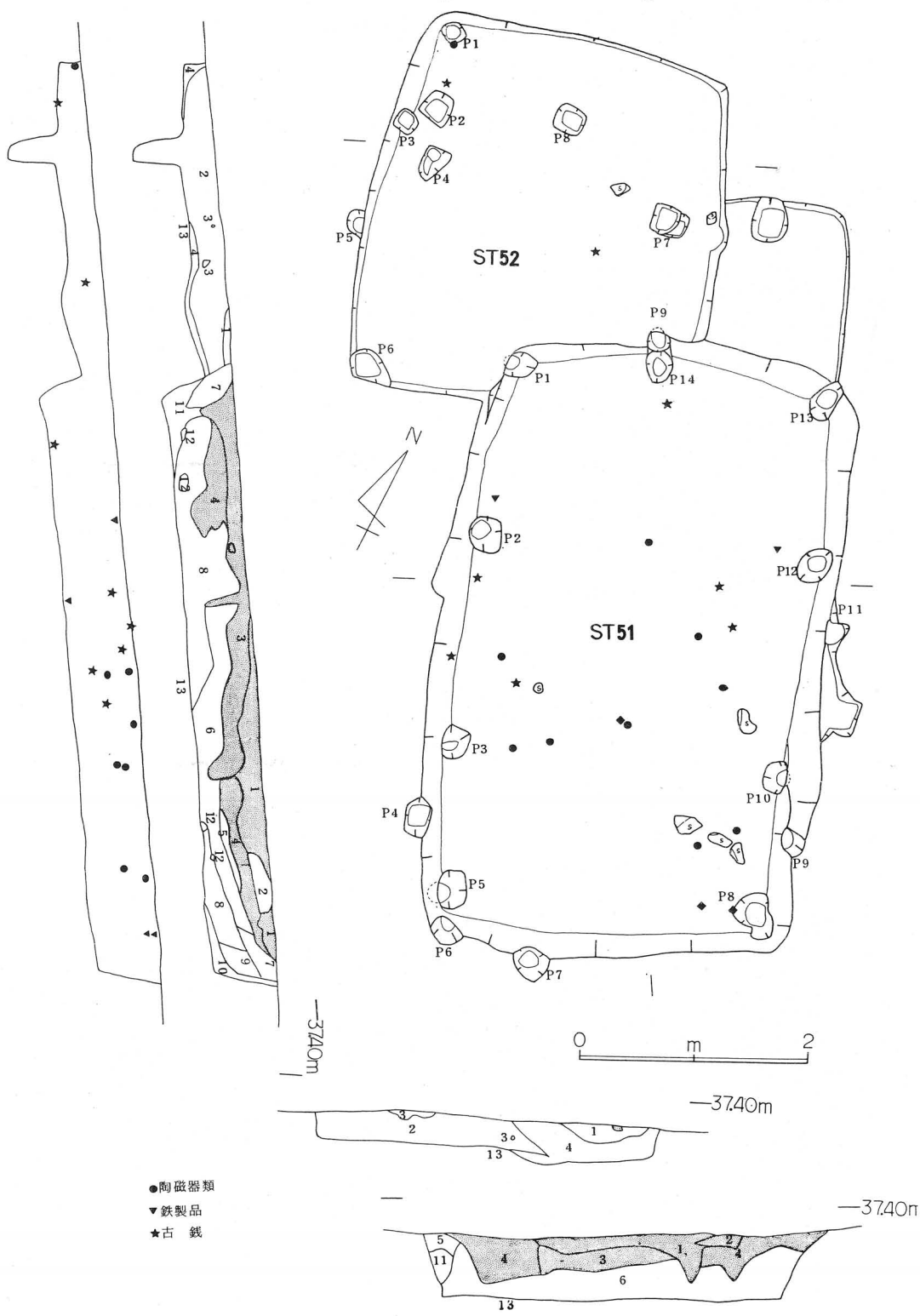


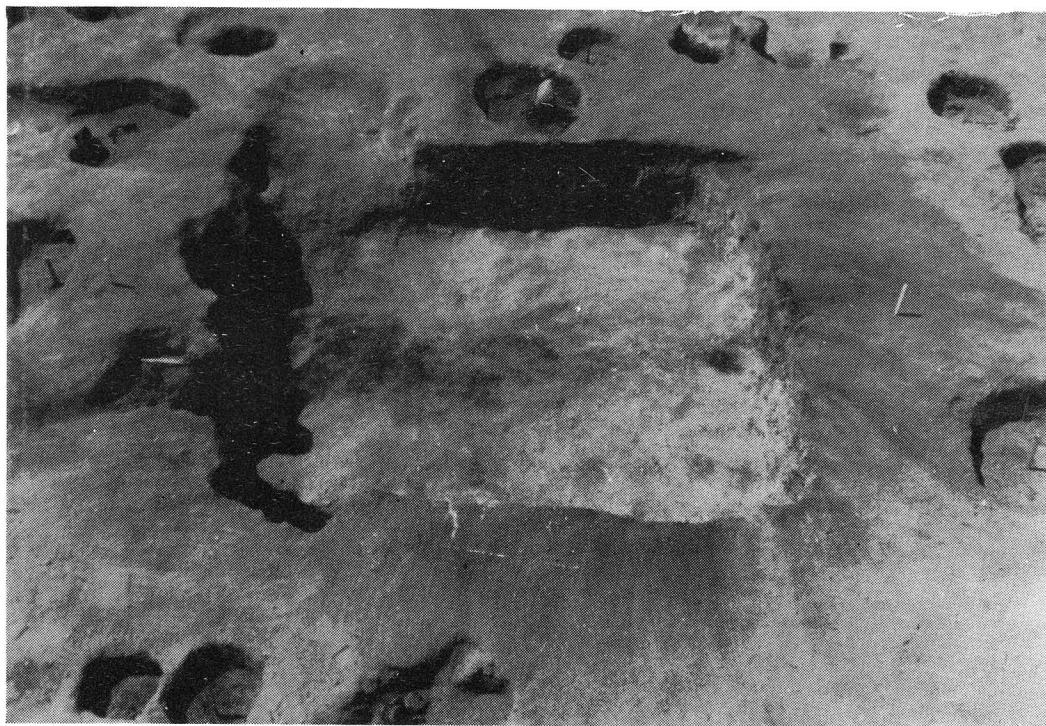
Fig.12 S T51・52実測図



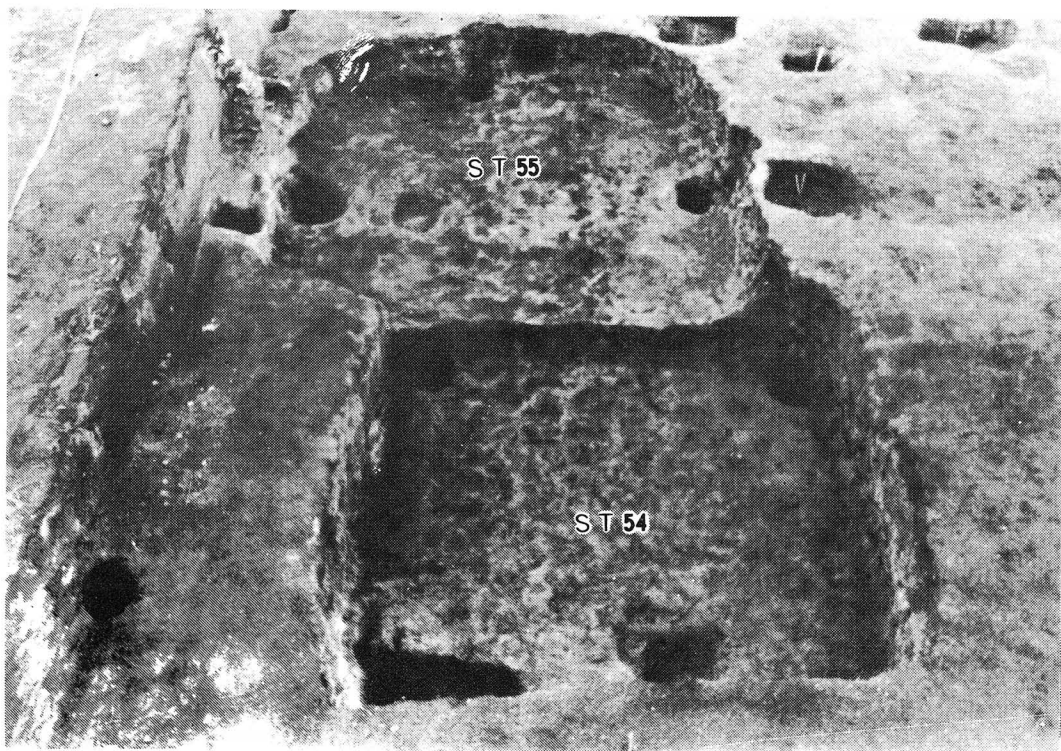
- 陶磁器類
- ▼鉄製品
- ★古銭



PL.10 ST53全景（南側から）



PL.11 ST54・ST55全景（北側から）



ST53〔M57区〕(PL.10、Fig.13、Ch.11)

規模：長軸 206 cm、短軸 174 cm、深さ 44 cm。

張り出し：舌状スロープでN-36°-Wの方向。

覆土：暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロックに含む混層で全般に炭化物があることから人為的埋め戻しと考えられる。

重複関係：なし。

柱穴配置：西壁中央に位置するPit1と東壁中央(スクリーン部分で掘り下げを忘れたようだ)の2個が付属するようだ。

出土遺物：床面から口縁が端反りする白磁皿(Ⓐ)が出土し、覆土からは須恵器杯の破片、不明施釉陶器が出土している。

ST54〔M57区〕(PL.11、Fig.14、Ch.12)

規模：長軸 190 cm、短軸 174 cm、深さ 56 cm。

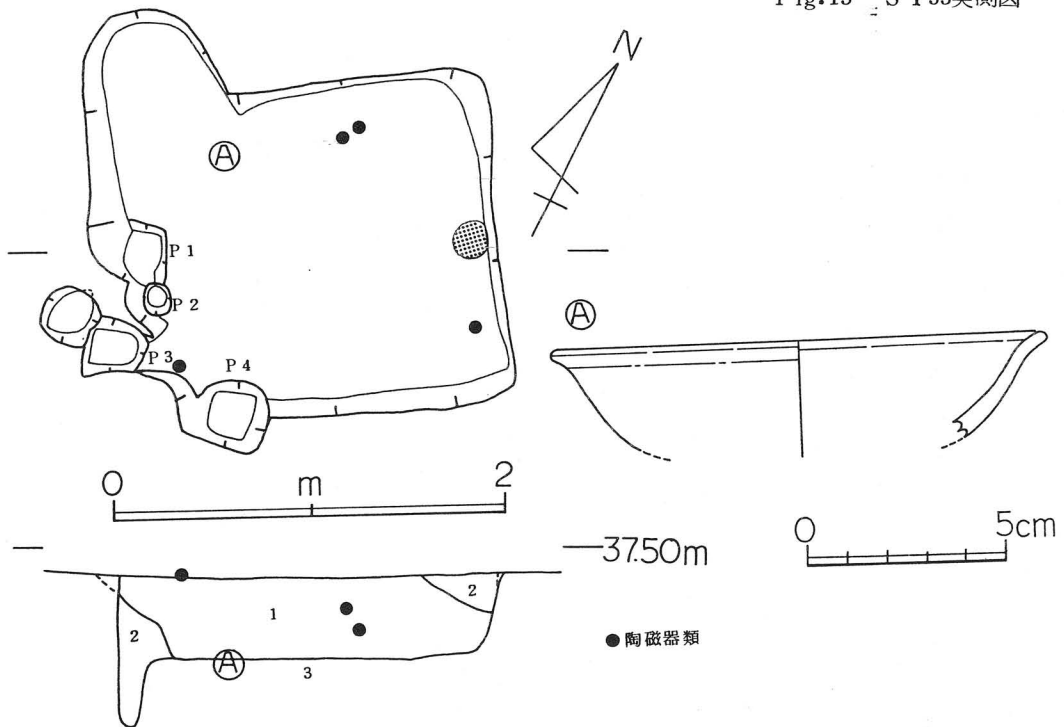
張り出し：なし。

覆土：黄白色砂質土を多量に含み、しまりのない埋め戻し土。

重複関係：ST55(旧)

柱穴配置：四隅に柱穴を配置するようで、Pit1、Pit2、Pit3、Pit4が本遺構に伴うと考えら

Fig.13 ST53実測図





れる。深さは平均17cmと浅い。

出土遺物：覆土中間から天目碗1点、美濃灰釉皿1点、下層（主として4層）から鏝銭3枚  
他不明鉄製品1点が出土している。

ST 55〔M57区〕（PL.11、Fig.14、Ch.13）

規模：長軸 216cm、短軸 180cm、深さ38cm。

張り出し：なし。北側をST54によって切られているため、消滅した可能性もある。

覆土：暗褐色土に黄褐色砂質土を大ブロックに含む混層が大半で、しまりを有する3層は床面と考えられる。

柱穴配置：東西壁の中央に位置するPit2とPit5が付属する柱穴と考えられ、ST53と規模同様に類似している。

出土遺物：覆土上層から、染付碗、天目碗、皇末通宝・開元通宝・鏝銭、小札2枚、鉄釘、床面から鎌（294）が出土している。

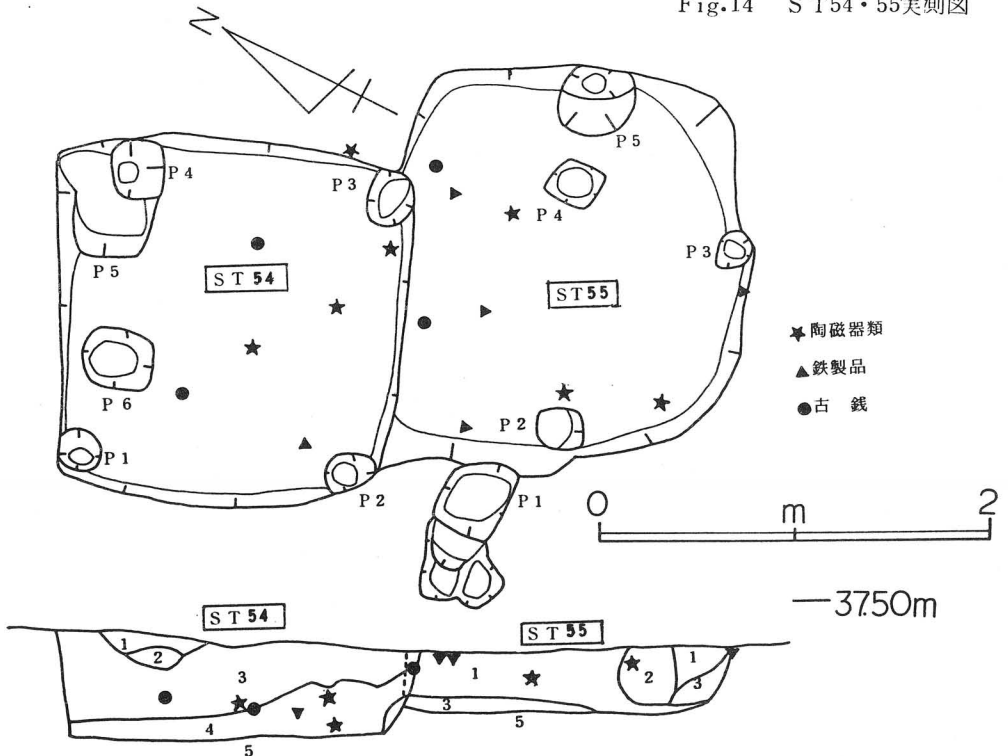
ST 56〔L・M-57区〕（PL.12、Fig.15、Ch.14）

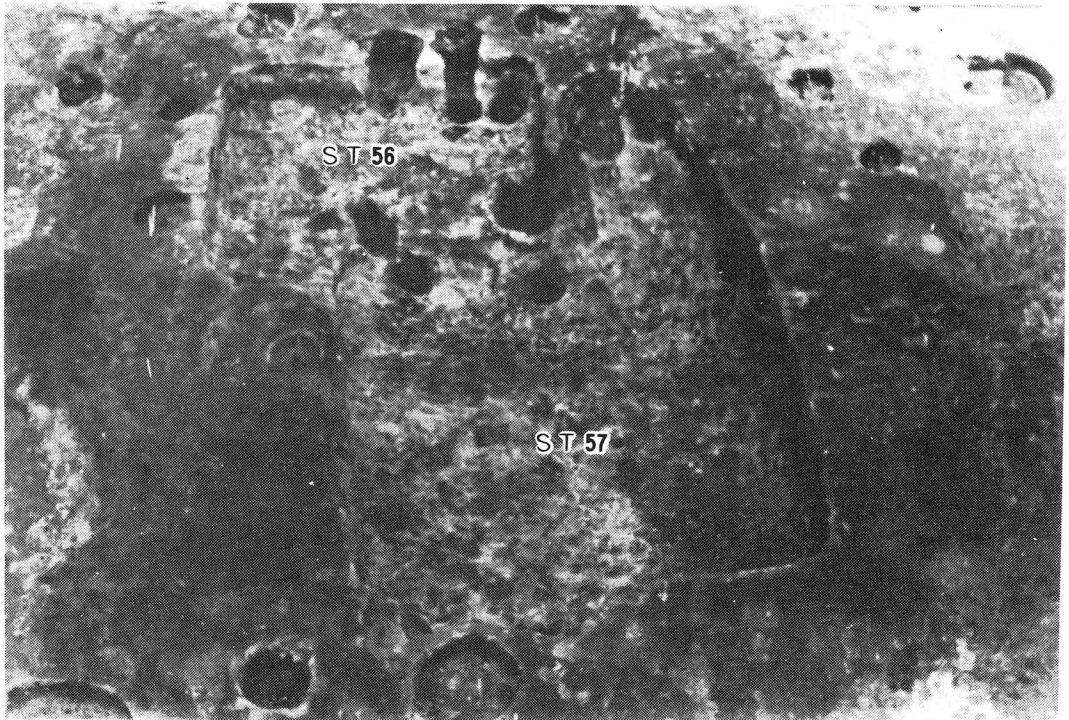
規模：長軸、短軸とも 170cm、深さ24cm。

張り出し：なし。

覆土：暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に、炭化物、灰を全般的に含んでいる。

Fig.14 ST54・55実測図





重複関係：S T57(旧)

柱穴配置：明確ならず。付属する柱穴はないようだ。

出土遺物：青磁皿、美濃灰釉皿の他、判読不能古銭1枚が出土している。

S T 5 7〔L57区〕(PL.12、Fig.15、Ch.15)

規 模：長軸 250 cm、短軸 228 cm、深さ 46cm。

張り出し：舌状スロープでS-38°-Eの方向。

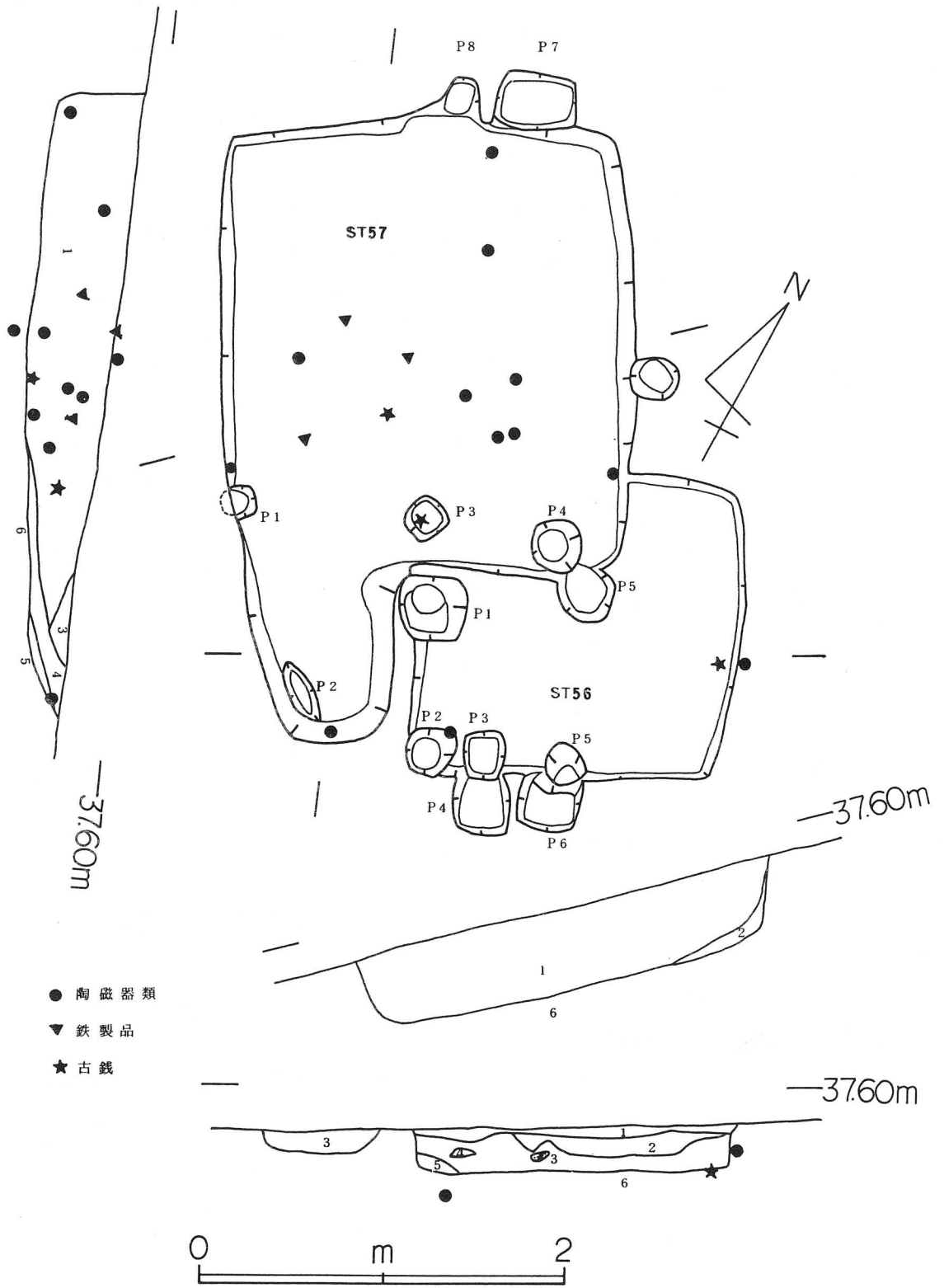
覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層が全体を覆い、全般に炭化物が存在する。

重複関係：S T56(新)

柱穴配置：明確に本遺構に伴う柱穴を把握することができなかった。Pit1は本遺構以前、Pit 3、Pit4は本遺構廃棄後の可能性が高い。

出土遺物：床面からは青磁碗(22)だけで、覆土中から青磁皿(42)、白磁皿、美濃灰釉皿、溶解物付着土器、珠洲系甕がそれぞれ少片で、また鏝銭が2枚、鉄釘3本の出土があった。

Fig.15 ST56・57実測図



ST 58 (L-56・57区) (PL.13、Fig.16、Ch.16)

規 模：長軸(290 cm)、短軸260 cm、深さ30 cm。

張り出し：舌状スロープで、ST 78に一部切られている。方向はS-18°-E。

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む層(1層)が全体を覆い、全般的に炭化物と灰が存在する。3層は、本遺構構築時の掘り上げ土あるいは拡張部分の覆土、そして4層が床面部分と考えられる。

重複関係：ST 78(新)

柱穴配置：Pit1、Pit2、Pit3、Pit4、Pit5、Pit8、Pit10、Pit11が本遺構に伴うものと考えられ、壁面からやや離れた所に位置している。深さも平均40 cmと、付属しない柱穴の深さと相違がみられる。Pit4とPit5を結ぶ細い溝は、おそらく張り出し(出入口)部分と関連するものと考えられる。

出土遺物：鉄釘2本、火打石、硯の破片、判読不能古銭がある。

ST 78 (L-56・57区) (PL.13、Fig.16、Ch.17)

規 模：長軸400 +  $\alpha$  cm、短軸388 cm、深さ25 cm。

張り出し：確認できず。

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む混層(2層)が多く、4層は床面を構成する

PL.13 ST 58・ST 78全景(北側から)

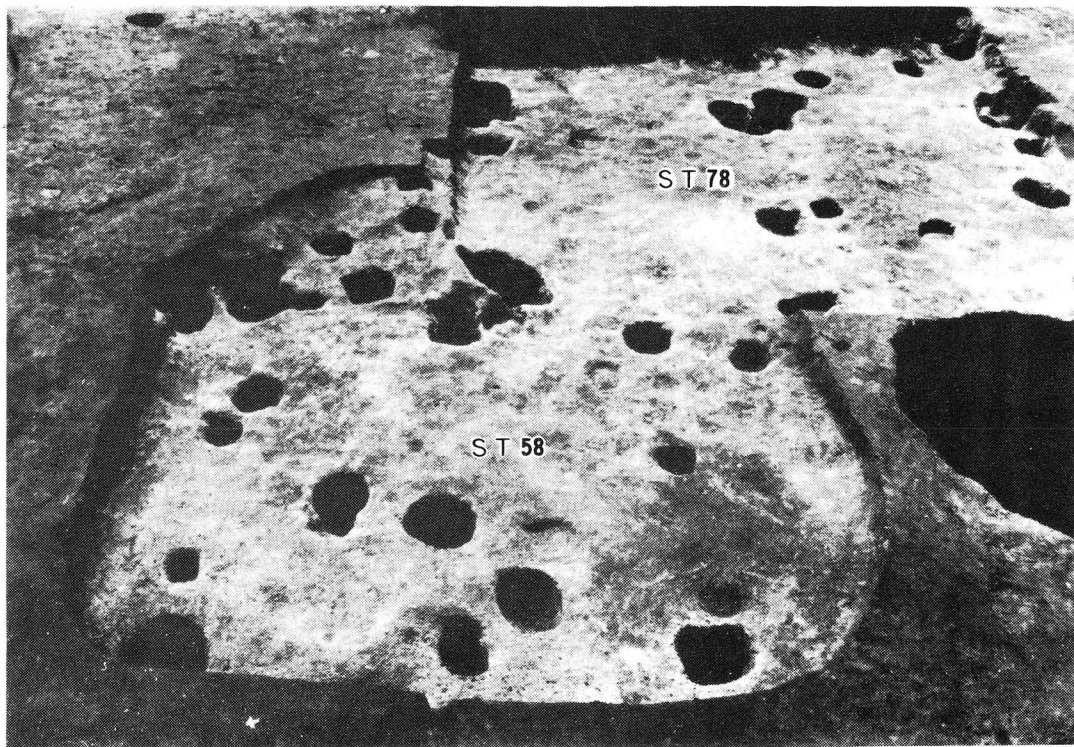
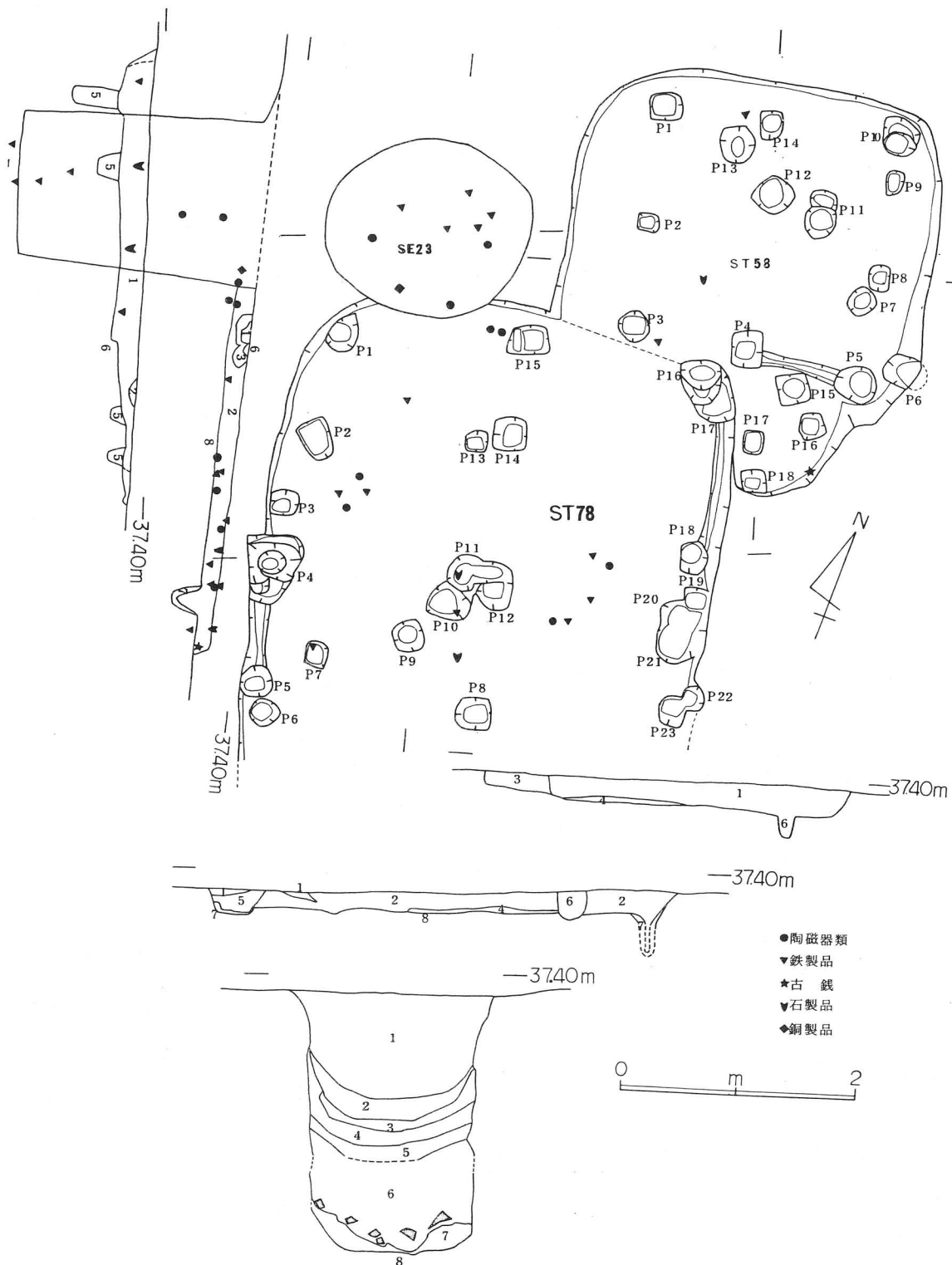


Fig. 16 ST58・78・SE23実測図



もので、粘性の強い土質となっている。

重複関係：S T 58（旧）、S E 23（新）

柱穴配置：本遺構に伴うものは、Pit1、Pit3、Pit5、Pit8、Pit14、Pit15、Pit16、Pit18、Pit23の9個と推定されるが完掘していないため確実ではない。配置としては壁に接する状態のものと、長軸中央通りに位置するものとの組み合った形態と考えられる。

出土遺物：美濃灰釉皿（113）、天目碗（139）、播鉢（212）などの陶器の他、熙寧元宝1枚、鉄釘6本、硯の破片、鉄滓などが出土している。

S T 5 9 S E 22に変更。

S T 6 0〔J・K-56、J57〕（PL.14、Fig.17、Ch.19）

規 模：長軸 370 cm、短軸 320 cm、深さ76cm。

張り出し：なし。

覆 土：全体が暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層であるが、時間的推移のもとに埋まったようで自然堆積の様相を呈す。特に下層は、しまりがなく砂質土を多量に含み、上層は灰を多量に含む特徴を有する。遺物は、主に上層からの出土が多い。

重複関係：S D 07（旧）、S B 06と07が拡張した場合重複する可能性がある。

柱穴配置：Pit2、Pit3、Pit5が本遺構に伴うと考えられ、長軸中央通りに3個の柱穴を配置

PL.14 ST60全景（北側から）

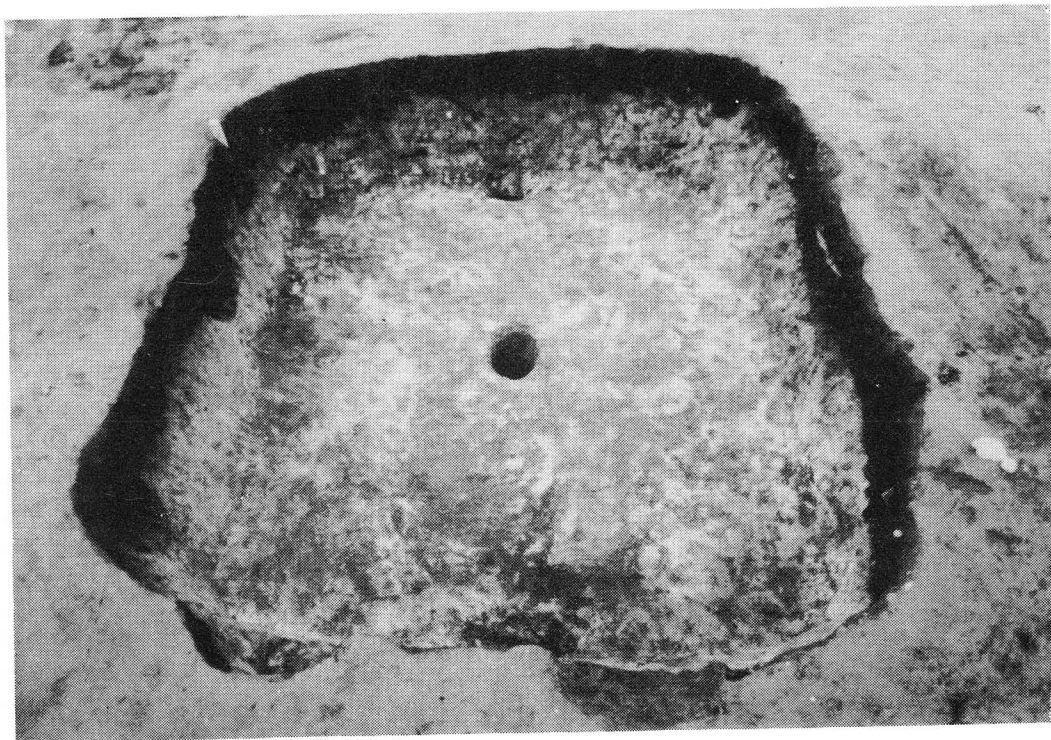
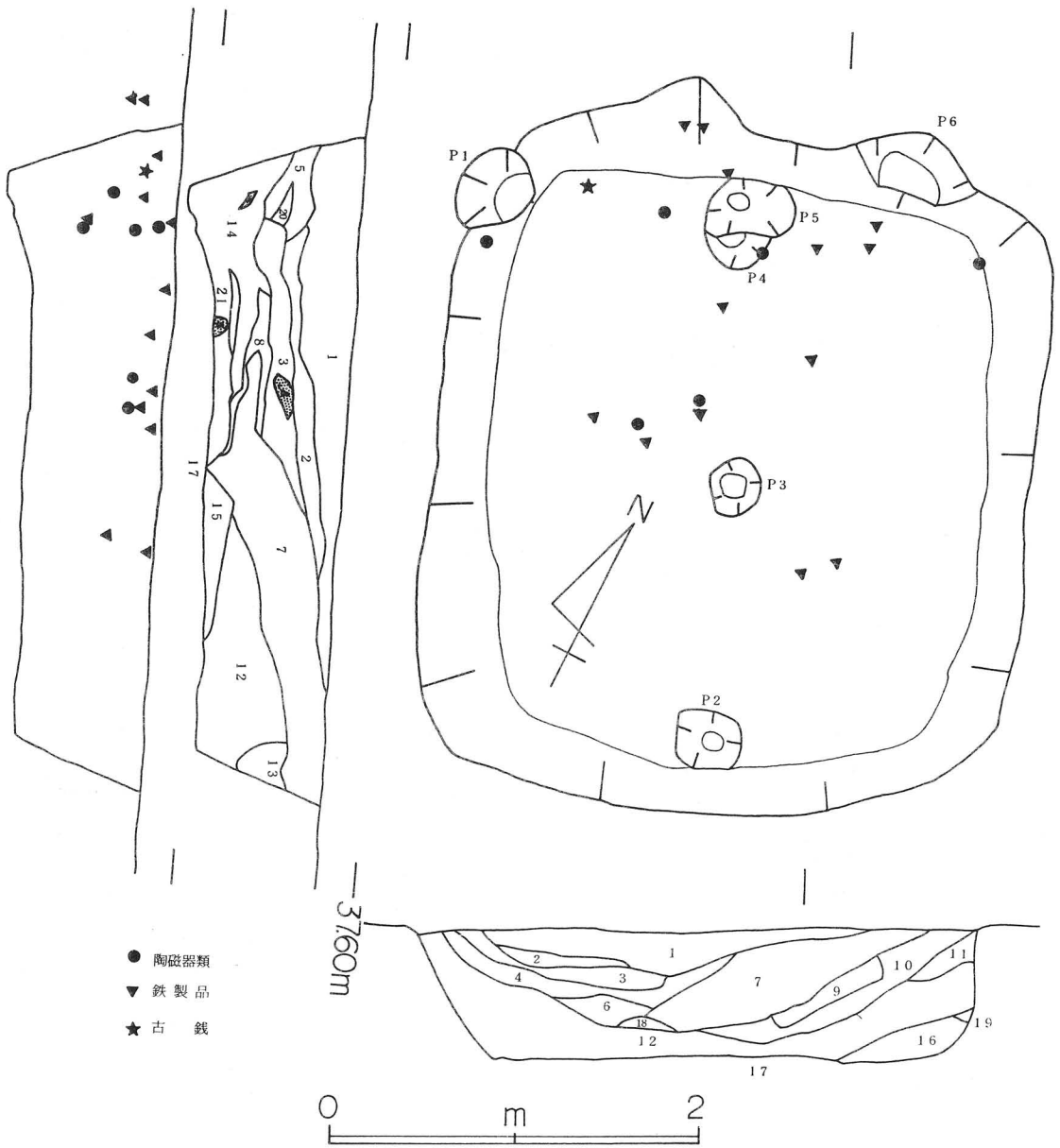


Fig.17 S T60実測図





する形態である。

出土遺物：青磁碗、無釉掻鉢2片、越前甕、溶解物付着土器、鏝銭3枚、鉄釘5本、鉄鍋、小札などが出土している。

S T 6 1 ( K 5 7 区 ) ( Fig. 1 8 、 Ch. 2 0 )

規 模：長軸 202 cm、短軸 174 cm、深さ44cm。

張り出し：なし。

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む混土が全体を覆い、床面付近には黒色土の中に炭化物と黄褐色砂質土を若干含む土層がみられる。また、部分的に焼土が混入している。

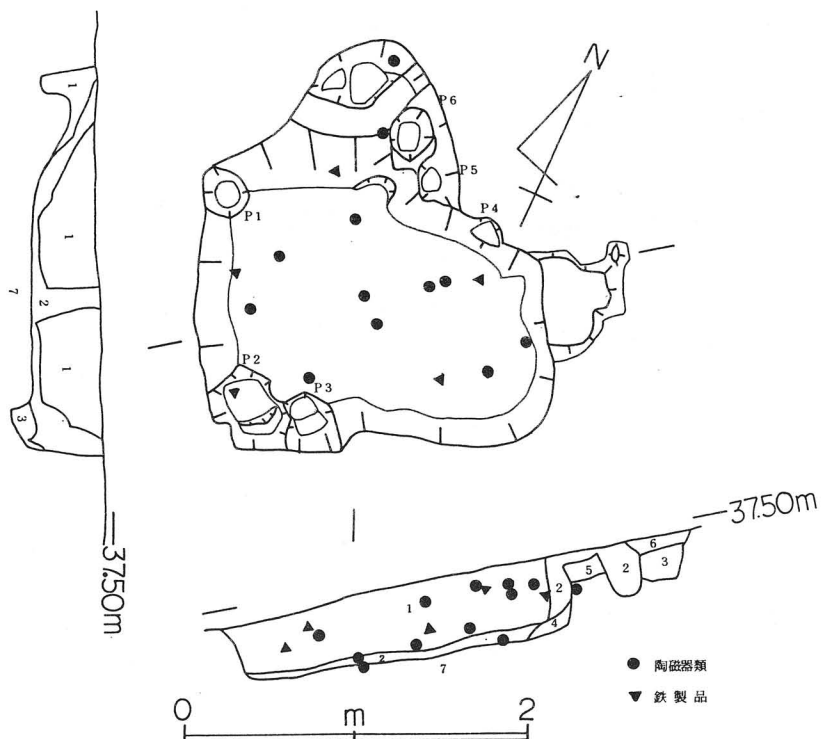
重複関係：なし。

柱穴配置：本遺構に伴うものはないようだ。

出土遺物：床面出土のものに口縁端反りの白磁皿(55)とくずれた蓮弁文を有する青磁碗がある。その破片は覆土中にも散在し、一括廃棄されたものと考えられる。他に覆土中から越前甕の胴部片、小札2枚、鉄釘3本などの出土があった。

性 格：竪穴遺構としては小型のもので、出土遺物等に注目すれば土壙的性格を有する可能性が高い。

Fig.18 S T61実測図



ST 62〔 J57区 〕 ( PL.15、 Fig.19、 Ch.21 )

規 模：長軸 352 cm、短軸 334 cm、深さ 60cm。

張り出し：なし。

覆 土：1層には灰色粘土と炭化物、2層には炭化物を含み、どちらもしまりはない。3層は本遺構の床面を構成するものらしく、遺跡の基本層序第3層とした黒色土であることに注目したい。

重複関係：S X32(旧)、S B07(新?)

柱穴配置：本遺構に伴うものは、Pit1、Pit4、Pit5、Pit6、Pit7、Pit9、Pit10、Pit12の8個で壁面からやや離れた位置に2間×2間に配置されている。深さも、平均40cm弱と他の柱穴に比較して相違がみられる。

出土遺物：大部分が覆土中の出土であるが、1層からは赤絵碗(106)と染付碗(73)、2層からは青磁碗や皿(10)と白磁皿(58)という相違がみられる。また本遺構の大きな特徴は溶解物附着土器が完形を含めて32個体、銅滓が3片出土していることである。銅製品としてもつまみのような金具(330)があり、工房的性格を有するのかもしれない。他の出土品には小札3枚、鉄釘8本、播鉢片、鏝銭1枚などがある。

PL. 15 ST 62 全景(北側から)

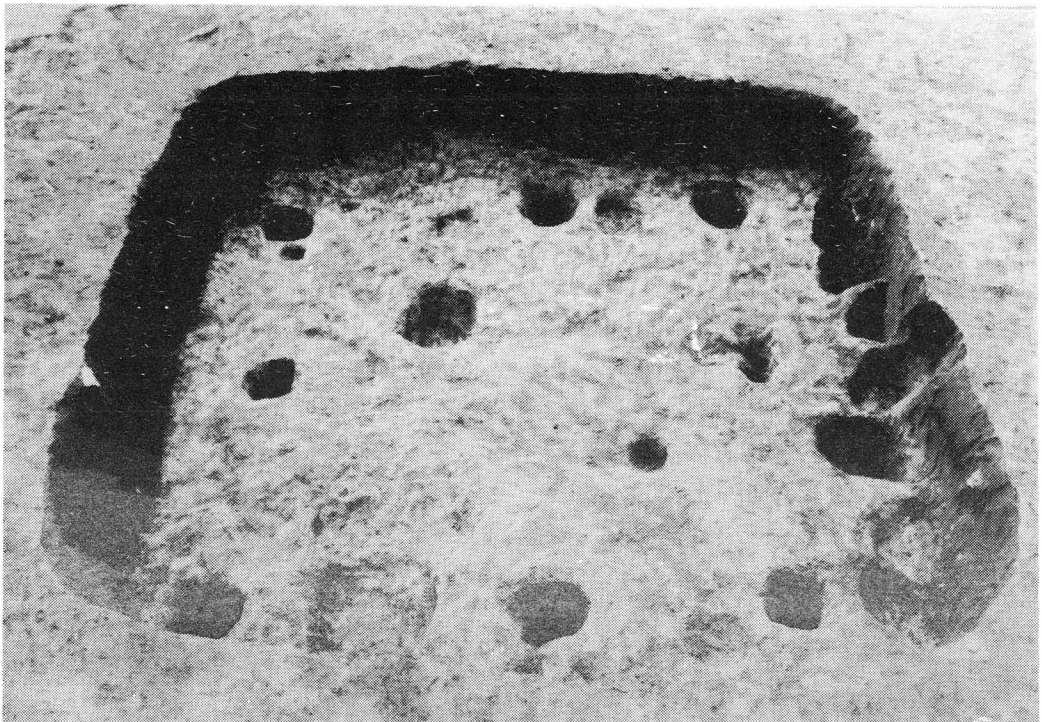
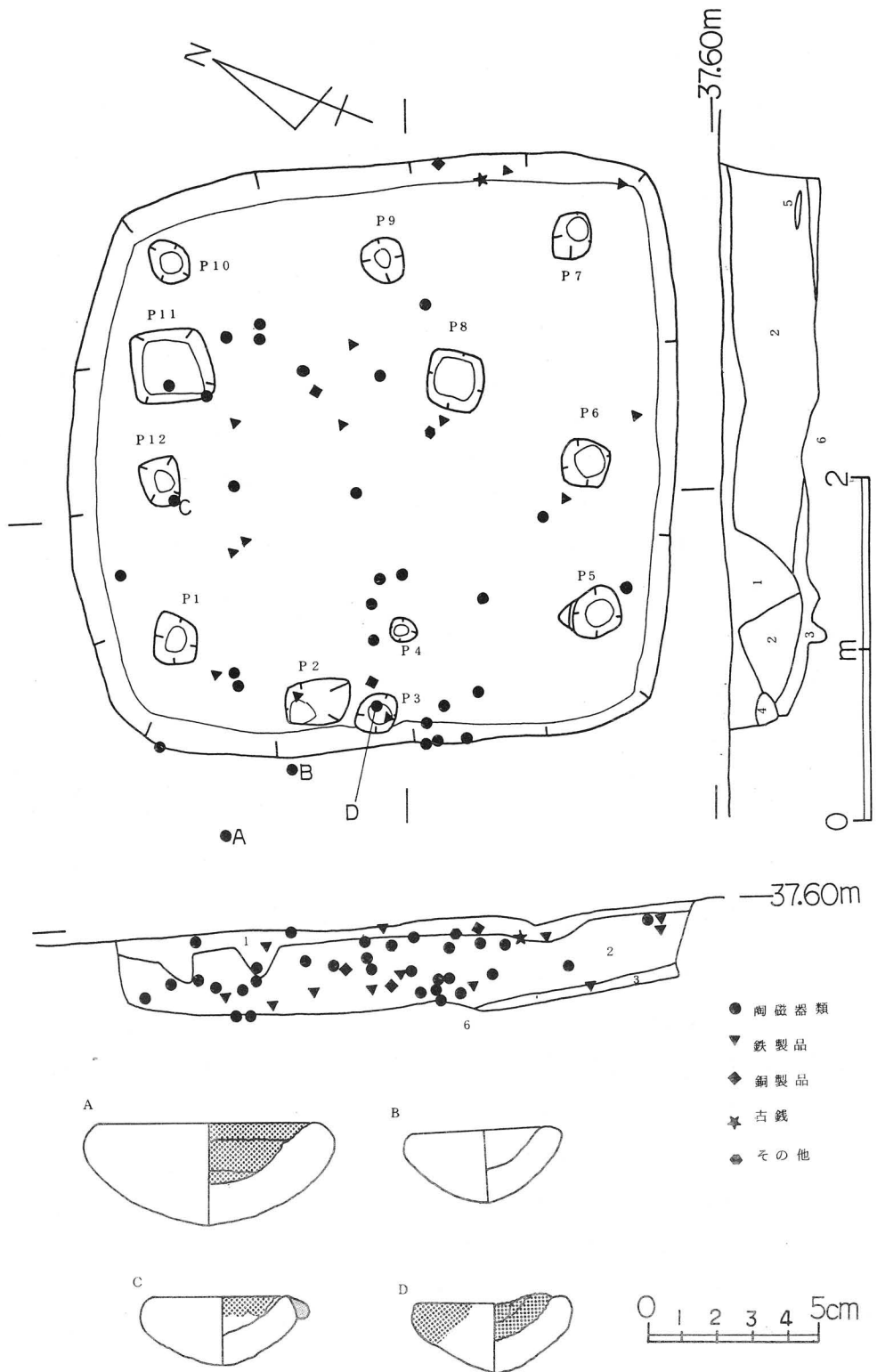


Fig. 19 ST62表測図



ST63〔I-55・56区〕(PL.16、Fig.20、Ch.22)

規模：長軸 466 cm、短軸 354 cm、深さ 74cm。

張り出し：なし。

覆土：全体に播鉢状の堆積を呈し、1層とした明褐色土に灰・黄褐色砂質土を混在する層が最も厚く、遺物の出土も多い。下層は、灰の含有より黄褐色砂質土の含有が多くなりしまりもなくなる。

重複関係：なし

柱穴配置：本遺構に付属する柱穴はないと思われる。

出土遺物：青磁皿・鉢・小碗(10)などは比較的下層の方から出土し、上層から出土しているものには、溶解物付着土器14片(245など)、瓦器6片、美濃灰釉皿4片、越前甕1片などの陶器類、永楽通宝他の古銭3枚、石鉢1片、火箸・釘の鉄製品、不明銅製品2点がある。床面から出土したものに不明鉄製品(遺物No.F444)がある。

ST64〔I54区〕

ST64は、掘り下げ当初ST64・ST66・ST67・ST68・ST79・ST80・SX29の重複遺構全体を仮称しており、精査の段階で遺物の出土ポイントを整理し、各遺構にふり分けため、誤差・誤認が少なからずあると思われる。ご了承ください。

なお、ST64については、相互攪乱が激しいため形状・規模・柱穴配置は不明確で記述を割愛したい。出土遺物は、別表を参照していただきたい。

ST65〔M54区〕(PL.18、Fig.21、Ch.23)

規模：長軸 330 cm、短軸 300 cm、深さ 32cm。

張り出し：なし。

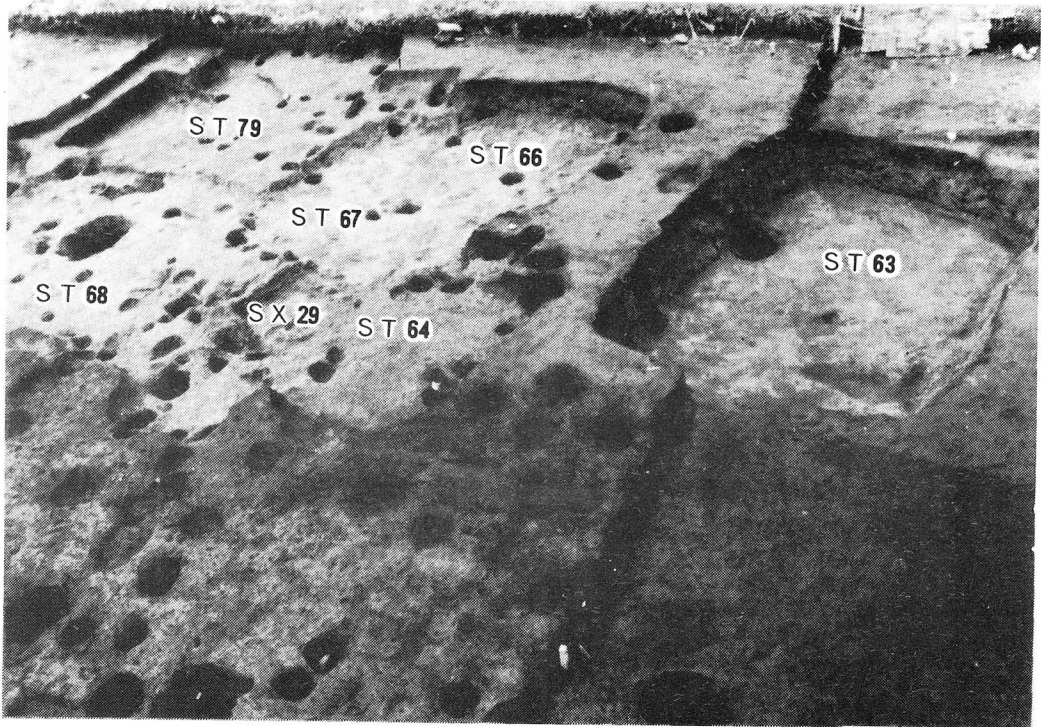
覆土：全般に灰と黄褐色砂質土を含み、床面直上付近でやや粘性のある土質がみられる。自然堆積の状況を呈する。

重複関係：SB05(新)

柱穴配置：Pit10、Pit12はSB05に伴う柱穴、Pit7も他の掘立柱遺構に伴う柱穴で、直接本遺構に伴う柱穴はないようである。

出土遺物：播鉢(215)、溶解物付着土器(254)、砥石(352)の他、青磁皿、越前甕、鉄釘9本があり、古銭として開元通宝2枚、聖宋元宝、永楽通宝、元祐通宝2枚、祥符通宝、天聖元宝2枚、熙寧元宝2枚、洪武通宝、朝鮮通宝、その他判読不能6枚が出土している。

PL.16 S T 63・64・66・67・68・79全景(南側から)



PL.17 S T 64・66・67・68・79全景(西側から)

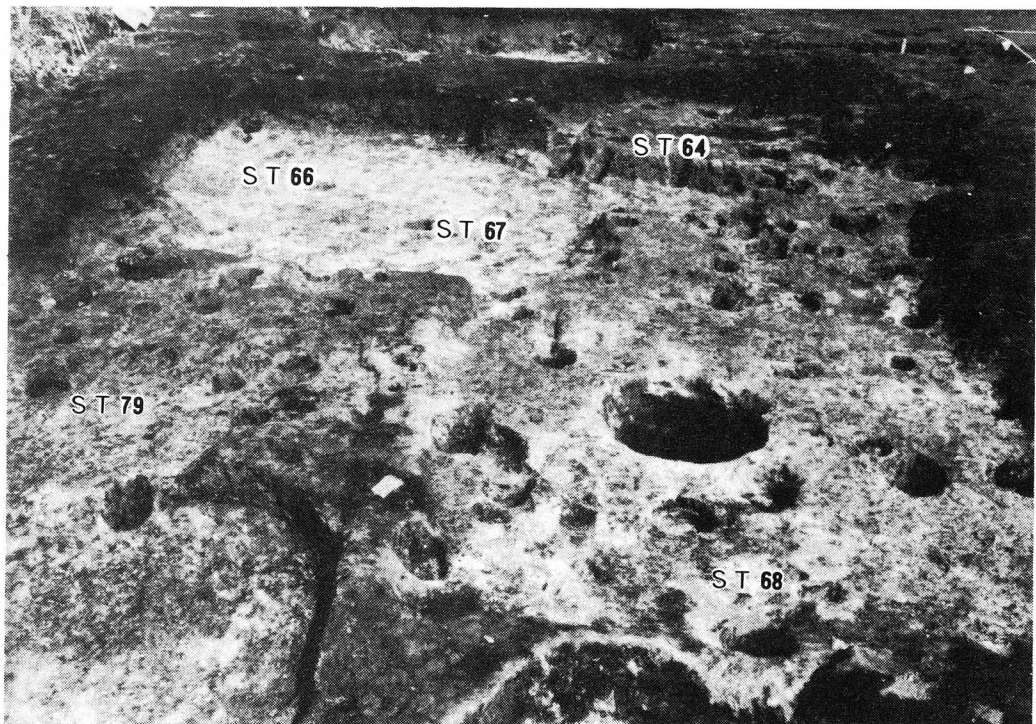


Fig. 20 ST 63実測図

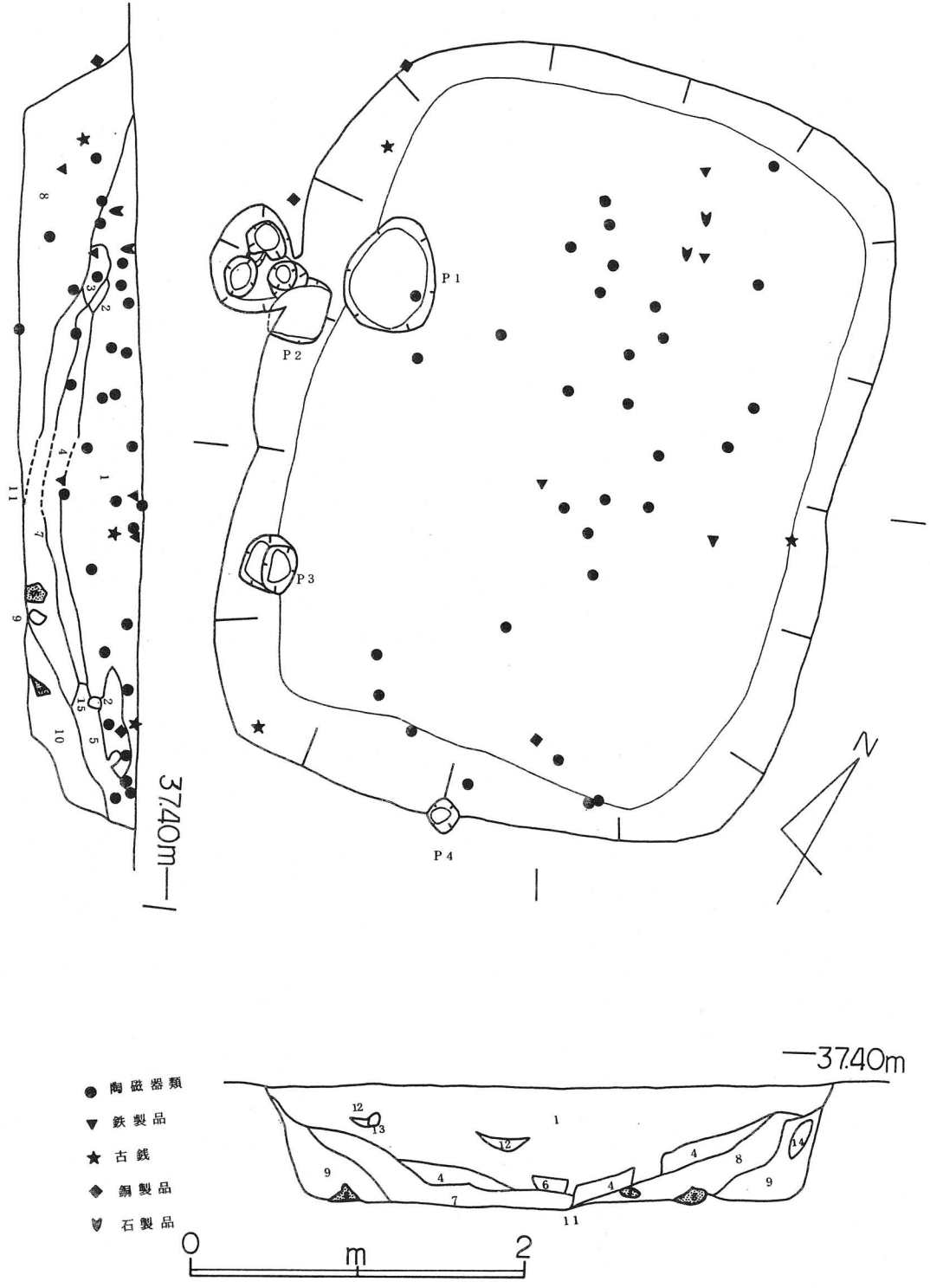
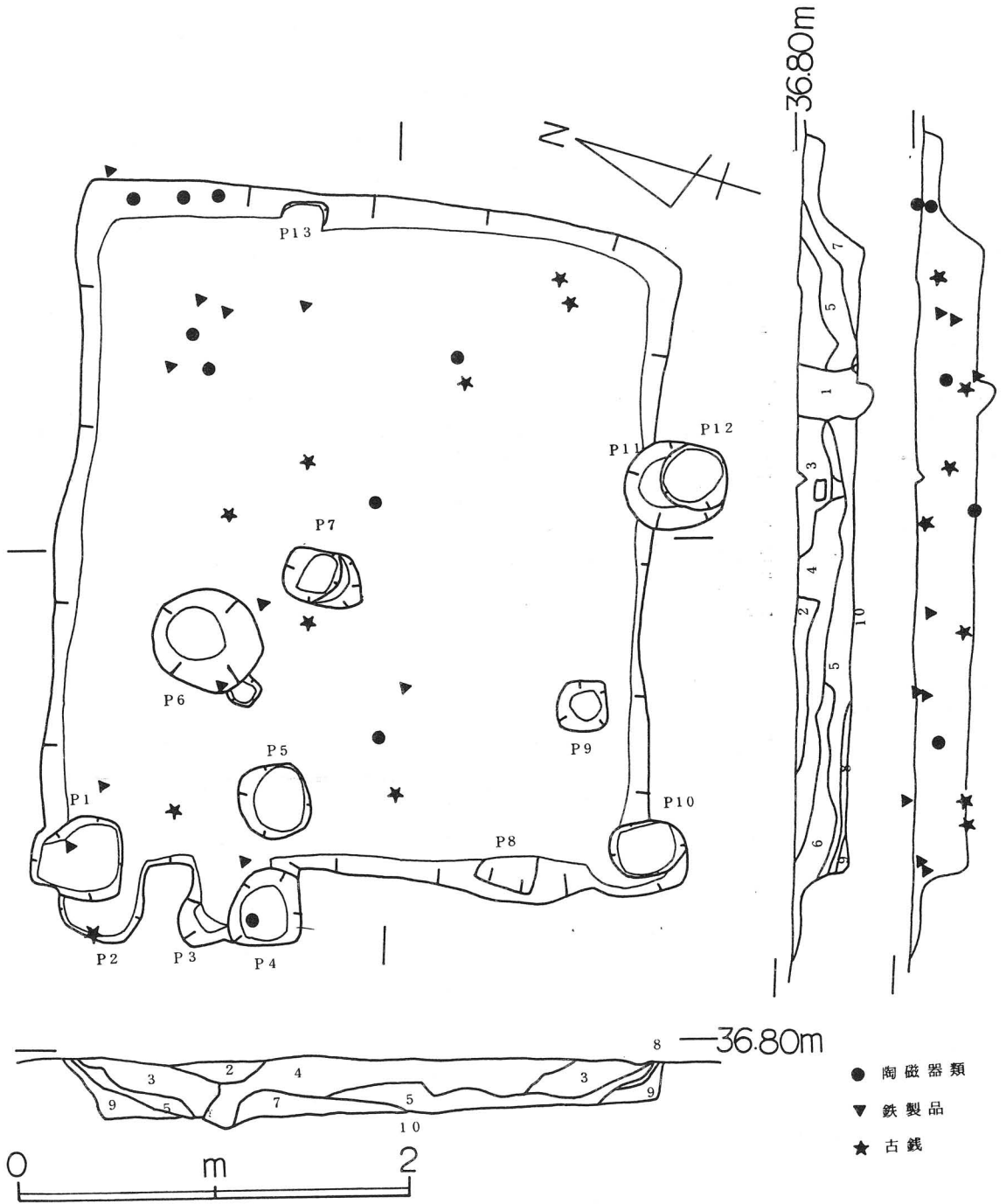
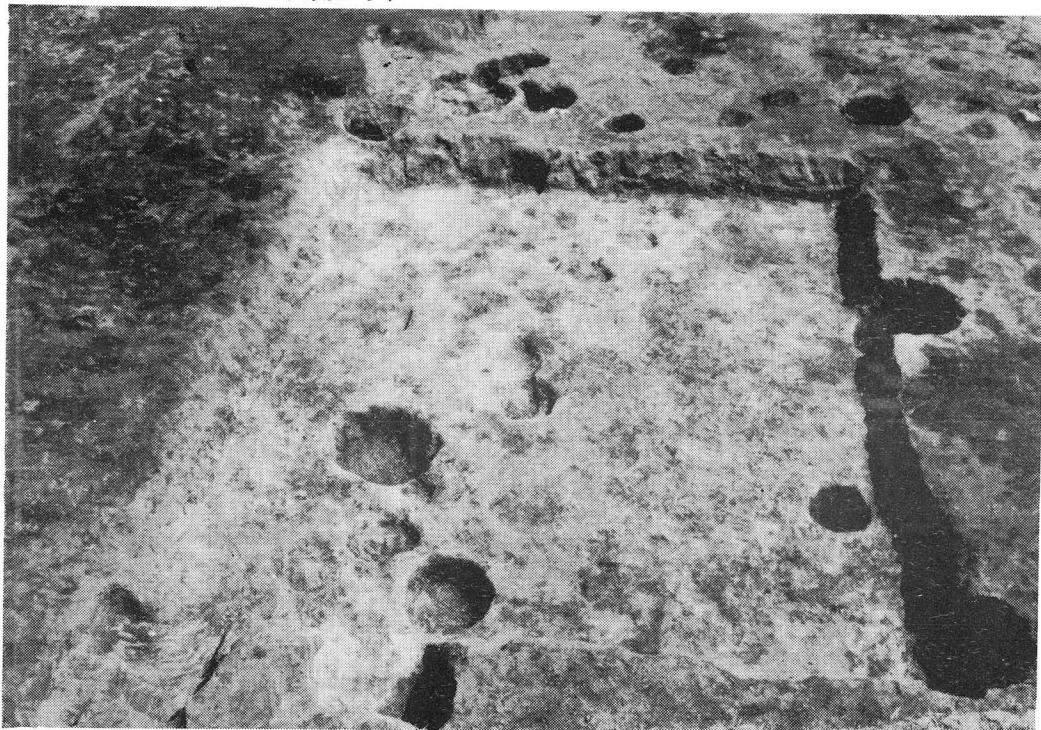




Fig. 21 S T65実測図





ST 66 ( I 55区 ) ( PL.16、PL.17、Fig.22、Ch.24 )

規 模：長軸 320 cm、短軸 300 cm、深さ 64cm。

張り出し：なし。ただし、南側に階段状のものが存在した可能性もある。

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を含み、部分的に炭化物がある 1 層がほぼ全体を覆う。

重複関係：S T 67 ( 旧 )

柱穴配置：Pit1、Pit4、Pit5、Pit6の4個が各コーナーの壁に接する状態で配置されている。  
またPit2はS T 67に伴うものと考えているが、あるいは本遺構の中央に配置されたものかもしれない。

出土遺物：青磁碗・皿、白磁碗、染付皿、美濃灰釉碗・皿、播鉢、溶解物付着土器、銅製装飾品  
( 326 )、小柄 ( 307 )、打根 ( 272 )、鉄鍋、鉄釘4本、淳化元宝・元祐通宝など  
の古銭6枚、および縄文時代石斧 ( 459 )なども覆土上層から出土している。

ST 67 ( I 55区 ) ( PL.16、PL.17、Fig.20、Ch.24 )

規 模：長軸 380 cm、短軸 360 cm、深さ 58cm。

張り出し：なし

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロックに含む混層の単一層。S T 66の覆土と違い炭化物の含有がみられない。

Fig. 22 S T 66・67・S X 29実測図

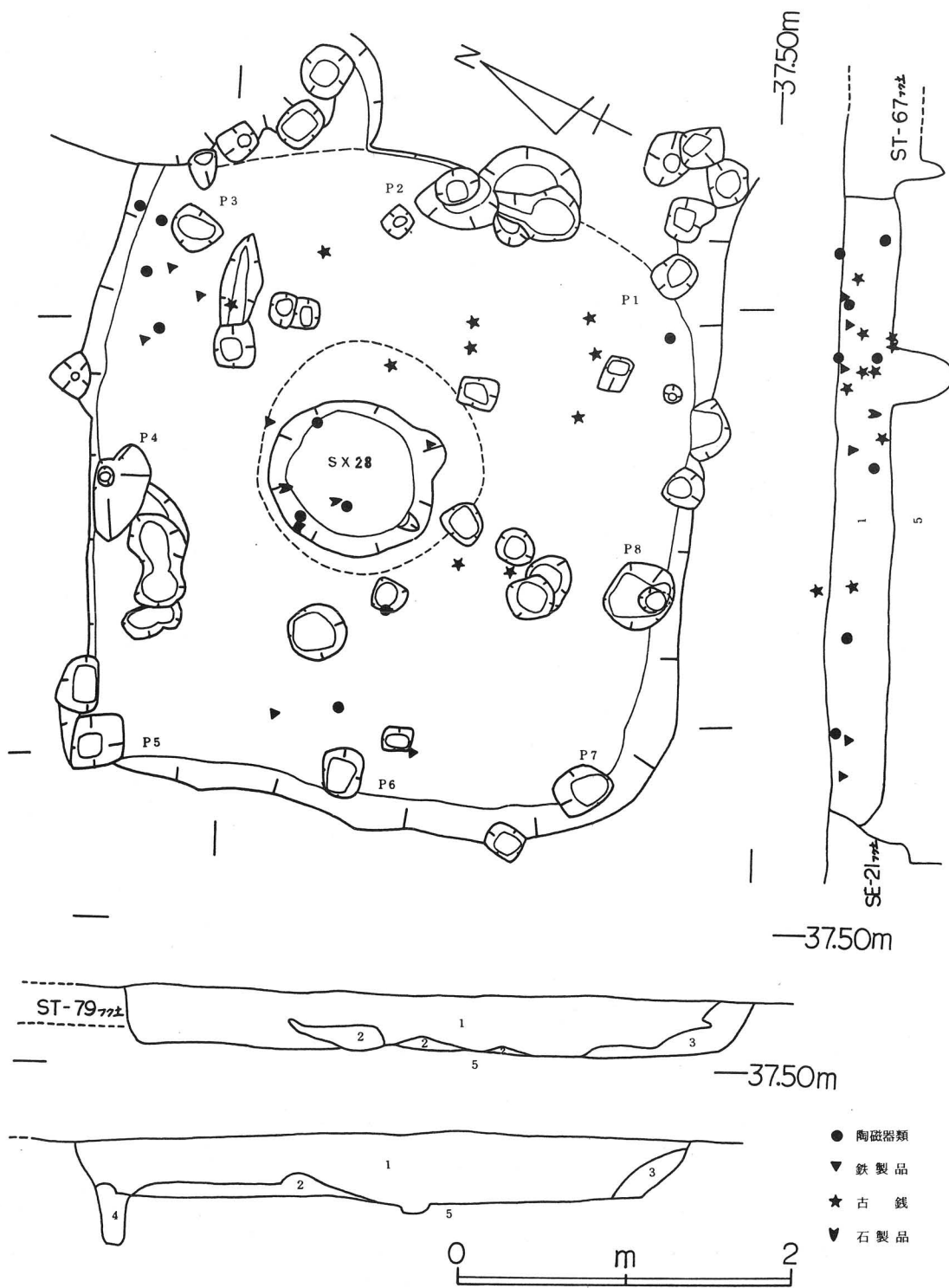


重複関係：S T 66（新）、S X 29（旧）、S T 64（旧）、S T 68（旧）

柱穴配置：壁端に存在するPit1、Pit2、Pit3、Pit9、Pit17などが関連すると思われるが、  
明確には把握できない。

出土遺物：白磁皿（52）、美濃灰釉皿、青磁碗、播鉢、越前甕の他、鉄釘2本、小柄、小札、  
永楽通宝・鏝銭などの古銭8枚がある。出土状況は覆土上層に集中している。

Fig. 23 ST 68・SX 28実測図



ST68〔I-54・55区〕(PL.17、Fig.23、Ch.25)

規模：長軸400cm、短軸380cm、深さ40cm。

張り出し：なし。

覆土：壁端(南側)に黒色土を含む流土がある他、暗褐色土と黄褐色砂質土を部分的に含む混層が全体を覆う。その中には炭化物も少量含まれている。

重複関係：SX28(旧)、ST67(新)、ST79(旧)。

柱穴配置：Pit1~Pit8までの8個が本遺構に伴うもので、壁面に接する状態で2間×2間の配置を有する。深さも平均60cmと比較的しっかりした構築である。なお、Pit4とPit8は建物の内側に柱の抜き取り痕がある。

出土遺物：染付皿、美濃灰釉皿、天目(143)、瓦器、播鉢、溶解物付着土器の他羽口(364)も出土しており、鉄釘4本、鉄鏃、鉄鍋片、永楽通宝・皇宋通宝・祥符元宝・鏹銭などの古銭10枚がある。

ST69 欠番

ST70〔H55区〕(Fig.24、Ch.26)

規模：長軸274cm、短軸222cm、深さ62cm。

張り出し：なし

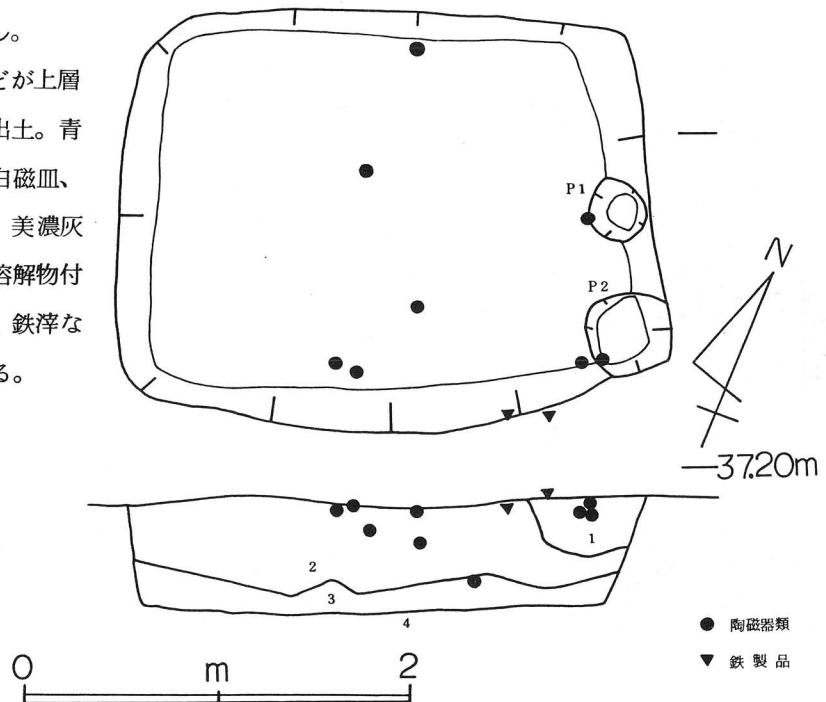
覆土：上層に一部灰を含む1層がある以外、暗褐色土と黄褐色砂質土の混層である。

重複関係：SD19(旧)

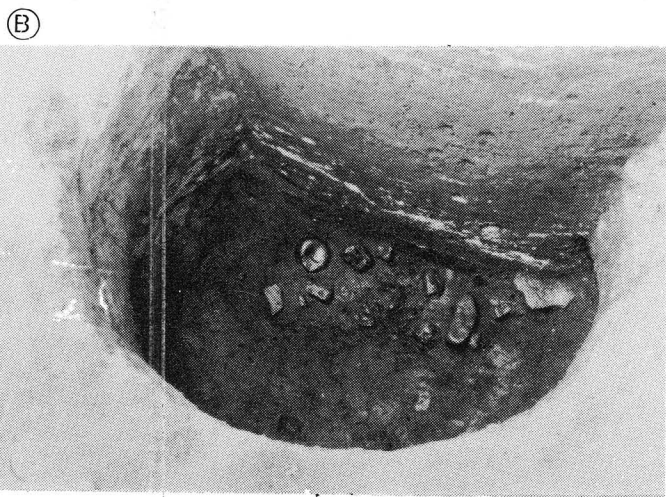
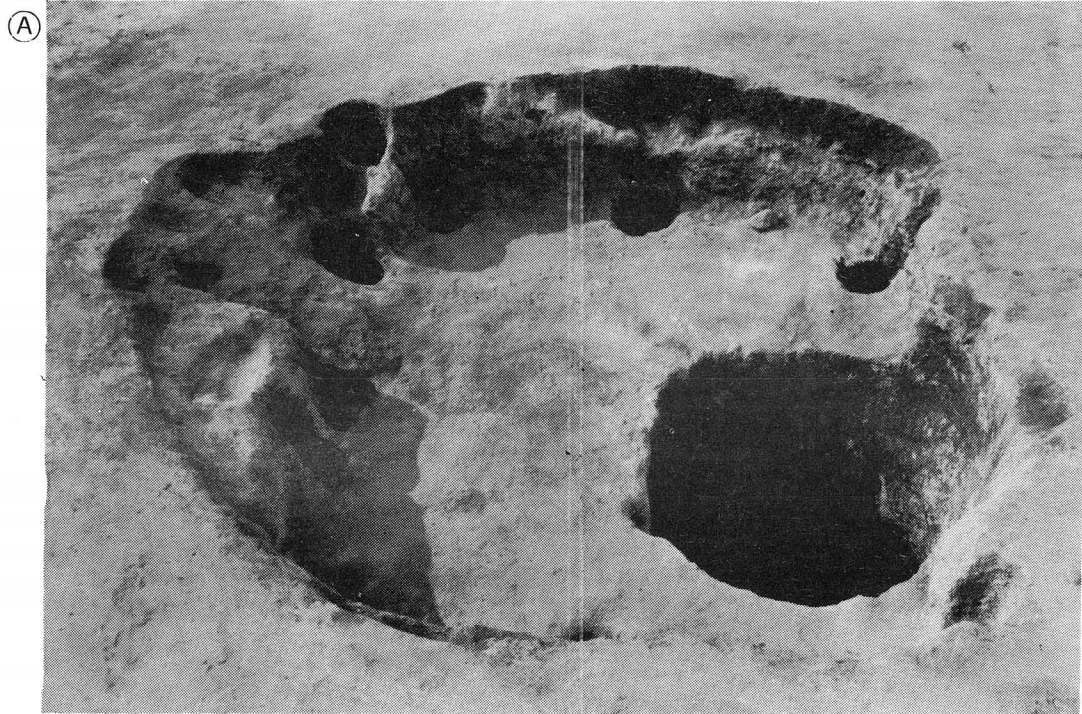
Fig.24 ST70実測図

柱穴配置：特になし。

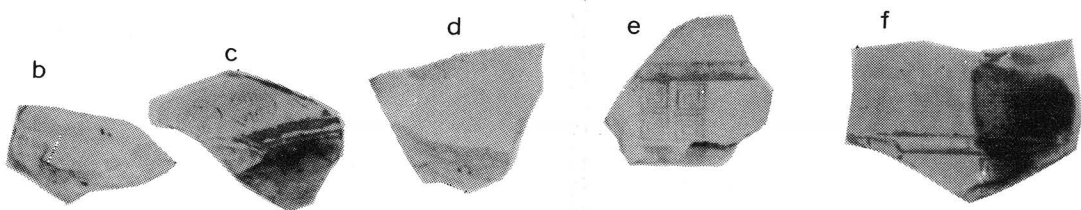
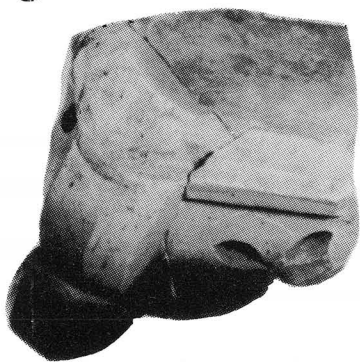
出土遺物：ほとんどが上層からの出土。青磁碗、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、溶解物付着土器、鉄滓などがある。



PL.19 ㊶71全景（南側から） ㊷同集石状態 ㊸出土遺物（瓦器）



㊸ a ( 184 )





ST71〔G55区〕( PL.19、Fig.25、Ch.27 )

規模：長軸 266 cm、短軸 232 cm、深さ 59 cm。

張り出し：西壁北側に舌状スロープで存在する。方向は W-10°-S。

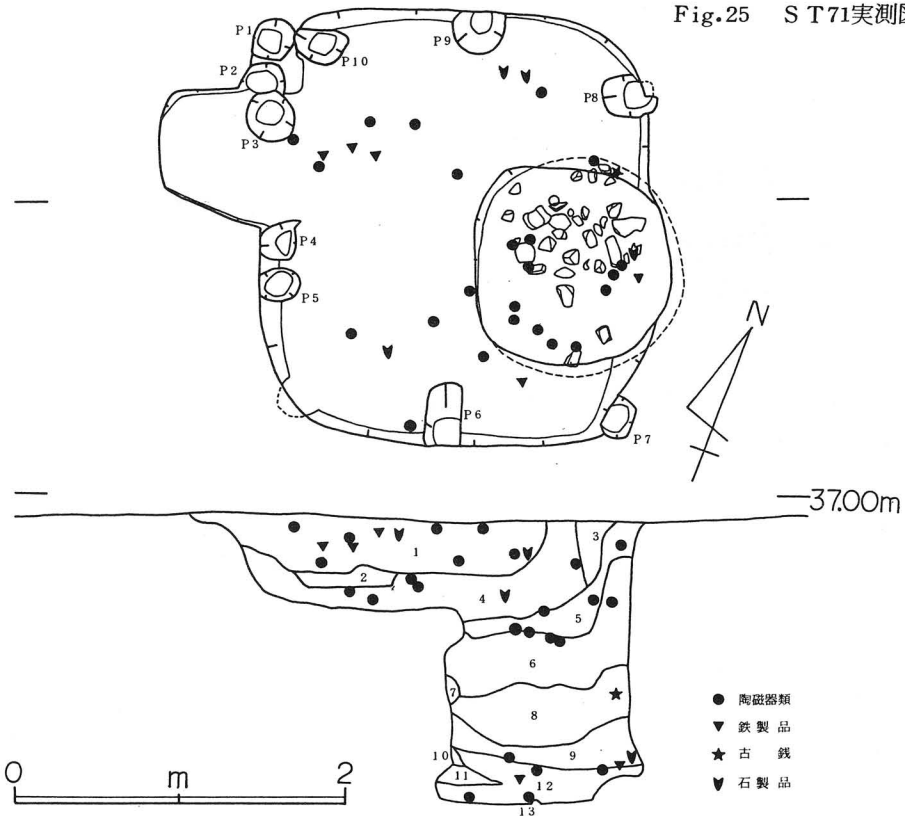
覆土：竪穴部分と貯蔵穴部分で相違がみられ、1・2・4層には灰・炭化物がみられないのに対し、3・5・6・8層では灰か炭化物を含む。そして、9・12層になると川原石が集中して検出され、上層もしまりが強くなる。

重複関係：他の遺構とは重複していないものの、竪穴遺構と貯蔵穴状ピットの関係については、相方同時期あるいは貯蔵穴状ピットが古い時期の構築と推定される。

柱穴配置：Pit4、Pit6、Pit7、Pit8、Pit9、Pit10などが本遺構に伴うものと考えられるが、Pit6は 61.6 cm と特に深く、南西隅には柱の痕跡だけが残っている。(深さがない。) いずれも壁端に接する状態で 2間×2間の配置である。

出土遺物：瓦器の出土に特徴がある。PL.19 ㊸はその一部であるが、手焙りの脚の部分(A)、行火状に円筒形を呈するもの(E・F)などがあり、総数で16片の出土をみた。他には白磁皿、挿鉢、溶解物付着土器、鉄釘3本、鉄滓などがある。また貯蔵穴覆土8層から寛永通宝(寛の字はあまり明瞭でない)と判読できる銅銭が1枚出土しており、本遺構が17世紀以降に構築された可能性も考えられる。

Fig.25 ST71実測図



PL. 20 ST72全景（西側から）

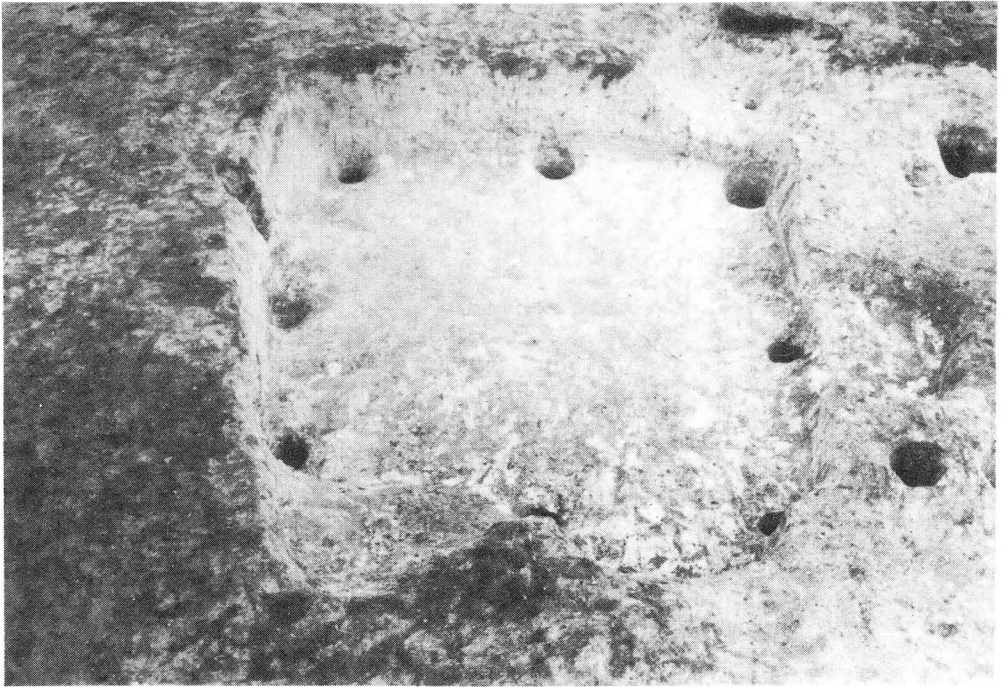
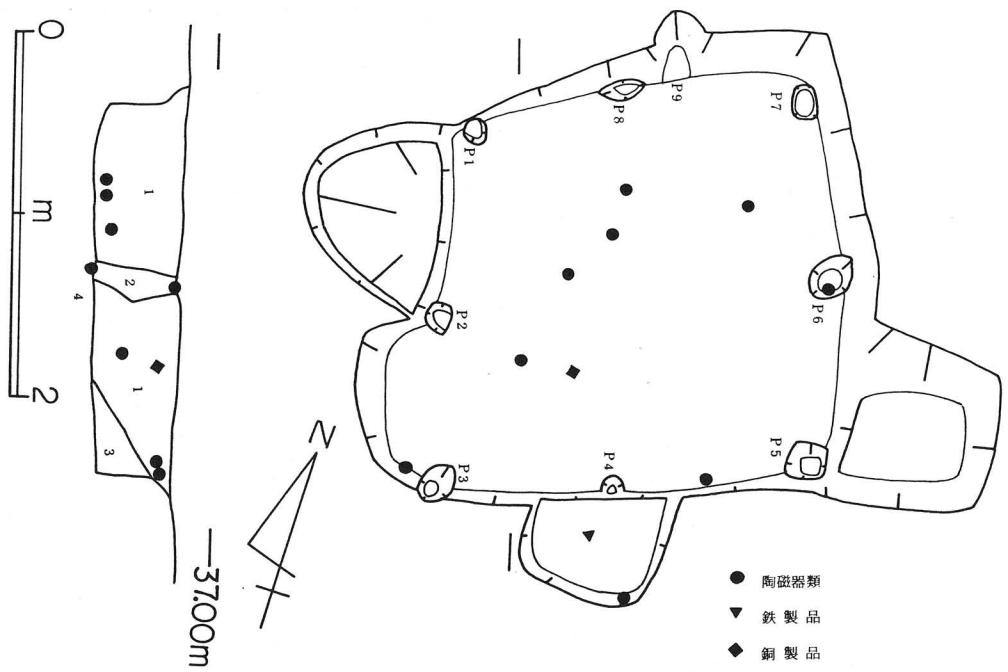


Fig. 26 ST72実測図



S T 7 2〔 F 55区 〕 ( PL.20、 Fig.26、 Ch.28 )

規 模：長軸 276 cm、短軸 250 cm、深さ 50cm。

張り出し：西壁北側に舌状スロープで存在する。また西壁南側にも若干角張った張り出しがある。

覆 土：ほぼ全体が褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む混層である。

柱穴配置：Pit1～Pit8までの柱穴が本遺構に伴うもので、壁端に接する状態で2間×2間に配置される。掘り方は一般に小さく、深さも25cmぐらいと規則的である。

出土遺物：青磁碗( 19 )、瓦器( 172・185 )、天目碗、美濃灰釉皿、白磁皿、溶解物付着土器、永楽通宝、砥石、用途不明鉄・銅製品の出土があった。

S T 7 3〔 F・G-54 〕 ( Fig.8 )

規模等については、S D09・S D20および柱穴による攪乱のため詳細不明。ただし、掘り下げ途中約20cm以内の所で鉄釘が42本集中して出土し、付近に焼土痕が存在した。

S T 7 4 S X20に変更

S T 7 5〔 E・D-55区 〕 ( PL.21、 Fig.27、 Ch.29 )

規 模：長軸 310 cm、短軸 270 cm、深さ 116 cm。

張り出し：南壁西側に舌状スロープに存在する。方向はS-5°-W。

覆 土：遺構確認面では、1層とした暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロックに含む土層の範囲が明瞭に検出され、それが覆土上層に擂鉢状を呈して存在する。下層にある2層と3層は、灰あるいは炭化物を含む層で廃棄直後の流入土と考えられる。

重複関係：S D10(旧)

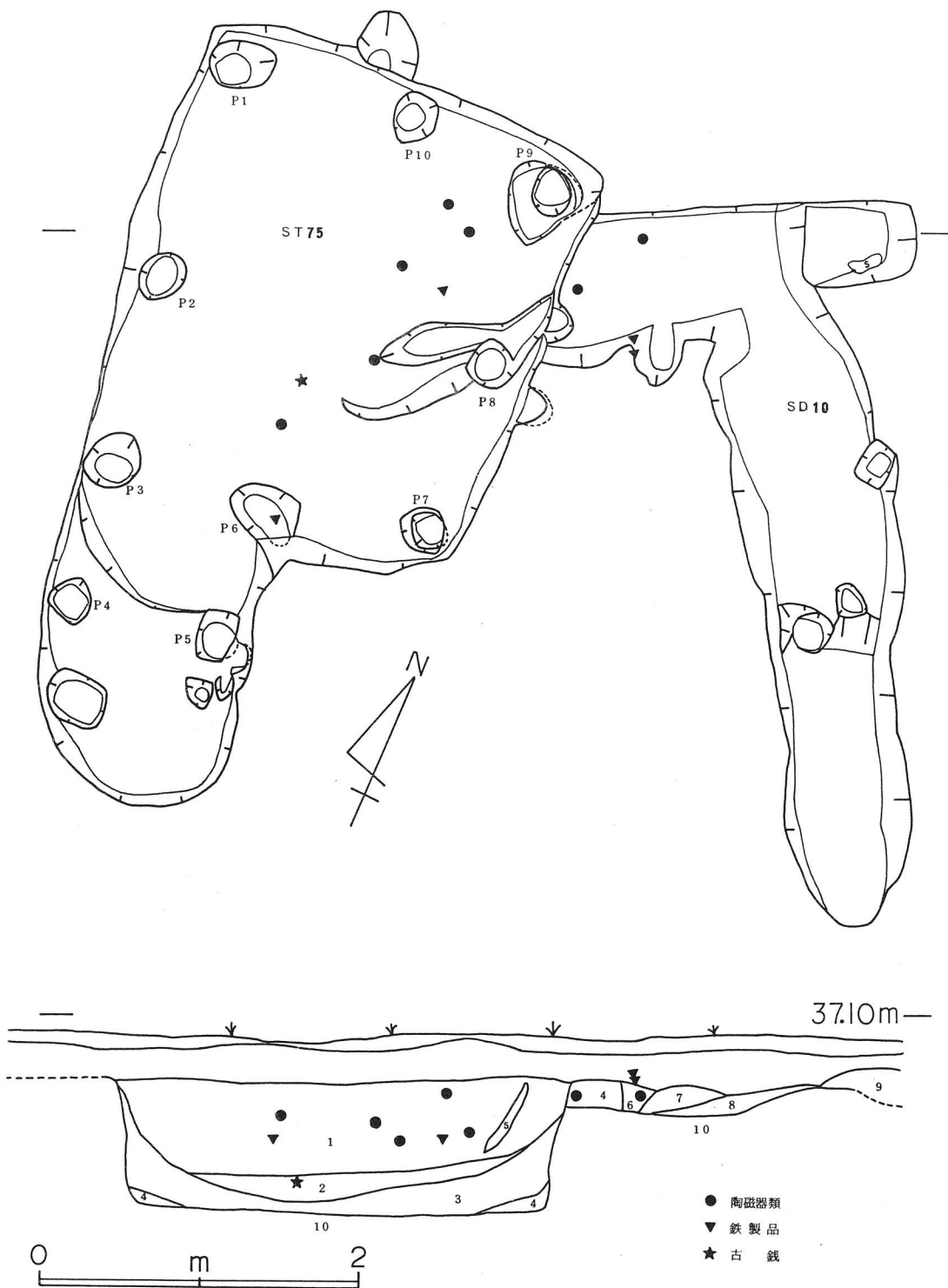
柱穴配置：Pit1～Pit10までの10個が本遺構に伴うものと考えられ、Pit4とPit5は張り出し部分に関連する柱穴、その他が竪穴の上部構造を規定する柱穴と思われる。柱穴は壁端に接する状態で配置され2間×2間の規模である。深さは平均54cmと比較的堅固な構造であったことが推定される。

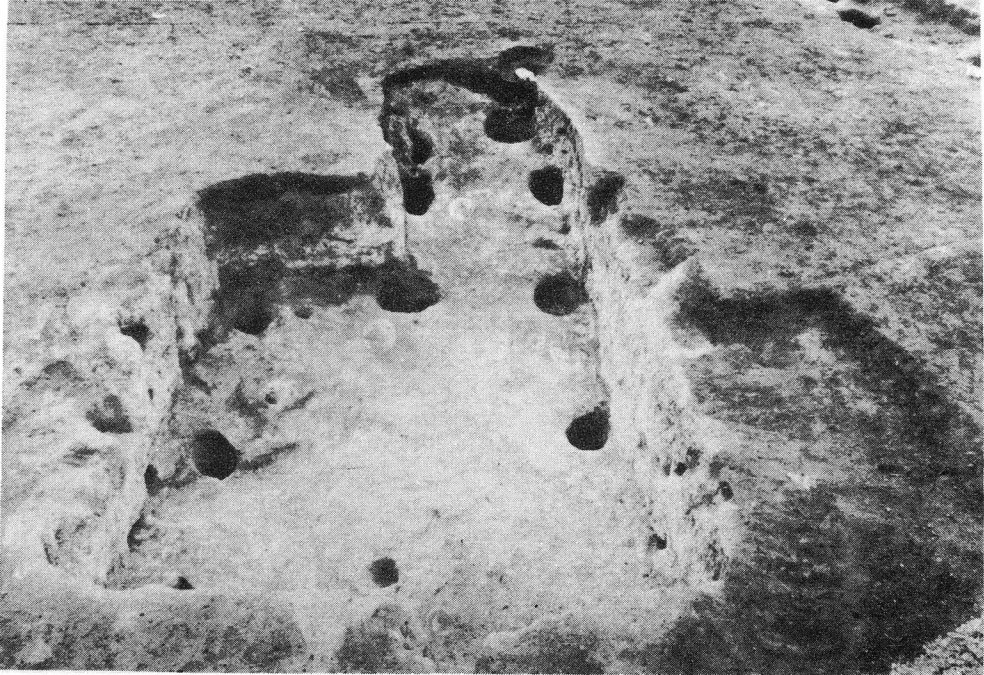
出土遺物：ほとんどが1層とした上層からの出土で、床面から白磁皿の口縁部分が出土したと記憶しているが移動の時に遺失してしまい定かでない。主なものとしては、青磁碗・皿、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿( 127 )、鏝銭、小札、鉄釘、不明銅製品( 344 )などがある。

S D 1 0〔 E55区 〕 ( Fig.27、 Ch.29 )

幅が約100 cmほどの溝で、深さは40cm、南北方向に走るが、S T75の東壁付近で東西方向に折れる。床面から須恵器火だすき坏( 472 )が出土しており、覆土中も土師器・須恵器しか出なかったため、城館期以前の遺構と推定される。

Fig. 27 ST 75・SD10実測図





ST76〔E・F54区〕（Fig.28、Ch.30）

規模：長軸 465 cm、短軸 300 +  $\alpha$  cm、深さ 35 cm。

張り出し：不明。

覆土：記録を取っていないため不明。

重複関係：ST77（？）、SE30（新）

柱穴配置：Pit1、Pit2、Pit3、Pit4などが本遺構に伴うと考えられるが、形状・深さも統一性がみられないため不明確である。他の柱穴との重複が著しい。

出土遺物：青磁碗、白磁碗、染付皿、美濃灰釉皿、溶解物付着土器、永楽通宝・開元通宝など古銭5枚、鉄釘8本、小札2枚、不明銅製品などがある。

ST77〔F54区〕（Fig.29、Ch.31）

規模：長・短軸 320 cm、深さ 32 cm。

張り出し：なし。

覆土：中央に存在した円形ピット（現代の廃棄物があった攪乱部分）のため記録を取っていないかった。

重複関係：ST76（？）

柱穴配置：Pit1～Pit6までが本遺構に伴うものだろう。深さも平均47cm強と平均しており、

Fig. 28 ST76・SE30実測図

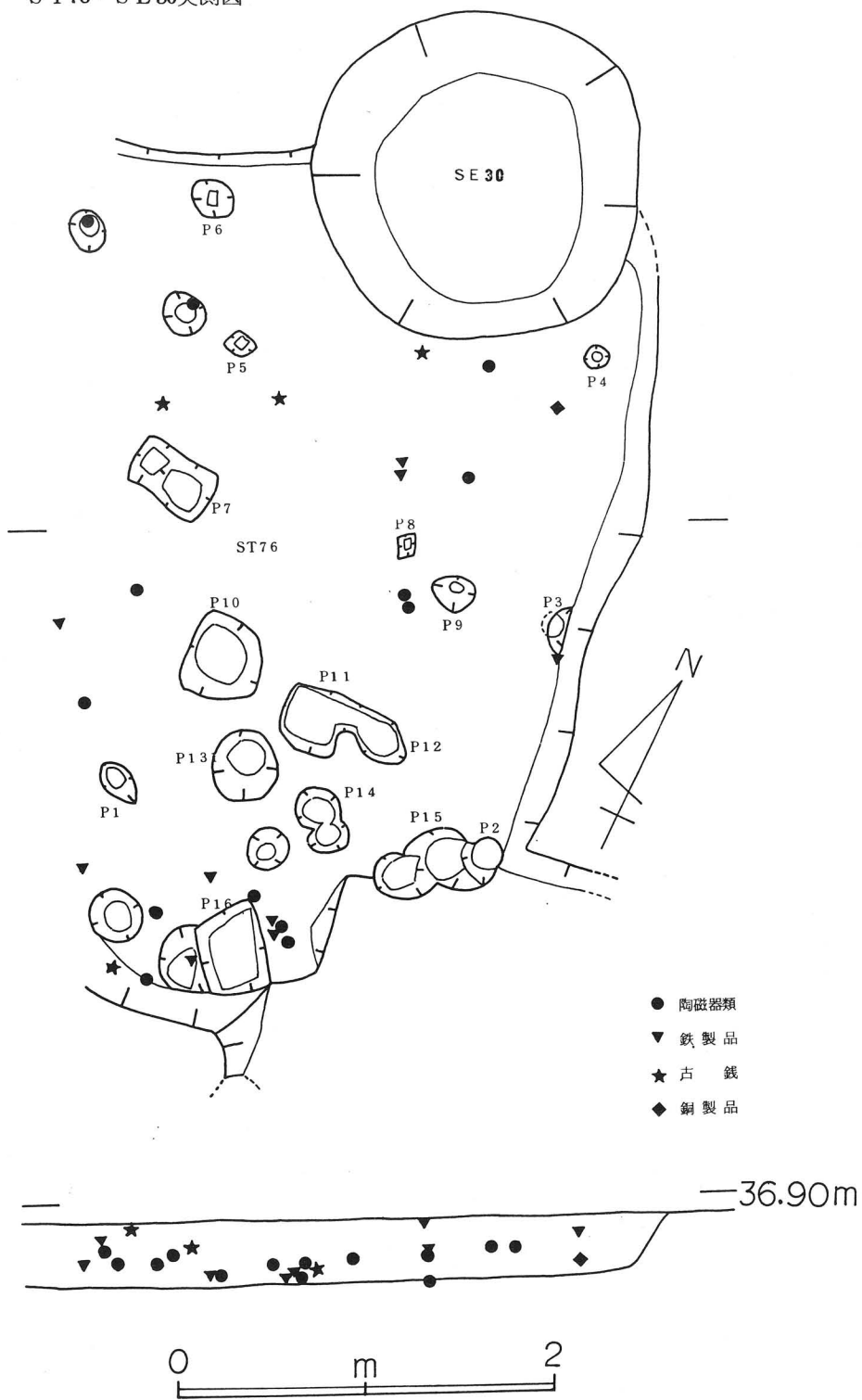
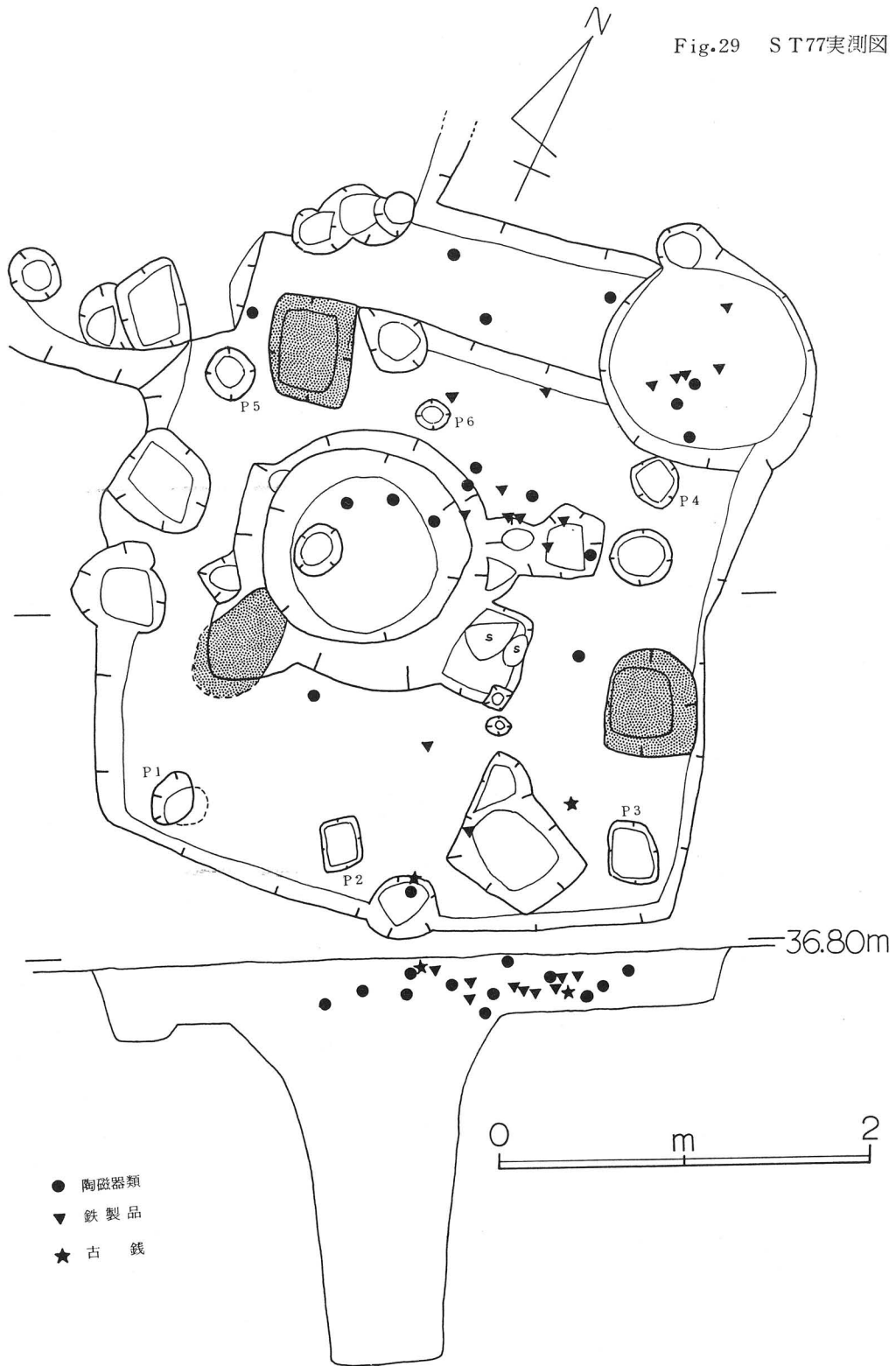




Fig.29 ST77実測図



壁面からやや離れた場所に1間×2間の配置がみられる。柱穴のうち、スクリーントーン部分はS B 03等に関連するもので直接本遺構とは関係がない。

出土遺物：青磁碗（1）、染付碗（70）、銅鈴（312）、の他白磁皿、美濃灰釉皿、鏝銭、鉄釘、各種不明鉄製品（299など）がある。

なお、中央の円形ピットからはブリキ板やビール瓶・プラスチック製品などが出土していた。

ST 7 8 P 39に記載済。

ST 7 9〔I 55区〕（Fig. 7）

攪乱・重複が激しく明確に把握できなかったため記述を割愛する。

ST 8 0〔I-54・55区〕（Fig. 30、Ch. 32）

規 模：長軸 308 cm、短軸 240 cm、深さ60cm。

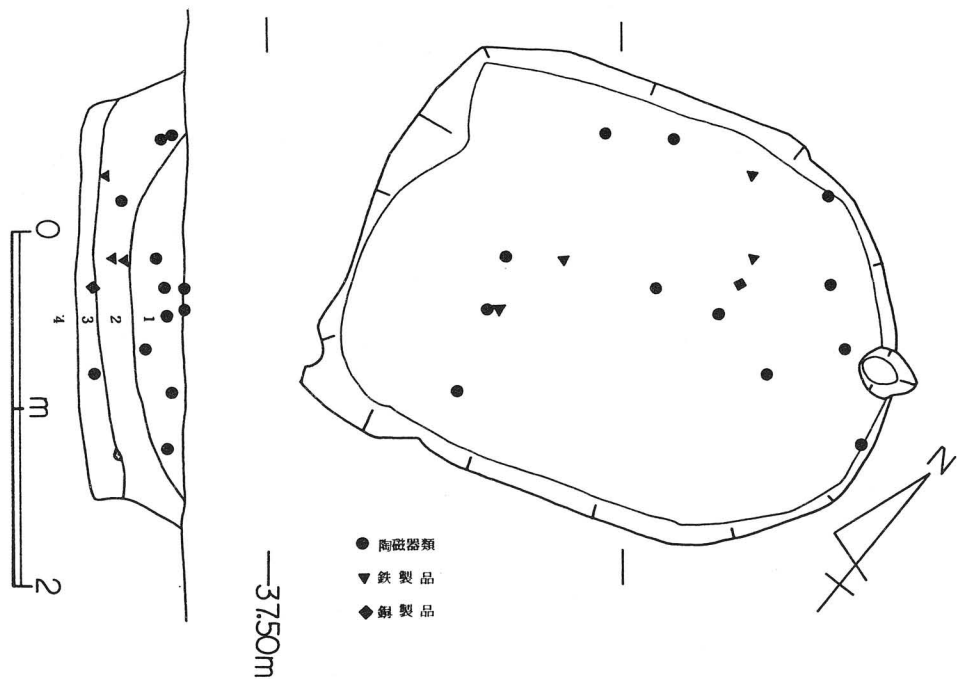
張り出し：なし。

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層が上層を覆い、下層には黒色土が若干含まれている。なお1層には炭化物も若干含まれている。

重複関係：S X 30（旧？）

柱穴配置：なし。

Fig. 30 ST 80実測図



出土遺物：染付皿（103）、白磁碗、青磁碗、美濃灰釉皿、天目碗、瓦器、溶解物付着土器、羽口、小刀、鉄釘3本、用途不明銅製品（328）、鉄滓などがある。

ST81〔I・J-56・57区〕（PL.22、PL.23、Fig.31、Ch.33、Ch.34）

規模：長軸560cm、短軸510cm、深さ66cm。

張り出し：東壁中央に舌状スロープを呈する。17層黄灰色粘土はその部分に貼ったものである。方向はN-67°-E。この張り出しは後述遺構重複の中で古い時期に構築されている。

覆土：掘り下げ途中で、遺物の出土が上層と下層で相違のあることを把握していなかったため、2遺構が重複しているとは知らずに完掘してしまった。つまり、上層にある1層・2層・3層・4層・5層までがひとつの竪穴遺構覆土であり、6層を基本とする下層がそれ以前の竪穴遺構であった。仮に、上層をST81A、下層をST81Bとすると、ST81Aは暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に炭化物を含む土層で覆われ、5層とした白灰を含む層が床面直上の土層となる。ST81BはST81Aの覆土より黄褐色砂質土がブロック状に含まれる傾向を呈し、しまりがなく軟質な土層を呈する。炭化物の含有量も前者より少ない。

柱穴配置：ST81Aでは、Pit7、Pit20、Pit21、Pit10、Pit6、Pit3、Pit17、Pit16、Pit15、Pit18の10個が想定され、おそらく壁端に接する状態で東西2間、南北3間の配置を考えてよいのではないだろうか。柱穴の深さも平均52cmと、当初の床面からだと80cmほどの深さになり、堅固な構造物と考えられる。

ST81Bは、Pit11、Pit12、Pit13、Pit14、Pit3、Pit2、Pit1が推定されるけれども南・北壁に隣接するものがないため、Pit5を中心の柱として利用していたのではないだろうか。詳細は不明であるが、壁面に接する状態で東壁（出入口部分）3間、西壁2間、南北壁1間の変則的配置が考えられる。

重複関係：SD07（旧）、他に掘立柱建物跡（SB07）なども考えられるが不明確である。

出土遺物：①銅鏡（PL.23） ④（302）⑤（303）ともにST81Aの床面と考えられる層位から約105cmの間隔をおいて出土した。出土した時はどちらも背面（文様部分）を上にし、藁状の植物繊維で包まれた状態にあった。県内の発掘調査による発見としては最初の例で、背面文様が菊花双雀文様である点や亀紐などから、鎌倉時代末期の特徴を有するとされ伝世品的意味が強い。二面とも同類の文様を有し、⑤の内径に④がすっぽりおさまることから考えると、二個一対で使用していた可能性が高い。

②瓦器（PL.23） C・D・F・Hは手焙りの破片、G・Iは行火の類と考え

られる。特にGとしたものは、昭和54年度調査で出土した瓦器行火（浪岡城跡Ⅲ P 102 № 131 の行火と接合し注目される。なお、これらの瓦器はすべてS T 81 Aの覆土から出土している。

(3)天目（PL.23-E・154）碗は、張り出し部分の黄灰色粘土直上から出土したもので、S T 81 Bに伴うものと考えられる。

これらの他、美濃灰釉皿（116）、瓦器（166・182）、播鉢（216・217）、鉄鏃（269）、銅脚（311）、銅割鋌（332）、硯（346）、石臼（360）が図示できたものである。S T 81 AとS T 81 Bの覆土出土遺物における明確な差異はなく、S T 81 Aからの出土量が陶磁器類、鉄製品共に多い点が指摘できるだけである。出土遺物をまとめると、青磁碗・皿、染付皿、美濃灰釉皿、天目碗、唐津、瓦器、播鉢、溶解物付着土器、元豊通宝など古銭11枚、小札、鉄釘63本（特に10本以上集中して出土した箇所が2箇所ある。）、鉄鏃4本、火箸、鉄滓、硯、砥石、石臼、各種銅製品となる。

性 格：本遺構が、銅鏡二面を出土したことで、単なる生活遺構というより祭祀的色彩を濃く有したりあるいは遺物（特に鉄釘など）の豊富さから土倉的性格を想定しなければならぬであろう。

PL.22 S T 81全景（西側から）

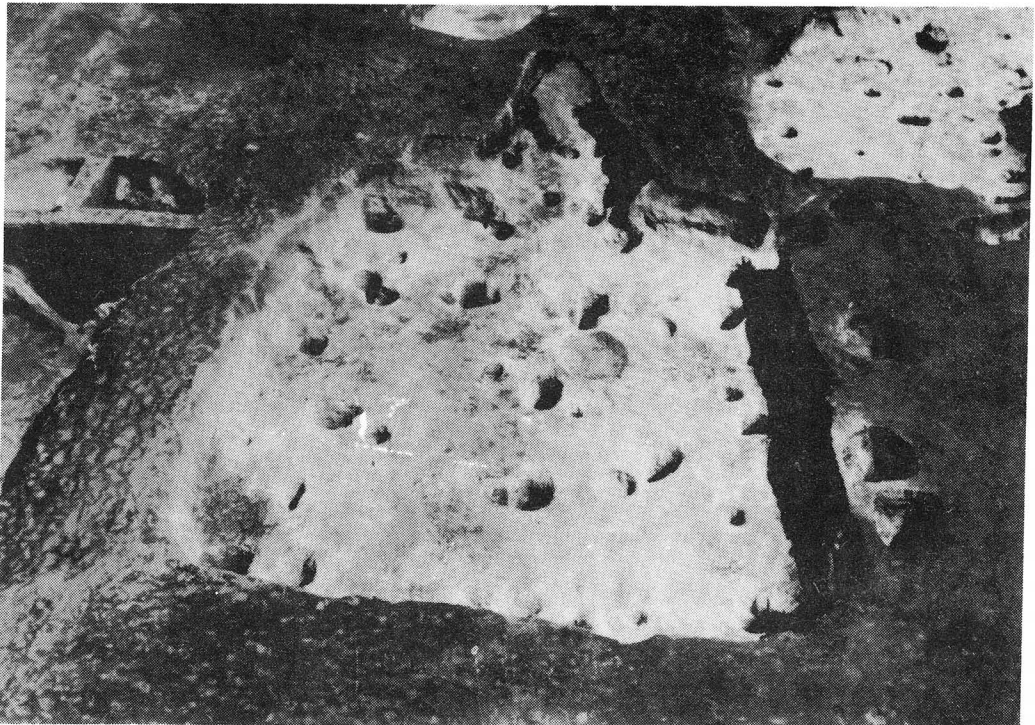
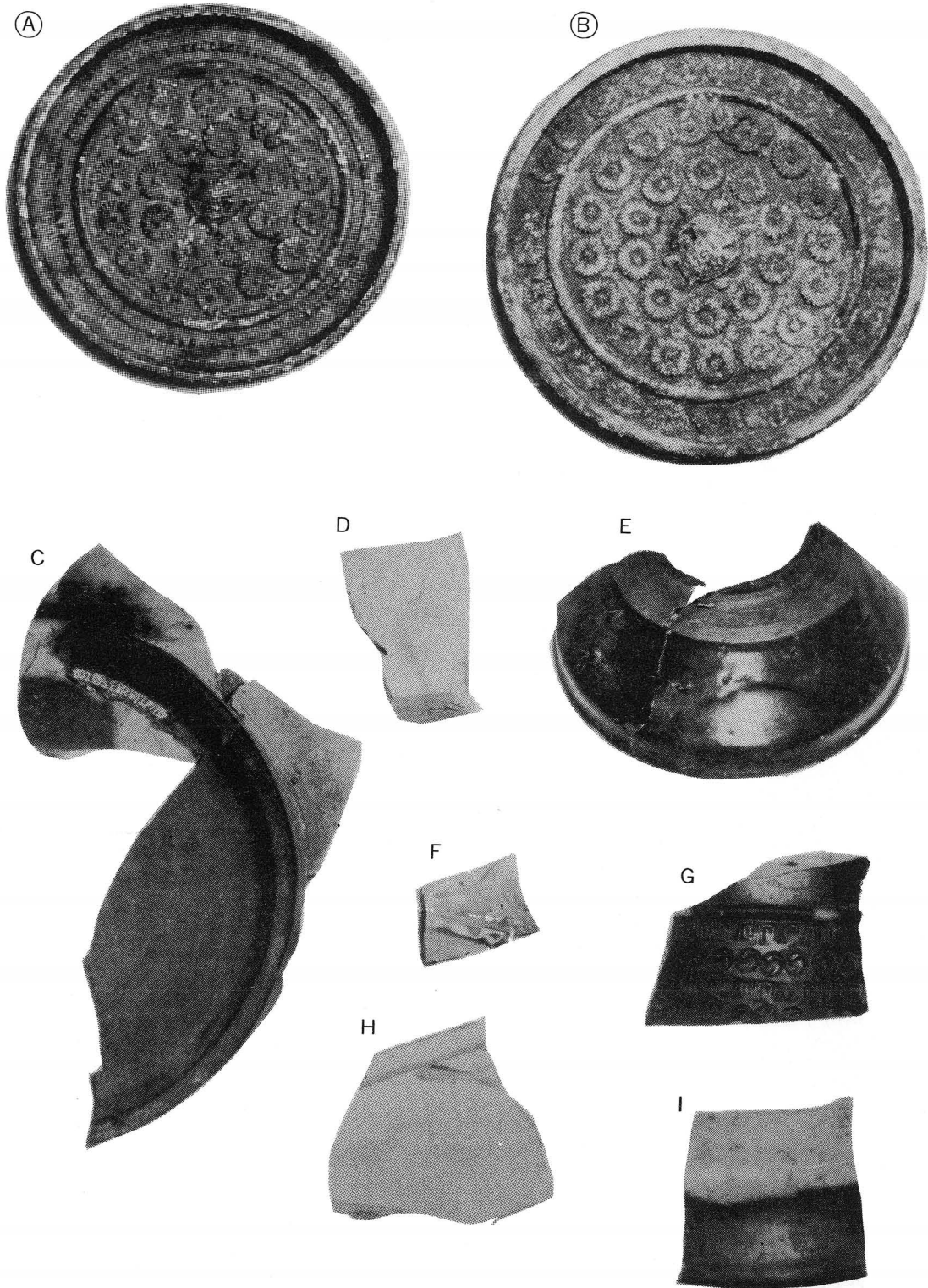


Fig.31 S T81実測図



PL. 23 S T81出土遺物





ST 8 2 [ I - 56・57区 ] ( PL.24、Fig.32、Ch.35 )

規 模：長軸 310 cm、短軸 218 cm、深さ 86cm。

張り出し：なし。

覆 土：上層 3・4・5 は暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層で、一部炭化物も含まれる。

下層 7・8 は黒色土あるいは暗褐色土の単層である。

重複関係：SE 24 ( 新 )

柱穴配置：Pit1～Pit3までしか確認できなかった。いずれも壁端に存在し、Pit3だけコーナーから離れた所に位置している。

出土遺物：青磁、瓦器 ( 181 )、鉄釘、小刀などが覆土上層から出土している。

SE 2 4 [ I 57区 ] ( PL.24、Fig.32、Ch.35 )

規 模：長軸 ( 290 ) cm、短軸 190 cm、深さ 290 cm。

覆 土：暗褐色土の単一層。

特 徴：木柱の隅柱と考えられる柱痕が四ヶ所で検出されたが、他の痕跡はなかった。底に川原石が遺物と共に廃棄された状況で出土している。

出土遺物：青磁碗 ( 23 )、美濃瀬戸系灰釉壺 ( 123 )、唐津皿 ( 161 )、瓦器 ( 180 )、播鉢 ( 209 ) の他底から文様を彫り込んだ硯 ( 345 ) が出土している。

PL.24 ST82・SE24全景 ( 北側から )

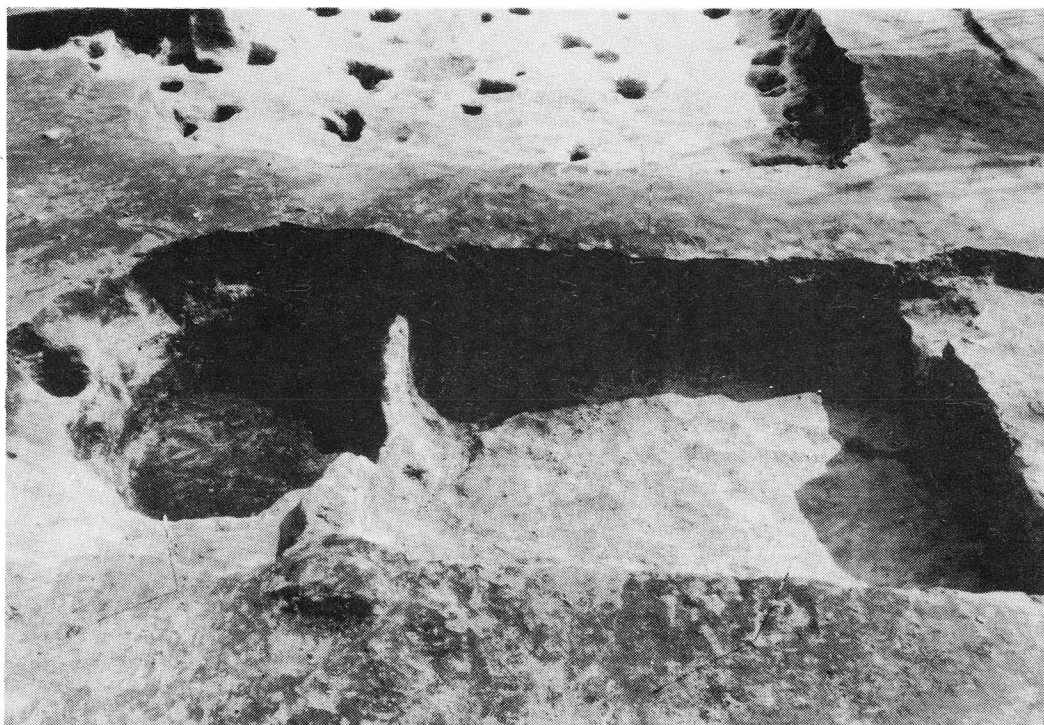


Fig.32 ST82・SE24実測図

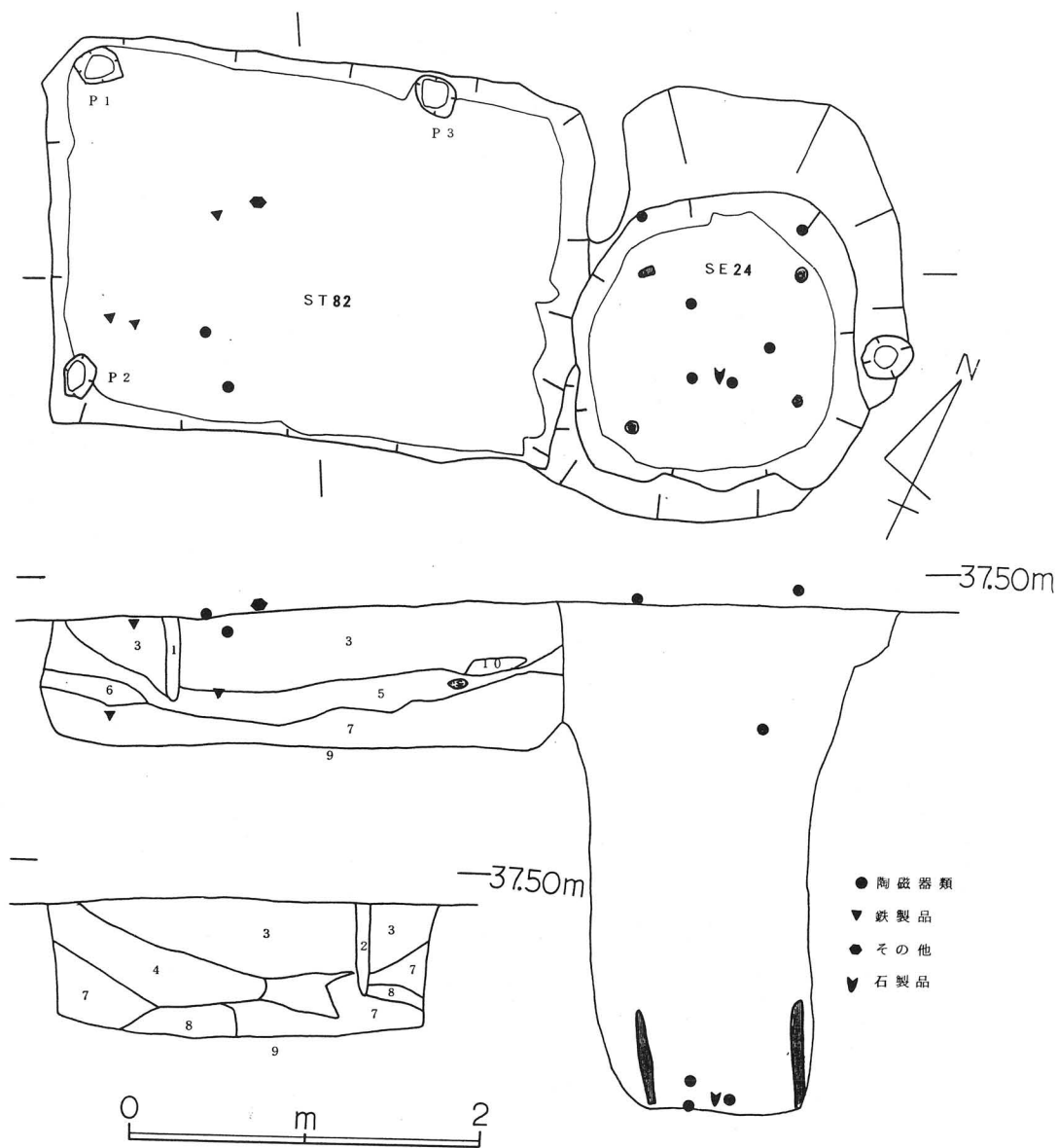
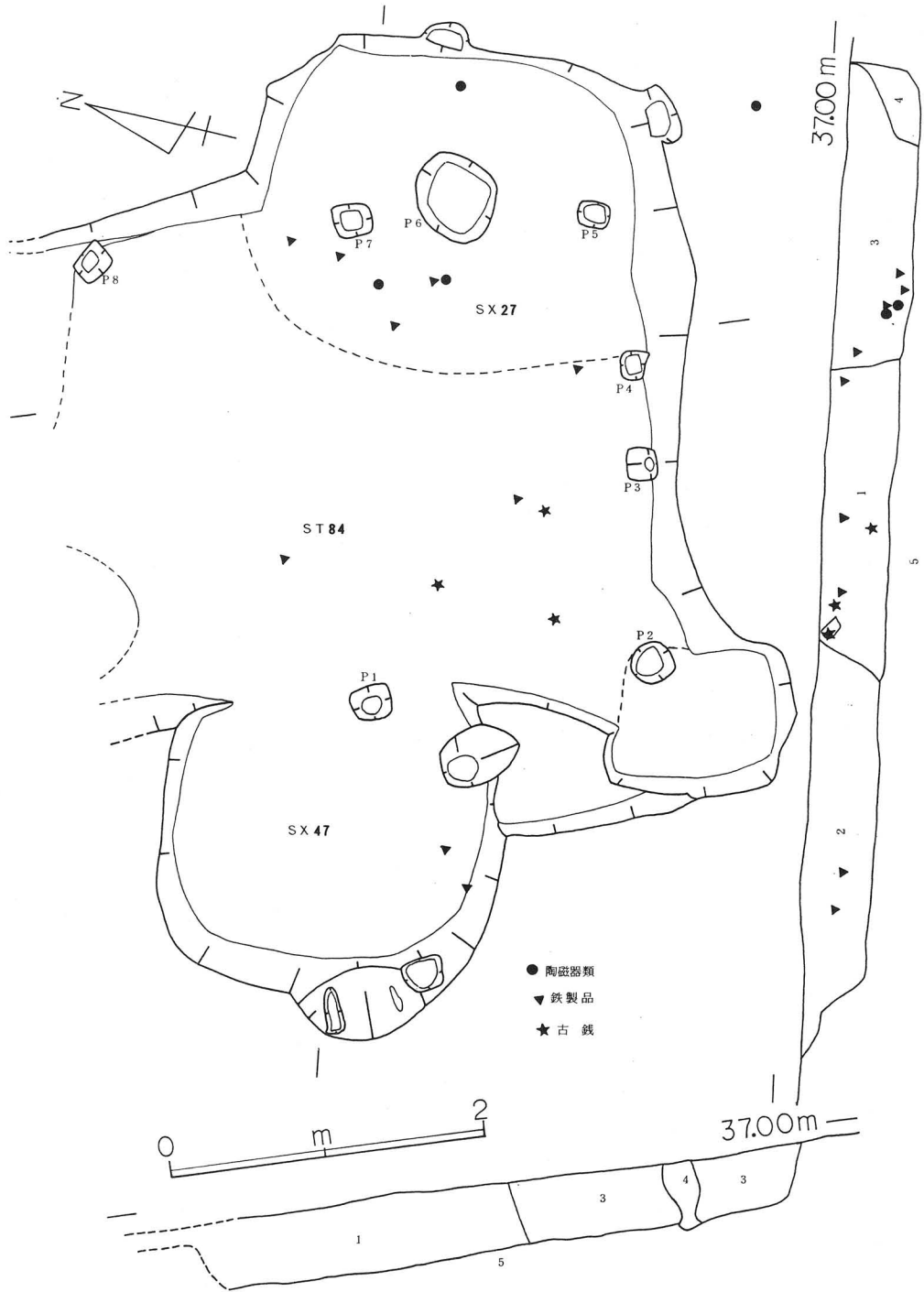


Fig.33 ST84・SX27・47実測図



ST 8 3 [ L-53・54区] 昭和56年度調査区と重複したため次回に報告する。

ST 8 4 [ I54区] ( Fig. 33、Ch. 36 )

規 模：長軸 ( 390 ) cm、短軸 340 cm、深さ 46 cm。

張り出し：確認できず。

覆 土：明褐色土に黄褐色土を斑点状に含む混層。

重複関係：S X 27 ( 新 )、S X 47 ( 新 )

柱穴配置：Pit1、Pit2、Pit3、Pit5、Pit7、Pit8が本遺構に伴う柱穴で、壁端に2間×2間で配置されていたと考えられる。残念ながら北壁を明確に検出できなかった。

出土遺物：鉄鏃 ( 268 )、鉄釘、聖宋元宝など古銭3枚が出土している。

#### 〔 竪穴遺構小結 〕

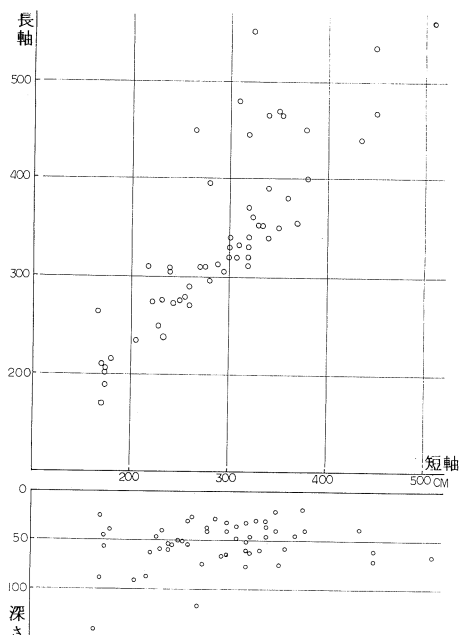
今回検出された竪穴遺構のうち、出入口と考えられる張り出しを有するものは7基しかなく、明確に柱穴配置のあるものも13基と半数に満たない状況にある。いわゆる、竪穴遺構の概念があいまいな現状で、竪穴遺構の形状、形態、出土遺物の相違による分類は時期尚早と考えられ、今回S Xと仮称した竪穴の中にもここでいう竪穴遺構が含まれているかもしれない。その意味で今回報告した竪穴遺構を城館期の構築物として広義に解釈していただきたい。

昭和53年度および昭和54年度調査の竪穴遺構

も含めて、規模の分布を示したのが右図である。S T 81のように二面の銅鏡や多量の遺物が出土することはまれであり、遺物も埋め土と考えられる覆土中からの出土が90%以上を占める。この事は、竪穴遺構自体が恒常的な建物跡として構築されたというより、短期間の使用で充足するものであったことと理解できる。

特に覆土上層から炭化物や灰が検出されることが多いことは注目すべき事実で、落城期の遺構 ( 焼失した遺構 ) がほとんど検出されない現在、落城期以前に竪穴遺構の大部分が埋め戻されていた可能性が高い。今後は、出土遺物の面からも構築・廃棄時期を考えてゆかねばならないであろう。

竪穴遺構規模分布図



C 井戸跡

SE20〔K-54・55区〕( PL.20、Fig.34、Fig.35、Ch.37、Ch.38 )

規 模：長径 235 cm、短径 230 cmの円形で、深さは 300 cm +  $\alpha$ 。湧水のため、底まで完掘できなかったが、東側に深い落ち込みがみられ、壁面の崩壊によってややフラスコ状を呈する。

覆 土：1層から23層あたりまでは炭化物あるいは灰を含む土層が重なり、遺物の出土状況からみても人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物：陶磁器では舶載品が圧倒的に多く、青磁碗14片、同皿9片、白磁皿9片、染付皿10片の他、美濃灰釉皿1点、珠洲系甕1片、瓦器1片、播鉢1片などがある。Fig.34とFig.35を参照して主な出土品をみると、㊸青磁碗は蓮弁文が簡略化されて劃線だけになっている。㊹青磁碗底部。㊺青磁皿で酸化のため赤褐色を呈する。㊻染付皿。㊼白磁皿。㊽瀬戸瓶子あるいは壺の底部。があり一括廃棄された資料として貴重である。また、㊾は馬の上顎・下顎の出土状態であり、PL.25 ㊿は漆器碗の漆被膜の残存状態である。この他銅製坩堝( 313 )、火箸( 285 )、鉄釘8本、鉄鍋(内耳のものもある)、永樂通宝、聖宋通宝など古銭7枚があり、鉄製品に関しては武具がなく生活用具が多いという特徴がある。

Fig.34 SE20断面図

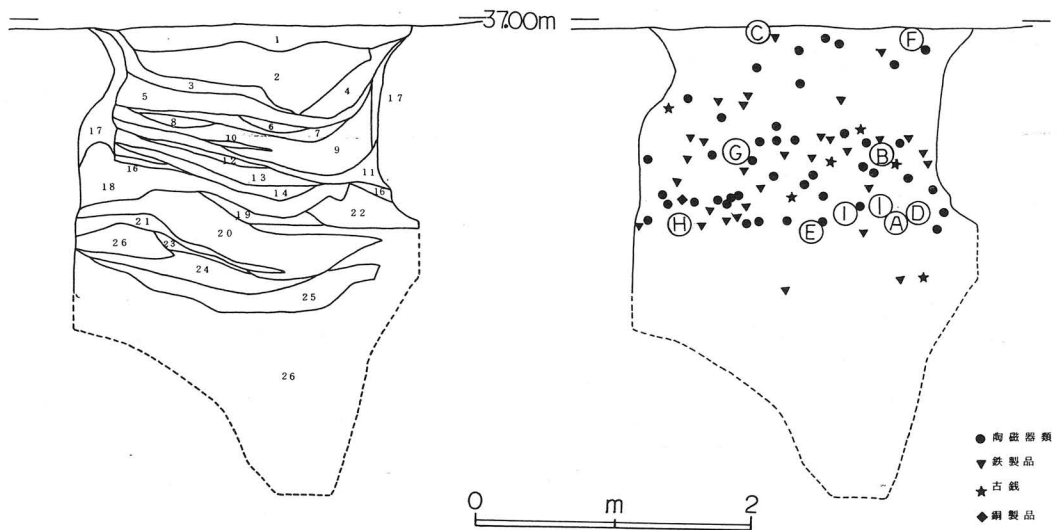
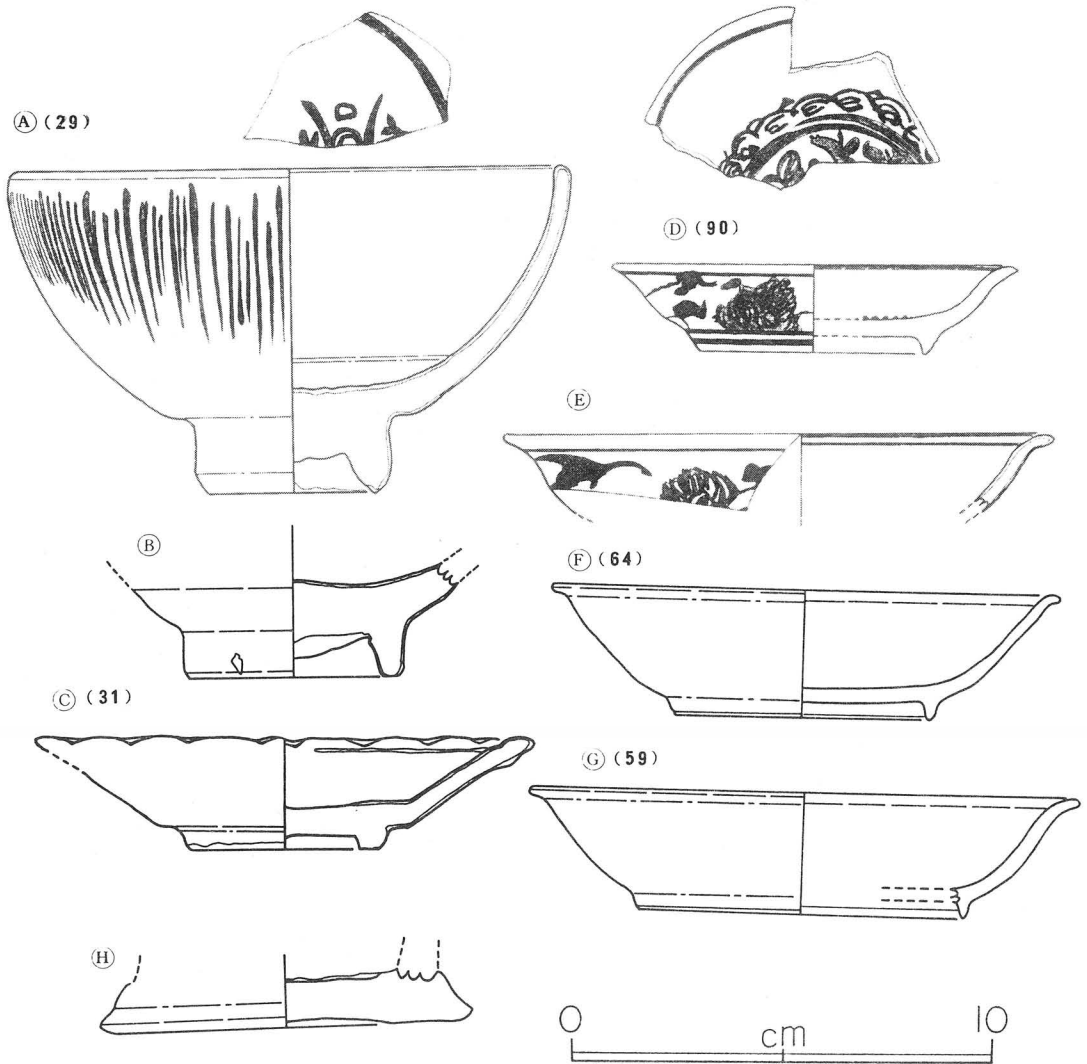


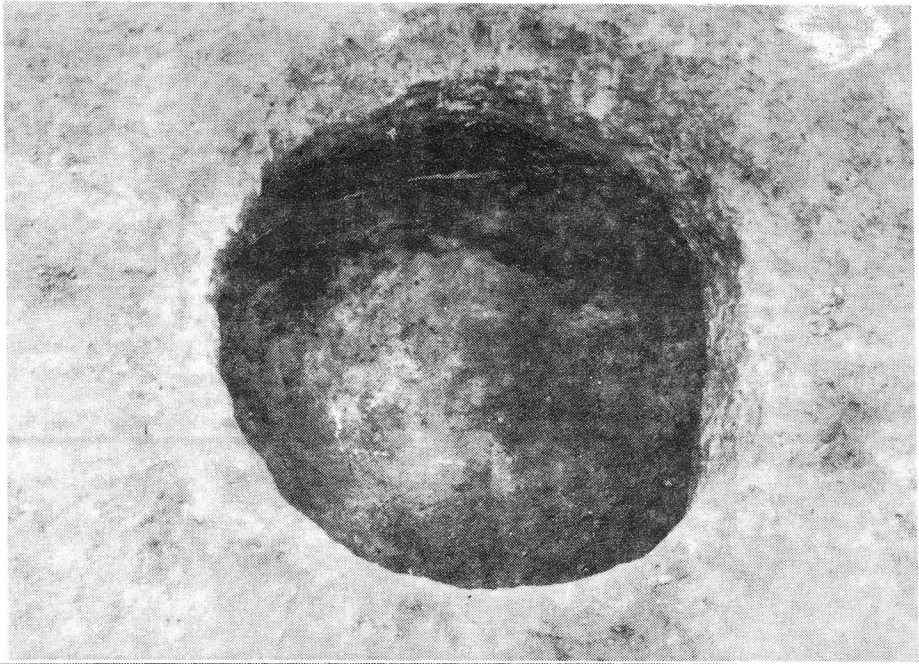
Fig. 35 S E 20出土遺物実測図



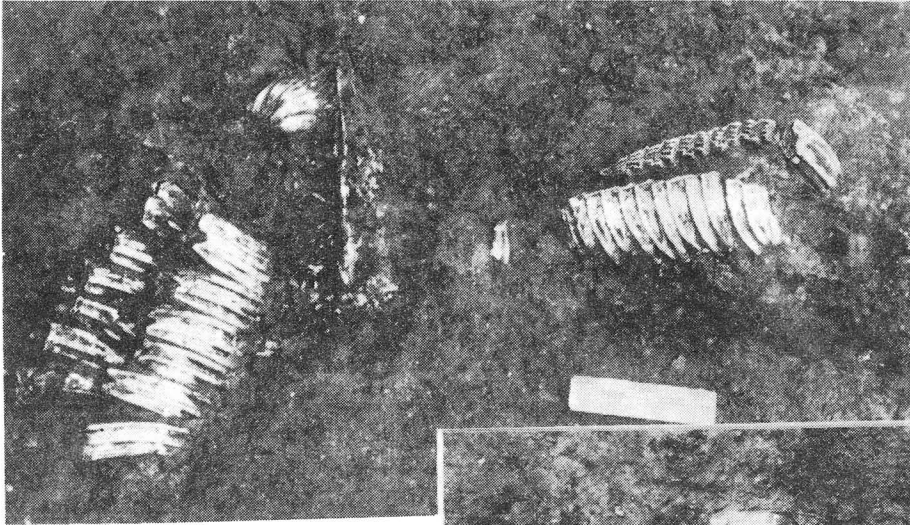
性  
(時

格：本遺構が井戸としての機能を有していた時期は、本杵等があったものと推定されるが、前述したように多量の遺物とともに廃棄されている点、舶載陶磁が国産陶器を凌駕する点などから、改築等に伴う廃棄と推定される。时期的には落城期以前であろうか。

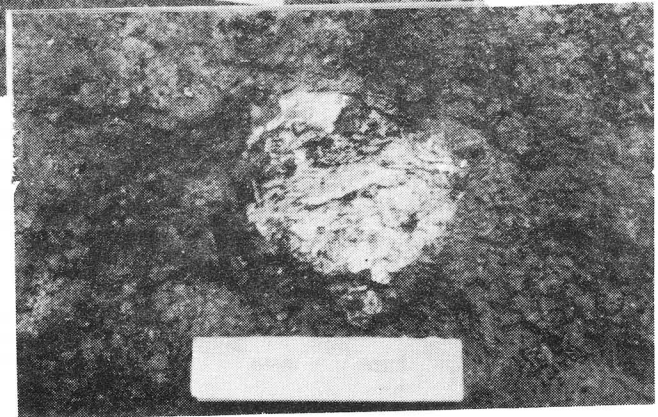
④ 全景 →



← ⑤ 馬函出土狀態 (I)



→ ⑥ 漆器被膜出土狀態





SE21〔I54区〕(PL.26)

規 模：長径 150 cm、短径 144 cm、深さ 222 cm。木枠のない素掘りのもの。

覆 土：上層は暗褐色土の単層、下層になると暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層になる。

出土遺物：火箸(281)、かえし(319)の他青磁碗・皿、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、瓦器、播鉢、鉄釉陶器、唐津皿、鉄釘5本、治平通宝・洪武通宝・鏝銭などが出土している。

SE22〔K-56・57区〕(PL.27、Fig.36、Fig.37、Ch.39)

規 模：長径 230 cm、短径 215 cm、深さ 380 cm。

覆 土：木枠を入れた部分が明瞭な線となってあらわれ、その覆土が1層である。それ以外は壁面の崩壊土も含め木枠の側板を固定させるために埋め戻した混層である。

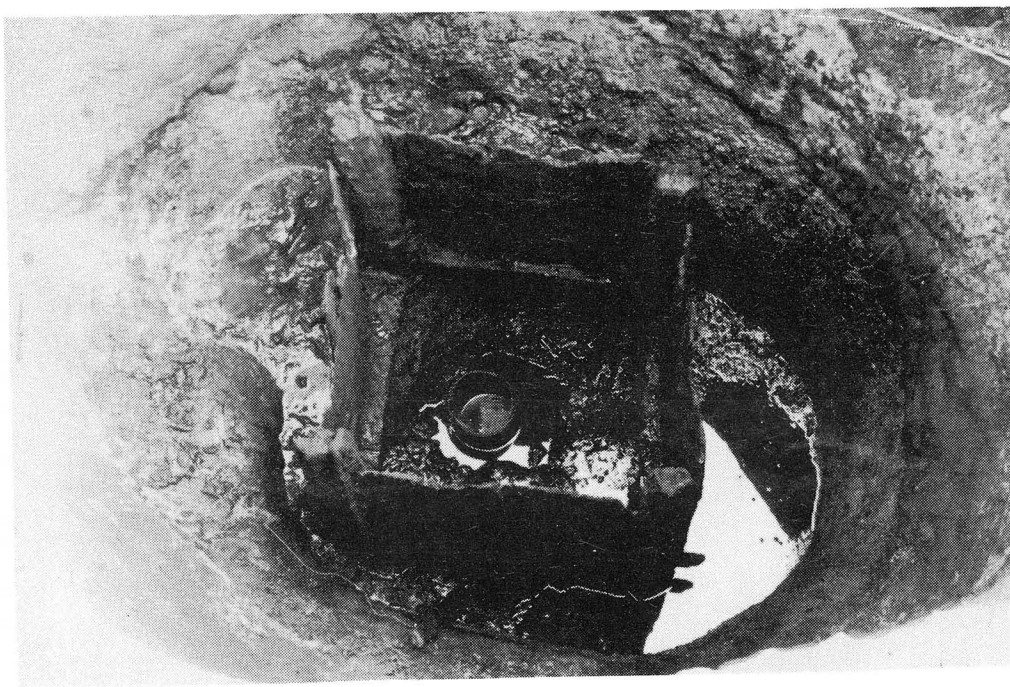
木枠形態：隅柱横棧型。隅柱は四～六角ぐらいに整形し、杢穴を穿って横棧を挿入している。側板は縦位に2～3枚を土圧によって固定する形で置かれている。一辺の規模は70～80cm(隅柱間の幅)、側板は最大のもので長さ152cm、幅40cm、厚さ3cmもあり、水分を含みかなりの重量になっていた。隅柱・横棧・側板とも手斧による整形がみられ、隅柱については建物部材を再利用しているものもある。

材 質：正式な鑑定は受けていないが、大部分は桧と考えられる。

PL.26 SE21全景(南側から)



㊤



出土遺物：掘り下げの段階で、1層とした木柁内覆土と木柁固定のための埋め土との遺物の差異は確認できなかった。主なものとしては、青磁碗・皿、白磁碗・皿、染付碗（68）、同皿（95・102・111）、美濃灰釉皿、搦鉢（201）、瓦器手焙り、政和通宝・鏝銭など5枚、溶解物附着土器、鉄鏝（267）、鉄釘7本、銅製香炉片（345）、砥石などがあり、木柁検出段階で川原石20個余りが柁内に存在しその中に石臼片（361）もあった。底からは、PL.27㊥・Fig.90No.418の曲物がほぼ完形で出土し、廃棄されたものと推定された。

㊥



Fig.36 SE22実測図

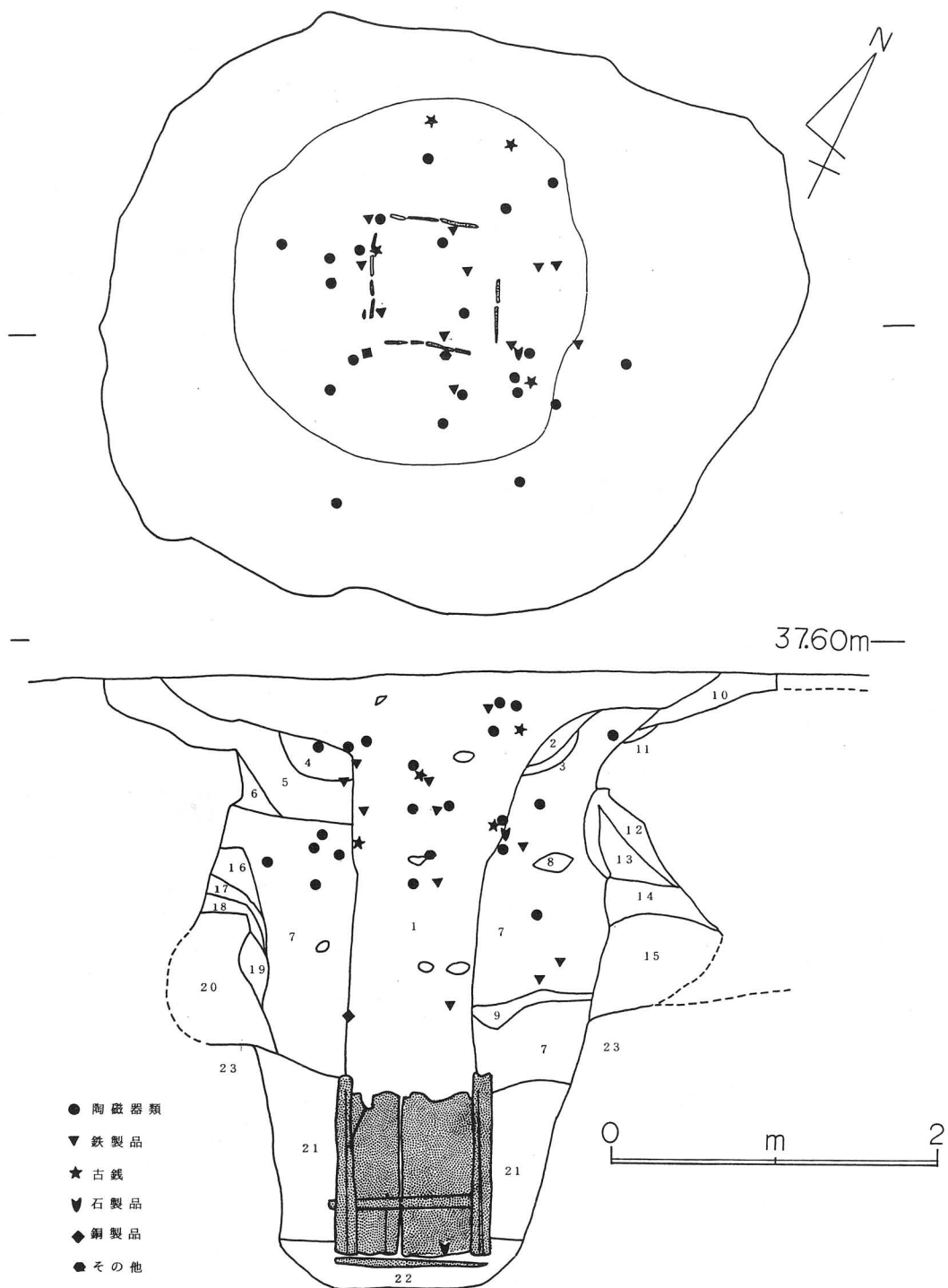
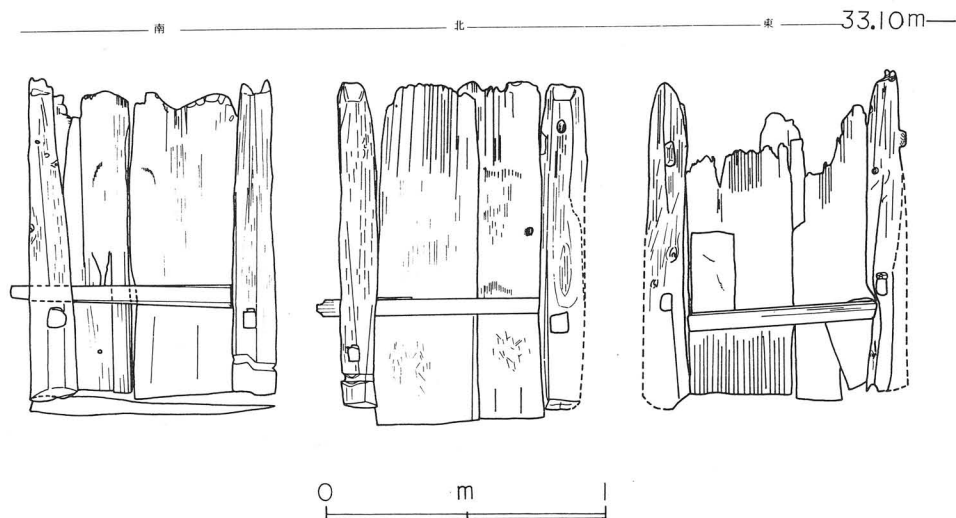


Fig.37 SE22木枠実測図



SE 23〔L56区〕( Fig.16、Ch.18 )

規 模：長径 180 cm、短径 160 cm、深さ 225 cm。素掘りの井戸。

覆 土：上層( 1・2層)は炭化物を含む層や灰層があり、下層( 3～7層)は暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層が主体をなす。

出土遺物：1・2層までは、美濃灰釉皿、瓦器、珠洲系壺の陶器・土器片と銅製飾り金具( 346 )、底面近くからは鉄釘が7本ほど出土している。

SE 24 P 67に記載済。

SE 25〔E54区〕( Fig.8 )

規 模：長・短径 160 cm、深さは 178 cmまでしか掘り下げなかった。素掘りの井戸。

覆 土：記録をとらなかったため詳細不明。

出土遺物：瓦器、播鉢、溶解物付着土器、洪武通宝、その他硯( 350 )が上層から出土している。

SE 26〔K54区〕( Fig.7 )

規 模：長径 162 cm、短径 154 cm、深さ 195 cmまで掘り下げ。素掘りの井戸。

出土遺物：青磁碗、播鉢( 205 )、天目碗、鉄釘4本がある。

SE 27〔I53区〕 昭和56年度調査報告書で記載予定。

SE 28〔J54区〕( Fig.7 )

規 模：長径 130 cm、短径 120 cm、深さ 278 cm。素掘りの井戸。

出土遺物：白磁皿、染付碗( 66・67・75 )、同皿( 100 )、天目碗( 141 )、播鉢( 211 )、木部が残存している芋引金( 278・280 )、火箸( 284 )、小刀、鉄鏃、鉄釘4本など。

### SE 29〔J54区〕( Fig.7 )

規 模：長径 180 cm、短径 160 cm、深さ 262 cm。素掘りの井戸。

特 徴：本遺構は底部でSE 28の掘り込みと重複しており、出土遺物も漆器の被膜片があっただけである。

### SE 30〔E・F-54区〕( Fig.28、Fig.38、Ch.40 )

規 模：長径 184 cm、短径 172 cm、深さ 211 cmまで掘り下げ。素掘りの井戸。

覆 土：上層( 1～5層 )はやや黄褐色砂質土を含む混層、中間にある6層からは炭化米が出土し注目される。

出土遺物：染付皿、瓦器、鉄釘などがある。

### SE 31〔H54区〕( PL.28、Fig.39、Ch.41 )

規 模：長径 192 cm、短径 164 cm、深さ 435 cm。木枠を有する井戸跡。

覆 土：深り下げ100 cmぐらいの所からPL.28 ㊸のように多量の集石が認められ、覆土上層では、灰を含む土層があることから人為的廃棄の井戸跡と考えられた。

木枠形態：隅柱横棧型で、隅柱の幅は70cm、

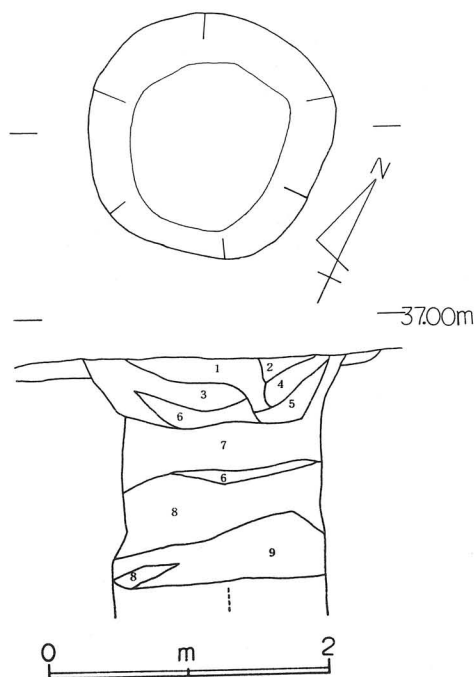
側板は一辺に3枚(中央の一枚が外側に位置)を縦位に設置する。

隅柱は六角に整形し、横棧は丸形で柵・柵穴の製作はしっかりしたものとなっている。北側にだけ横棧が2段で残っていた。

材 質：桧と考えられる。

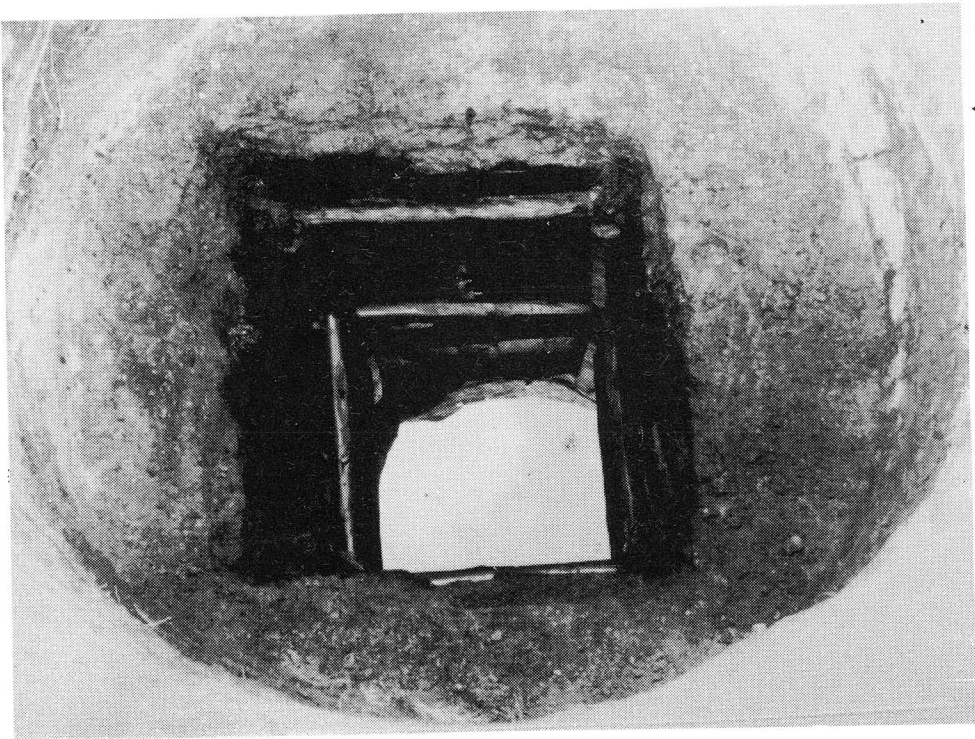
出土遺物：青磁碗・皿、白磁皿( 57 )、染付皿( 92 )、美濃灰釉皿、瓦器、溶解物付着土器( 233 )と小札、毛抜き、鍋、小刀、釘などの鉄製品、木枠内からは刀形木製品( 367 )、桶底、曲物( 422・423 )、棒( 390 )、篋などの木製品が出土している。古銭は上層から開元通宝・至大通宝が出ている。

Fig.38 SE30実測図



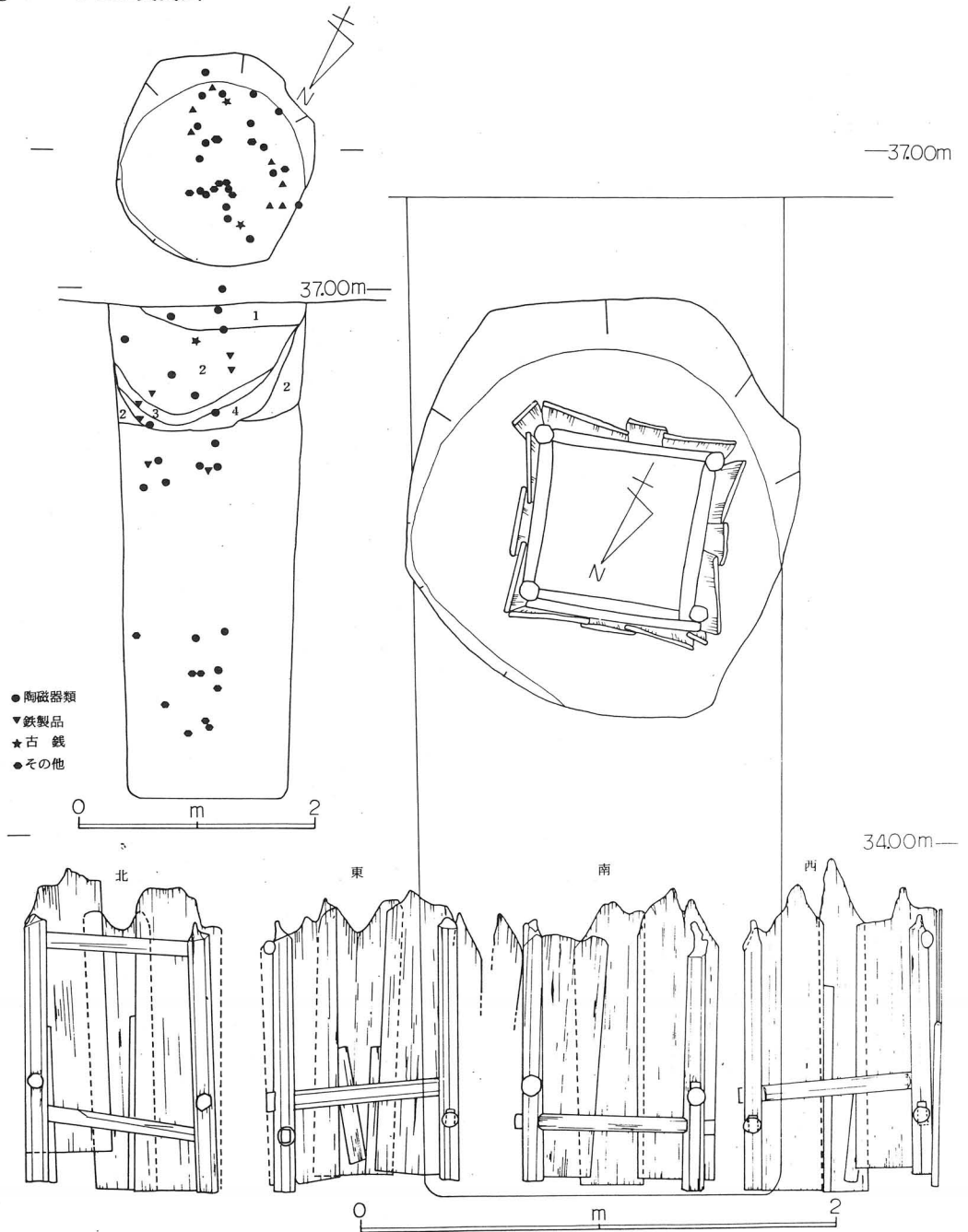


④ 集石出土状態 →



← ⑤ 木枠出土状態

Fig. 39 S E 31実測図







SE32〔J・K-54区〕

（PL.29、Fig.40）

規 模：長径180cm、短径  
170cm、深さ357  
cm。木枠を有する  
井戸跡。

木枠形態：隅柱横棧型。隅柱  
間の幅は70cmとSE

31に近似した大きさであるが、隅柱・横棧とも四角に整形されており杓・杓穴による接合もしっかりした構築になっている。側板は、東側・西側が2枚、南側・北側が3枚（中央は外側に位置）の縦板で、特に南側の一部には桶底を置いた部分（Fig.40南側スクリーン部分）もある。

出土遺物：覆土上層から、青磁皿（38）、同碗、美濃壺（132）、唐津皿、瓦器、播鉢、鏡状銅製品（331）、木枠の底からPL.29のように曲物（382・421）が完形状態で出土した。特にPL.29㊹（382）は内面に漆を塗っている優品で、水を入れても漏らないところから手洗いなどに使用したと考えられる。

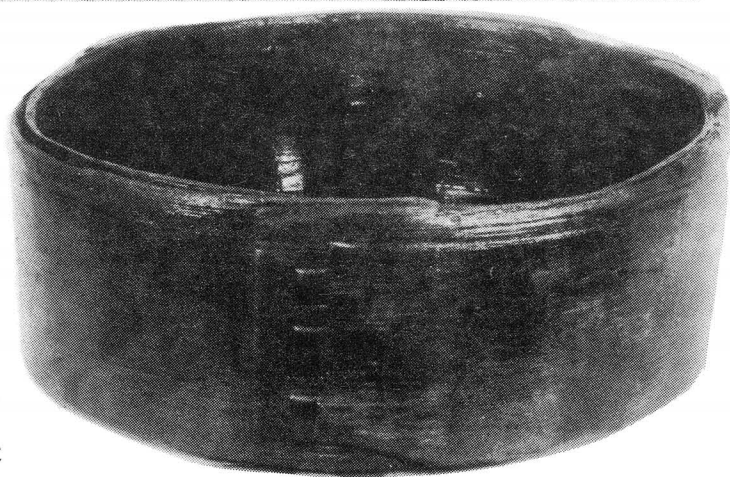
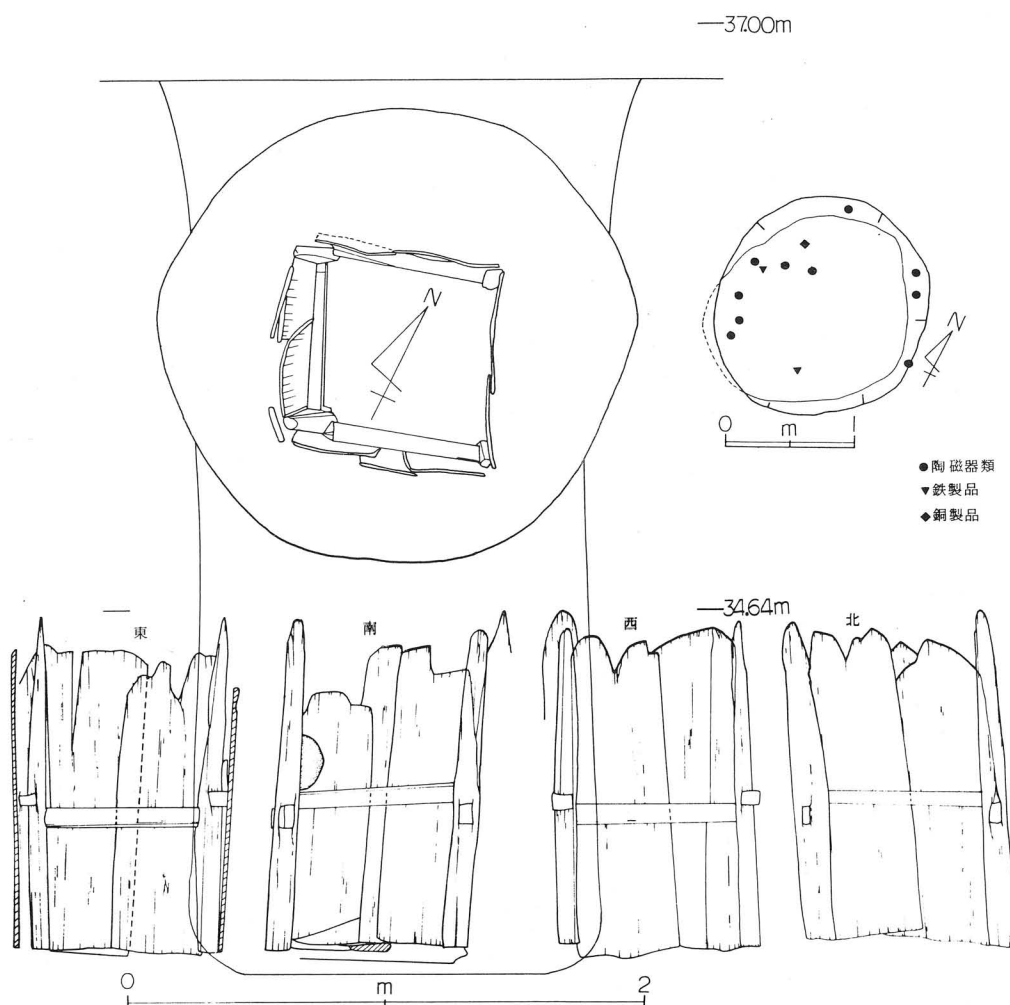


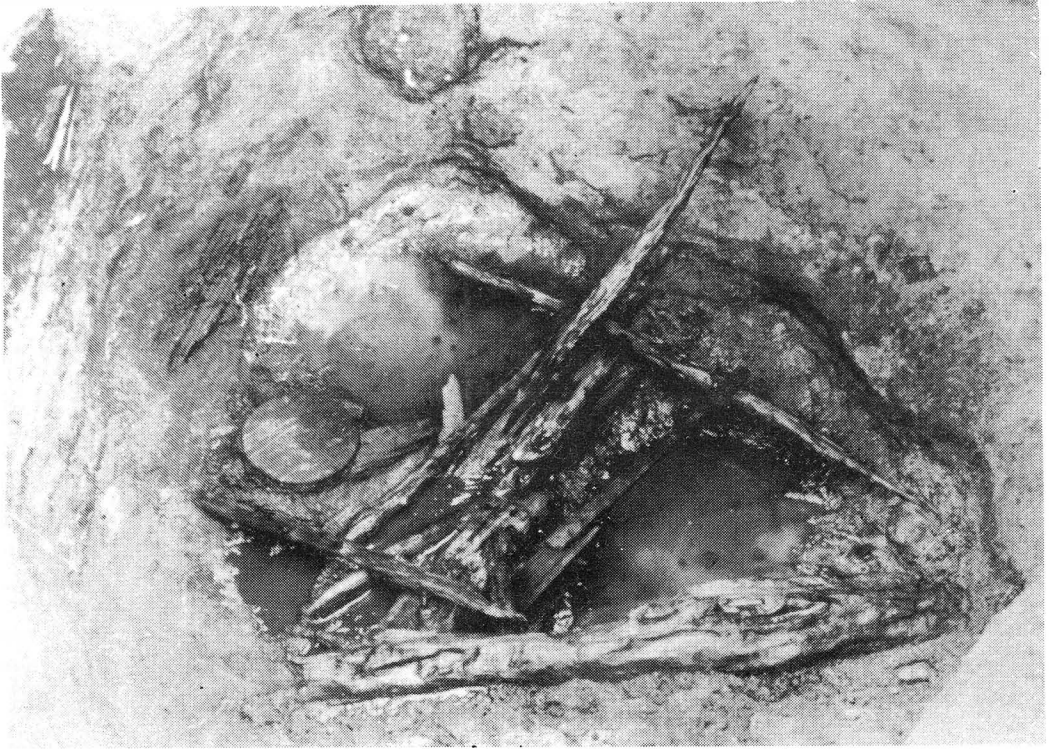
Fig. 40 S E32実測図



S E 3 3 [ F ・ G - 54区 ] ( PL.30、Fig.41 )

規 模：壁面の崩壊が激しかったため上端を削って調査した。長・短径はおよそ 164 cm で  
深さは約 300 cm である。明瞭な木杵は検出されなかったが、杵材あるいはそれに  
類似するとみられる木材が底から集中して検出された。

重複関係：S D09 (旧)、S D20 (旧)、S B 03 (旧?)



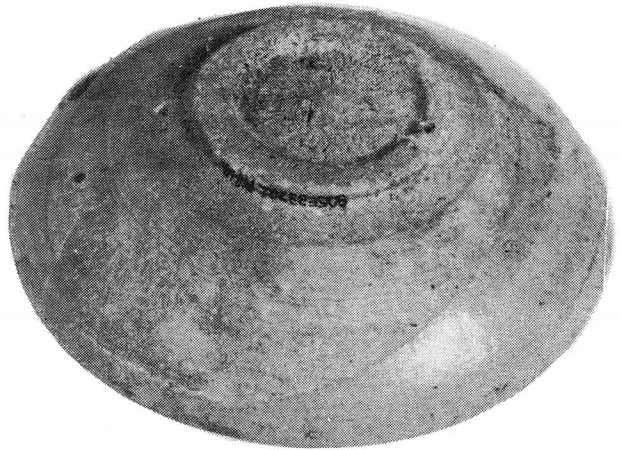
出土遺物：ほぼ下層に集中する

傾向を示し、底面出土と覆土中のものに分類できる。

覆土中では、青磁碗、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿（120）、播鉢、砥石などがあり、底面から唐津皿

（155・157）が出

土している。特にPL.30㊤（155）の唐津皿は、桶底や木材とともに底に破片として散乱していたものを復元したものであり、本遺構の廃棄時期を決定する貴重な資料である。この他、井戸とは直接関係がないものの、周辺地域から黄瀬戸手の大皿片が出土しており、本遺構が落城期に近い前・後の時点で廃棄されたことが予想される。



SE 34〔G54区〕( Fig.8 )

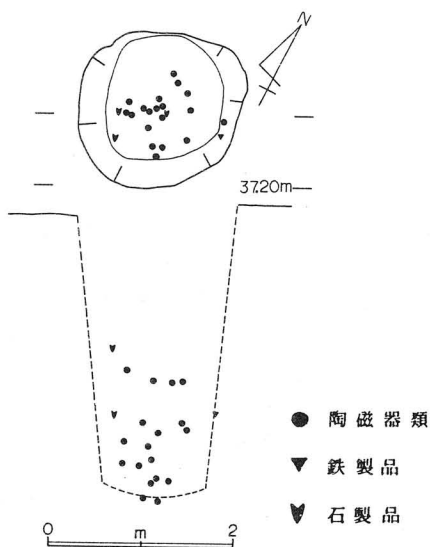
規 模：長径 140 cm、短径 130 cm、深さ  
230 cm。素掘りの井戸跡。

出土遺物：青磁碗、漆器が 1 片ずつ出土。

〔井戸跡小結〕

今回検出した中で、木杵を有するものが SE 22、SE 31、SE 32 の 3 基、木杵が存在したという痕跡を残していたものが SE 24、SE 33 の 2 基、他はすべて素掘りのものであった。特に SE 22 の掘り方と SE 31・32 の掘り方では同じ木杵を入れるにしても前者が広く掘るとい違いがある。木杵はすべて隅柱横棧型で、構造に違いはない。また木杵内から、曲物が出土するという特徴は、井戸を廃棄する時点で何か精神的な意味があるようにも思えるが、今後検討する余地があるだろう。

Fig. 41 SE33遺物出土状況図



D 焼土遺構

焼土遺構は、かまどや炉というような遺構と認定できるものではなく、また落城時の火災跡としては範囲が狭すぎることから、一種の性格不明遺構に属する。

S F 0 1〔K57区〕( PL.31 ㊟、Fig.42、Ch.42 )

規 模：長軸 166 cm、短軸 100 cm、深さは上端から約30cmぐらいで楕円状を呈する。

覆 土：焼土は遺構範囲の周囲に多く、中央には灰( 2 層 )と炭化物を含む層( 3・4 層 )が重なっている。北側は柱穴のため焼土が消滅している部分もあるが、おおむね残存状態は良好であった。

出土遺物：土師器片 10、須恵器片 4 がある。

S F 0 2〔K54区〕( PL.31 ㊟、Fig.42、Ch.42 )

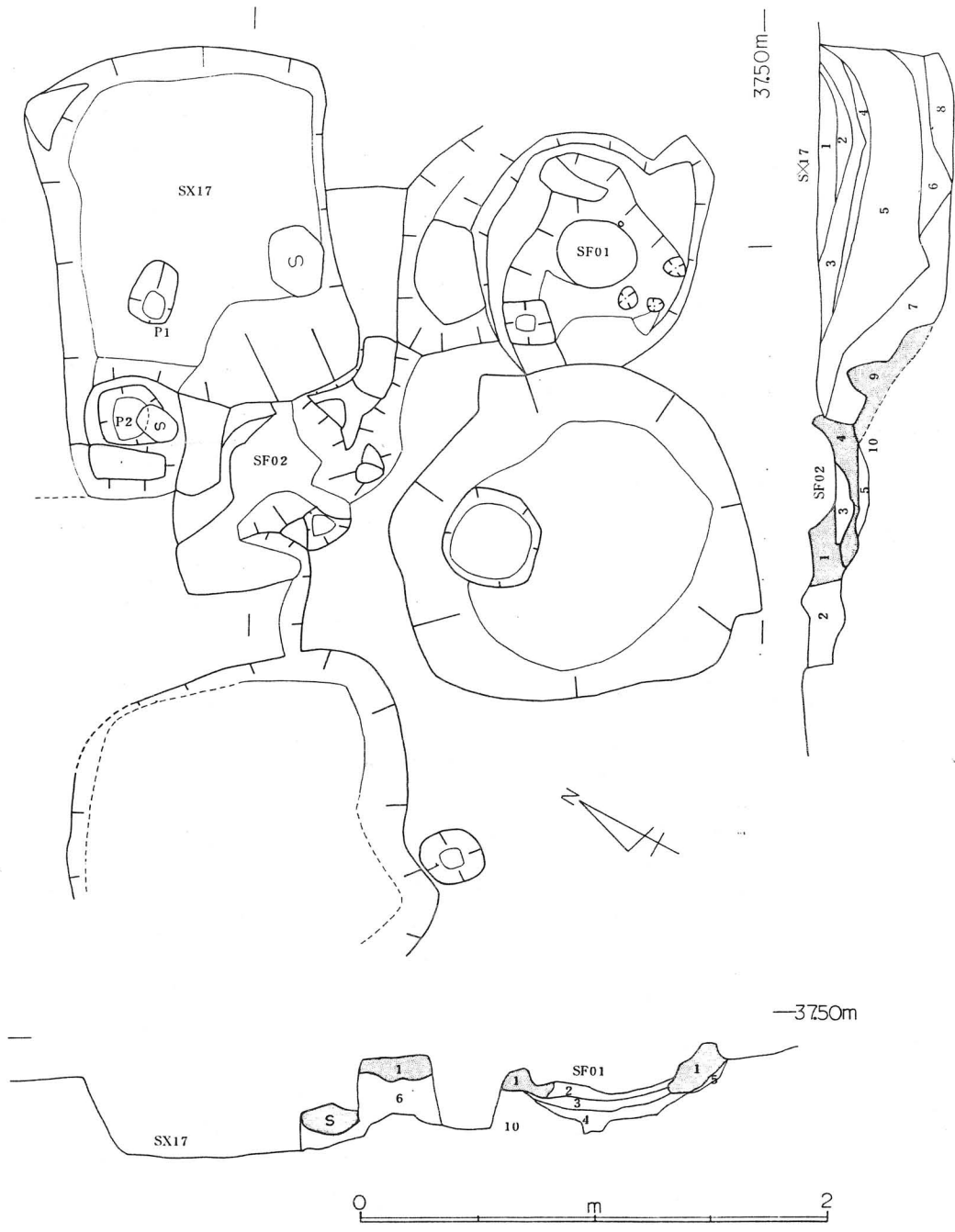
規 模：長軸 120 cm、短軸 100 cm で S X 17 の覆土に落ち込むような状態で存在する。

覆 土：焼土( 4 層 ) 上部に灰( 3 層 ) を包含する状態であり、後の攪乱のためか暗褐色土を混じる焼土( 1 層 ) も存在する。

出土遺物：土師器片 6 だけ。

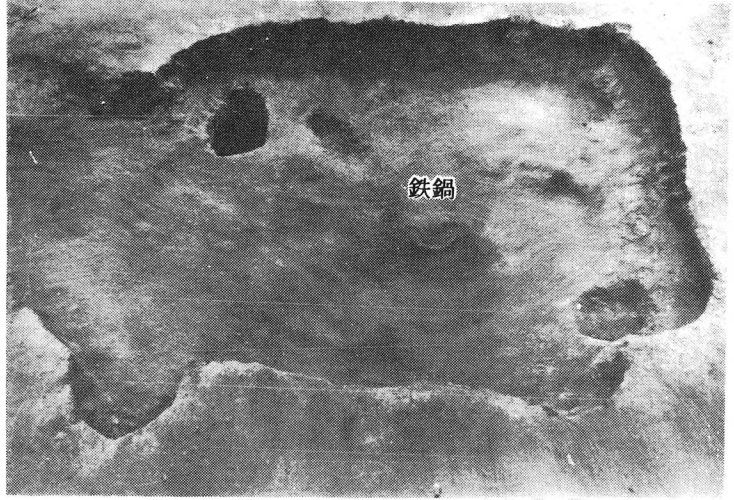
S F 01・S F 02 のどちらも、遺構西側に径 150 cm、深さ 30 cm ほどの丸いピットが検出されており、焼土遺構と関連する可能性もあるが確かでない。

Fig.42 S F 01・02・S X 17実測図

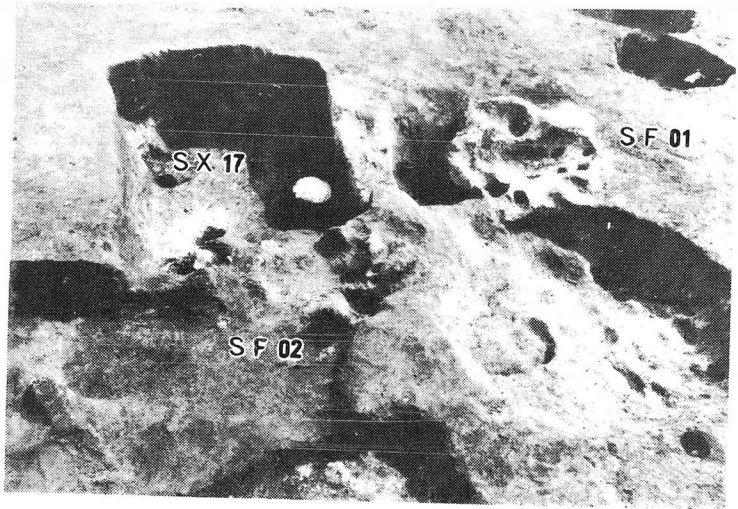


PL.31

㊤ S X10全景



㊤ S X17・S F01・02全景



㊤ S X32

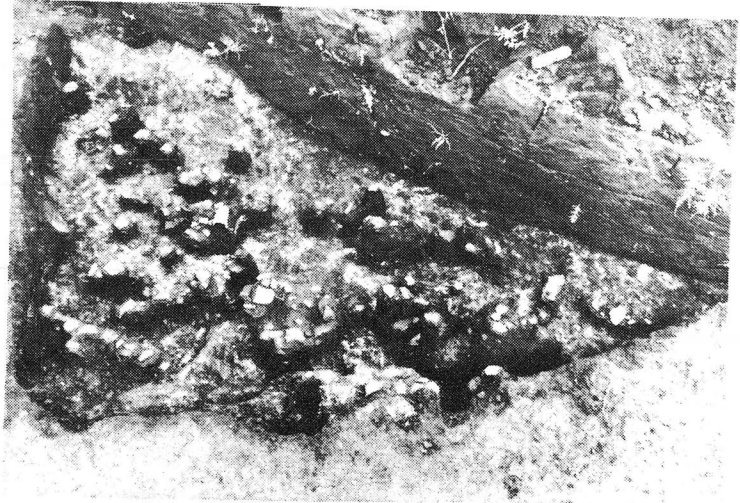
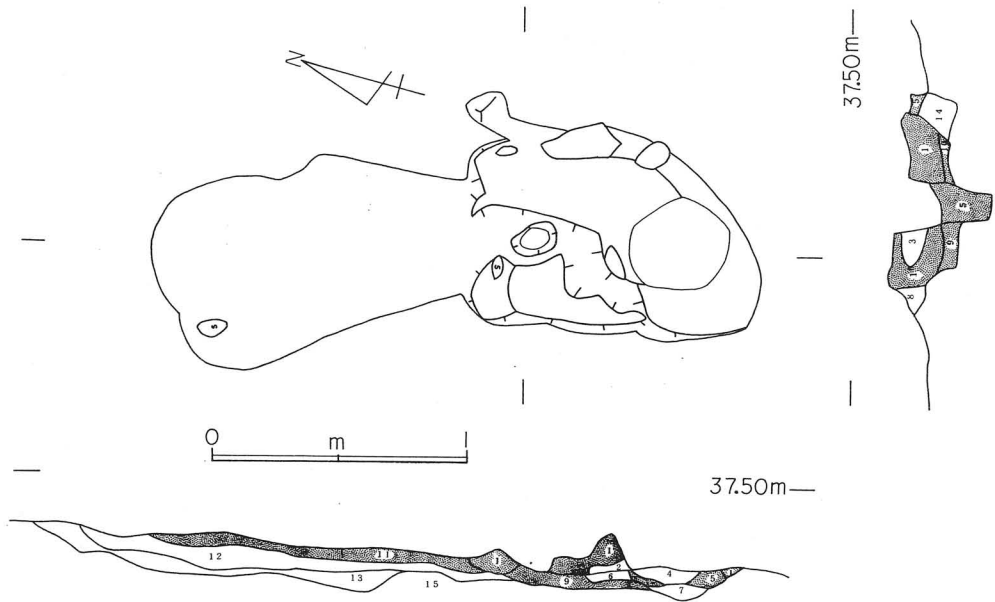




Fig.43 SF03実測図



S F 0 3 [ K 57区 ] ( Fig.43、Ch.44 )

規 模：長軸 440 cm、短軸80cm、焼土の厚さは平均10cm弱である。

覆 土：焼土（1層）は南側ほど厚く堆積し、おそらく火床とみられる9・10層の上部が最も厚い。灰を含む層（4・7層）は焼土と暗褐色土の混層（5層）を挟んで上下に分布する。それも最南端部分である。北側の方は純然たる焼土はみられなくなり炭化物・暗褐色土の混層が主体を占める。

出土遺物：産地不明の無釉陶器が1点出土している。

性 格：当初、かまど状の遺構として掘り進めたが、燃烧部・煙道部という明確な形では検出されず、今後の問題を残す結果となった。

S F 0 4 [ J 55区 ] ( Fig.44、Ch.45 )

規 模：長軸 360 cm、短軸 180 cm、深さは25cm弱である。

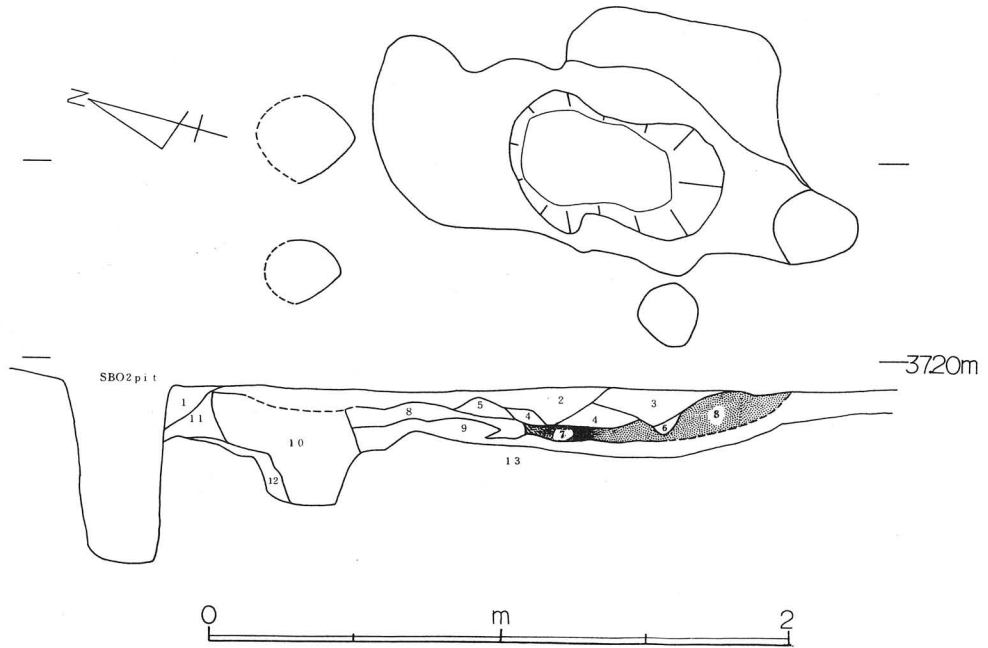
覆 土：焼土層（7・8層）の上面に炭化物層（4層他）が存在し、完掘した場合の最も落ち込む部分が焼土部分と重なるため、燃烧を意図して構築されたことはほぼ誤りないと考えられる。

出土遺物：なし。

性 格：本遺構の位置がS B 02の一部屋に存在することから、掘立柱建物跡に付属する施



Fig.44 SF04実測図



設とも考えたが、柱穴の掘り下げ面よりは下位に存在することから同時期とは言えない面が強い。また、焼土部分の厚さも5cm弱と薄いことから長期間使用したものとは考えられず、簡易な遺構と考えられる。

〔焼土遺構小結〕

城跡の建物跡を検出してゆく中で、日常の炊事をする場所あるいは遺構を明確に把握できない難点がある。今回の焼土遺構はその意味でも重要なものであるが、SF01・SF02・SF03はSE22に隣接し、なおかつ3基が集中して位置することは、重要な事と考えられる。城跡の中では建物別の炊事というよりは、決まった場所でまとめて炊事していた可能性が高く、かまどの構造とともに追求すべき点と思われる。

E 性格不明遺構

本遺構は、竪穴構造を有するものの上部構造を推定できないため、一括して性格不明遺構とした。しかし、一部は土壇(墓壇)、溝などに比定できるものもあるため、各遺構の中で記述してゆくつもりである。なお、時代的にも城館期以前と考えられるものもあり、発掘現場では明確に把握できず整理の時点で理解したようなものもある。今回は検出例が多いため、特徴のあるものを主体に報告してゆく。

S X 1 0 [ K 55区 ] ( PL.31 ㊸、Fig.45、Ch.46 )

規 模：長軸 223 cm、短軸 181 cm、深さ 37cm。方形プラン。南側に攪乱の部分あり。

覆 土：暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に炭化物・灰などが混じる。

出土遺物：覆土上層から青磁碗、白磁皿、床面から須恵器甕の破片とともに鉄鍋(Fig.No.277)と熙寧元宝が出土している。

性 格：共伴する柱穴はないと考えられ、床面から出土した鉄鍋(完形に近く、二つに割れた状態で出土した。Fig.45のスクリーン・トーン部分)などから、上部構造のない炊事関係の遺構ではないだろうか。詳細は不明。

S X 1 1 [ K・L-55区 ] ( Fig.46、Ch.47 )

規 模：長軸 180 cm、短軸 110 cm、深さ 34cm。方形プラン。

覆 土：1・2層が本遺構の覆土で、それ以外は本遺構構築以前のピット覆土である。覆土上面には薄い灰層(1層)が存在する。

出土遺物：須恵器片 2 個のみ。

性 格：位置的に S X 10、S X 12 と隣接していることから関連遺構と考えられる。

Fig.45 S X 10実測図

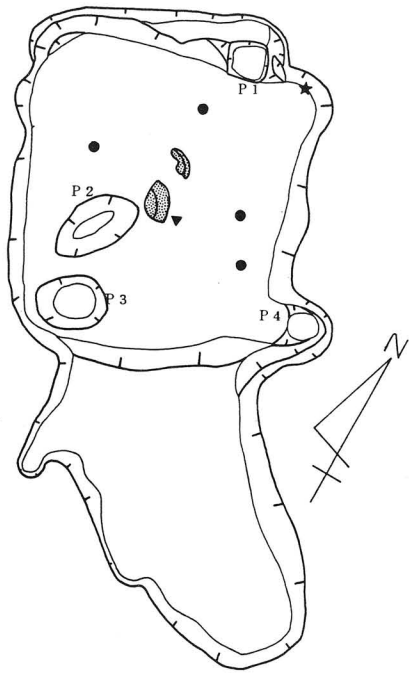
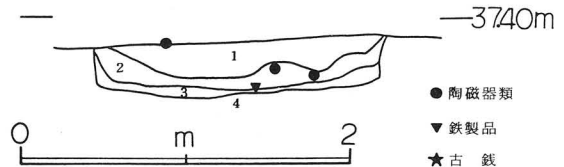
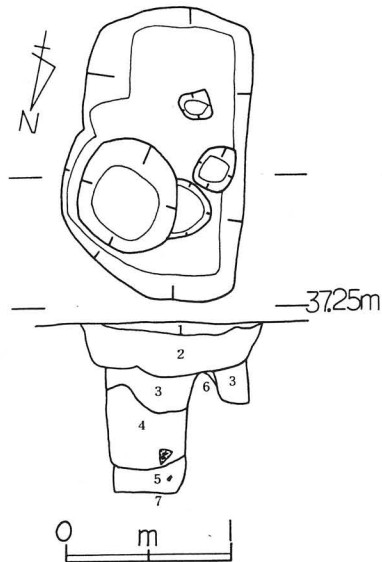


Fig.46 S X 11実測図



S X 1 2 ( L 55区 ) ( PL.9、Fig.47、Ch.48 )

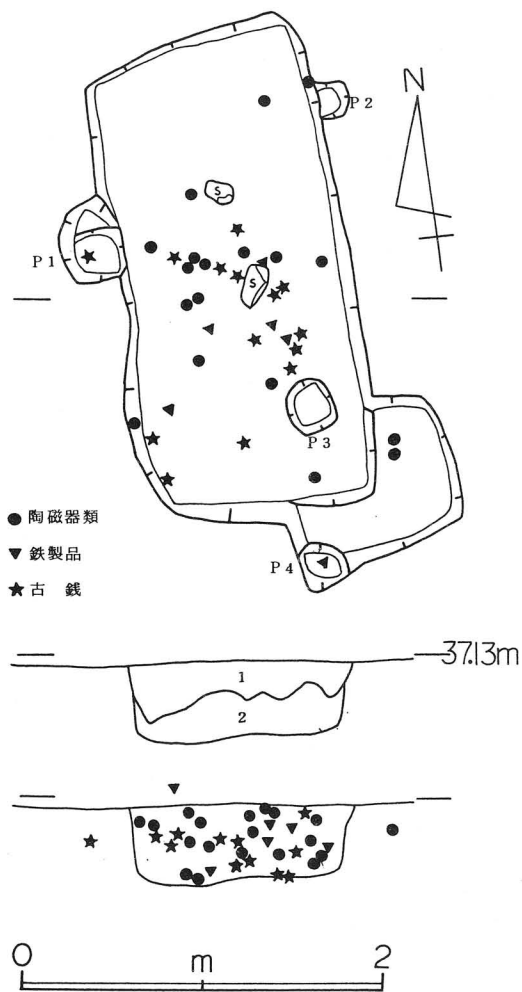
規 模：長軸 276 cm、短軸 126 cm、深さ 42cm。長方形プラン。南側に一部攪乱あり。

覆 土：暗褐色土と黄褐色砂質土の混層に灰や炭化物が含まれる土層で覆われ、上面はしまりが強くなっている。

出土遺物：床面から青磁碗、溶解物付着土器、元〇通宝、判読不能銭、鉄釘が出土し、覆土内から青磁皿( 33 )、美濃灰釉皿( 112 )、白磁皿、瓦器( 173 )、染付皿、鉄釉陶器碗、珠洲系甕、古銭は元豊通宝・鏝銭など13枚と鉄銭1枚、鉄砲玉、小札、釘2本が出土している。

性 格：覆土は一括埋め戻しの後、上面を堅めたようで、覆土中の多量の出土古銭などから土壌の性格が強いと考えられる。付属するピットもなく上部構造は考えにくい。特に鉄砲玉が出土していることは、落城期に近似した時点で構築されたとみるべきであろう。

Fig.47 S X 12実測図



ら土壌の性格が強いと考えられる。付属するピットもなく上部構造は考えにくい。特に鉄砲玉が出土していることは、落城期に近似した時点で構築されたとみるべきであろう。

S X 1 3 ( K・L-55区 ) ( Fig.48、Ch.49 )

規 模：長・短軸 110 cm、深さ 36cm。不整形プラン。

覆 土：暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。

遺 物：なし。

性 格：不明

Fig.48 S X 13実測図

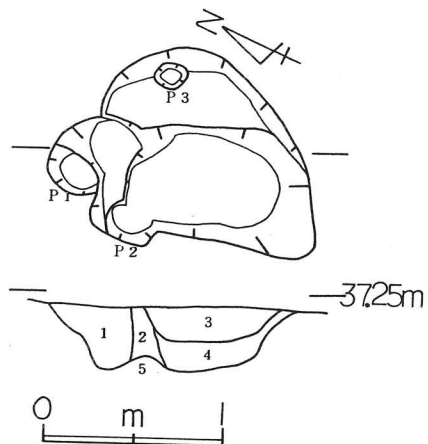
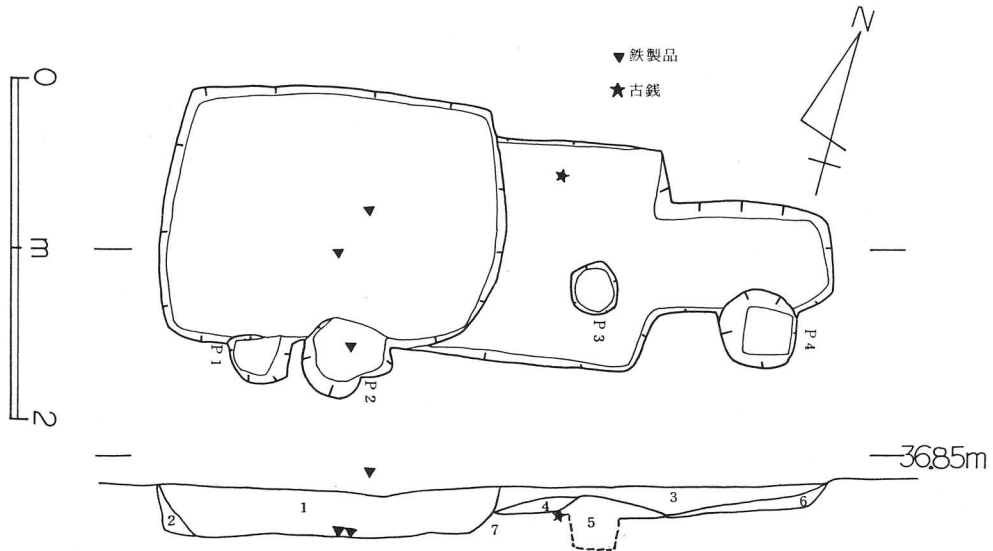


Fig.49 S X14実測図



S X 1 4 [ M54区 ] ( Fig.49、Ch.50 )

規 模：2遺構が重複しているため、新しい方は長軸196cm、短軸150cm、深さ28cm、古い方は長軸280+a cm、短軸130cm、深さ20cmである。前者は方形プラン、後者は東側に張り出しを有する方形プランと考えられる。

覆 土：相方暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層で覆われ、古い方(東側)は底に黒色土と暗褐色土がみられる。

出土遺物：古い方からは鏝銭1枚、新しい方から鯖尾鏃(270)と鍋の破片が床面から出土している。この他、古銭が6枚、鉄釘が5本覆土中から出土している。

性 格：付属柱穴がないようなので、土壇的なものと考えられる。

S X 1 5 [ K56区 ] ( Fig.7 )

S D07などの攪乱によって詳細不明。不明鉄製品(F 211)が出土している。

S X 1 6 [ K56区 ] ( Fig.7 )

S D07などの攪乱によって詳細不明。播鉢、溶解物付着土器、小札など出土。

S X 1 7 [ K57区 ] ( PL.31 ㊟、Fig.42、Fig.50、Ch.43 )

規 模：長軸190cm、短軸120cm、深さ57cm。西側がスロープ気味に立ち上がる方形プランである。

覆 土：上層(1・2・3・4層)は交互にしまりを有する砂質土がベースの土層で、下層は暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層である。西側にはS F02と関連する焼土がみられる。出土遺物は下層からのものが多い。

出土遺物：青磁碗（7）・皿、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、淳熙元宝他古銭6枚、かすがい（292）、鉄釘5本、銅製裝飾金具（321）、硯（350）などが出土している。

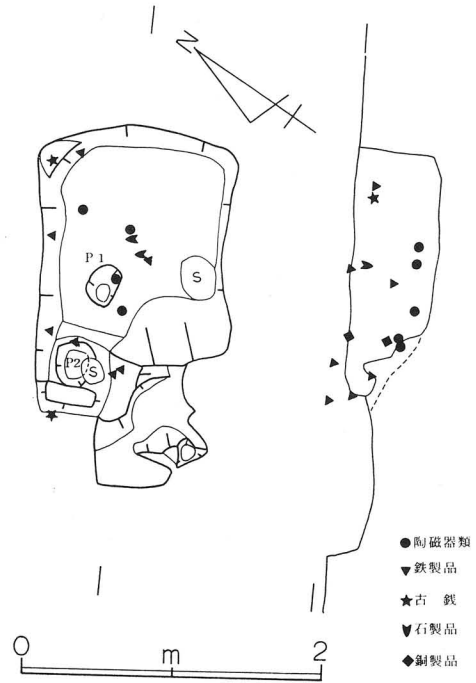
性格：付属柱穴はみあたらず、覆土上層にしまりのある層が存在することから土壙的なものと考えられる。構築時期は明確でない。

S X 1 8〔L56区〕（Fig.51）

規模：長・短軸80cm、深さ43.4cm。単に柱穴とも考えられる。

出土遺物：完形のかわらけ(258)(PL.53, Fig.80)が1点出土している。浪岡城跡から、かわらけと認めるものが出土したのは最初である。

Fig.50 S X17遺物出土状況図



S X 1 9〔L57区〕（Fig.7）

規模：長軸220cm、短軸120cm、深さ30cm。

出土遺物：覆土中から鉄釉陶器と鉄釘2本が出土している。

性格：不明

S X 2 0〔G・H-54区〕（Fig.8）

当初S T 74として掘り下げた部分、S D 12・18・19などの北側部分が本遺構（遺構と認定できるか疑問で攪乱部分が多いようだ。）

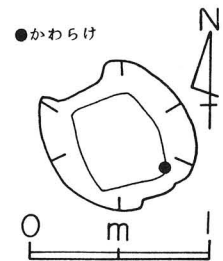
であり、壁面や覆土も明確に把握できなかった。おそらく、S D 12などと接続する南北方向の溝状の性格を有するものと考えられるが、幅や深さともはっきりしない。主な出土遺物を見ると、量的に土師器甕・坏(466・469)、須恵器甕・坏(477)が多く、陶磁器類は青磁や瓦器の破片が覆土上層で発見されているだけである。もちろん、攪乱による混入の可能性もある。よって、構築時期は城館期以前と考えられ、後の攪乱によって性格を把握するまではいたらなかった。

S X 2 1〔E54区〕（Fig.52、Ch.51）

規模：長軸（長さ）550 +  $\alpha$  cm、短軸（幅）160 cm、深さ約22cmで北側の方が深い。溝とも考えられるが完掘できなかったため詳細不明。

出土遺物：覆土から青磁碗（26）、判読不能古銭が、床面から土師器甕が出土している。

Fig.51 S X 18実測図



性 格：溝の可能性が高い。時期は城館期以前である。

S X 2 2 S E 33に変更。

S X 2 3〔H54区〕 S X 20と重複消滅。

S X 2 4〔L56区〕

規 模：径80cm、深さ130cmのピット状遺構である。

出土遺物：なし。

S X 2 5〔M-53・54区〕

規 模：長軸125cm、短軸120cm、深さ200cm。正方形プラン井戸状遺構。

覆 土：黄褐色砂質土に暗褐色土が若干含まれる混層。

出土遺物：覆土上層から火箸、溶解物付着土器、天目碗の破片が出土している。

S X 2 6〔K・L-57区〕(Fig.53、Ch.52)

規 模：長軸193cm、短軸185cm、深さ30cm。方形プラン。

出土遺物：青磁碗、須恵器甕破片、小札1枚が出土している。

柱 穴 等：Pit1とPit3は深さも35cm以上あり、遺構のコーナーに位置するところから相伴すると考えられる。よって簡易な上部構造を有する遺構ではなかったろうか。

S X 2 7〔I54区〕(Fig.33、Ch.36)

規 模：長軸270cm、短軸(200)cm、深さ45cm。S T 84(旧)と重複。

覆 土：暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。

出土遺物：白磁皿、美濃灰釉皿、鉄釘3本、小札1枚がある。

Fig.52 S X 21実測図

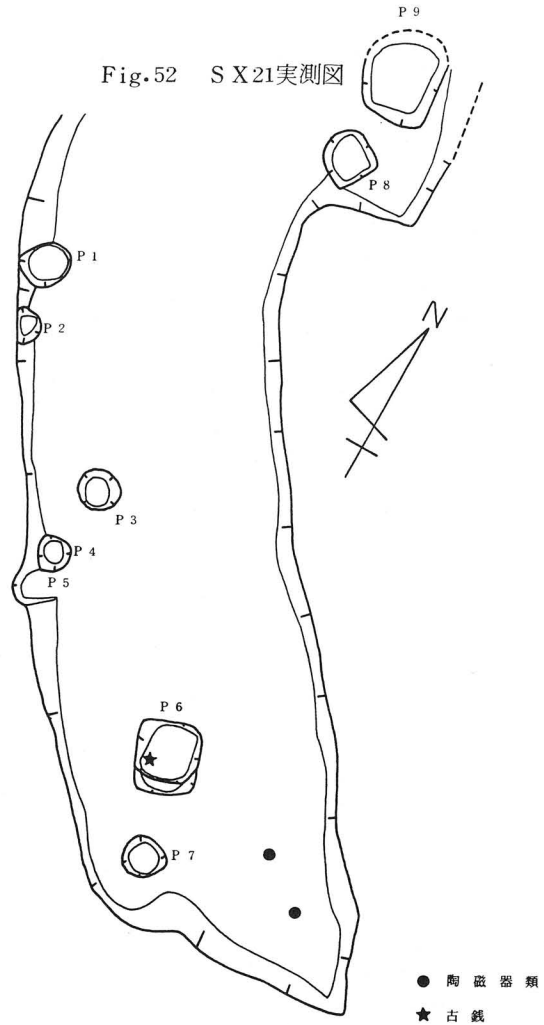
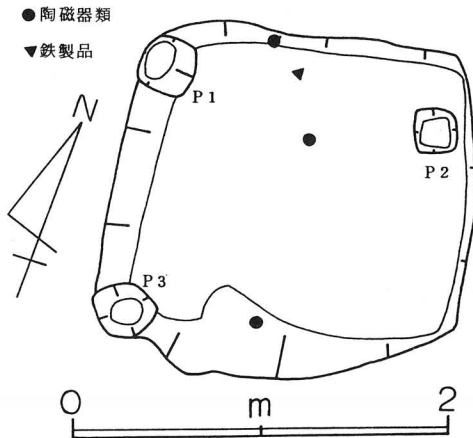


Fig.53 S X 26実測図



S X 2 8〔 I 55区〕 ( PL.17、 Fig.23 )

S T68の中央に位置するフラスコ状ピット。S T68より古い時期の構築で、上端径 100 cm、下端最大径 140 cmを計る。美濃灰釉皿、溶解物付着土器、砥石などが出土している。

S X 2 9〔 I 55区〕 ( PL.16、 Fig.22、 Ch.24 )

規 模：長軸 150 +  $\alpha$  cm、短軸 130 cm、深さ50cm。長方形プラン。

覆 土：暗褐色土に黄褐色砂質土を含む混層と一部に灰・炭化物がみられる。

出土遺物：美濃灰釉皿、溶解物付着土器、鉄鏃、鉄釘4本、小札、銅滓、鉄滓、洪武通宝・永楽通宝、鏹銭などの古銭が8枚出土している。

性 格：長軸はS T67に切られているが、推定で約 200 cmぐらいと思われS X12と同様に土壌的性格が強いと考えられる。

S X 3 0〔 I 55区〕 S T79・S T80との重複が激しく詳細不明。

S X 3 1〔 J 57区〕 ( Fig.54、 Fig.55、 Ch.53、 Ch.54 )

規 模：長軸 212 cm、短軸 148 cm、深さ50cm。長方形プラン。

柱 穴 等：Pit1~Pit4はそれぞれ各コーナーに位置し、掘り方は壁面をやや削る形で深さも床面と同レベルというものである。簡易な上部構造が存在したのだろうか。

覆 土：上層は暗褐色土・黒色土などとともに黄白色粘土を含む土層がマウンド状に盛り上がり、中位には幅40cmぐらいの大きな石が1個置かれていた。中層(12・13層)には灰と焼土を多量に含む土層が存在し、下層はしまりのない暗褐色土と黄褐色砂質土の混層であった。

出土遺物：床面出土のものと覆土中のものと分けて述べる。

床面からは鉄製品の出土が特徴的であった。Fig.54とFig.55における④~⑩はそれぞれ対応するもので、④は槍、⑤は刀の茎、⑥は小柄、⑦は鉄鏃、⑧はaとbが接合するものと考えられ槍あるいは鏃状の製品、⑨は小札、⑩は小柄の柄の部分であろうか。以上が床面出土の遺物で、人為的に置かれた状態で出土している。覆土中は特に中層からの出土が多く、⑩はこなごな打ち砕かれた青磁皿(30)で出土した時は散乱状態であった。この他陶磁器類では、染付碗・皿、美濃灰釉皿、瓦器などがあり、小柄(338)、小札、鉄釘、鉄鍋とともに古銭が27枚出土している。そのうち22枚(洪武通宝、天禧通宝、元符通宝、開元通宝、元祐通宝、鏹銭など)はまとまって出土し、穴の所に植物繊維状のものが残存していた。

性 格：覆土上層のマウンド状の形態や床面からの出土遺物などから土壌(墓壇)的な性格と推定される。特に青磁皿を打ち砕き埋めるのは精神的意味が強いように考えられる。



Fig. 54 SX31実測図

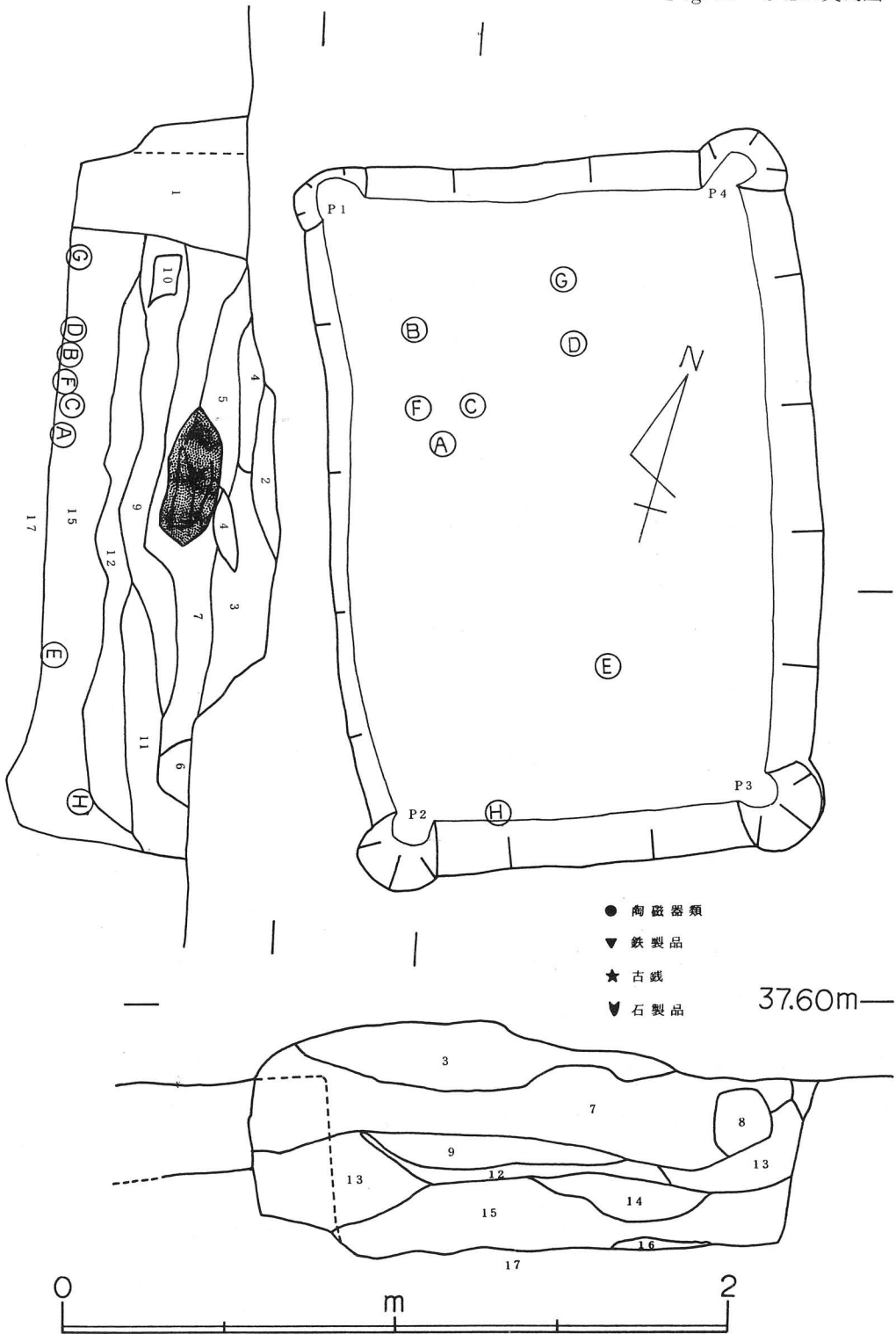
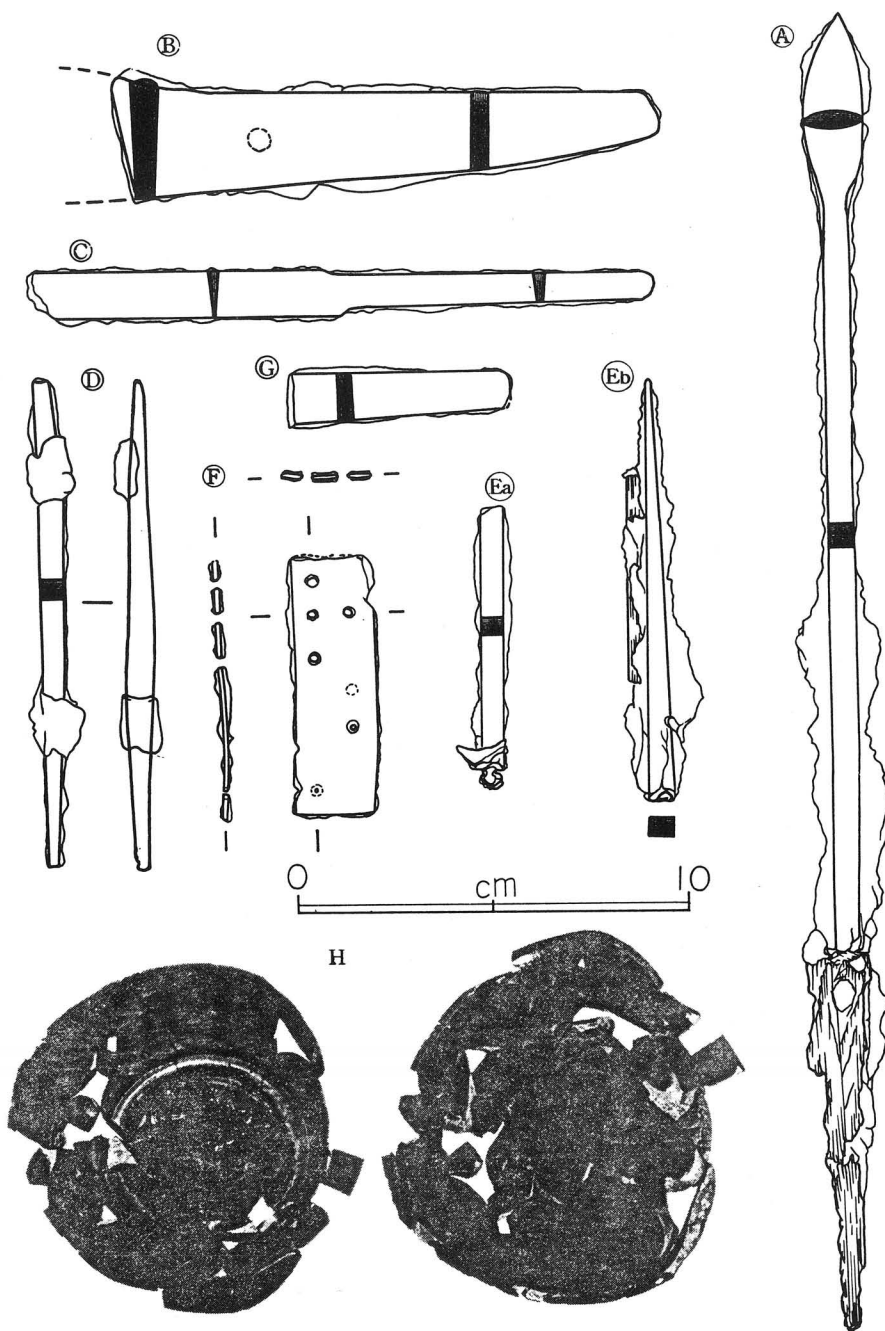


Fig. 55 S X31出土遺物実測図



S X 3 2 [ J 57区 ] ( PL. 31 ㊟、 Fig. 56、 Ch. 55 )

掘り下げ時にプランの確認が不備だったこともあり、拡張してゆくと溝状の遺構となった。

規 模：幅 200 cm、深さ 50 cm。S T 62 ( 新 ) と重複。付属する柱穴はなし。

覆 土：主要な覆土 4 層は城館期以前に埋め戻され、1 層上面が城館期初期の生活面と考えられる。

出土遺物：覆土上層から青磁碗が 2 片と染付皿 1 片が出土している他は、土師器・須恵器の出土が圧倒的多数を占める ( PL. 31 ㊟参照)。特に床面からは須恵器壺 ( 475 ) が出土している。

S X 3 3 [ I・J-57区 ] ( Fig. 57、 Ch. 56 )

規 模：長軸 210 cm、短軸 160 cm、深さ 38 cm。方形プラン。

出土遺物：青磁碗・皿、白磁皿、美濃灰釉皿、瓦器 ( 169 )、播鉢 ( 193 )、紹熙元宝 2 枚を含む古銭 5 枚、鉄釘 2 本、不明鉄製品などがある。

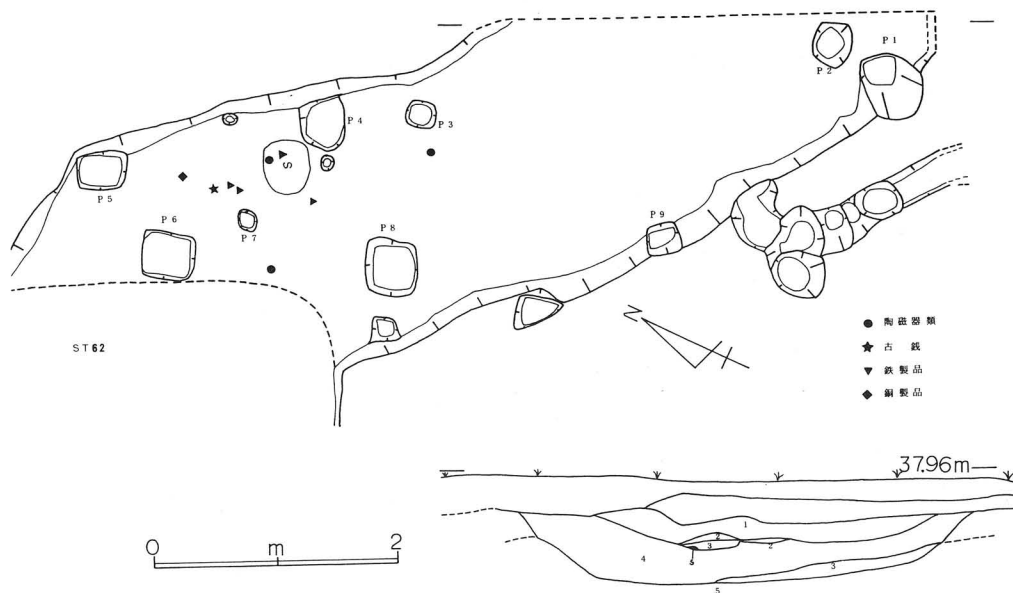
S X 3 4 欠番

S X 3 5 ( I 53区 ) 昭和 55 年度調査報告書にて報告予定。

S X 3 6 [ I 57区 ]

図面には取らなかったが S X 33 の北側に存在し、播鉢 ( 214 ) や毛抜き ( 287 ) を出土している。

Fig. 56 S X 32 実測図



S X 3 7〔G55区〕(PL.32㊤, Fig. 58・59, Ch. 57)

規 模：長軸 370 cm、短軸 160 cm、深さ 56 cm。方形プラン。

覆 土：上層は灰を含む土層が覆い、下層は暗褐色土と黄褐色砂質土の混層である。

出土遺物：青磁皿、鉄釉陶器碗、溶解物付着土器(241・252・255)などと鉄釘が1本出土している。

S X 3 8〔G55区〕(PL.32㊤, Fig. 58)

S X 39に切られ、詳細不明。

S X 3 9〔G55区〕(PL.32㊤, Fig. 53, Ch. 57)

規 模：長軸 200 cm、短軸 180 cm、深さ 40 cm。方形プラン。

覆 土：床面に白灰が薄く存在する。

出土遺物：青磁碗・染付皿、美濃皿がある。

柱 穴 等：Pit2とPit3は本遺構に伴うものと考えられ、簡易な上屋を推定できる。

S X 4 0〔G55区〕(PL.32㊤, Fig. 58)

規 模：長軸 200 cm、短軸 120 cm +  $\alpha$ 、深さ 25 cm。方形プランで西側不明確。

出土遺物：瓦器、白磁碗がある。

S X 4 1〔H55区〕(Fig. 8)

規 模：長軸 120 cm、短軸 110 cm、深さ 45 cm。方形プラン。S D 17(旧)との重複によって形状が不明確。

出土遺物：青磁碗が覆土中から、瓦器片が床面から出土している。

S X 4 2〔H55区〕(Fig. 8)

規 模：長軸 90 cm、短軸 80 cm、深さ 46 cm。方形プラン。

出土遺物：白磁皿、須恵器 3 片が出土している。

S X 4 3 } S T 73と重複しているため記載不能。  
S X 4 4 }

S X 4 5 欠番

S X 4 6〔J56区〕(Fig. 60, Ch. 58)

規 模：長・短軸 124 cm ぐらい、深さ 36 cm。方形プラン。

Fig. 57 S X 33実測図

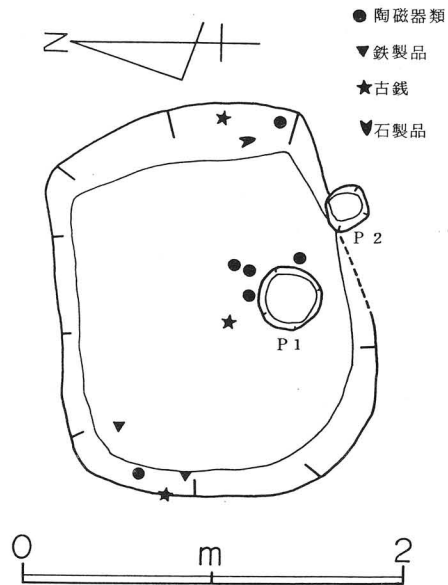


Fig. 58 S X 37・38・39・40・S D 11実測図

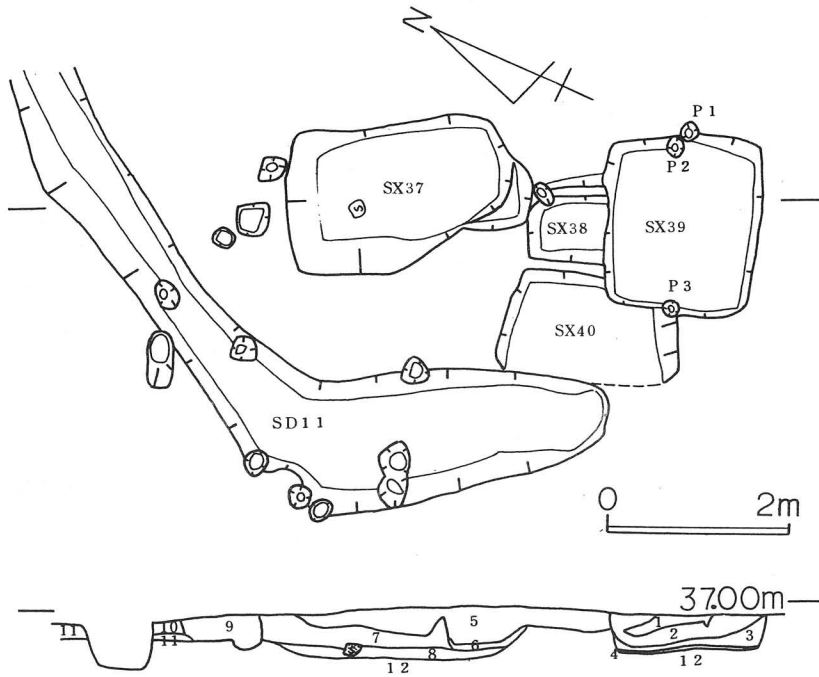


Fig. 59 S X 37遺物出土状況図

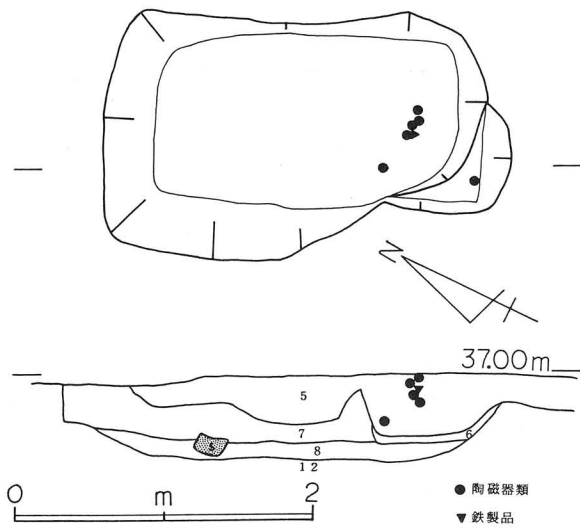
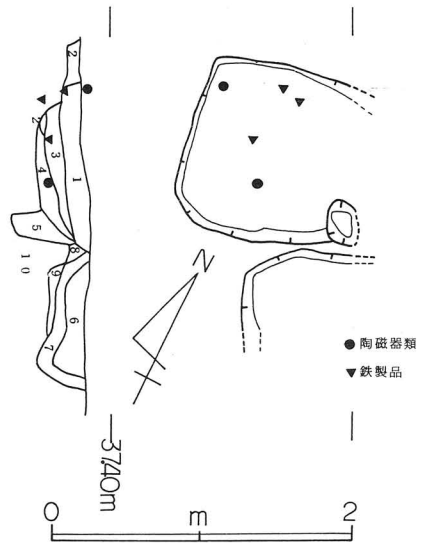


Fig. 60 S X 46実測図



覆 土：3層とした中間層が植物性遺存体を含む灰層である。その南側にも灰層（7層）の落ち込みがみられる。

出土遺物：美濃瀬戸灰釉壺(133)、染付皿、鉄釘、鉄鏃など。

S X 4 7 ( I 54区 )

( Fig. 33, Ch. 36 )

規 模：長軸220cm、短軸200cm、深さ44cm。

出土遺物：鉄釘と小札が出土している。

S X 4 8 ( H 55区 )

( PL. 32②, Fig. 61, Ch. 59 )

規 模：長軸 330 cm、

短軸 240 cm、深さ 120 cm まで掘り下げ。方形プラン。

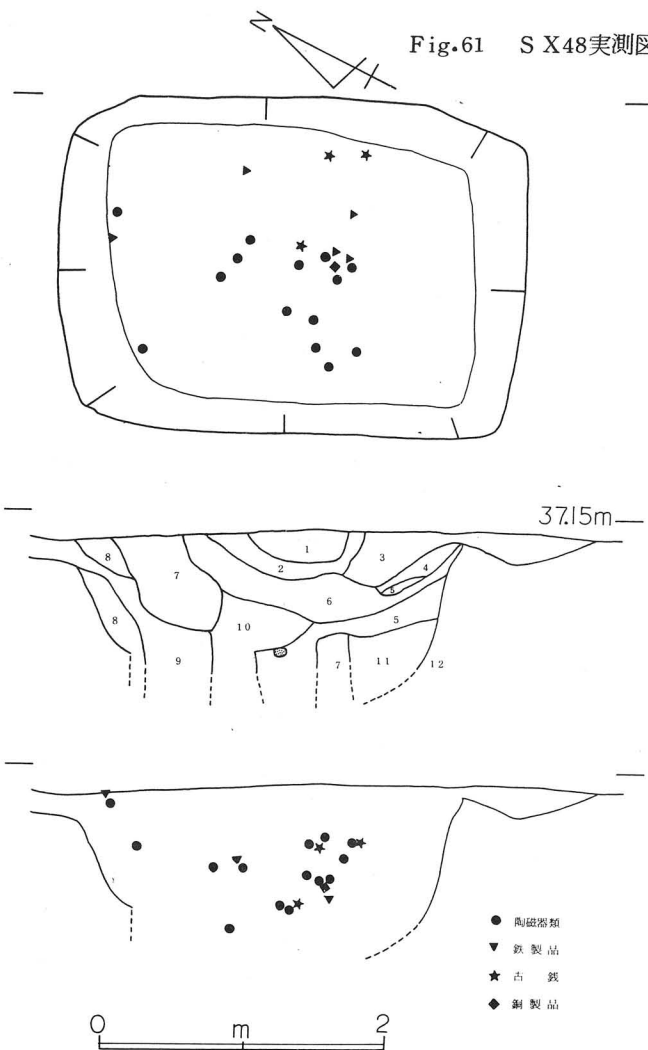
覆 土：上層（1～7層）は全般的に炭化物を含む土層で、しまりのある部分もみられる。下層は黄褐色砂質土を主体とした混層である。

出土遺物：PL.32②でみられるように、外面を黒色研磨した瓦器火鉢が全体の1/2ほど出土した。(179)他に青磁皿、白磁皿、溶解物付着土器、羽口(365)、雁股鏃(271)、芋引金(279)、不明銅製品(320)、鉄滓、宣徳通宝、永楽通宝など古銭9枚が出土している。

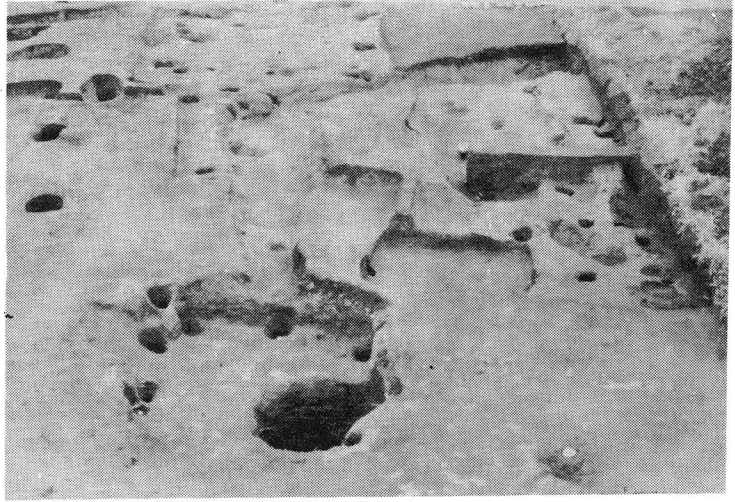
性 格：炭化物の分布や羽口・鉄滓などの出土から生産工房的なものであろうか。

S X 4 9 欠番

Fig.61 S X48実測図



㊤ S X 37・38・39・40・S D09  
全景（南側から）



㊥ S X 48瓦器、羽口等出土状態



㊦ S X 31出土遺物写真





PL. 33 S D05・07全景（KL56区）（北側から）



PL. 34 S D07他（H56・57区）（北側から）



## F 溝跡 ( Fig.7、 Fig.8 )

溝跡はS D05からS D22まで17本確認されているが、相互に連続したり攪乱によって不明瞭になったりしたものを除けば、基本的に3つのタイプに分類できる。

I 類 遺跡を南北方向に走るもので、幅は100 cm以内深さも40cm以内と比較的小型の溝。これにはS D05・07・08・17・12・13・14・15・18などがあり、各遺構配置とは無関係に走るものが多い。S D08はS B06の西端に位置することから雨落ち溝とも考えてみたが出土遺物もなく時期決定が困難で、確証に乏しい状況である。最も長く走るS D07 ( S D17も同様 ) からは土師器片23個、須恵器片3個しか出土せず、切り合い関係からS T60・S T81より古い構築と確認されているだけである。出土遺物はほとんどないか、あっても土師器片が数点の場合が多い。

II 類 遺跡を東西方向に走るもので、I 類同様に小型のもの。S D09・19・20・21・22などで、遺構との重複が激しい。ちなみにS D09はS D33 ( 新 )、S B03 ( 新 )、S B04 ( 新 )、S T73 ( 新 )、S D20 ( 旧 ) というようにながりの類にのぼり、土師器・須恵器片の出土が多いのはI 類と同様である。

III 類 溝の形状が南側に開く弧状を呈するもの。S D16が典型的なもので、他にS D06・10・11にS X21などもこの類と考えられる。何か別な遺構を囲むような形状であるが、弧内には特別な遺構は検出されていない。本類の溝跡は、出土遺物に特徴がみられ、S D16から土師器坏( 465 )、須恵器火ダスキ坏( 470・471・480 )、S D10から須恵器火ダスキ坏( 472 )、S D11から須恵器火ダスキ坏( 473 )が出土している。いわゆる城館期以前に構築された溝跡といえよう。

このように溝跡については、明確に城館期のものであるという確証のない状況で検出されることが多く、屋敷割りや排水機能を推定させるようなものは少ないと言ってよい。いずれにしても、他の遺構 ( 掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡など ) と重複した場合、大部分は古い時期の構築であり、関連を持って検出されることも少ない現状では前述の如くなるわけである。

## G 堀跡

今回調査した堀跡は昭和54年度調査区域（N・O・P-54・55区）の南側（北館と猿楽館間の堀跡）で、グリッド区域はP・Q-55区である。調査における平面実測、遺物の出土ポイント等は平板実測によって行ったため、出土遺物のNoが平場調査のものと重複しているものがあり、出土区表示がP・Q-55区となっていた場合は堀跡出土のものをご了解いただきたい。

### a 堀跡の層序と構築（PL.35 ㉔、PL.36 ㉕、Fig.62、Ch.60）

堀跡の規模は上端幅（北館側は昭和54年度調査のS A03、中間土塁である。浪岡城跡Ⅲ P67）14.5m、下端幅10.5m、深さ最大230cmで、土層の堆積によって数度の改修がおこなわれていることを確認できる。なお、平面的な改修の痕跡は湧水が激しいことと、遺物が多量にわたったために時間的に無理であった。ただ筆者の観察によるところは以下に述べる通りである。

新しい時期のものから順次述べてゆく。

I 期 1層～4層までの堆積は、堀跡が水田と利用されていた時の耕作土である。現代。

II 期 17層～23層までと47層が城館期最終末の覆土。いずれも泥化した堆積土が主体をなし22層などは木片・もみがらの腐植が激しいため異臭が激しく、掘り下げが大変であった。23層を底面とする落ち込みは、薬研状を呈して、掘り下げ部分では猿楽館寄りに走る傾向を示した。後述する遺物の出土状況でも、この落ち込み部分からの遺物の出土が多い特徴を有している。上端にある26・27層がしまりを有するところからも確認できる。

III 期 12層を最下層とする落ち込みの堆積土。本落ち込みの構築は32層とした粘質土を貼って造られた可能性が高い。

IV 期 13層を最下層とする落ち込みの堆積土。35・36層が上端面である。

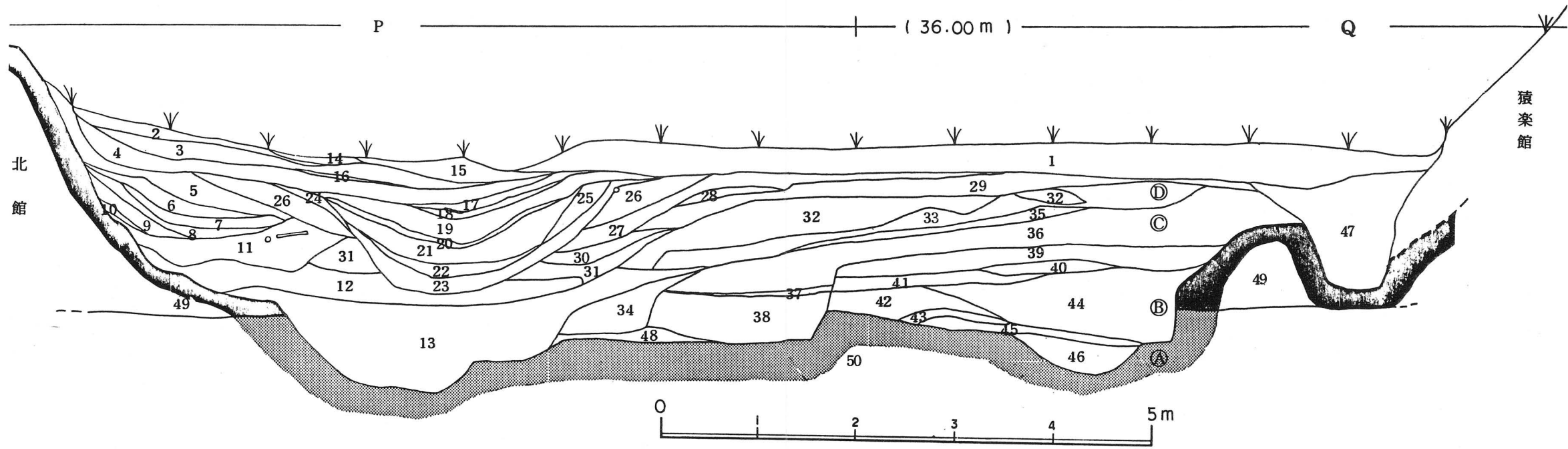
V 期 38層を最下層とする落ち込みの堆積土。39層が上端面である。

VI 期 45層を最下層とする落ち込みの堆積土。49・50層という本遺跡の地山を掘り込んだ、築城期のもの。

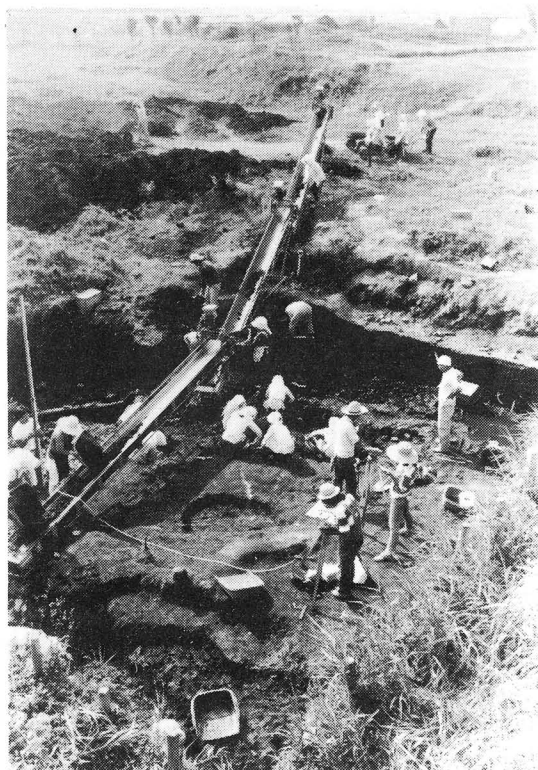
このように、現代の堆積土を除けば、5期に及ぶ堀の改修がみられ、新しくなるにつれて堀幅、深さとも狭小になる事実がわかった。もっとも遺物の出土状況からみて、堀としての機能を有する時期はII期～IV期までが中心のようで、築城期の堀跡は早い時期で幅狭に埋め戻されたか、利用しやすいように改修されたい。

堀跡の構築に関してII期はU字状の薬研堀、III期は北館側の落ち込みに対して猿楽館側は傾斜が暖やかすぎるため既成の名称（堀の掘り方）にあてはまらず、何と形容したらよいらう。IV期も同様である。V期・VI期になると落ち込み部分については垂直に落ち込む傾向が強くなり、箱堀的構築を意図しているように思われる。

Fig.62 堀跡 ( P Q55区 ) 東壁断面図



PL.35 ㊤堀跡の発掘状況



㊦堀跡東壁断面図



㊧堀跡の発掘調査参加者





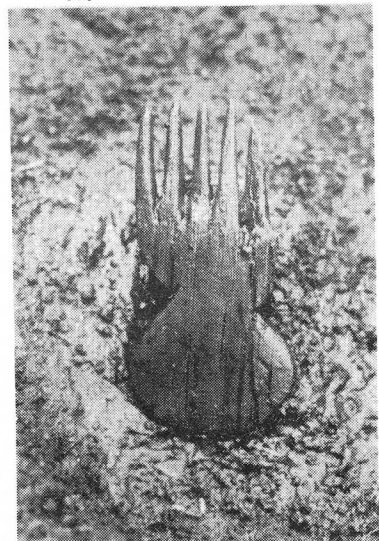
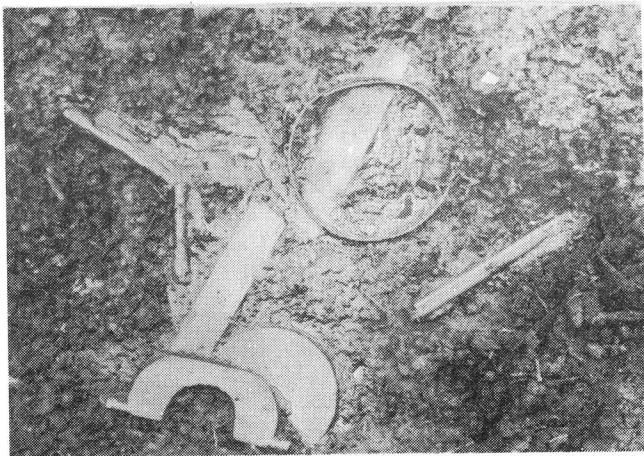
◎ 堀跡完掘状況



◎ 木製品出土状態

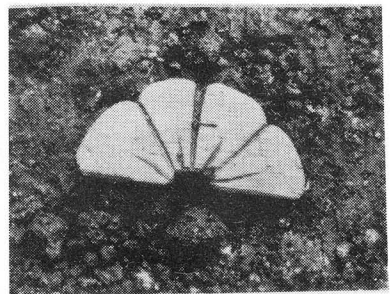
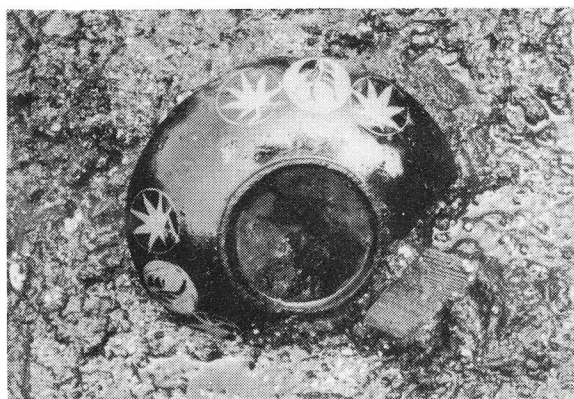
434

417



383

416



413



379

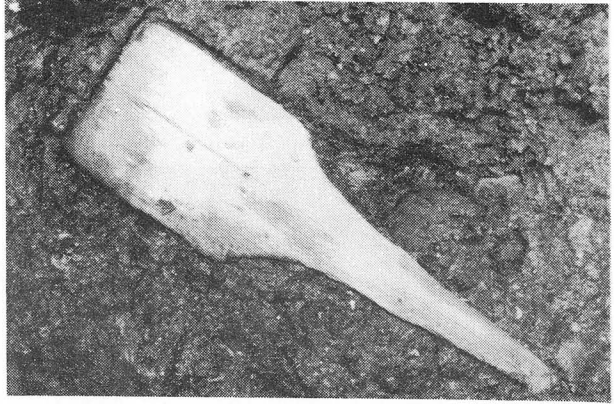


PL. 37 掘跡遺物出土状態(1)

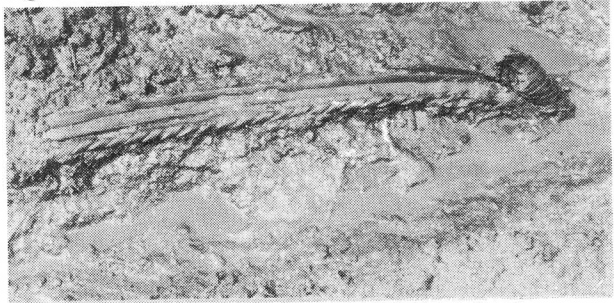
391



388



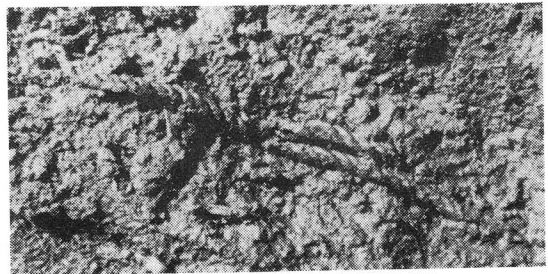
(A)



415



(B)





(A)

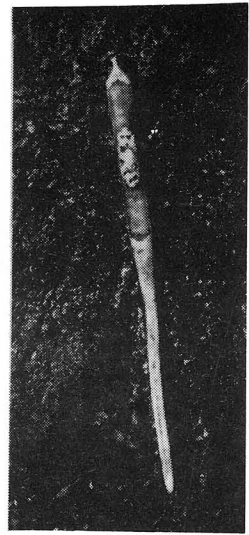


(A)

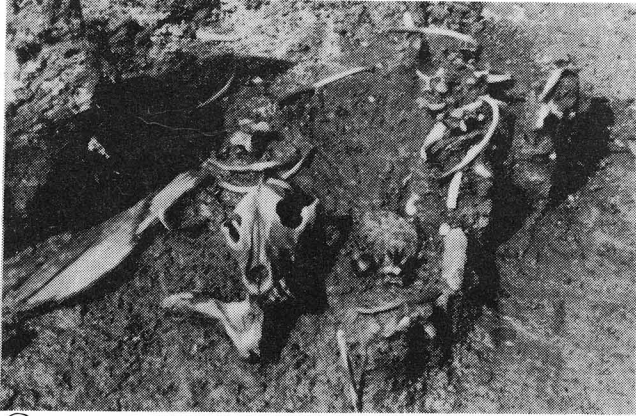


306

(B)

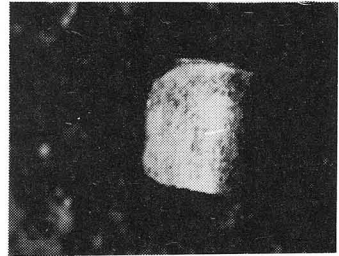


(E)



309

(C)

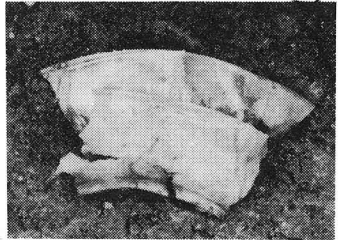


(F)



336

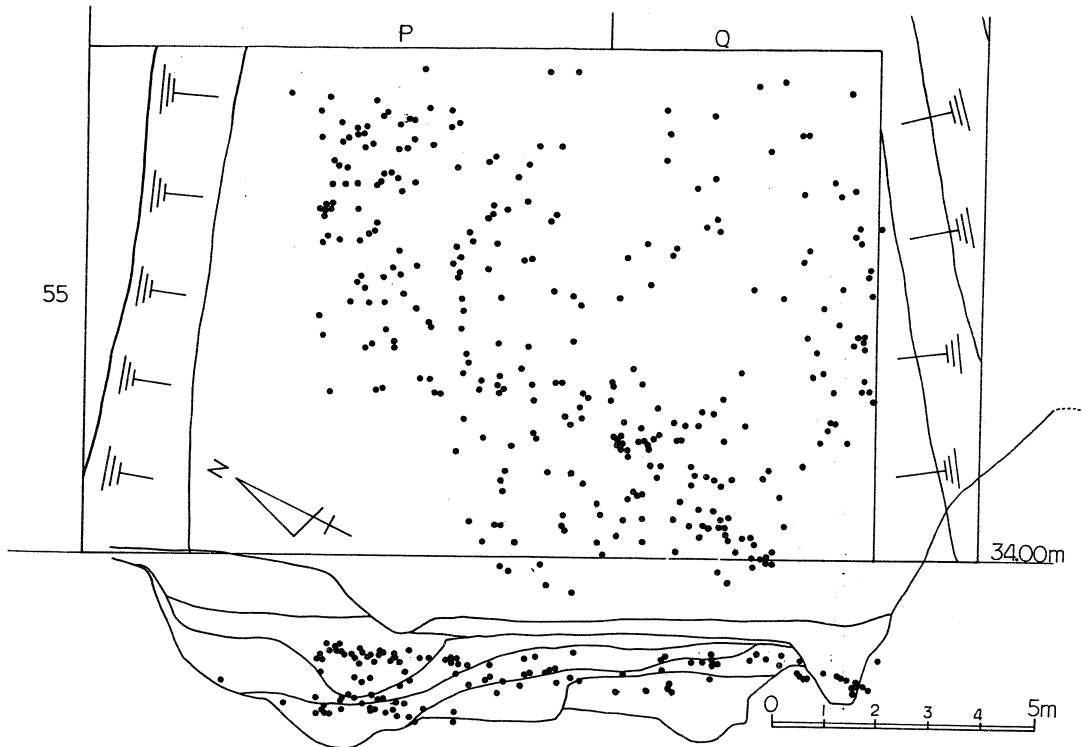
(D)



(G)



Fig.63 堀跡陶磁器出土分布図



b 堀跡の出土遺物

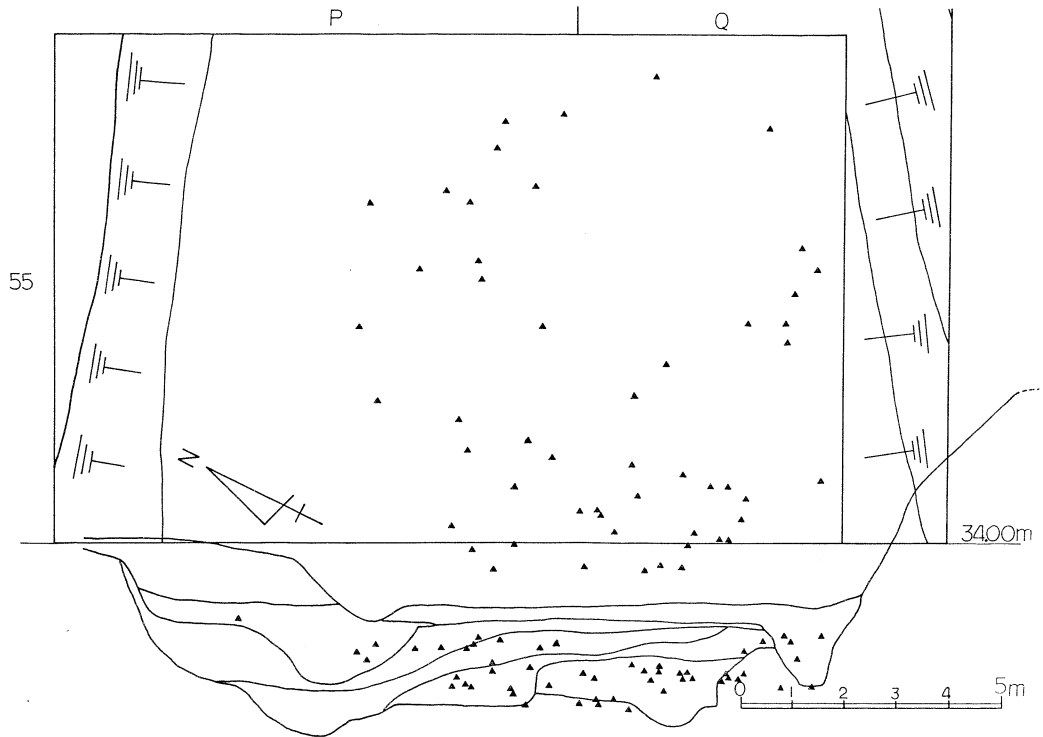
○陶磁器類 ( Fig.63 )

堀跡からの陶磁器類出土総数は 398 点、その内訳は青磁52、白磁34、染付49、美濃灰釉36、天目21、瀬戸 3、越前 5、唐津 3、瓦器 9、播鉢25、溶解物付着土器71、土師器49、須恵器19、その他22となる。溶解物付着土器、土師器、須恵器、その他を除いた舶載品と国産品の割合は 57 : 43 となり、舶載品が国産品を凌駕する傾向を呈する。舶載品の中で青磁 : 白磁 : 染付の割合は 39 : 25 : 36 となり白磁が最も少なく、青磁・染付の比率が多くなるのは平場における出土傾向と対応する。国産品では、美濃灰釉と天目、瀬戸を入れたいわゆる美濃・瀬戸系の陶器が 59% 近くを占め、次に産地不詳の播鉢が 25%、越前 5%、唐津 3%、瓦器 9% の出土率を示す。

Fig.63 に示した陶磁器の出土分布図のうち、断面図の分布は東側半分の出土遺物に限定して点を打っている。出土分布は全体的広がりをみせる中でも、前述第Ⅱ期の北側に位置する溝跡の方向に添って厚く分布する傾向がある。つまり、最終末期の部分からの出土比率が高いことになる。

主な出土品をみると、青磁 ( 13・18・21・24 )、白磁 ( 53 )、染付 ( 77~86・108 )、美濃・瀬戸系陶器 ( 114・117・140・145・146・149 )、唐津 ( 165 )、瓦器 ( 167 )、播鉢 ( 191・213・219・220・222・223 )、鋳型 ( 242 ) の他、PL.47◎とPL.51で示した越前系甕 ( 147・151 ) などが、平場調査区 ( 2,900 m<sup>2</sup> ) に対する堀跡調査区 ( 150 m<sup>2</sup> ) の陶磁器類出土率は約 25% ほどであった。

Fig.64 堀跡鉄銅製品分布図



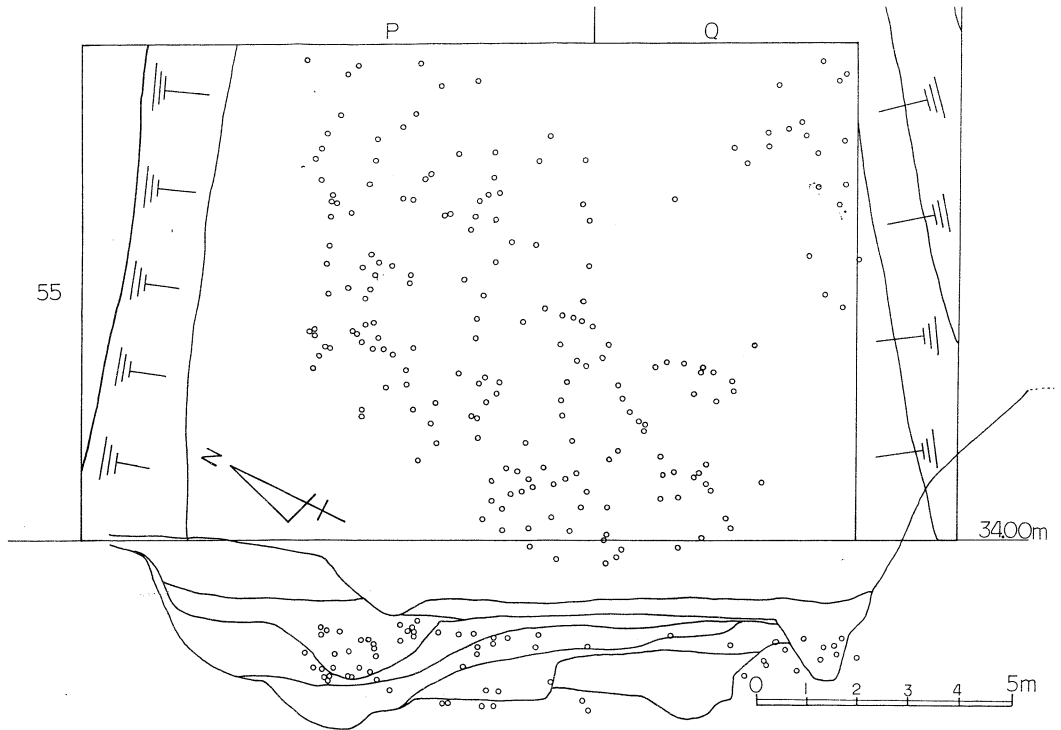
○鉄・銅製品 ( Fig.64 )

鉄製品と銅製品を合わせた出土総数は59である。堀跡のように湿性の強い状況では、鉄・銅製品とも密閉状態（安定）から取り出すこととなるため、取り出した後急激に錆化が進んだり乾燥のためモロくなったりすることが多い。特にPL.38⑩で出土状態を示した筭などは、出土時は赤銅色に光沢を放っていたが、現在は黒色気味に変色したり、PL.54・Fig.84-304で示した鎧の胸板的な部品は合成樹脂によって固定したにもかかわらず、移動のたびに欠損が多くなる状態である。

さて、堀跡出土の鉄製品・銅製品の中で主なものをみると、小札(276)、火箸(282)、轡状鉄製品(291)、釘(295・296・298)、鎧の胸板(304)、筭(306・335)、金メッキした板状の製品(309)、飾金具(324・334)、金メッキした耳かき(333)、銅皿(336)、キセル(341・342)などがある。これらの出土状態をみると一様に廃棄行為の印象を強くするが、筭(306)や耳かき(333)などはまだ充分使用に耐え得る優品であり理解に苦しむ所である。PL.38⑩銅皿(336)などは、破壊した後3片を重ねて廃棄したようで写真の通りの出土状態であった。

このように、本堀跡から出土した製品をみると、武具・装身具・生活具の中でもいわゆる優品が多いことは、堀跡の位置が内館・北館・猿楽館という浪岡城の中心的館跡にはさまれた場所であることと無関係ではないであろう。

Fig.65 堀跡木製品分布図



○木製品 ( Fig.65 )

本堀跡は、木製品の宝庫である。遺物№を付けたものが約 250 点、他に箸・屋根桁などは一括して取り上げているため、総数では 500 点以上になるものと考えられる。また、家屋の柱と推定されるものなどは大きすぎて写真や実測ができず、プールに入ったままである。

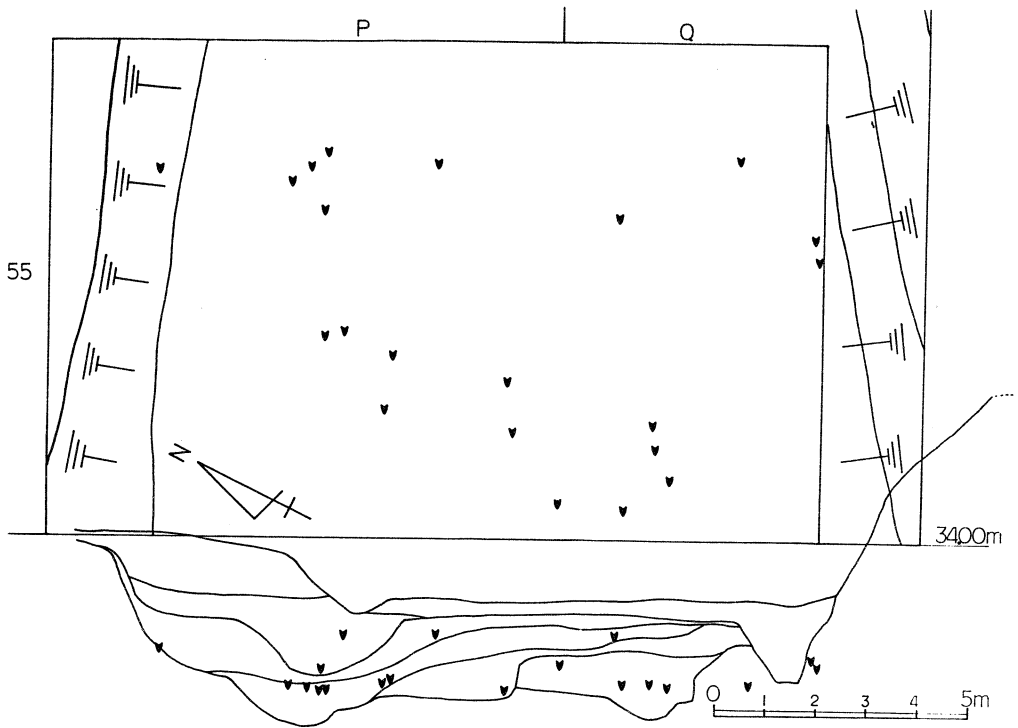
分布図をみると、陶磁器類と同様に P 区側に多く存在し、Ⅱ期とした溝跡内に最も多く存在する。Q 区付近で分布の薄くなる部分は、前述した粘土貼りによる改修面である。

主な遺物を見ると、漆塗り椀( 383 ~ 397、他)、折敷( 379)、箸、膳( 376)、篋( 388)、桶( 391)、曲物、取手( 434・435)、櫛( 416)、下駄( 401 ~ 412)、形代的機能のもの( 368 ~ 371 )などがあり、そのほとんどが部品であるため用途不明なものが多い。

出土した木製品はすべて廃棄されたものとみて大誤ないと考えられるが、機能的面から言えば、食膳・饗膳具が多いことに注目できる。そして、農具や生産に関係した製品は数えるほどしか出土しない。また、屋根には桁を葺き、日常生活には下駄を履き、生活用水は桶などを利用して移動・貯蔵していたことが理解できる。さらに火災にあって焼成痕のみられるものも多い。

木製品と関連するものとして、PL.37㊸で示した箕と推定されるもの、PL.37㊹の縄などが出土している。木製品についての詳細は後述する。

Fig. 66 堀跡石製品分布図



○石製品 ( Fig.66 )

石製品は25点の出土があった。特に注目できるものとしてPL.38㊸の写真・模式図で示した、自然石に墨書痕を有するものがあげられる。文字は「のろの」と判読できるが、墨痕が薄くなっているため写真では見え辛い。自然石であること、「のろ(の)の」などと書いてあることから手慰み的な意味が強いように思われる。

その他の出土品としては、砥石、茶臼、石鉢などの城館期のもの、縄文時代の石斧 ( 463 ) などもある。

○獣骨等 ( Fig.67 )

獣骨などの骨類は、総数 ( 1個体でまとまるもの、それ以外は破片もひとつと数えている ) で80点ほどあり、まだ鑑定を受けていないため詳述できないが、馬、犬、牛、人などのものがあると考えられる。PL.38㊸は犬、PL.38㊹は馬の骨と推定され、PL.38㊺は牛の角の出土状態である。この他、人の歯 ( 第1中切歯 ) と推定されるものもある。鑑定を受けた後に再度報告する予定である。

Fig.67 堀跡獣骨類分布図

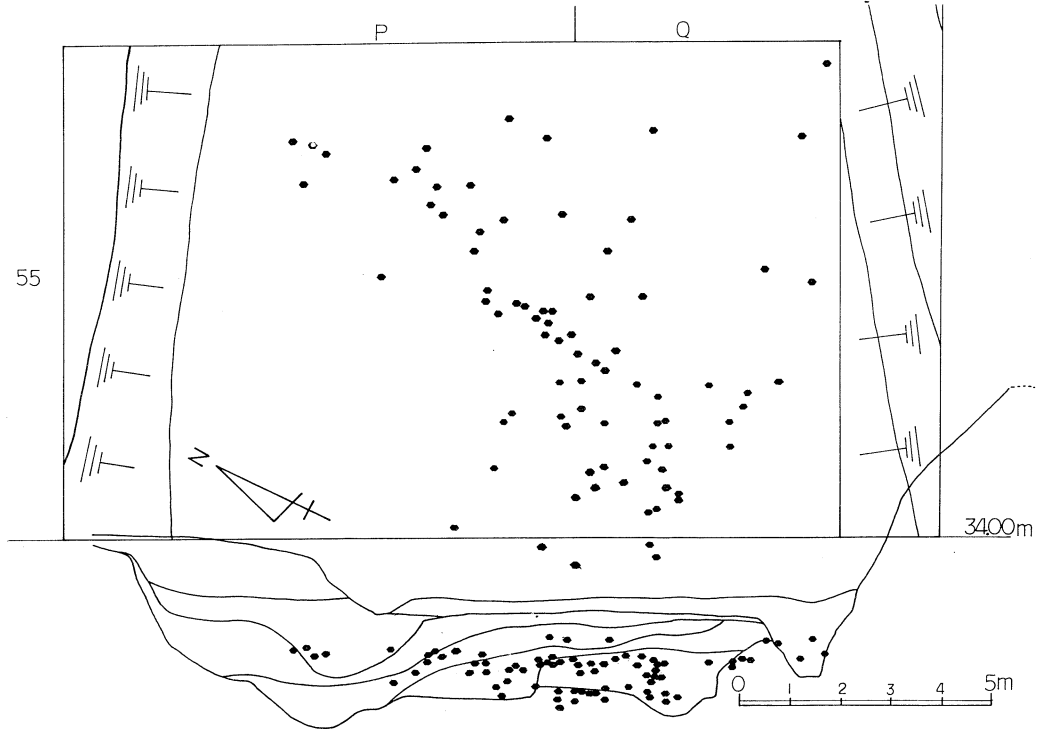
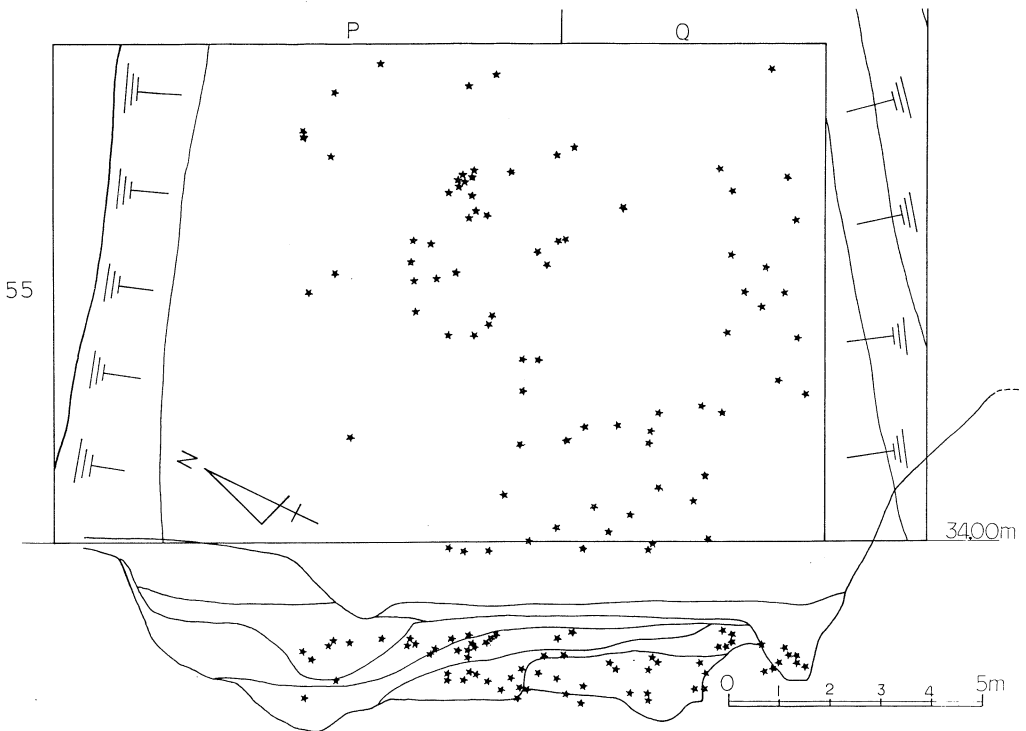


Fig.68 堀跡古銭分布図



### ○古銭 ( Fig.68 )

古銭の出土総数は116であり、名称・個体数は以下の通りである。

開元通宝 6、乾元重宝 1、唐國通宝 1、至道元宝 1、景德元宝 2、天禧通宝 2、天聖元宝 3、明道元宝 1、景祐元宝 1、皇宋通宝 5、至和元宝 2、熙寧元宝 2、元豊通宝 4、元祐通宝 3、紹聖元宝 2、元符通宝 1、聖宋元宝 2、政和通宝 2、洪武通宝 21、永樂通宝 5、判読不能 18、無文銭 ( 鏹銭 ) 31。

平場区域から420枚出土しており、その比率は78 ( 平場 ) : 22 ( 堀跡 ) となるが面積的に堀跡は平場の5%であることから出土頻度は高いと言える。特に、平場から出土する寛永通宝など落城以後のものは1枚も出土せず、堀跡に関して近世・近代の攪乱は平場と比較する限り少なかったことが言えるのではなかろうか。

### ○その他の出土遺物

堀跡からは、前述した遺物以外にくみや種子などの自然遺物、自然木、鉄滓、銅滓、粃穀、藁、貝殻の外皮、漆器の被膜など多種多様なものが出土している。今後、整理が終了次第紹介してゆく予定である。

### 〔堀跡小結〕

今回調査した堀跡は、内館・北館・猿楽館の中間に位置するところから、当初橋梁のような遺構が検出されればと期待していた。しかし、PL.36㊦でみられる若干の杭をもって橋梁と認定できるはずなく、昭和53・54年度に続き残念な結果に終わった。

堀跡の調査については、常に湧水との闘いになり、深さ2 m以上にも達する堀跡では遺物の取り上げが主体となり、遺構の確認という基本的作業がおろそかになる傾向があった。特に前述したⅡ期・Ⅲ期における猿楽館側の粘土貼り部分は、断面図を取った後に初めて地業改修部分であったことが判明し、雑な掘り下げをしたと後悔している。このような粘土貼り部分は、初期の堀跡を狭める意図で行なったものか、あるいは土橋的意図で構築にしたものか、平面的把握がないため理解できないが、いずれにしても単に堀跡を自然堆積のままに放置していたのではなく、人為的に改修して堀の機能を維持していたことが判明した。

このように数度の改修跡のある堀跡は、昭和52～54年度までの調査ではみられなかったことであり、出土遺物の多様さなどからも、本堀跡が浪岡城内における中心的生活空間の一部であったことが推定できる。

( 工藤清泰 )



## V 出土遺物

今回出土遺物には、陶磁器、土器、鉄製品、銅製品、木製品、石製品、銭、自然遺物、織物などがあり、多種多様に渡っている。そのすべてを紹介することは紙数上無理があるため、浪岡城跡の歴史的意義を表現しうる典型的なものに限って記述してゆく。なお、土師器・須恵器については城館期以前の遺物と推定されることから別章にて紹介することとした。

### A 陶磁器類（やきものとしての性格を有するものを一括した。）

#### 1. 青磁（PL.39、PL.40、Fig.69、Fig.70、Ch.61）

総数で295片の出土である。器形としては、碗・皿・鉢・盤などがあり、15世紀～16世紀の製品が主体を占める。舶載品。分類は、器形→文様→器形上の特徴→色調・胎土の順である。

#### 〔碗〕

I類 無文のもの。

I a類 口縁が外反気味に立ち上がるもの。（10・11・14・15）

I b類 口縁が真直く立ち上がるもの。（18）

II類 無文ではあるが、外面口縁直下に一条の劃線をめぐらすもの。（4・5・12・13）

III類 雷文を有するもの。

III a類 口縁部外面に雷文帯、胴部に他の文様を窺描きしているもの。（1・2・3）

ただし、2に関しては内面にも窺描きの痕跡がみられる。

III b類 口縁部外面および内面にスタンプ状の雷文を施しているもの。（6・7・8）

IV類 外面にくずれた蓮弁文を有するもの。

IV a類 蓮弁の先が剣先状を呈するもの。（23）

IV b類 “ ” が丸く波状を呈するもの。（19・20・21・27）

IV c類 “ ” が縦の劃線だけに簡略化されたもの。（28・29）

V類 その他の文様を有する碗。

この中には雷文を簡略化したもの（9）などがあり、底部片だけのため見込に印花文があるにもかかわらず口縁・体部文様が不明なものも含まれる。

青磁の碗の中で出土量の多いものはIV a類・IV b類であり、無文のものや雷文を有するものは少ない。特に、口縁部に雷文帯を有するものは昭和52年度から通算しても10片ぐらいで、総出土量の1～2%以内である。釉調・胎土による相違は、分類上明確でない。

#### 〔皿〕

外径が15cm以内のもの、それ以上のもので二つに大別できる。前者は小皿、後者は大皿あるいは盤と言ってよいもので、前者がI・II・III類、後者がIV・V類に相当する。

I類 口縁が稜花状を呈し、底部立ち上がりから口縁にかけて朝顔状に広がるもの。

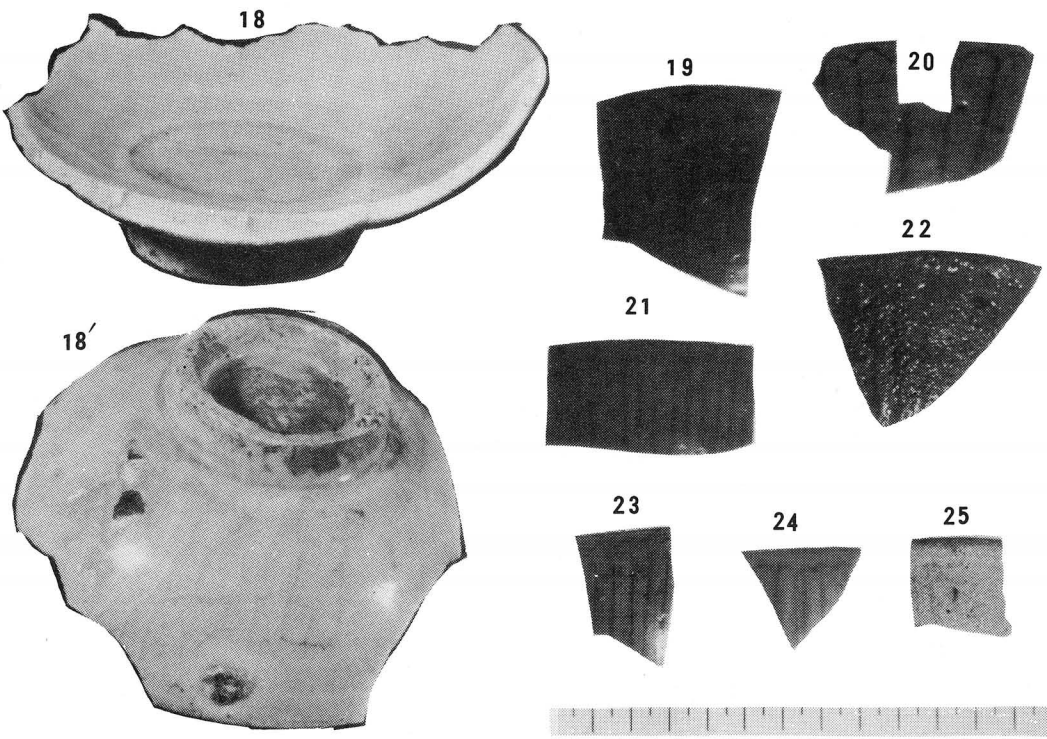
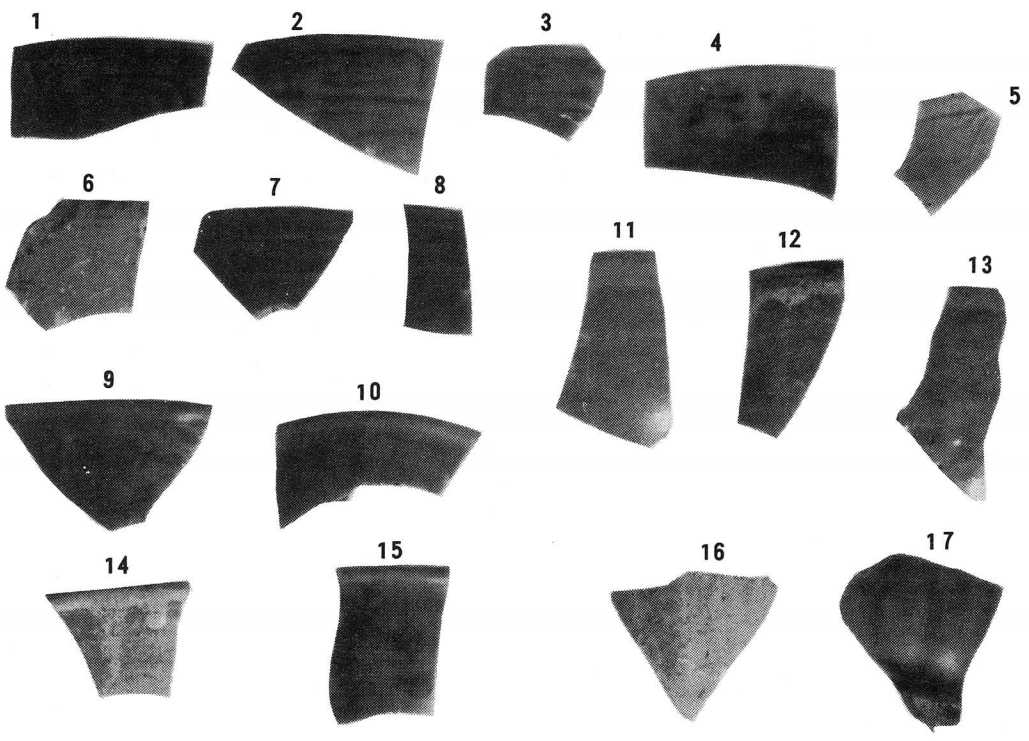
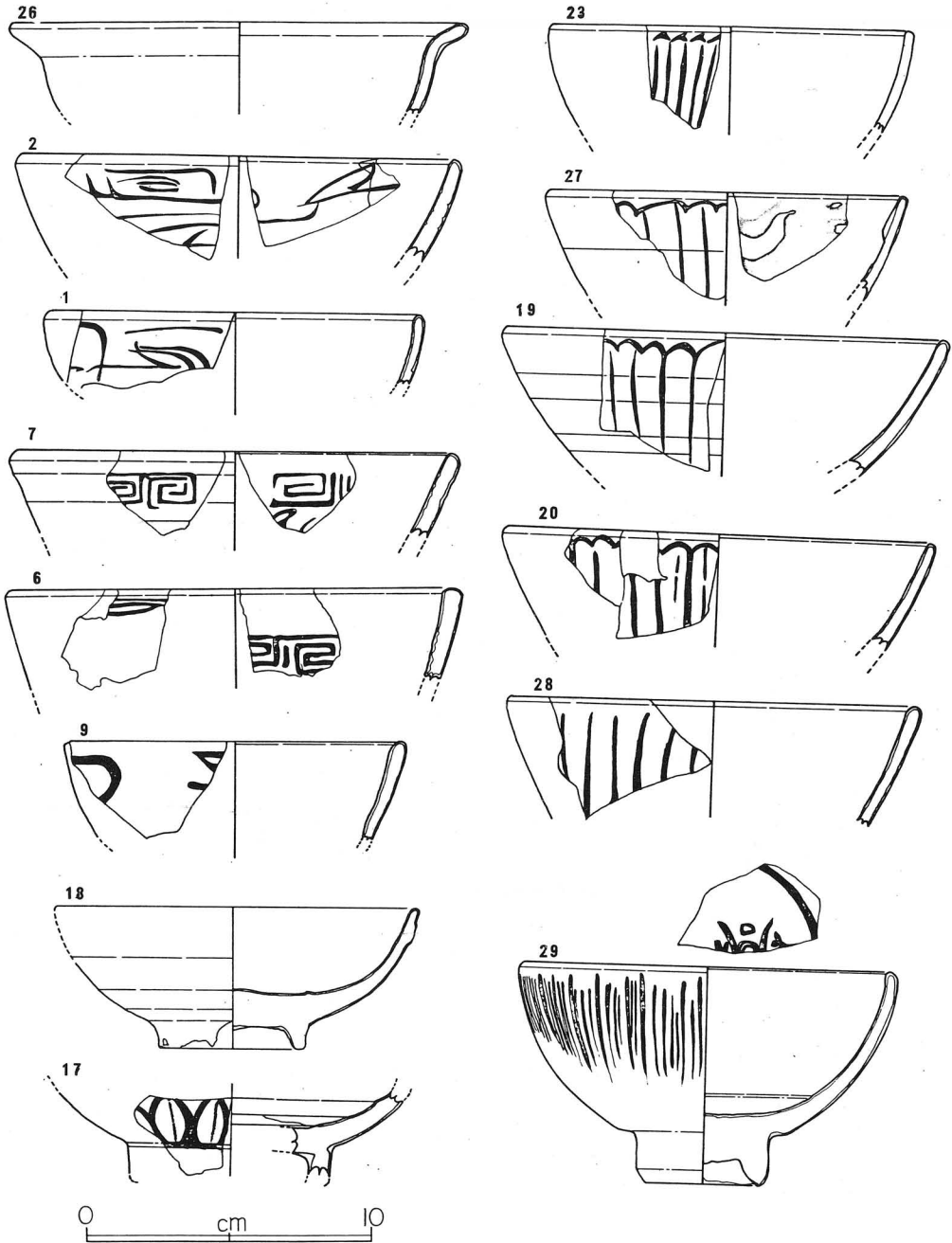


Fig.69 青磁奩测图(1)



I a 類 口縁部内面に流水状の櫛目文を2～3条口縁形に沿って施すもの。(31・35)

I b 類 口縁部内面に流水状の櫛目文を2～3条口縁形に沿って施し、さらに見込みにかけて劃線・劃花文を施すもの。(33・34・36・37)

I c 類 内・外面とも無文のもの。(32・38・39・40)

I a 類の35は、色調・胎土とも赤褐色を呈し、いわゆる酸化青磁と言われるものである。

II 類 口縁は外反するものの平縁を呈するもの。(42)

III 類 底部下半から体部・口縁部にかけて内湾して立ち上がるもの。(44)

IV 類 口縁は稜花状であるが、口縁から体部にいたる部分でくの字状に折り曲り、口縁部内面は平面的になる。なお、平面的な部分には流水状の櫛目文が施されている。(41)

V 類 肉厚な器形で、釉調・胎土ともに良質、口縁がないため確実ではないが内湾気味に立ち上がるものと思われる。見込に一条の劃線がめぐる。(30)

VI 類 その他の皿。底部だけとか体部だけのため詳細不明のもの。(43など)

青磁の皿で典型的なものはI類であり、皿の90%以上がその中に含まれる。また、見込みが丸く無釉になるもの(31など)も多く、一般に焼成不良のものに多い。

#### 〔盤〕

小片のため明確でないが、47は盤の口縁部と推定される。

#### 〔壺〕

45・46は、内面に施釉されていないところから壺と考えられる。45は、外面に篋削りによる文様もみられ、46は二次加熱にあって釉が剥脱している。

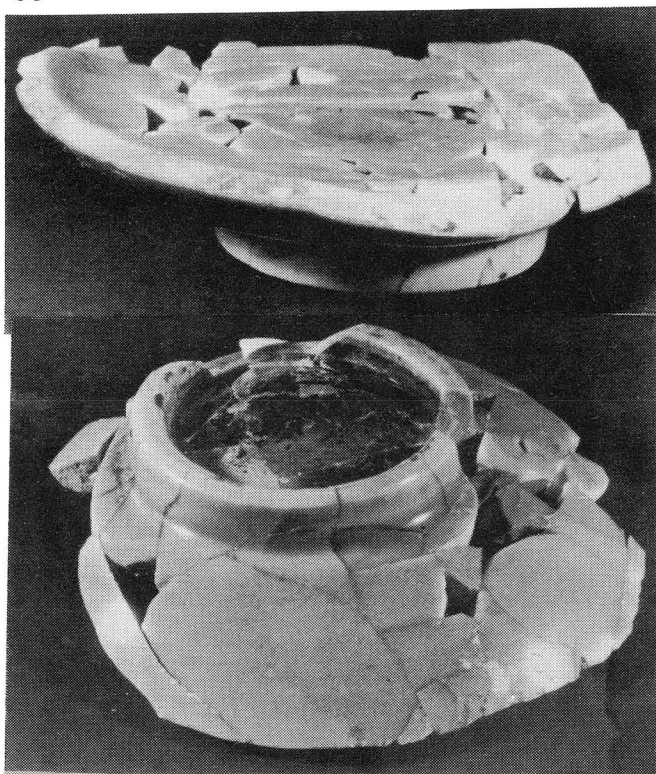
#### 〔鉢〕

17は、外面文様が篋彫りによる鎬蓮弁文で、内面は一部釉の流れている部分があるものの、ロクロによる凸凹が明瞭にみられる。おそらく小鉢の底部片となるものであろう。蓮弁は複葉になる可能性もある。

青磁の中で、胎土が白色に近く、釉調もきれいな青緑色となるいわゆる龍泉窯系と認められるものは多くない。一般に胎土がくすんだ暗灰色、釉調も深緑色のものや、酸化状態で焼成されたためか胎土・釉調も赤味の強い緑色のものが多い。また、焼成高度が低いためか釉調が光沢を失なって緑色の地に黄白色の部分が多くなるものもみられる。(41など)

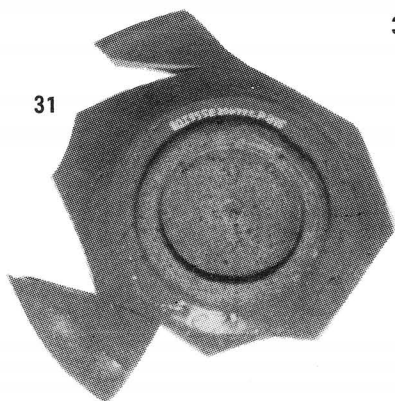
さらに、層位や遺構間による出土品の違いは現在のところよくわからない状況で、碗の中で口縁外面に雷文帯を有するもの(14世紀から15世紀の製品と考えられている。)と簡略化した蓮弁文を有するもの(15世紀から16世紀の製品と考えられている。)との比較対照は今後の問題として残っている。

30

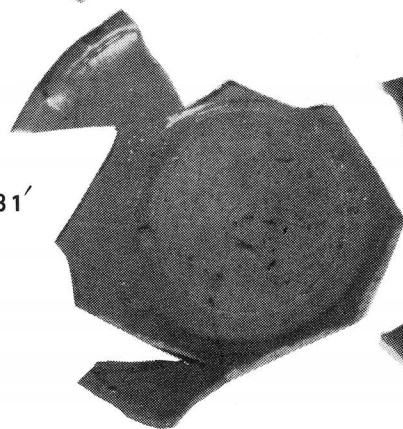


30'

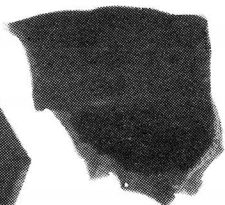
31



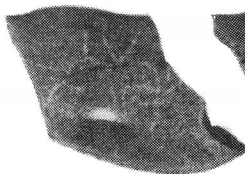
31'



32



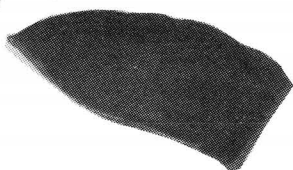
33



34



35



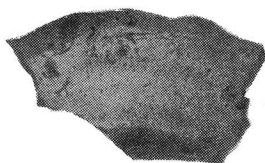
36



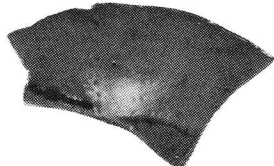
37



38



39



40

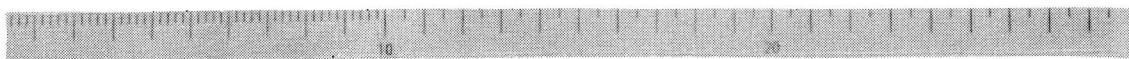
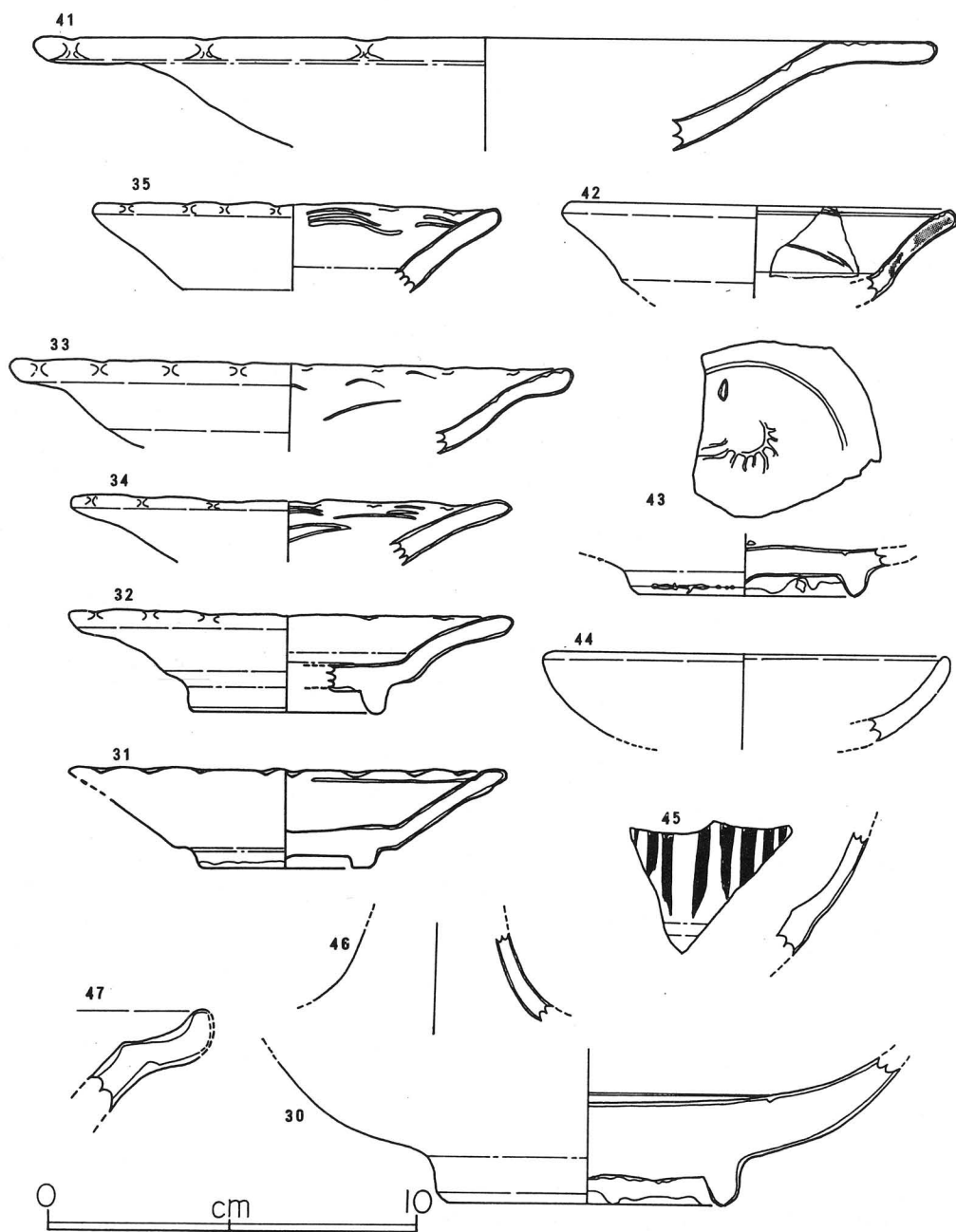


Fig. 70 青磁実測図(2)



## 2. 白磁 ( PL.41、Fig.70、Ch.62 )

総数で127片の出土である。器形としては皿、碗、小坏、壺などがあり、一部13~14世紀のものと推定されるものもあるが、全体的には15~16世紀の製品が中心である。舶載品。

### ○13~14世紀

#### 〔皿〕(48)

底部が肉厚なのに対し、体部からの立ち上がりは薄く内湾気味である。色調・胎土とも暗灰色を呈し、内外面とも釉の上から凹ができています。内面に7条1単位の櫛目状の文様がみられ、無方向に施されている。

#### 〔壺〕(60)

口縁が肉厚な玉縁になっているもので、色調・胎土は前記皿と類似している。四耳壺とも推定される。層的的にI層(最上層)からの出土であり、遺構等に伴うものではない。

### ○15~16世紀

#### 〔皿〕

I類 口縁がやや内湾気味な立ち上がりを呈し、軟質感のあるもの。

I a類 底部高台を四ヶ所弧状に削るもの。(50・61)50は全面に施釉している。

I b類 底部高台が削られないもの。(51)底部に施釉されない。

II類 口縁が端反りし、全体に薄手、硬質感のあるもの。

II a類 色調が白色あるいは青白色に近いもの。(53・56・57・59・63・64)

II b類 色調が灰色あるいは灰色の中に黒色の部分が点在し、斑状になっているもの。

(55・58)

II c類 高台部がやや内傾しながら立ち上がるもので、他はII a類と同じもの。(62)

#### 〔小坏〕(54)

高台の立ち上がりは、湾曲などせずに真直ぐ立ち上がり、硬質・薄手な製品である。見込みは蛇の目状に調整され、釉のない部分は赤黄色を呈する。また、その部分に若干の白釉が残っていることから重ね焼きの痕跡とも考えられる。

#### 〔碗〕

小片であるが、多角碗の体部片と推定される。黄白色の釉が内面全域および外面は口縁方向から胴部中間まで施され、軟質な胎土である。

白磁の中で最も出土量の多いものは皿II類であり、特にII a類が圧倒的である。13~14世紀のものとした皿・壺は今回の発掘調査が初現であり、伝世的色彩が強いと考えられるが、北畠氏の浪岡入りの時期と関連して、今後の問題を残すところである。



PL.41 白磁  
48

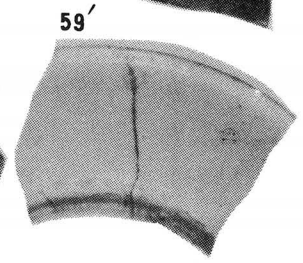
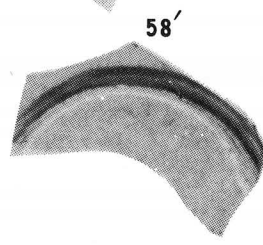
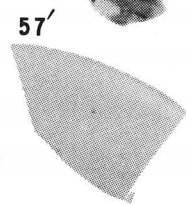
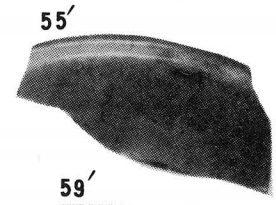
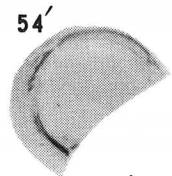
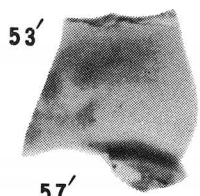
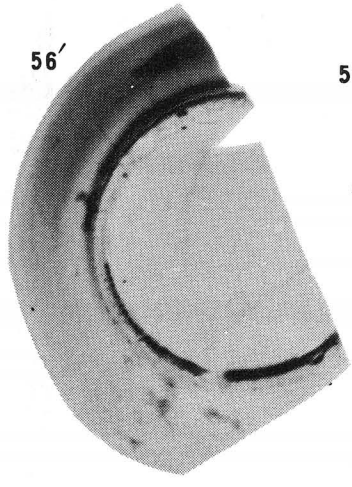
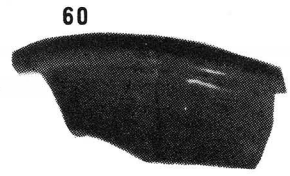
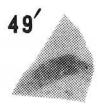
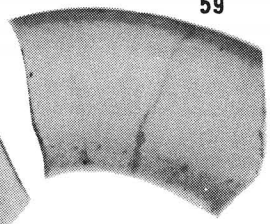
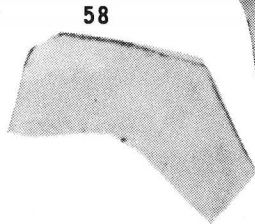
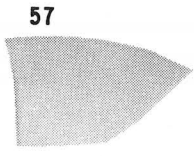
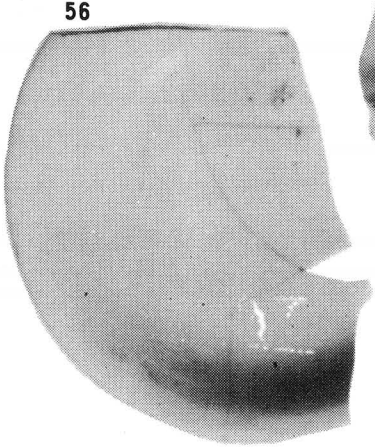
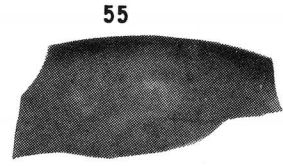
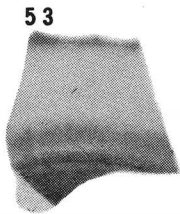
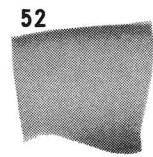
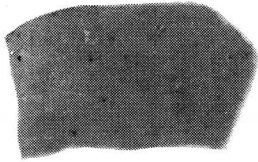
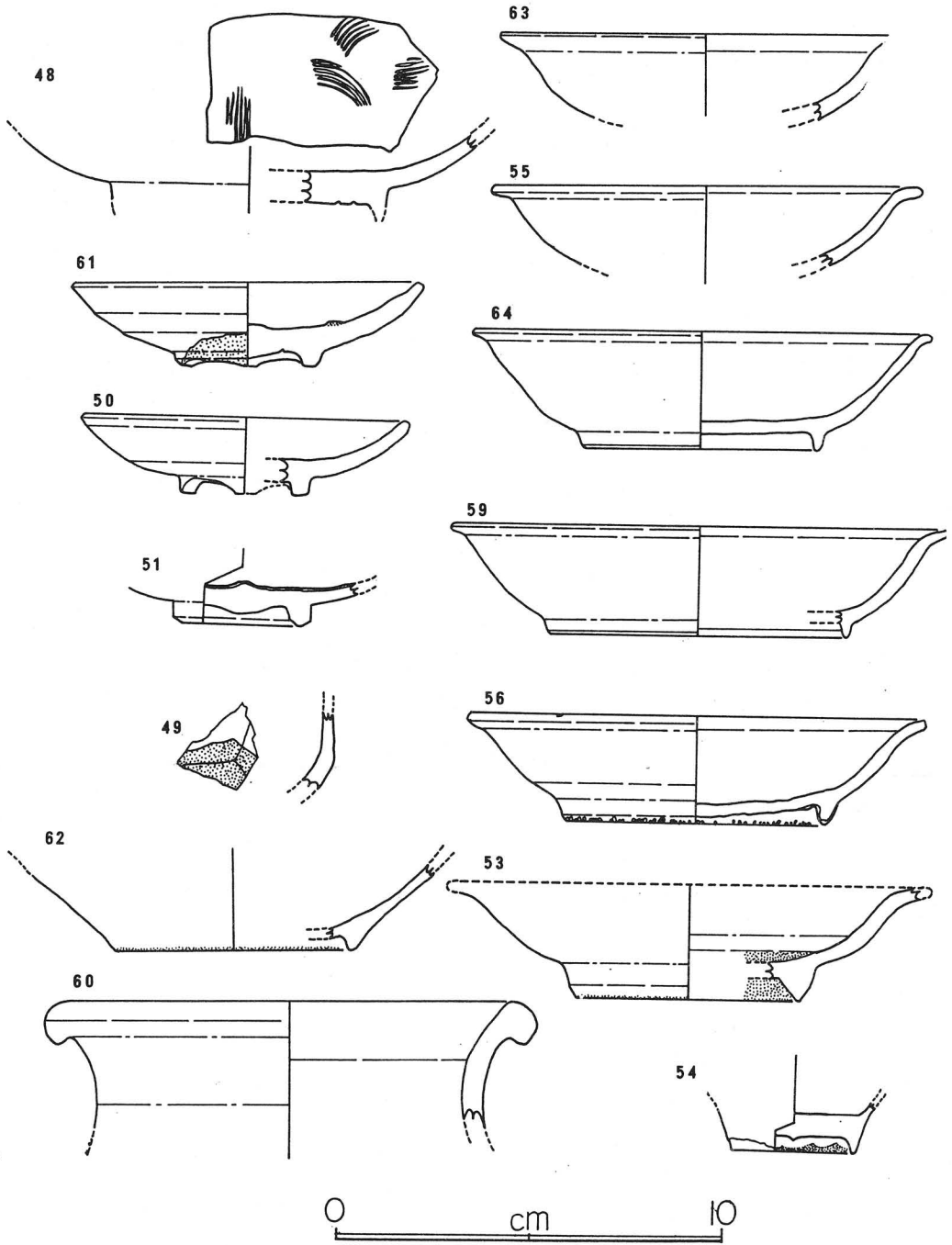


Fig.71 白磁実測図



3. 染付( PL.42、PL.43、PL.44、Fig.72、Fig.73、Fig.74、Ch.63 )

染付は総数 192 片の出土である。器形としては、碗・皿・小坏がみられ、16世紀を中心とするものが大多数である。舶載品。

〔碗〕

I 類 口縁が端反りし、底部は不明のもの。

I a 類 外反度が強く、「く」の字状に折れる。外面文様は花鳥文らしい。( 87 )

I b 類 外反度は緩く、外面に牡丹唐草文、内面口縁部に一条の圈線あり。( 67 )

I c 類 外反度は若干で、外面は意象不明の粗雑な文様、内面口縁部に一条の圈線。( 66 )

II 類 口縁は直行ないしはやや内湾するもので、底はU字型を呈する。蓮子碗。

II a 類 外面体部に蕉葉文、口縁部に波濤文帯を配し、内面見込みに蓮華文を有するもの。  
色調は黄緑色と青灰色の二種類あり。( 65・71・74・75・84 )

II b 類 外面体部に扁平な丸を三つ重ねたような意象文を有し、見込みに同様の文様を施しているもの。( 76 ) 69も同種のものと考えられるが、あるいは人物画的意象かもしれない。いずれにしても本類に近似した性格を有する。

II c 類 外面体部にアラベスク風の蓮華文を有するもの。(「浪岡城跡Ⅲ」P91No.55)

II d 類 外面体部および見込みに「卍」の意象文を配したもの。( 85・101 )

III 類 口縁はやや内湾気味に立ち上がり、底部は饅頭心型の形状を呈するもの。

III a 類 外面体部に牡丹唐草文を有するもの。( 73・78 )

III b 類 見込みに人物画文などを有するもの(「浪岡城跡Ⅲ」P87No.54)

IV 類 その他形状、文様などがはっきりしない一群。( 68・70・72 )

〔皿〕

I 類 碁笥底で口縁がやや内湾気味のもの。

I a 類 外面体部は放射状に蕉葉文、口縁部は列点状波濤文帯、見込みに草花や菊花文を施しているもの。(「浪岡城跡Ⅲ」P91No.69)

I b 類 外面体部および見込みに吉祥文を施すもの。

I b 1 類 胎土精良で硬質感のあるもの。( 83 )

I b 2 類 胎土・焼成不良で軟質感の強いもの。( 77・97・99 )

I c 類 外面は無文に近く、内面見込みに草花文を有するもの。( 98 )

II 類 高台はほぼ真直ぐ立ち上がり、体部は丸味をもって、口縁が端反りするもの。

II a 類 外面体部には牡丹唐草文、見込みに羯磨文( 89・94)、玉取獅子文( 95)、草花文( 90・92・93)などを配するもの。

II b 類 小片のため意象が不明確な一群。( 図示できず )

PL. 42 染付(1) ㊤碗類 ㊤堀跡出土の染付

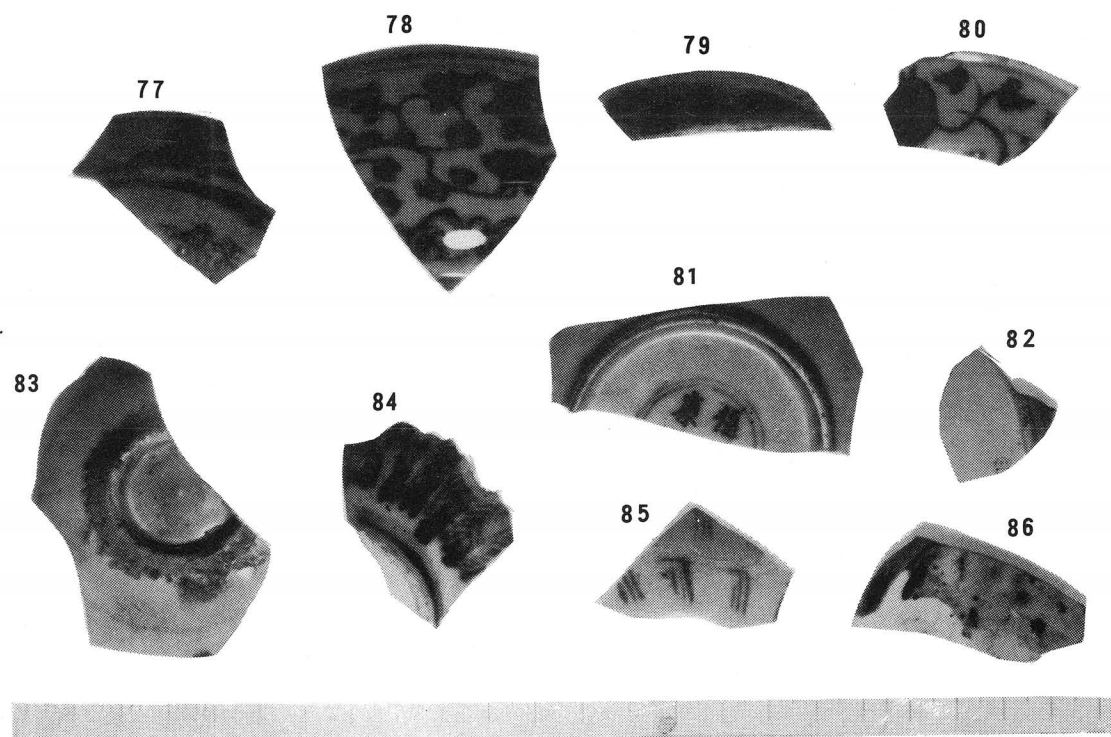
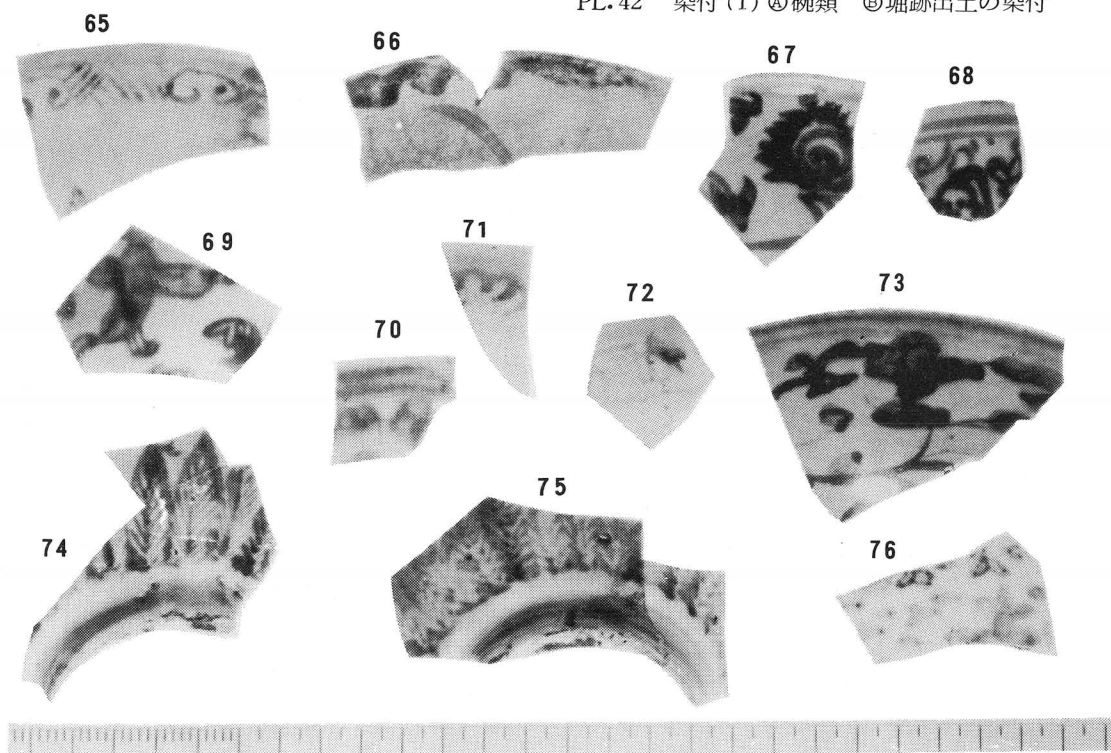
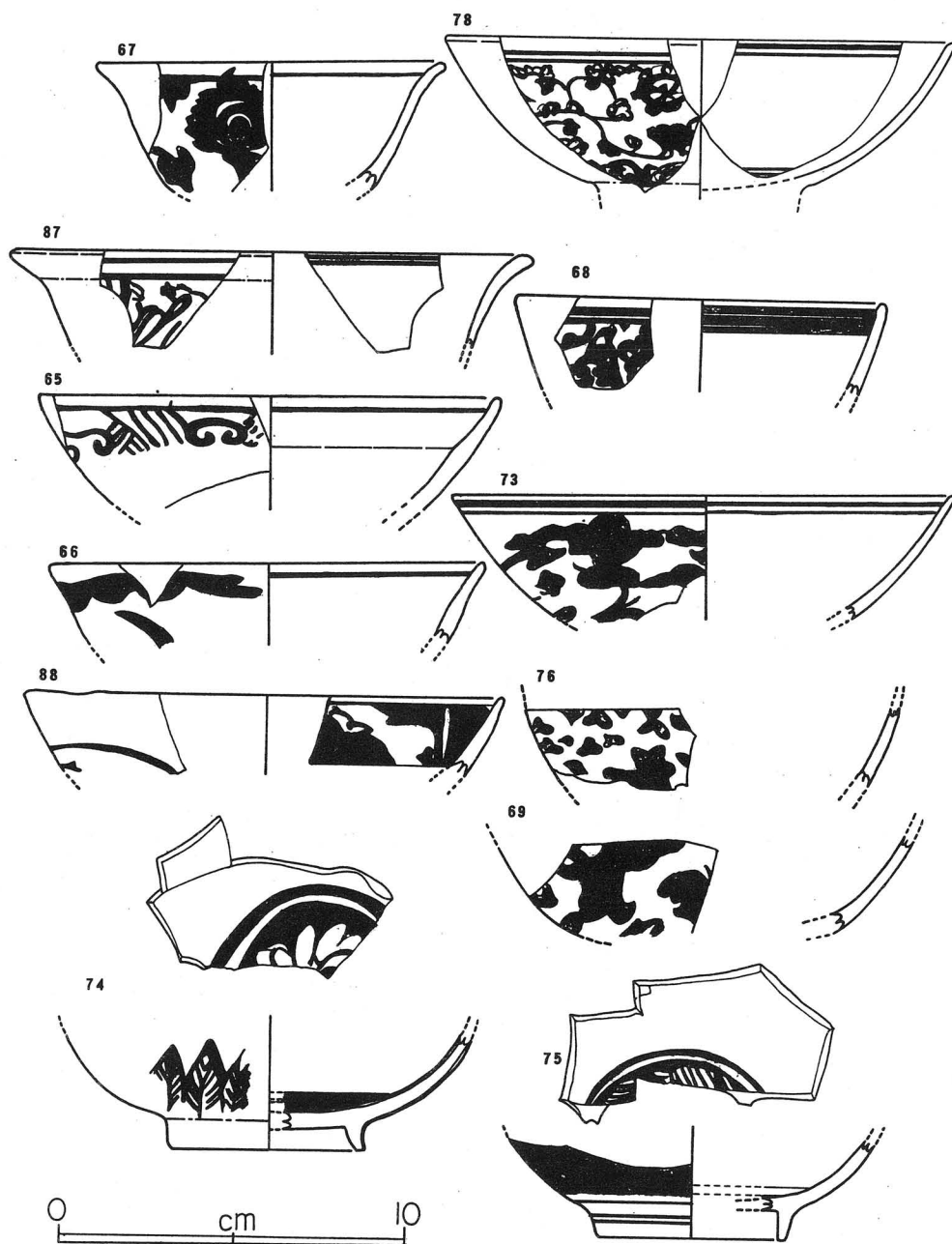



Fig. 72 染付実測図(1)



- Ⅲ類 底部から口縁にかけて緩く端反りし、体部に丸味を有しないもの。見込みに巴状の雲堂文を配するものが多い。( 100 )
- Ⅳ類 高台は真直ぐ立ち上がるが、体部から胴部にかけて内湾気味のもの。
- Ⅳ a 類 外面体部に牡丹唐草文、内面口縁部に四方禪文、見込みに蓮池文などを配するもの。(「浪岡城跡Ⅱ」P65No.11)
- Ⅳ b 類 外面体部に折枝(あるいは笹竹)文、内面口縁部に四方禪文を有するもの。( 110 )
- Ⅳ c 類 外面底部の「」銘を除き外面は無文に近く、見込みに独自のタッチの獅子文を有するもの。( 96 )
- Ⅳ d 類 施釉が雑で、見込みにほんち蟠螭文を有するもの。( 109 ) (「浪岡城跡Ⅲ」P89No.66で写真は掲載済。)本類と類似した文様を有するものとして102と103がある。
- Ⅳ e 類 その他、意象が不明瞭なもの。( 111 )
- V類 形状は不明確であるが文様等に特徴を有するもの。
- V a 類 大形の皿で、見込みに三方にのびる草文を描いているもの。( 91 )
- V b 類 焼成不良のためか軟質で、見込みに a 類と近似した文様を描くもの。( 105 )
- V c 類 白磁の皿の可能性もある。底に「福○康○」銘があり、見込み上部に一条の圏線を有するもの。( 81 )

〔小坏〕

4片の出土をみたが、2点しか図示しなかった。104は、外面体部に唐草草花文、底に「大明年造」銘、見込みは風景文(山水画)であろうか、底部の一部を除いて全般に施釉はゆきとどくが高台の成形は雑な部分もある。108は、外面文様は不明瞭だが、底は碁笥底気味で、見込みは蛇の目状を呈する。特に釉をふき取った部分は赤褐色の色調を呈する。他の2片は、口縁が外反するものらしく、外面体部に草花文を描いているようである。

染付の中で最も出土量の多いものは皿Ⅱ a 類で、他の碗・皿はまんべんなく出土しているようである。ただ、皿Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類の中で、意象の構成が独自の描き方をしているものもみられ、それらは1～2点の出土にとどまっている。

4. 赤絵( PL.44、Ch.63 )

赤絵は、皿と皿か鉢の破片が2点出土している。

106は、表面に赤と緑の色彩がみられるだけで、文様・器形等は明確でない。

107は、外面口縁部に2条の圏線と、体部に牡丹唐草文、内面口縁に2条の圏線と見込みに早花文を配したもので、染付Ⅳ類の器形になると思われる。

PL.43 染付(2)

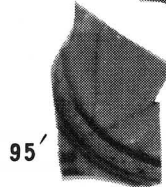
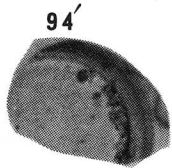
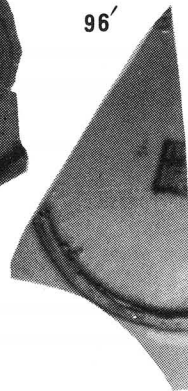
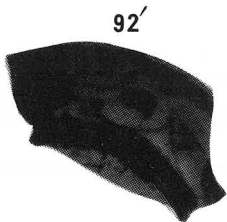
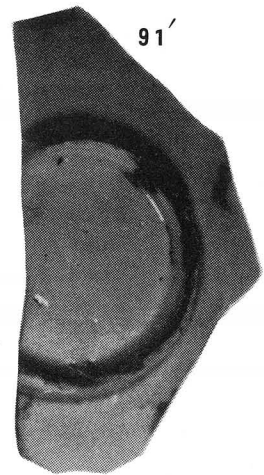
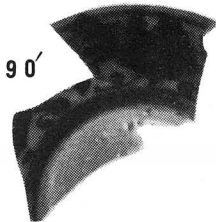
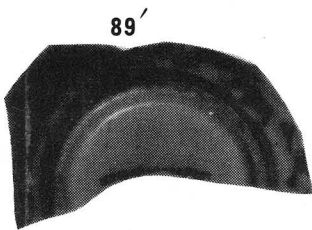
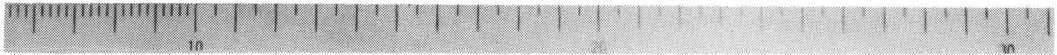
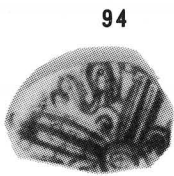
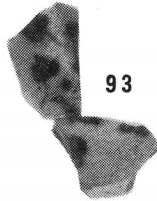
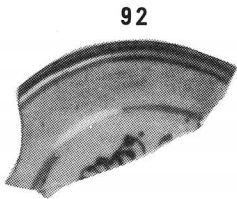
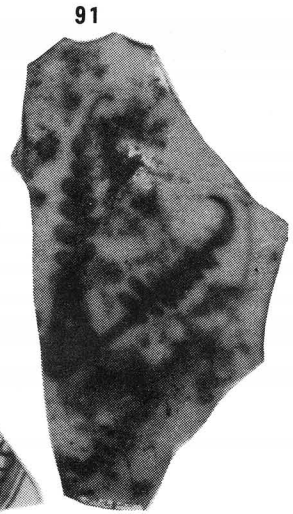
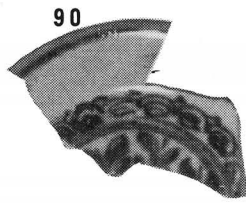
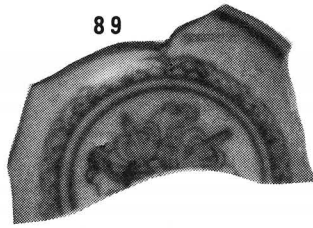
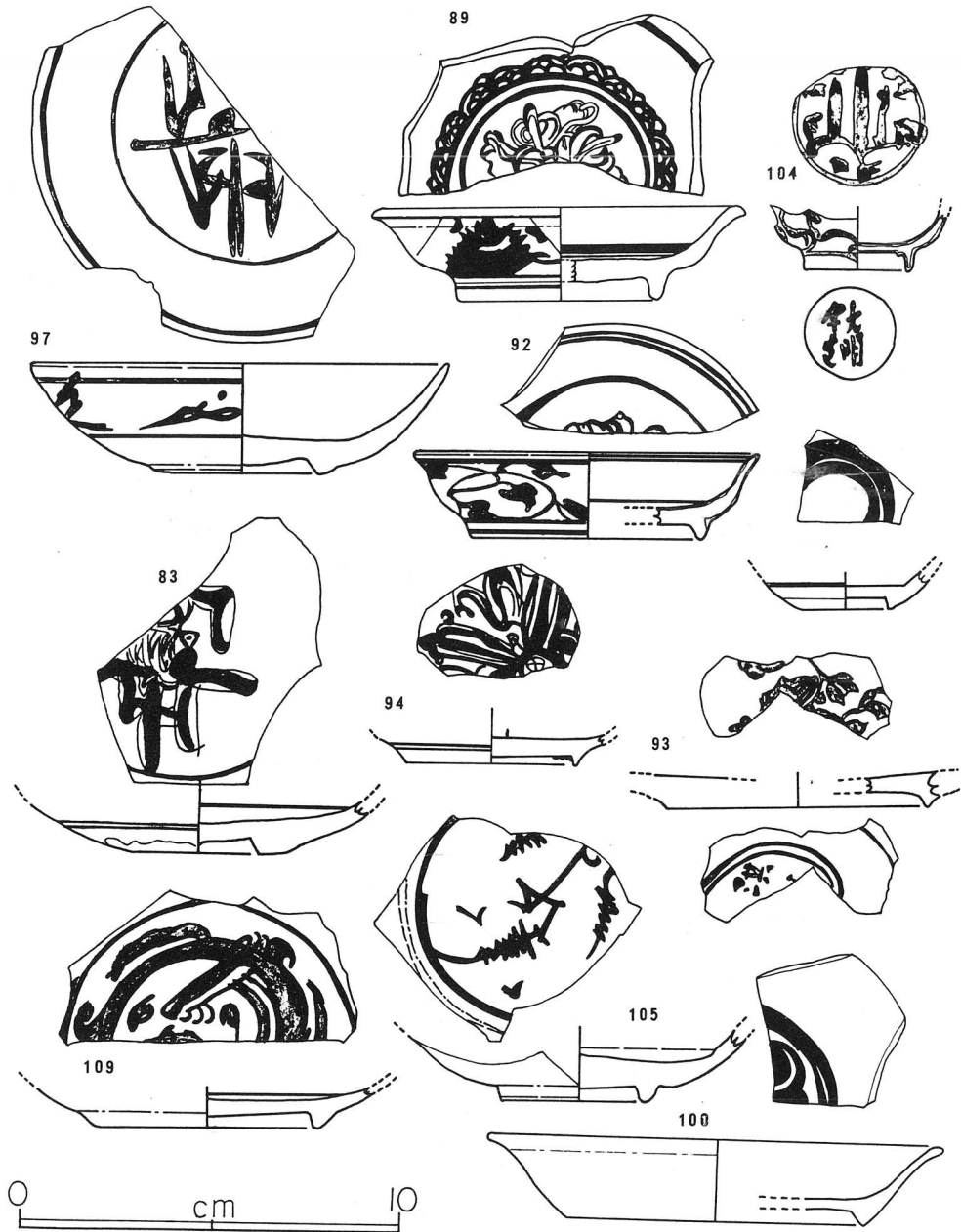




Fig.73 染付実測図(2)



PL.44 染付(3)赤絵

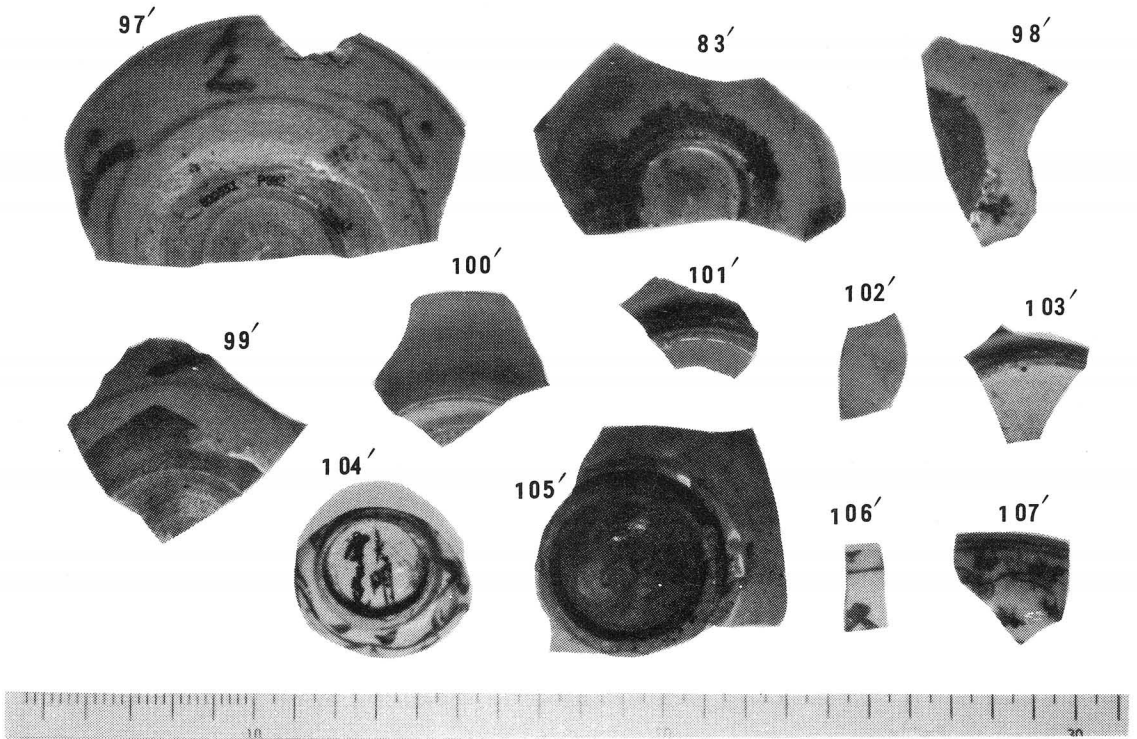
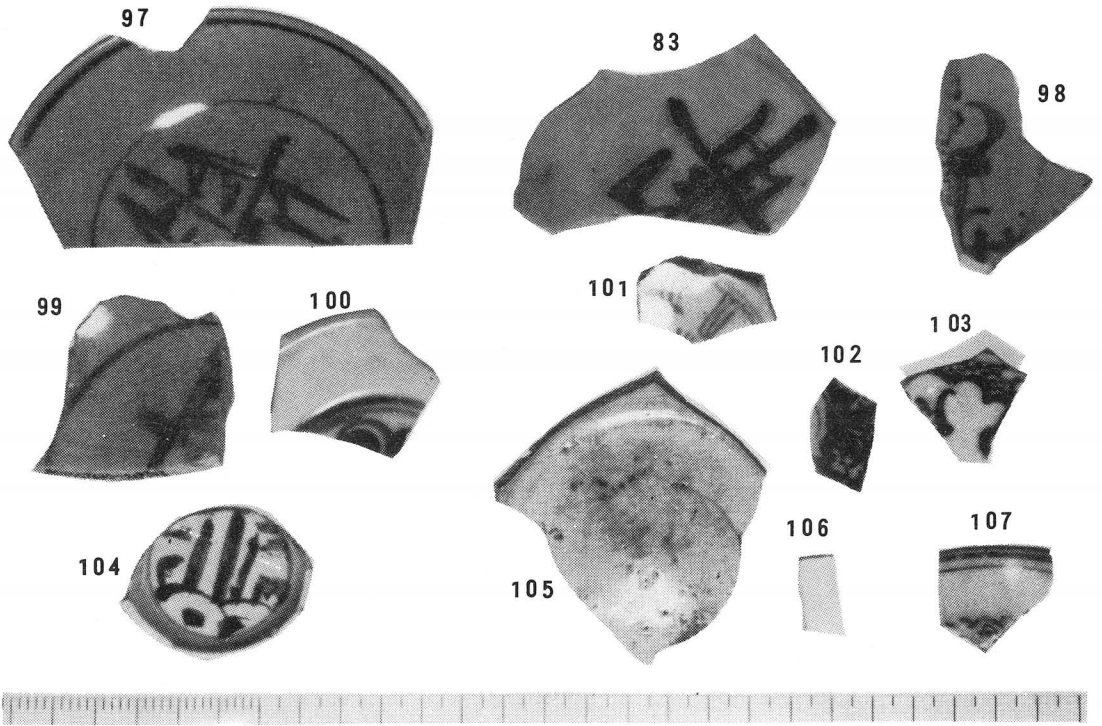
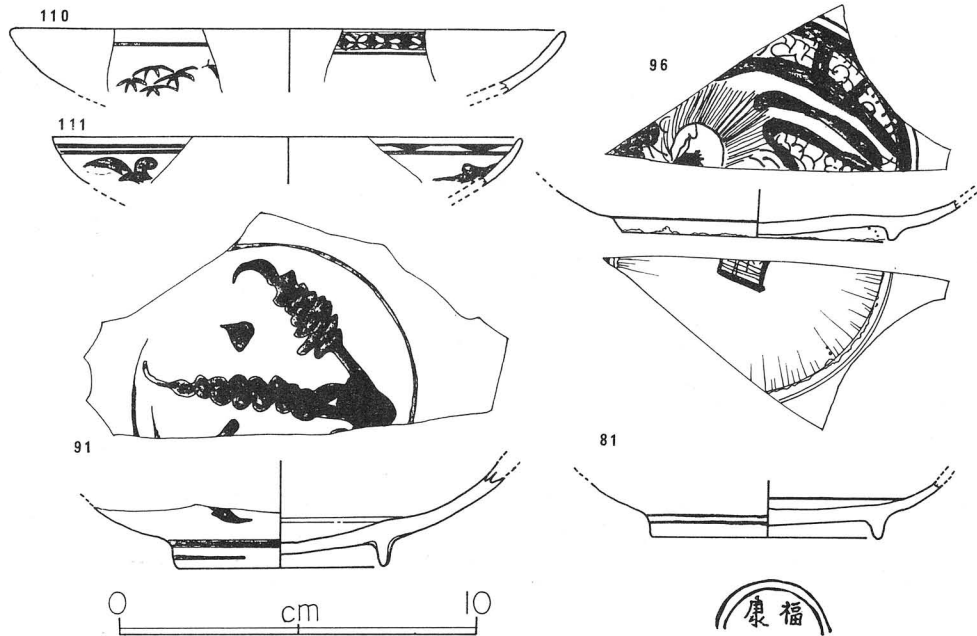


Fig.74 染付美濃図(3)



5. 美濃・瀬戸 ( PL.45、PL.46、Fig.75、Ch.64 )

美濃・瀬戸の陶器は、灰釉系と鉄釉系の二つに大別でき、灰釉小皿・天目碗をみる限り美濃大窯期の製品が最も多い。総出土数は相方合計して235片、内訳は美濃灰釉系176片、天目碗32片、鉄釉系24片、瀬戸灰釉系3片である。

(j) 灰釉陶器

灰釉陶器の器形としては小皿・中皿・大皿・壺・碗などがあり、中皿とした口径10cm内外のものが圧倒的に多い。

〔小皿〕

底径3cmほどの破片が3点出土している。見込みに若干印花文の痕跡を残すが詳細不明。

〔中皿〕

I類 口縁が外反せず真直ぐ立ち上がるもの。

I a類 釉調が黄緑色でガラス質の光沢を有するもの。(114・117)

I b類 釉調が黄白色気味で光沢が鈍いもの。内面見込みは釉のふきとりによって素地が露呈するものが多い。(116)

II類 口縁が端反りするもの。

II a類 釉調が深緑色のもの。

Ⅱ b 類 釉調が淡黄緑色で、見込みに印花文を施すものが多い。(112・113・115・118・119)

Ⅲ 類 口縁部内面が段状を呈するもの。折縁。

Ⅲ a 類 釉調が黄味の強い黄緑色を呈するもの。(120)

Ⅲ b 類 釉調が白濁色で不透明なもの。(図示できず。)

#### 〔大皿〕

器形・釉調とも中皿Ⅲ a 類に類似している。底部は明瞭な高台でなく若干削込んだだけの成形である。(122・125)

#### 〔その他の皿〕

この他の皿としては、釉が緑灰色で体部下半から底部にかけて施釉されていないもの(134)、釉調が黄白色でいわゆる黄瀬戸に近似した特徴を有するもの(130)、志野皿(136)などがある。

#### 〔壺〕

一般に、二次焼成を受け釉が剥落しているものが多く、口縁形態のわかるもの(133)、胴部だけのもの(128・132)、頸部だけのもの(123)があり胎土は暗灰色で前述皿類とは相違がみられる。瀬戸窯のものであろうか。

#### 〔瓶子〕

135は、瓶子あるいは壺の底とみられるもので、二次焼成のため釉が剥落しており十分に釉調を確かめることはできない。胎土は緻密な灰色で、底は回転糸切りによる切り放し痕が明瞭に残っている。

#### 〔碗〕

淡黄緑色の釉調で、外面口縁部に櫛目状の彫り線を縦位に施している。(121)おそらく底部は(124)であろうと考えられる。

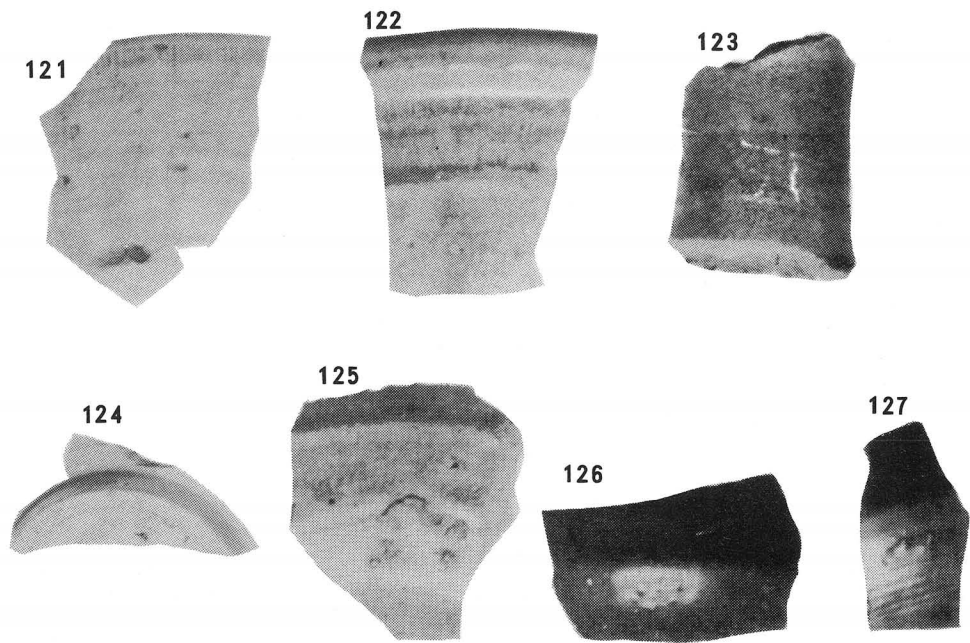
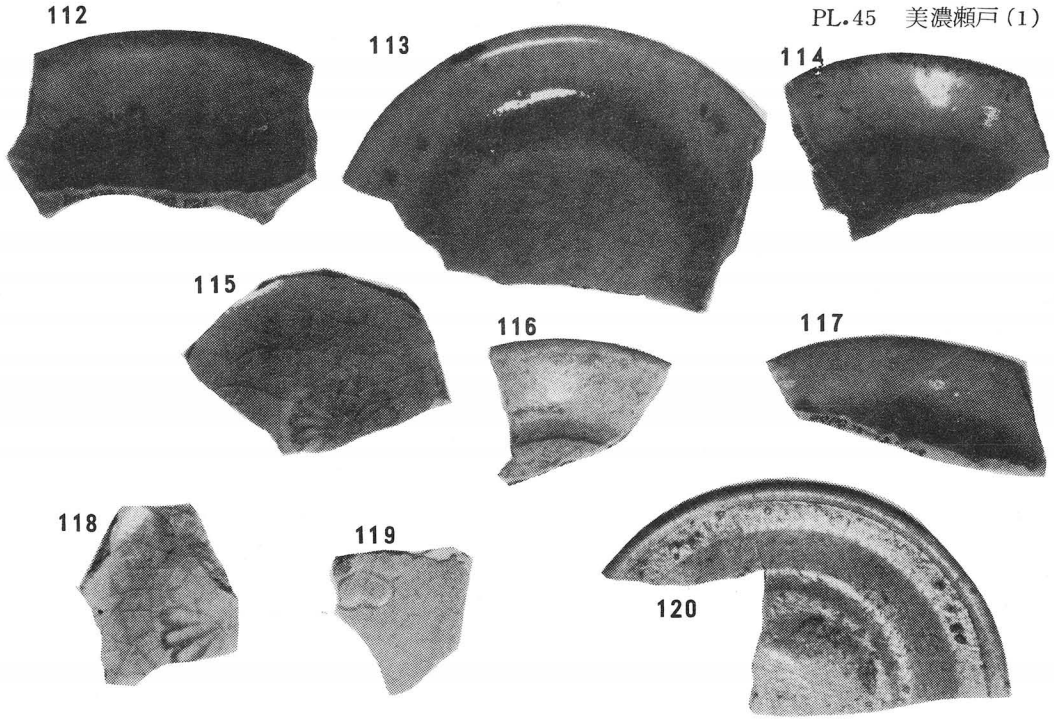
#### (ii) 鉄釉陶器

〔天目碗〕(PL.47、Fig.76、Ch.65)

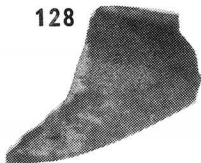
口縁形態は、体部上半から一段のくびれをもって外反するものがほとんどで、その外反度が顕著なもの(137・144など)と緩やかなもの(139など)があり、それらは釉調・他の特徴での相違はみられない。釉調としては黒色気味のものや褐色に近いものに大別され、褐色に近いものは釉の流れによって斑らになったものが多い。施釉はいずれも体部中位で止まり、底部にかけて鉄分を附着したように赤褐色を呈するもの(144など)が多いという特徴がある。もっとも、単に素地を露呈するもの(141など)もある。

#### 〔皿など〕

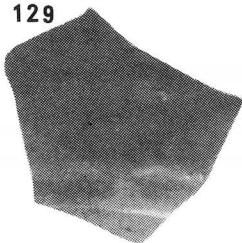
2片の出土で、「浪岡城跡Ⅲ」P 100 No.116・119と類似したものである。釉調は褐色に近



128



129



130



131



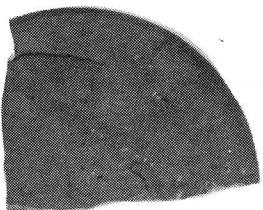
132



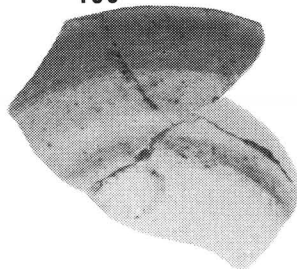
133



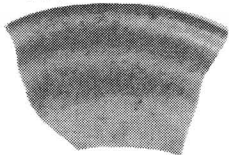
135



136



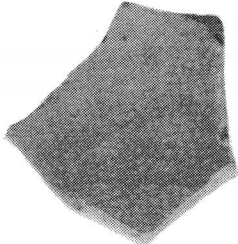
134



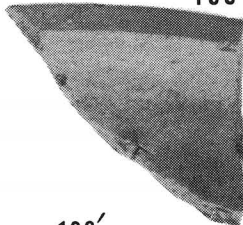
128'



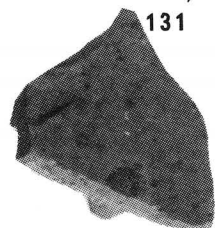
129'



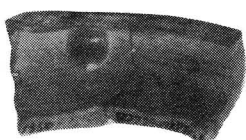
130'



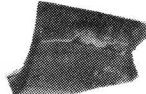
131'



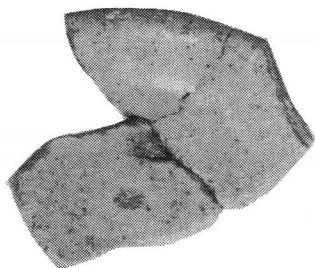
132'



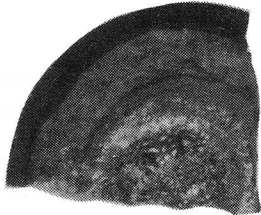
133'



136'



135'



134'

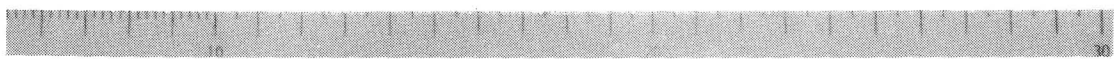
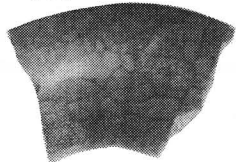
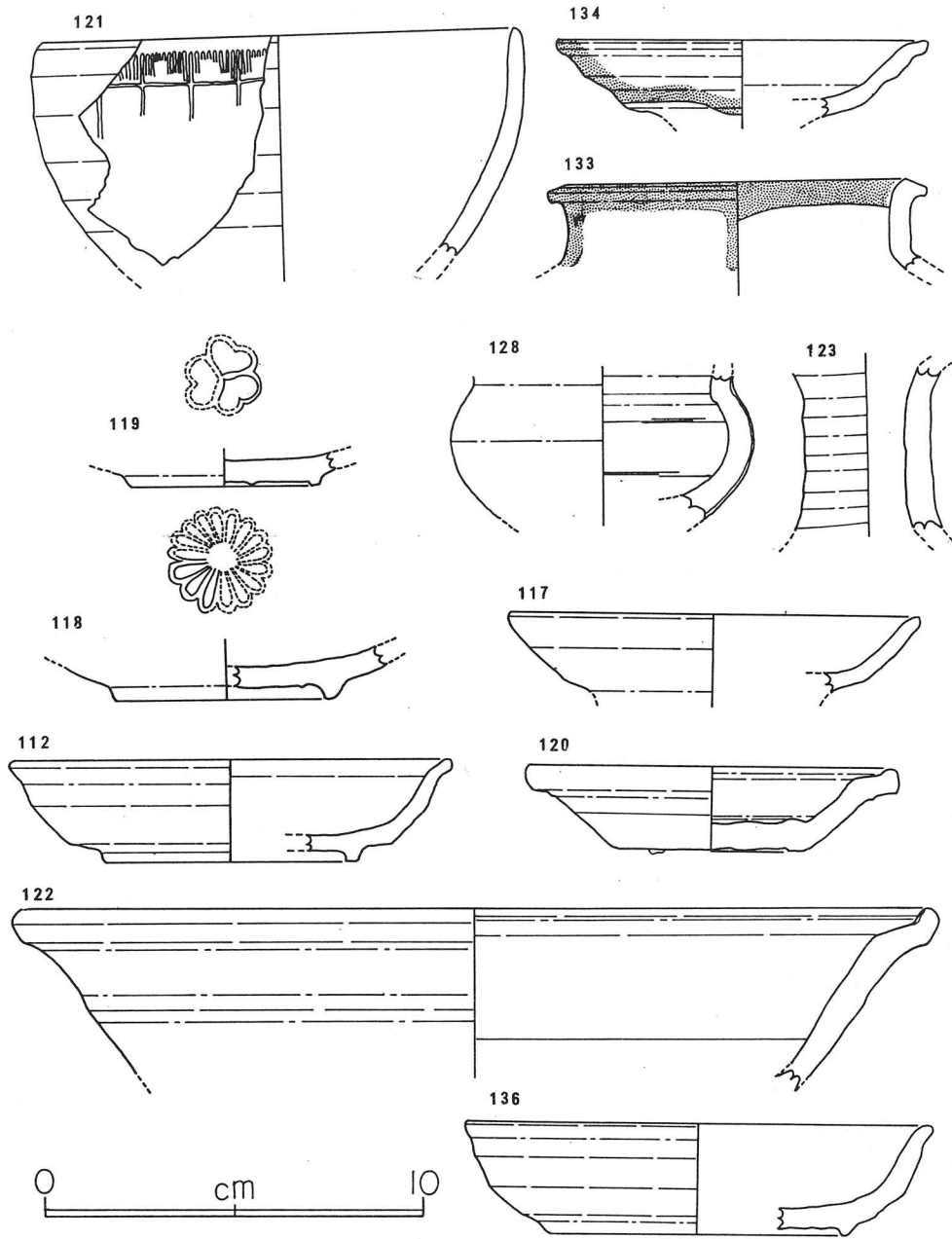


Fig.75 美濃・瀬戸実測図





く、胎土も黄白色気味のものである。少片のため図示できなかった。

〔壺〕

149 は、四耳壺と思われる肩部の破片で、耳部の付着痕が残っている。釉調は光沢の強い黒褐色を呈し、胎土も緻密な暗灰色を呈する。堀跡出土のものである。

〔その他〕

145 は、甕あるいは鉢の口縁部片と考えられるもので、口縁が肉厚な玉緑になっている。釉調は黒褐色、胎土は緻密な暗灰色で壺とした149 と類似した特徴を有する。

146 は、甕の胴部片と考えられ、釉調が黄緑色を呈する他、とくに特徴はない。

以上、瀬戸・美濃窯出土のものについてみたが、個体数が最多のものは灰釉中皿Ⅱb類であり、約50%を占めると考えられる。また、灰釉陶器の中(皿・壺)でも、施釉が全面にゆきわたらず、口縁から体部にかけて施されているものは、素地が暗灰色で緻密なものが多いのに対し、全面施釉の一群は黄白色・黄灰色の軟質な素地を示すものが多いという対照がみられる。前者は瀬戸系、後者は美濃系と考えられるが、遺構等の出土状態による差異は現在のところみられない。

## 6. 唐津(PL.48、Fig.76、Ch.66)

出土総数は27片である。器形には、皿・大皿・碗がみられ、釉調によって若干の分類ができる。唐津は、井戸跡覆土や遺構上層面での出土が多い。

〔皿〕

口径は10cm強のものが多く、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、施釉は体部下半で止まり、底部の成形が削り高台であるという同一の特徴を有する。

Ⅰ類 釉調が暗い緑色を呈し、ガラス質で光沢が顕著なもの。(156・158・164)

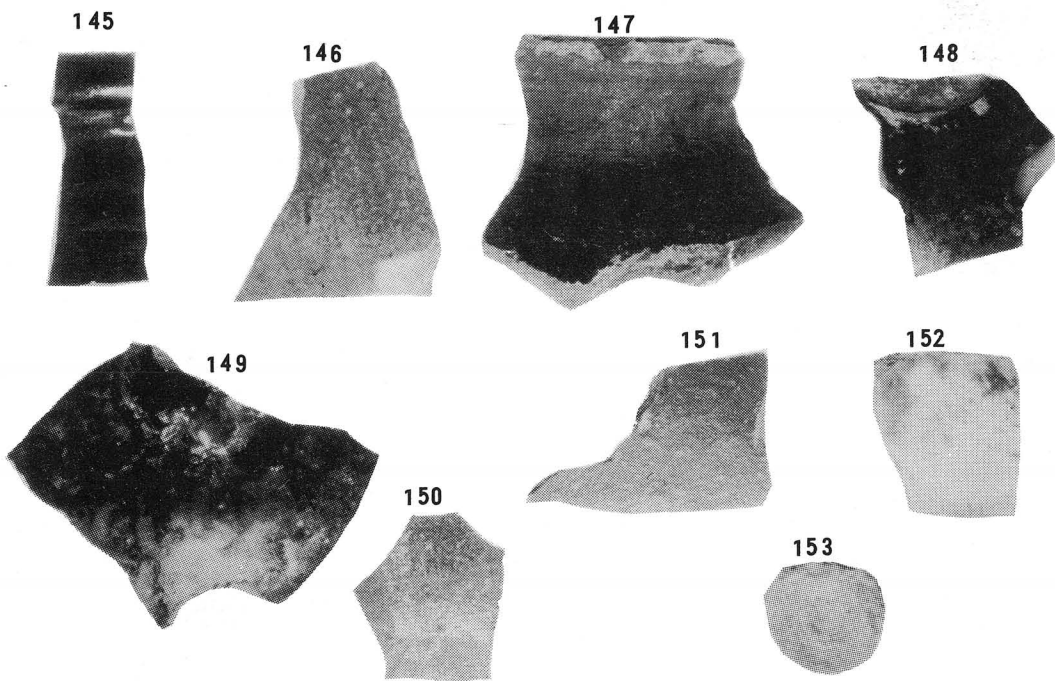
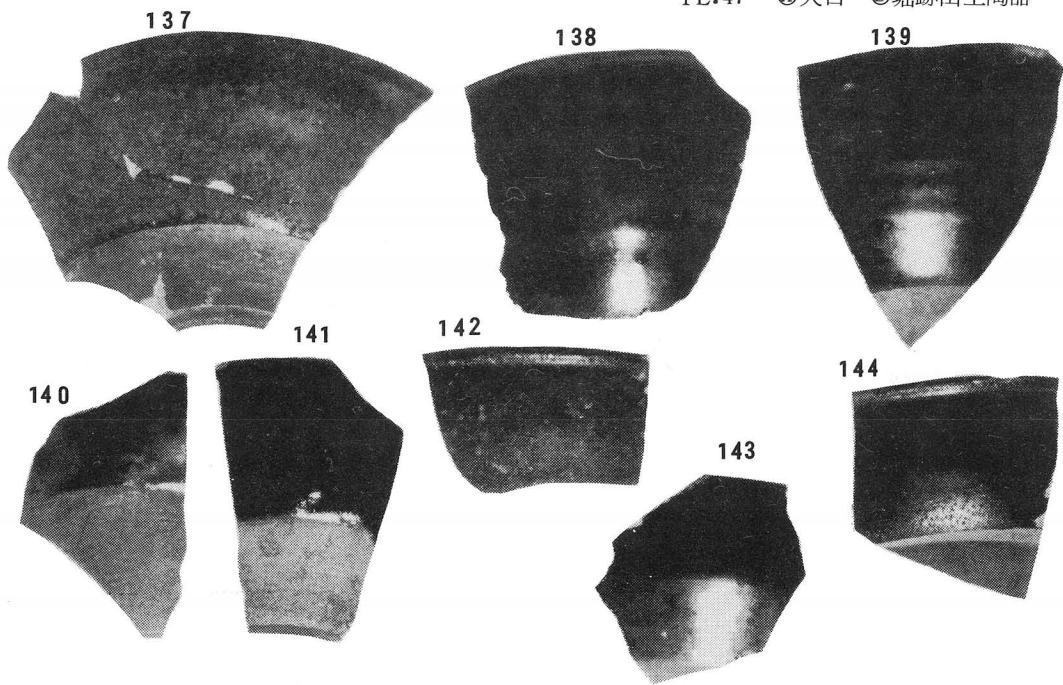
Ⅱ類 釉調が灰色の強い灰緑色を呈し、光沢が鈍く釉上に凹がみられるもの。(157・159  
・161・162・163)

〔大皿〕(160)

釉調は皿Ⅱ類と同様で、外面に白釉による文様らしいものがみられる。

〔碗〕(165)

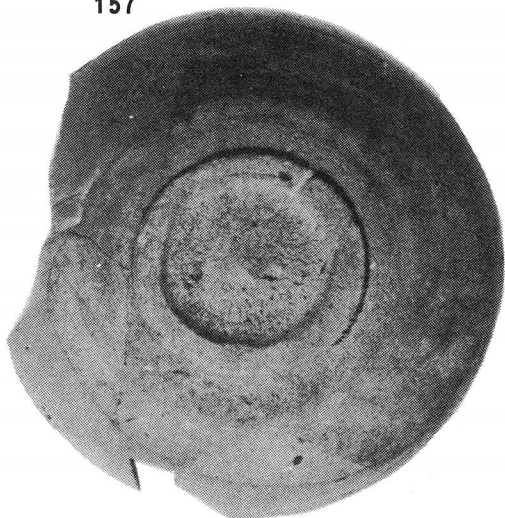
釉調は深い緑色を呈し、胎土は暗灰色で緻密感がある。底部は天目碗でみられるような鉄分の付着によって赤褐色を呈し、高台からの立ち上がりも丸味を有したものとなっている。



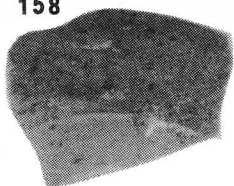
156



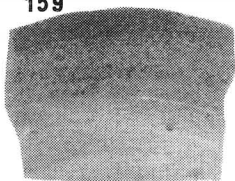
157



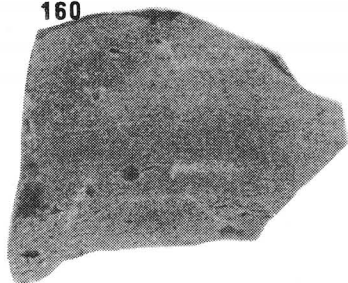
158



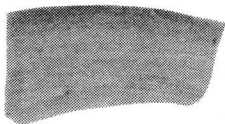
159



160



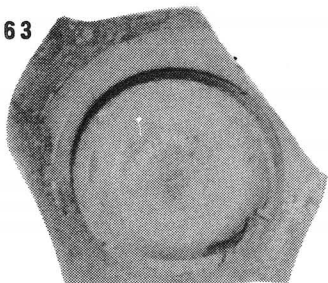
161



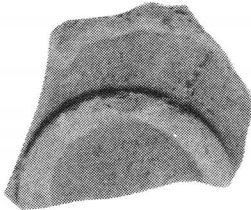
162



163



164



165

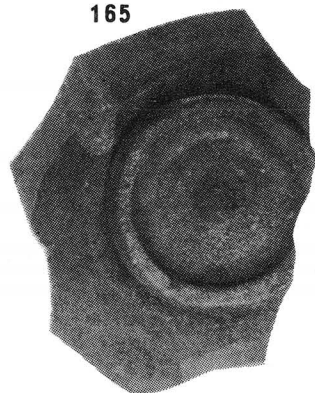
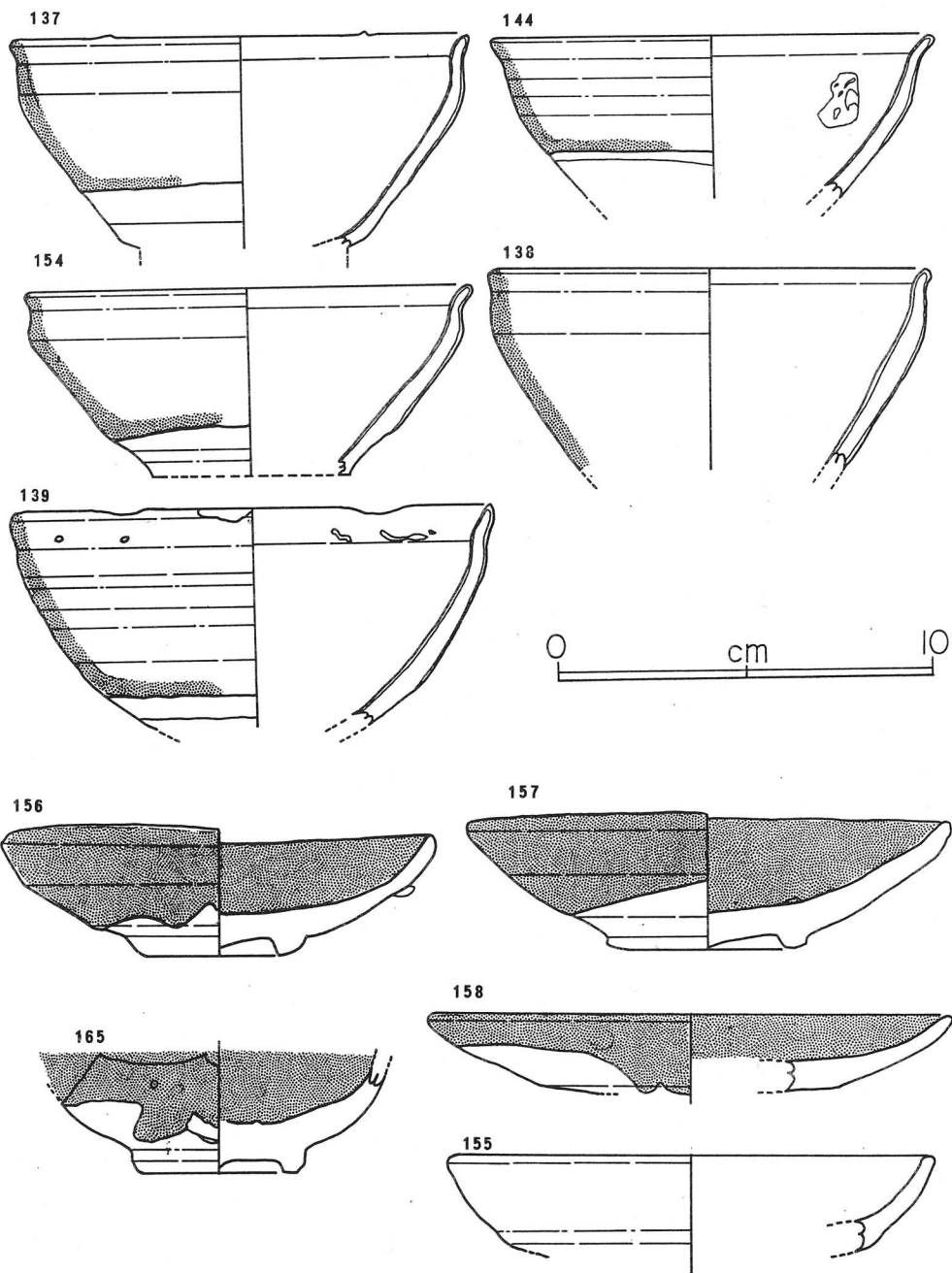


Fig.76 天目、唐津実測図



## 7. その他の施釉陶磁器

今回出土した中で、施釉陶磁器として認められるものは、前述の青磁・白磁・染付・赤絵（以上舶載品）、瀬戸・美濃・唐津（以上国産品）の他に産地不詳あるいは名称不詳のものが若干存在する。本報告では、城館期の遺物を中心に記述しているため、年代的に新しいもの（近世末・近代・現代）は除外しているが、あるいはそれらの中に城館期のものが混じっていることも考えられる。

伊万里系の磁器（皿など）は19世紀後半のものが多いこと、近代・現代と推定されるものの中には地元窯あるいは近隣の地方窯で生産されたらしいものもあること、などを教示されているが、紙数の関係で紹介できない状況である。いずれも、浪岡落城以後の居住者・空間活用を知る上で重要な資料と考えられる。

陶磁器の中で越前系の甕・播鉢・珠洲系の甕・播鉢については、明確に産地同定ができかねるので、若干の記述にとどめたい。

越前系の器種としては甕・播鉢が存在し、播鉢は別項で詳述するので割愛し、甕について述べると、PL.47 No.147・151などが越前系の甕と考えられ、胎土は暗灰色気味で釉調は赤褐色を呈するものである。この他越前系の甕とみられるものは、25片ほど出土しているが、少片が多いため図示するにいたらなかった。

### 〔陶磁器余談〕

今回出土している陶磁器の出土比率をみた場合（個体数ではなく破片総数からの比率）、舶載品に関しては、青磁48%、白磁21%、染付31%、赤絵0.3%となり、青磁が最も多い。国産品の中では美濃・瀬戸（天目・鉄釉も含む）系が、碗・皿という器種だけでみた場合90%近くを占めて、圧倒的数を示す。しかし、舶載品との比率でみると、碗・皿の器種は舶載品が70%を占め、国産品は約30%に過ぎない。播鉢や甕などを除いた、食膳具の中で舶載品の占める割合が高いことは日本海側の立地のみならず、城館居住者の嗜好的な意味も大きいのではないかと考えられるのである。

ちなみに、陶磁器類と一括した中で溶解物付着土器・かわらけと報告したものを除いた総数における個々の比率は次のようになる。青磁24.81%、白磁10.68%、染付16.15%、赤絵0.2%、美濃・瀬戸灰釉系15.05%、天目2.69%、美濃・瀬戸鉄釉系2.02%、唐津2.27%、越前（甕だけ）2.10%、瓦器13.71%、播鉢（越前系・珠洲系・備前系・その他を含む）9.34%、志野0.34%、珠洲系（甕だけ）0.67%となり、総比率でも舶載品の多さが目立っている。

## 8. 瓦器 ( PL.49、Fig.77、Ch.67 )

瓦器あるいは瓦質土器と呼称すべき土器の一群で、器形としては角形・丸形の火鉢・手焙り、行火、壺形のものがあり、破片が多いため全形を知り得る資料は少ない。総数で163片の出土があった。以下特徴的なものを記述してゆく。

### 〔火鉢・手焙り〕

I 類 器形が円形を呈するもの。

I a 類 外面を黒色研磨し、外面口縁部や胴部にスタンプ文を有するもの。( 179 )

179 は、口径49cm、高さ12.2cmを計る大きな火鉢で口縁外面に逆S字状の巴文を押し、外面の研磨状態も良好な製品である。

I b 類 外面は黒色研磨処理しているが無文のもの。( 181 )

I c 類 外面は黒色処理されず、黄褐色に近い色調を呈して各種のスタンプ文を施すもの。  
( 169・177・178・180 ) 178 は脚の部分である。

I d 類 外面は黄褐色に近い色調を呈すが、無文のもの。( 174・183 )

II 類 器形が四角あるいはそれ以上の面を有するもの。

本年度は出土例が少なく、184の脚の部分などがある。

### 〔行火〕

167・182 はいずれも外面が黒色研磨処理され、182については「浪岡城Ⅱ」P 102 No. 131で示した個体と接合したものである。

### 〔壺形〕

I 類 外面を黒色研磨処理しているもの。( 170 )

II 類 外面が黄褐色気味の色調のもの。

II a 類 研磨処理を施し、雷文・巴文・十字文などを有するもの。( 176・187 )

II b 類 研磨処理はなされず、巴文・櫛描波状文を有するもの。( 171 )

壺形のもとは一般に小型のものが多く、170・176・187などはどのような用途を持つのか不明である。また、171は、主にF55区を中心に出土しているが、別遺構出土のものや、距離をおいた地点のものでも接合しており、出土地域における土層の攪乱を裏付ける一因となっている。

その他、脚の部分( 168 )、残片ではあるがスタンプ文のみられるもの( 185・186 )、瓦器を多量に出土した遺構( S T 71・S T 81 )の項目で示したものなどがある。

瓦器については、生産地を畿内地方とする説が一般的である。今後は、成形・器形・文様等の精査から、他の陶磁器とともに搬入問題を考えてゆかなければならない。

PL.49 瓦器他

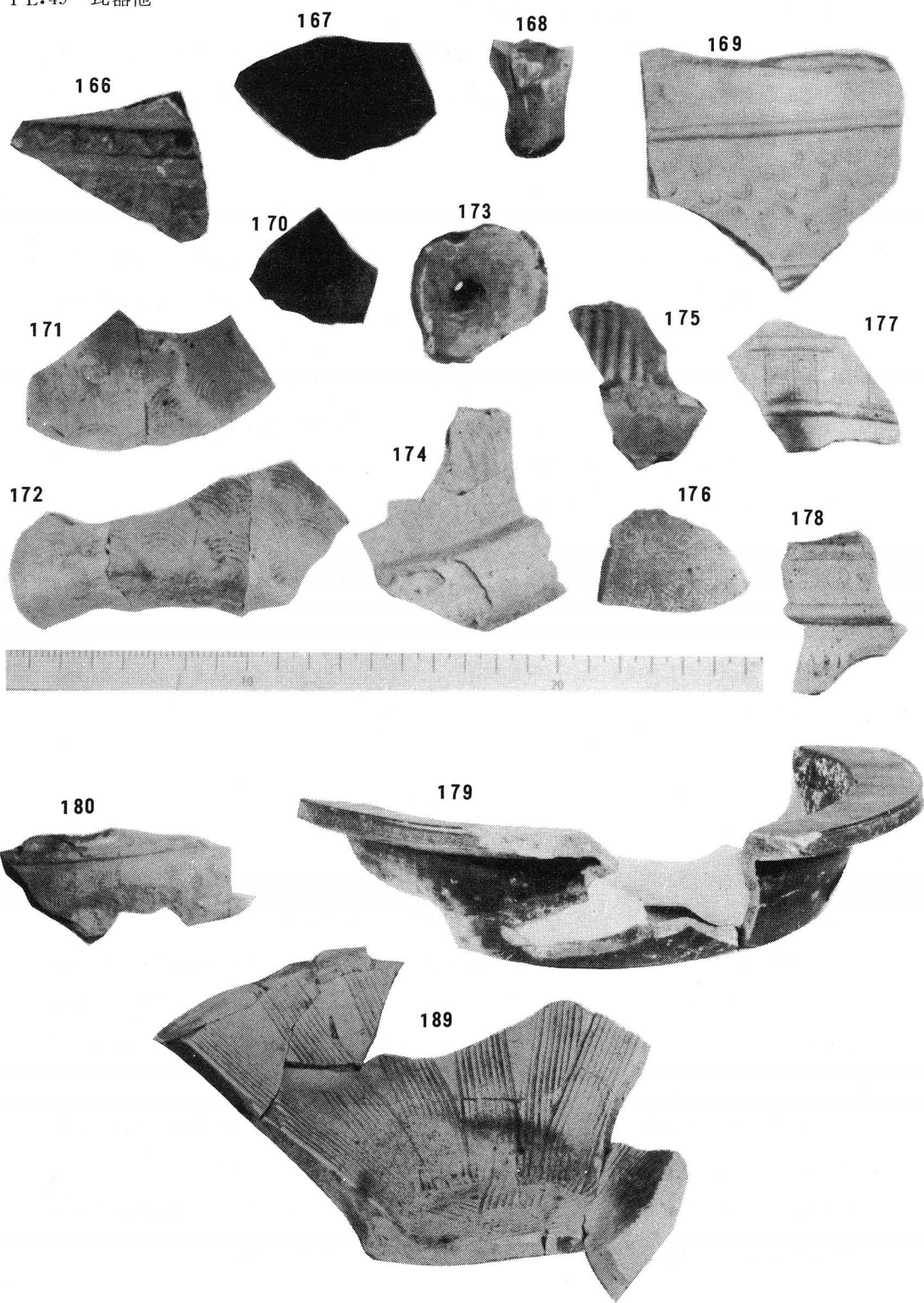
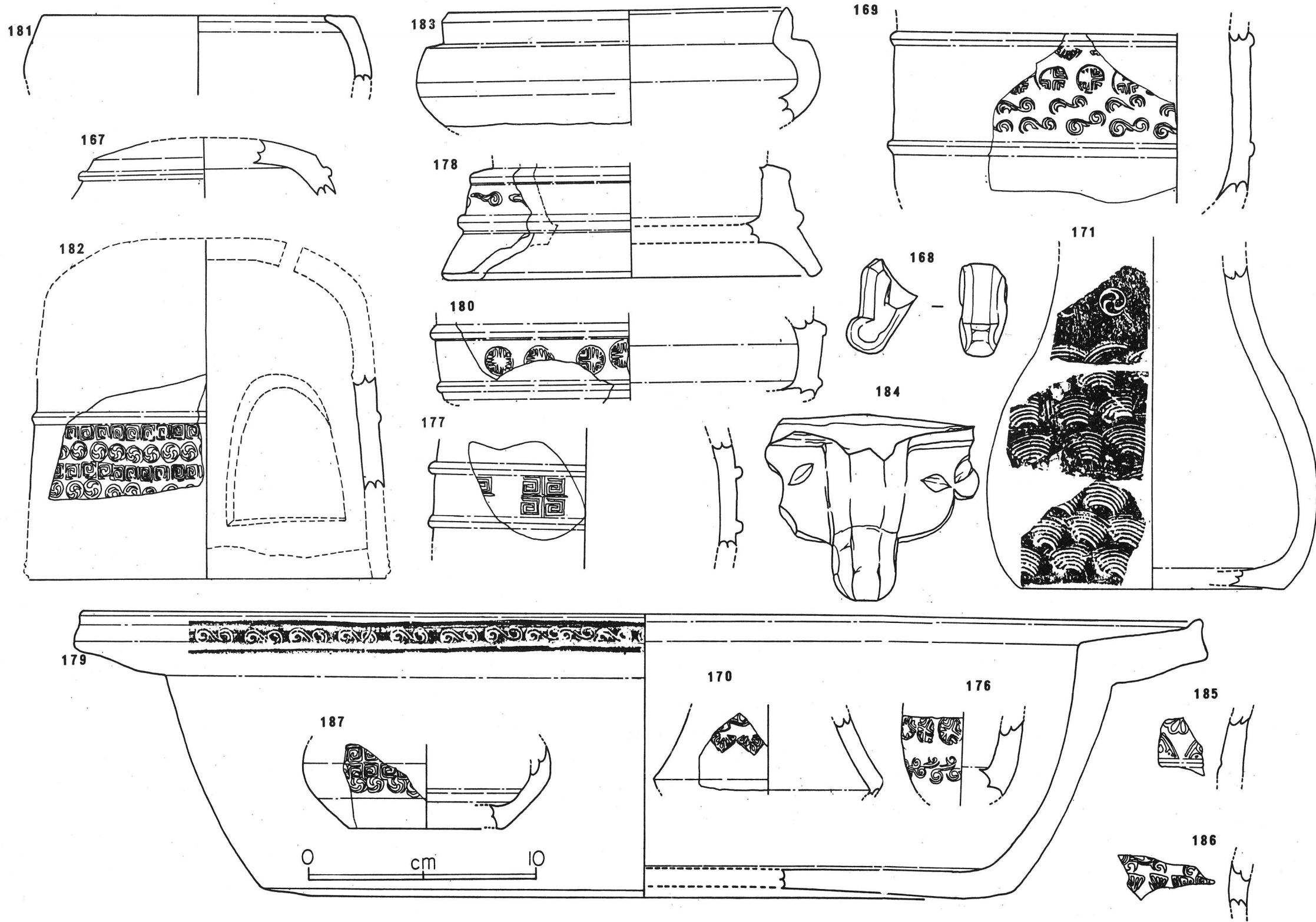




Fig.77 瓦器实测图



## 9. 播鉢 ( PL.50、PL.51、Fig.78、Ch.68 )

播鉢は、総数で111片の出土があった。成形・焼成・胎土等の特徴から大別すれば、①珠洲系、②越前系、③備前系、④その他というように四つに分類できる。しかし、生産地を同定するまでには至っていないため、今回は任意な分類に従って記述しておく。

I類 口縁部内面に波状櫛目文を有し、胎土は灰色で白っぽい砂が混入しているもの。〔珠洲系〕( 199・201・202 ) 櫛目は、199が11条、201が9条のようで、どちらも粗い小砂を含んでいるため、内外面に凹部分がみられる。201は外面に粘土の貼り付けがある。本類の播鉢と同様の胎土・色調を有する甕( 203・204 )の破片もある。

II類 口縁下内面に一条の凹あるいは段状の部分をもつもの。

II a類 胎土は黄灰色・赤黄色を呈し、全体の色調も赤味の強い黄白色を呈するもの。

( 189・192～195・210～213 ) 越前系と考えられる。底部立ち上がり部分は一般に整形が雑で、凹凸した部分が多く、胴部は横位に刷毛状のもので調整した痕跡が残っている。

II b類 胎土は赤灰色で白っぽい砂が含まれ、色調は全体に明灰色を呈する。( 207～209 )

II a類と比較すると硬質感が強いだけで、底部整形・胴部調整も類似している。

III類 口縁が緩やかに外反する立ち上がりをもつもの。

III a類 胎土は黄褐色の部分と暗灰色の部分があり、同一個体でも焼成温度による違いがみられる特徴がある。全体の色調は、赤褐色、灰色、黒色というようにバラエティーに富んでいる。また、卸目は口縁から底部にかけてややカーブを描きながら施されるという特徴を有する。( 194・195・197 )

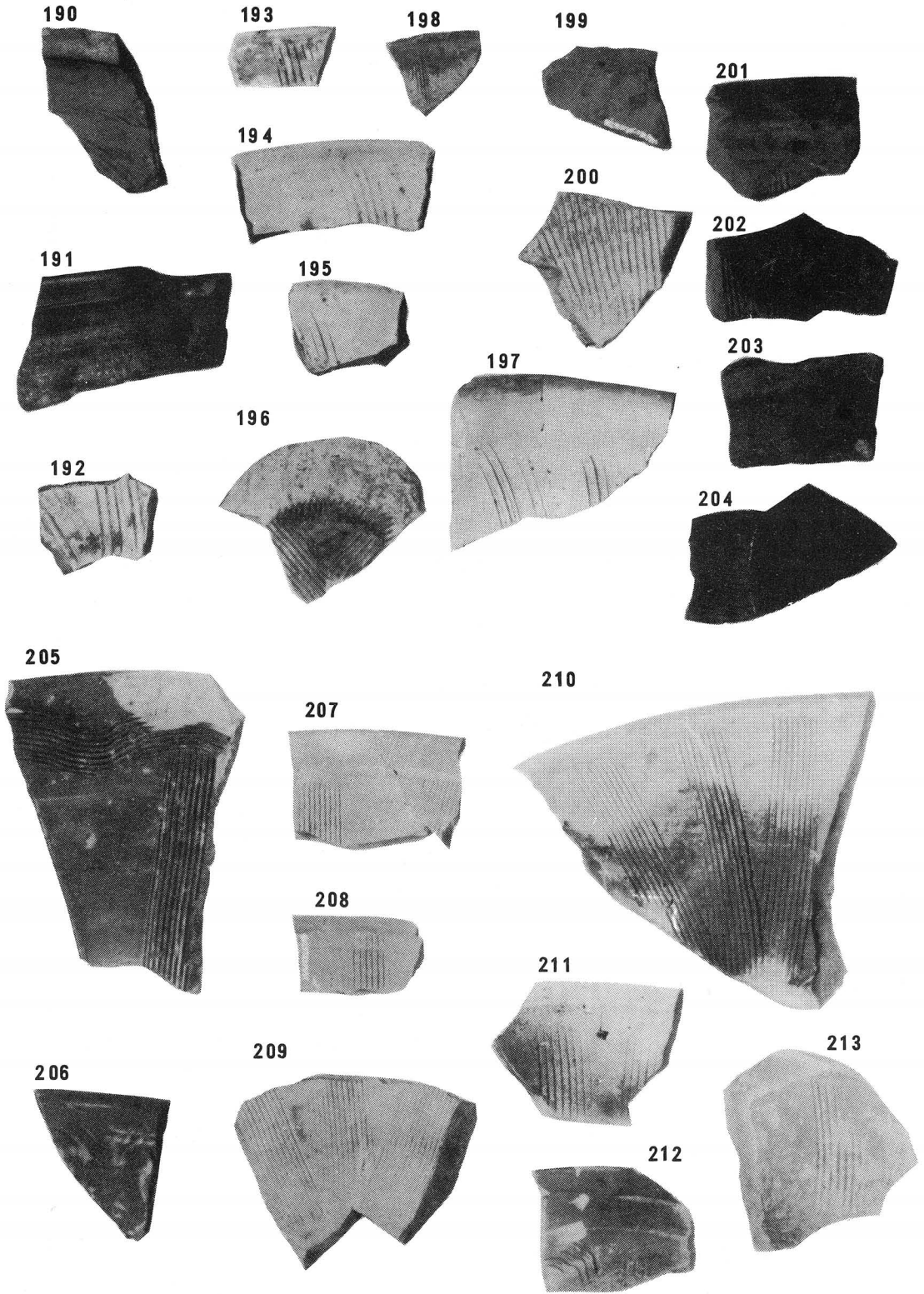
III b類 胎土は灰色、黒色、および赤褐色のものがあり、全体の色調は炭素をしみこませたように黒色を呈するものが多い。瓦器の黒色土器の製作に類似している。卸目の櫛目は縦位に施した後、口縁下部に波状を呈して廻らすようで、他にみられない特徴である。( 205・206 )

IV類 口縁は緩やかに外反し、胎土は暗灰色を呈すが表裏に薄い白色層がみられる。全体の色調は黒色で、須恵器質の感触がある。卸目の櫛目が先の丸い状態で、広く施されている。( 216・217・218 ) 外面の調整は雑で凹凸した状態である。

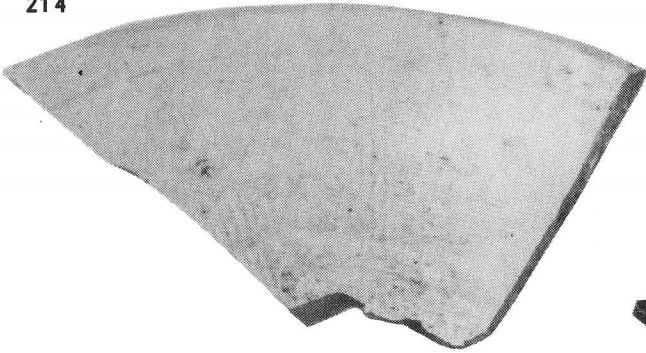
V類 口縁が内湾気味に立ち上がり、胎土・色調は暗灰色を呈す。硬質感が強く、卸目は細く密である。( 198 )

VI類 口縁は真直ぐ立ち上がり、平縁である。片口部は小さく、変形度は少ない。胎土は黄褐色のものと淡灰色のものがあり、色調は同色である。調整は刷毛状のもので丁寧におこなわれているにもかかわらず、胎土が軟質のためか表裏に剥離痕が多く、214に

PL.50 摺鉢(1)

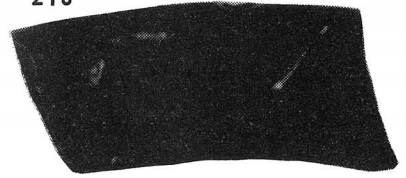


214



PL.51 播鉢(2)他

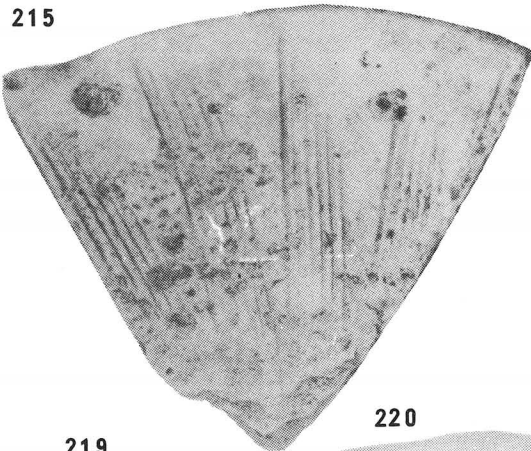
216



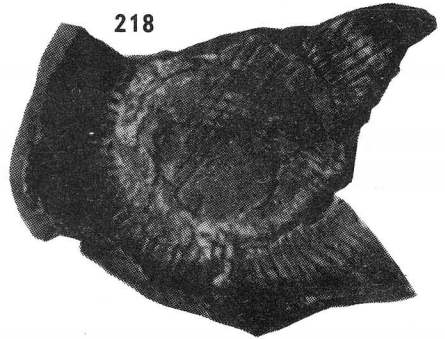
217



215



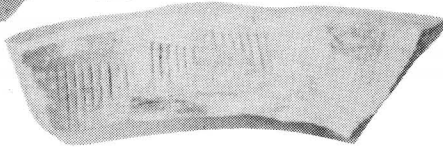
218



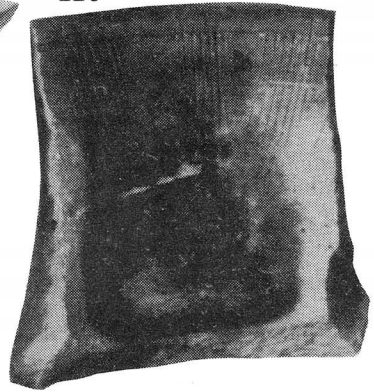
219



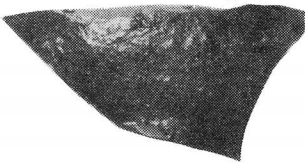
220



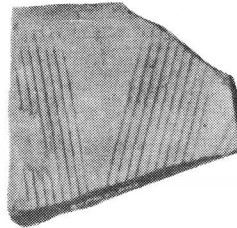
223



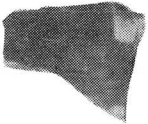
221



222



224



225



229



230



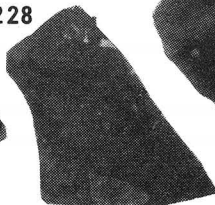
226



227



228



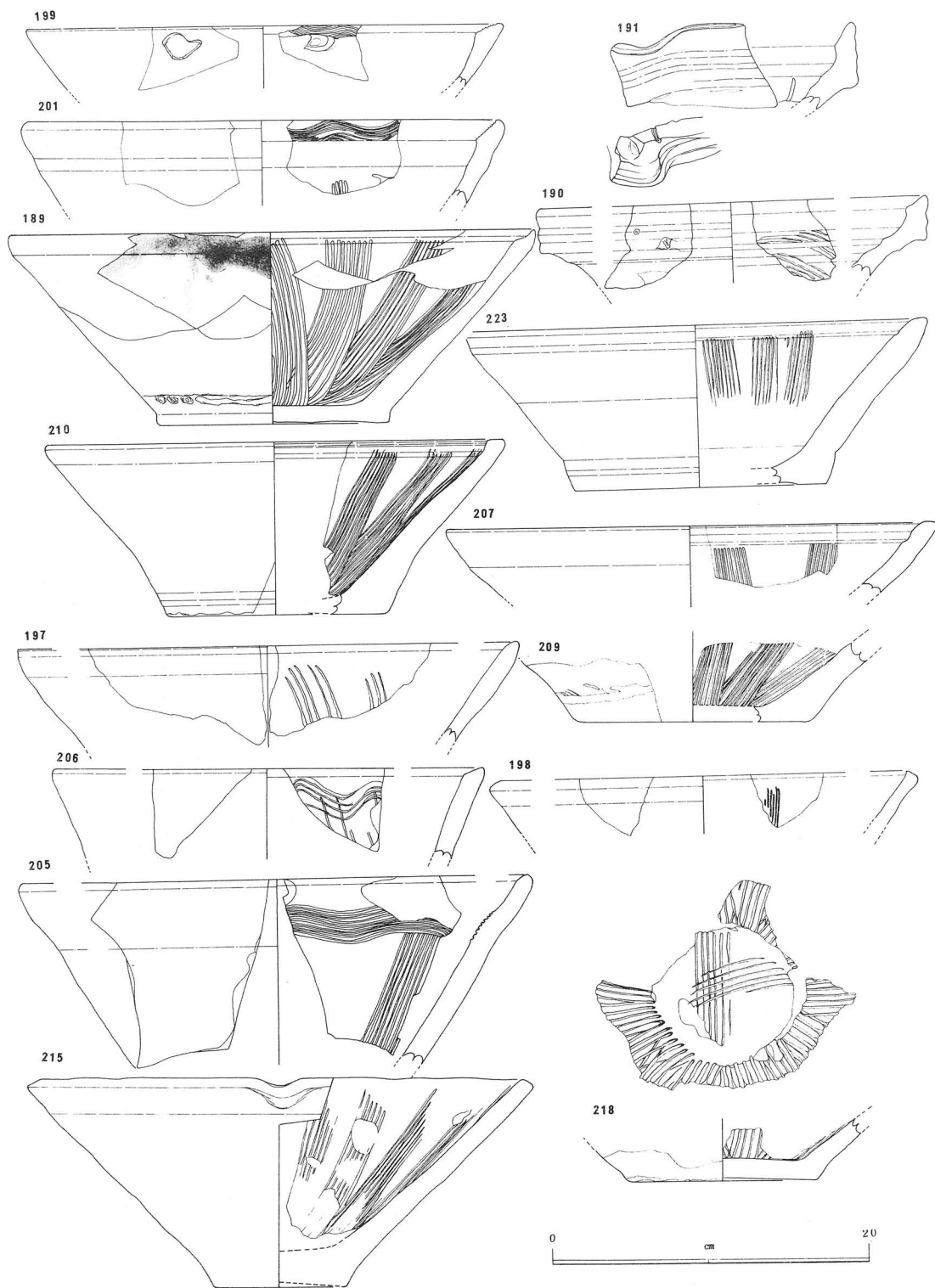
231



232



Fig.78 挿鉢実測図



関しては、卸目が消えかかっている。( 214・215 )

Ⅶ類 口縁形態はわからないが、全体に肉厚な形状で胎土が内面赤褐色、外面黄灰色の二重になっており、白色の砂が多量に含まれるもの。( 200 )

Ⅷ類 口縁部が上方に強く立ち上がり外面に2～3条の段を有する。胎土は暗灰色で少量の石英が混入し、色調は暗赤褐色を呈する。備前系。( 190・191 )

※本類の2点については倉敷考古館長間壁忠彦氏の御教示をいただいた。なお生産地については、北陸の可能性もあり早断できない状況である。

この他、出土した播鉢の中には、明らかに近代・現代に使用されたと考えられるものも含まれていたが今回は省略した。

以上の播鉢において、珠洲系(Ⅰ類)、越前系(Ⅱa類)、備前系(Ⅷ類)とした他に、越前系と推定されるものはⅡb類・Ⅲa類・Ⅵ類などがあり、Ⅲb類でみた櫛歯が横位に施される特徴などは珠洲系における口縁部櫛歯波状文と同義の様相を呈し、相互関連のみられる点を指摘することができる。

#### 10. 溶解物付着土器( PL.52、Fig.79、Ch.69 )

溶解物付着土器としたものは、破片も含めた出土総数が300点以上ある。用途は銅などを溶かした坩堝と考えて大異ないと考えられるが、その出土量の多さは城館内での生産遺構が検出されていない現状で、どのように把握したらよいのだろうか。形状は饅頭を逆さにした状態で、大きさも最小で口径が5cm以内のもの(237・238・250など)から最大で10cm近くのもの(234・257など)まであり、平均的には6～7cmのものが多い。

付着物には、緑青のある銅滓、赤褐色で光沢をはなつ銅の流動状態が冷却して固まったもの、漆状の固形物(233)などがあり、未使用のため付着物がみられないもの(239)との比較から使用前にはすでに素焼きの状態であることがわかる。

使用粘土には、粉や小石が多量に含まれ、軟質粗悪である。成形も手びねりであることから坩堝としての使用は1～2回限りと考えられ、そのため多量に製作したものかもしれない。

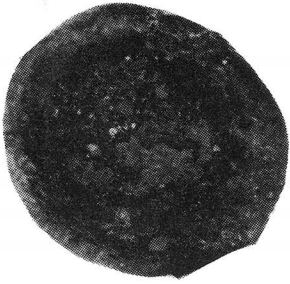
#### 11. 鋳型( PL.52、Fig.79、Ch.69 )

素材は溶解物付着土器とまったく同じで、当初は溶解物付着土器と一括報告していたものがあるが、詳細に整理した段階で鋳型であることが判明したものである。

もちろん、鋳型であることから製作後は破壊されるのが当然で、今回は製作中の形状が推定できるものに限って報告する。

PL.52 溶解物付着土器(埴塙)铸型

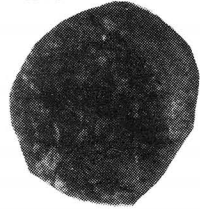
233



235



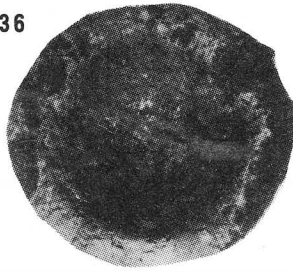
237



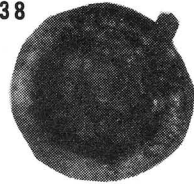
234



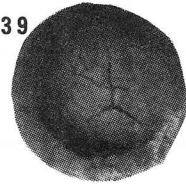
236



238



239



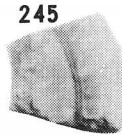
240



24



245



248



246



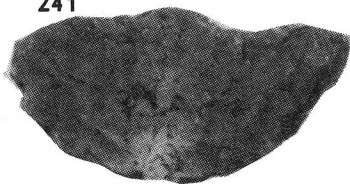
243



249



241



247



244

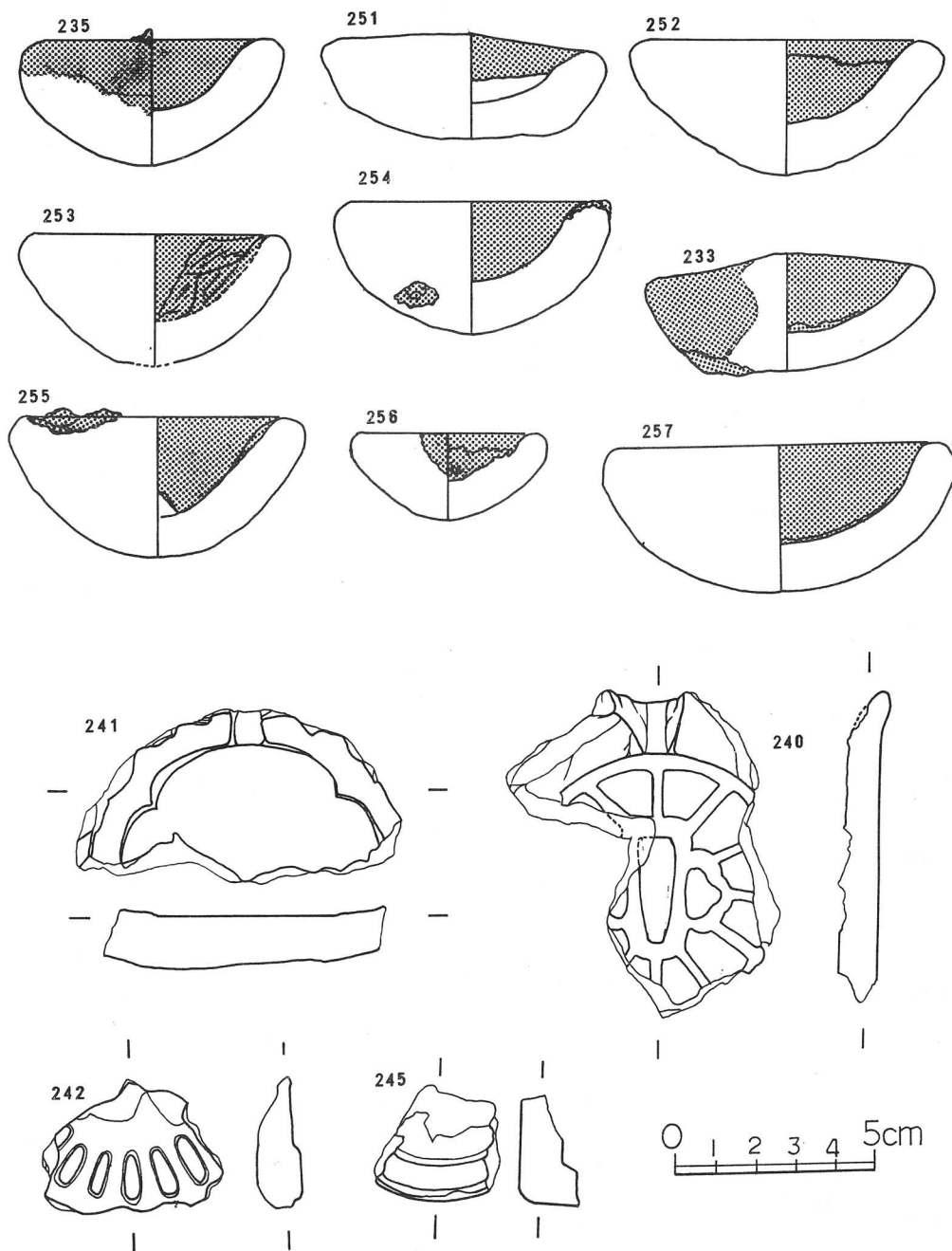


250





Fig.79 溶解物付着土器(埴塙) 鑄型実測図



〔鐸〕

いわゆる透かし鐸の鑄型が2点みられる。240・243がそれで、240は比較的良好な残存状態である。図面（Fig.79 No.240）上で復元すると、直径7cm余りの車透し鐸になると考えられ、弁櫃の部分も明瞭にわかる。表面観察では、鐸の本体にあたる部分が滑らかに平らになっている以外透かしの部分は素地を露呈して凹凸している。注ぎ口は刀の背の方向に付けられている。

241も木瓜形の鐸のものである。型の部分はわずか2～3mmのへこみしかなく、茎櫃の部分は明確でない。胎土には多量の粗が含まれ、表面に出ている部分もある。注ぎ口の部分もある。

〔加工品〕

どのような製品になるかは不明であるが、菊花状の凸が輪状にめぐるもの。（242）

〔その他〕

出土した中では円形の端の部分が多く（244～247、249・250）、口径はいずれも7～8cmぐらいと推定されるものばかりである。出土状態をみても、特色のある検出はなく、破壊された後の残片が各所に散逸したという状況である。

このような鑄型について、現在まで出土例の報告に知見していないため詳細不備な点がある。類例等があったら是非ご教示いただきたい。

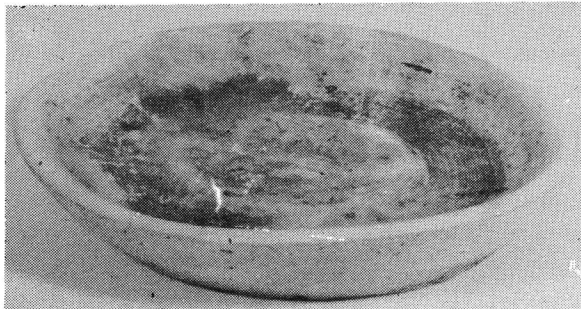
## 12. かわらけ（PL.53、Fig.80）

258はロクロ成形、指ナデ調整をおこない、底は回転糸切りによる切り離しのものである。内面にススの付着がみられる。灯明皿。

259も258と同一の特徴を有するが、ススの付着はみられない。

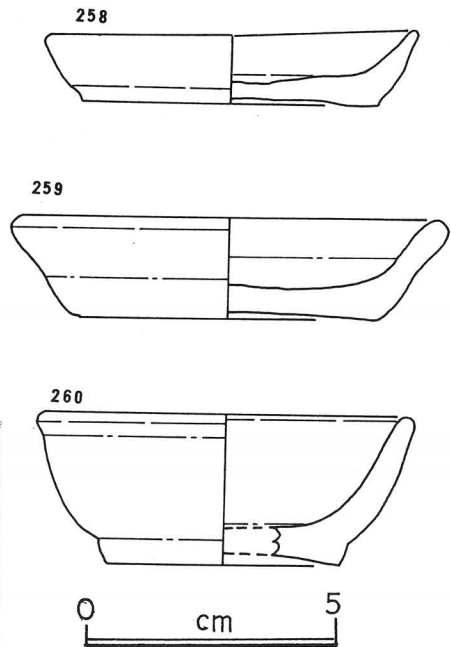
260は、底部立ち上がりが高台状を呈し、やや深みのある器形で、胎土は黒色で焼成粗悪。以上3点が中世のかわらけと考えられる。

PL.53 かわらけ



258

Fig.80 かわらけ実測図



258

259

260

0 cm 5

## B 鉄製品 ( Fig.81、Fig.82、Fig.83、Ch.70 )

鉄製品の出土総数は約1076点、その内の50%近くは釘(角)であり、錆化が進んだり破損したために用途不明なものは約300点以上もある。今回は、武具、生活具、建築具、その他という機能面から、特徴的なものを抽出して記述してゆく。

### [ 武具 ]

#### 1. 刀

**261** :平造の短刀で、刀渡り18cm、茎の長さ8cmでほぼ中央に目釘穴が存在する。懐剣的なものであろうか。

#### 2. 小柄・小刀

**262** :小刀と柄が残っている唯一の小柄である。柄は銅製であり文様等はみられない。小刀の長さ11.5cm、柄の長さ8.8cmを計り、残存状態は良好である。

**263** :錆化が進んでいるため、刃部と茎の境がはっきりしないけれども、茎の長さは7.5cmと推定される。茎尻が丸味を有する特徴がある。

**264** :刃部の幅が狭く、茎が広い。茎の断面は丸くなっているが錆化のためとも考えられる。

**265** :刃部の長さ9.2cm、茎の長さ約9cmを計り、刃幅が広い小刀である。

#### 3. 槍

槍はすでにS X31出土遺物の所で報告したものが1点あり ( Fig.55④)、それと同様の形態を呈するものが**266**である。

**266** :長さ23.1cm、先端部がやや扁平になってはいるが鋭く尖ってはいない。基部は角状の断面を呈すがしだいに細身になってゆく。槍以外の機能も推定される。

#### 4. 鉄鏃

**267-268** :根と茎の境が明瞭ではなく、根の先端が鑿状を呈している。Fig.55⑤で示したのも同種のものである。

**269** :根の先端は鑿状を呈するが、筥被の部分が四角な形状を示し、茎も角状を呈する。

**270** :根の先端がU字状に二股になり、茎部分は角状を呈する。

**271** :根は鱗尾形を呈し、茎は扁平な角状で欠損している。

#### 5. 打根

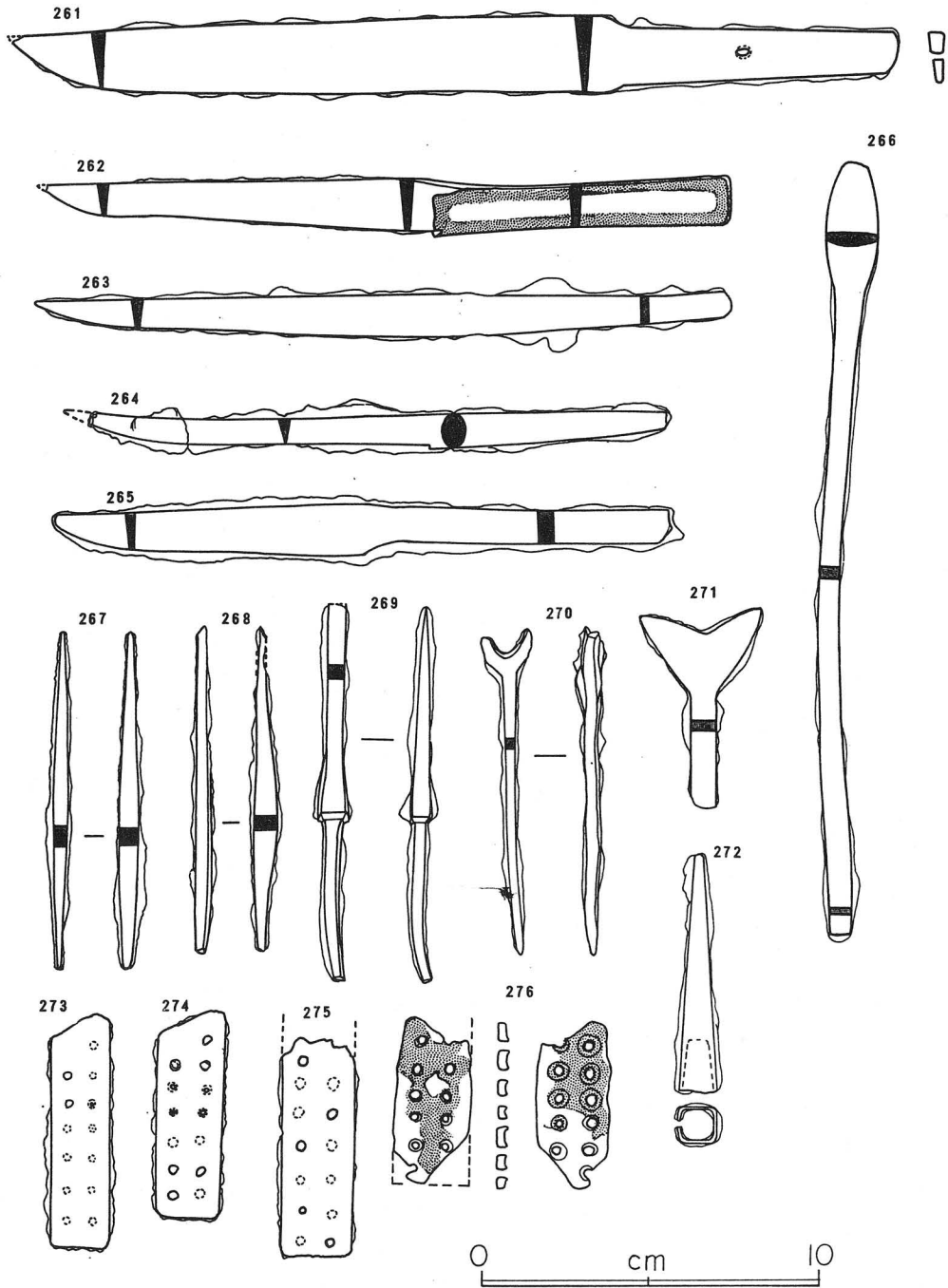
**272** :先端を尖らせ、木などを着装する部分が鉾状になったもので、手投げの鏃である。

#### 6. 小札

**273-274** :上端片方を斜めに欠いたもので、2列に穿たれた穴のうち長辺に7個、短辺に6個があるもの。

**275** :おそらく碁石頭の小札で、2列7個ずつと穴が穿たれていると思われる。

Fig. 81 鉄製品実測図(1) 武器類



276 : 表裏に黒漆が付着している小札である。

〔生活具〕

7. 鍋

鍋の一般的な形態は、277 で示した三足を有し、鉉を引っかけるための突起が口縁上端に付いているものである。しかし、図示できなかったが内耳の鍋も1例だけ出土していた。

277 : S X10床面出土のもので、口径25.0cm、高さ11.5cmを計り、銹化が進んでいたため復元図を作成した段階で破損してしまった。

8. 火箸

281・282 : 断面形が角を呈し、ねじりの部分が片方に長く存在するもの。両方欠損している。

283・284・285 : 断面形が丸を呈し、ねじりの部分が1～2cmの長さで中央に存在するもの。283は木部の残存もみられ、木製の柄があった可能性もある。

完形で出土したものがないため、長さは不明である。

9. 苧引金

麻の繊維を取りだすために使用する用具。

278 : 手に持つ木部の部分が残存している。厚さは、木部が0.7cm、本体が0.2cmである。

279・280 : 木部は残っておらず、本体のみである。280は使用面が摩耗して凹凸している。

10. 鍵

286 : 穴に差し込む部分が厚さ2mmほどで、やや変形した面取りをしている。柄の部分は端になりしたい扁平で幅広になっている。

11. 毛抜き

287 : 長さが推定8.5cmを計り、全体の幅も狭く先端部ほど薄く製作されている。銹化が顕著である。

〔建築具〕

12. 釘 ( 295 ～ 298 )

釘は、長さが5寸のものから1寸ぐらいのものまで各種あり、数量的には2～3寸ぐらいのものが最も多い。形態的には銀杏葉状の頭をたたいてL字状につぶれたものが圧倒的に多い。

299は、頭の部分がL字形に折れ曲った作りで、釘と同様の機能を有するのであろうか。

13. かすがい

292 : 長さが4cmほどの小型のかすがいで、断面形は長方形を呈する。

〔その他〕

以下、用途不明なものを述べてゆく。

288 : U字状の形状で、端の方が細くなっている。使用痕はないが工具・金具の類であろうか。

289・290 : 相方くさび状の形態であるが、ずっしりとした重量感があり、地金的要素もある。

Fig. 82 鉄製品実測図(2) 生活用具類

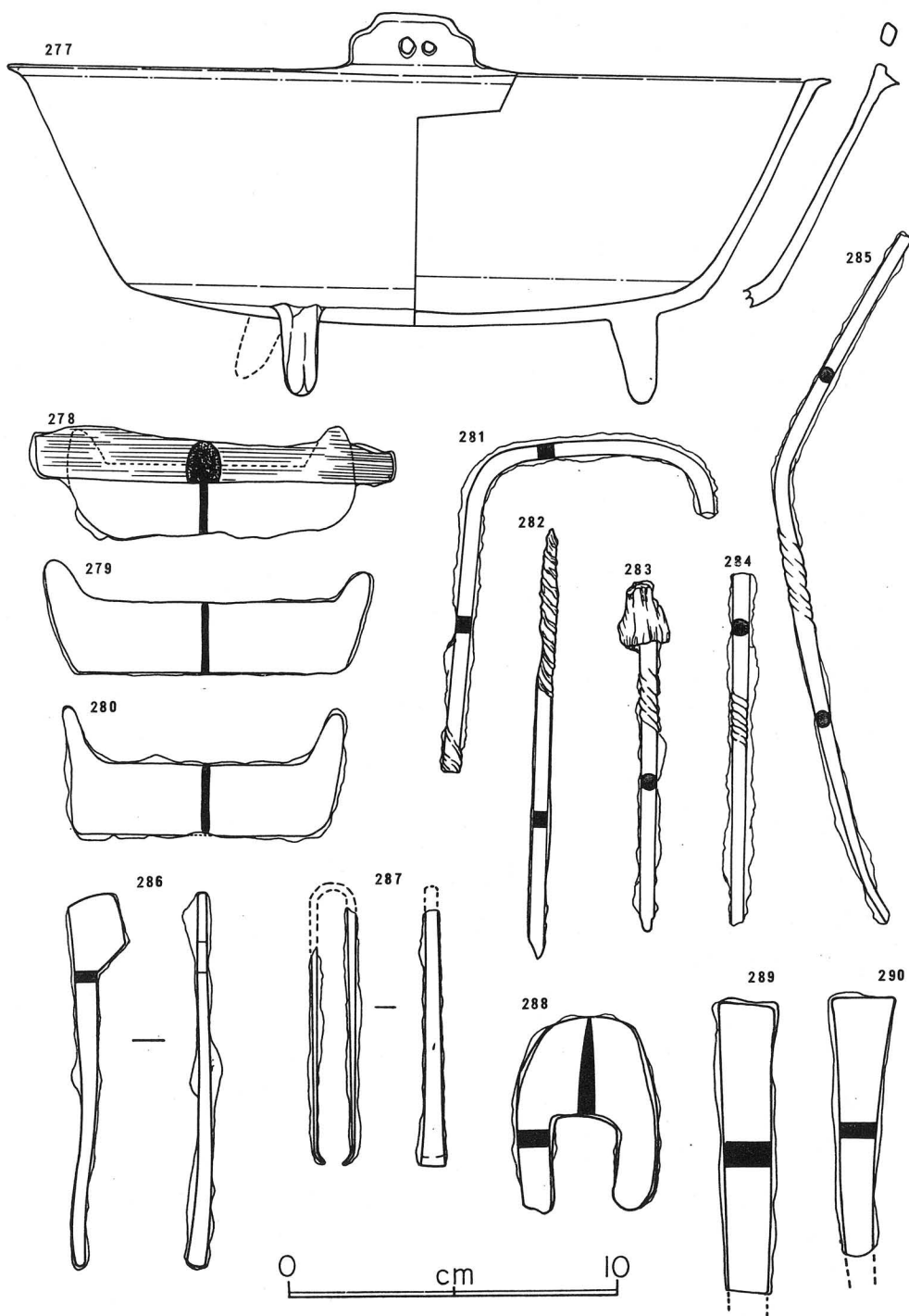
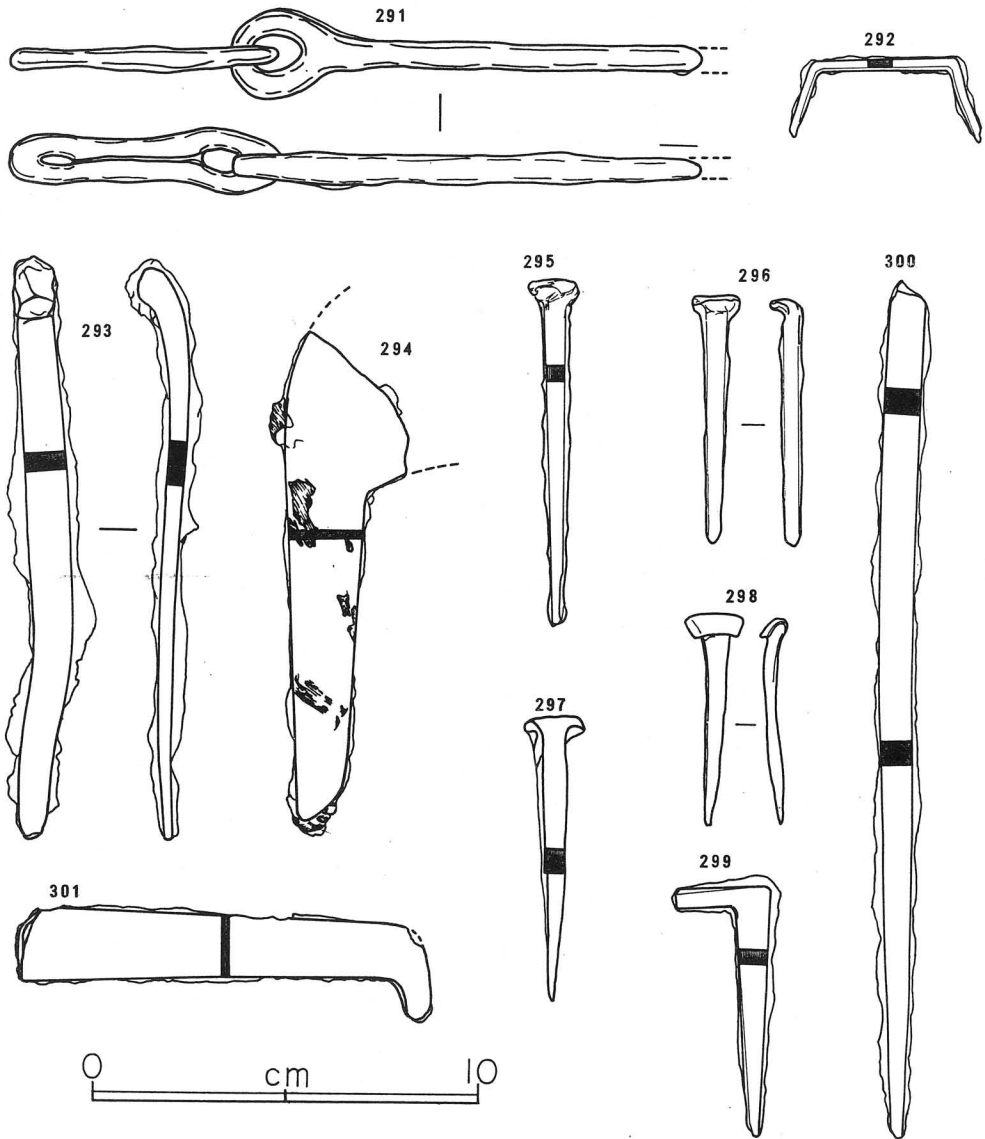


Fig.83 鉄製品実測図(3) 建築具他



291：馬具の轡状の形態で、連繫している。断面形は相方丸を呈する。

293：一方が肉厚なこぶ状で、もう一方は筈状に細くなる。工具等の部分品であろうか。

294：鎌の柄の部分と推定される。

300：断面形角の棒状を呈し、一方が先細になっている。

301：扁平な板状の鉄製品で、幅の狭い方がL字状に突起を有している。

以上、鉄製品についてはまだ未整理の物が多く、概略だけを述べた。

(工藤清泰)



## C 銅製品 ( PL.54、PL.55、Fig.84、Fig.85、Ch.71 )

銅製品の出土総数は 108 点 ( 銅滓も含む ) で、機能別分類からゆくと、武具、生活具、信仰具、装飾具、その他があり、以下個別に述べたい。

### [ 武具 ]

#### 1. 鎧

**304** : 堀跡出土のものである。胸板と考えられ、厚さは 2 mm ぐらいしかなく、軟質な鉄に銅を貼ったような状態で、表面には緑青のみられる所さらに黒い漆が残っている部分もある。縁の部分はやや肉厚な造りをしており、穿穴は一定方向からのみおこなっている。全体に腐蝕が激しく、もろくなっている。

**314** : 高紐の<sup>こはぜ</sup>鞆と考えられるもので、わずかに金メッキの痕跡が残っている。

**315** : 草花の文様をあしらった中に 2 個の丸い穴があく。八双金具の類と考えられ、全体に金メッキの痕跡が残っている。

**321** : 地板は七七五状になっており、**315** に類似した文様を施す所から同種の金具と考えられる。

#### 2. 刀装具

**305** : 筭。胴の地板は七七五を蒔き、中央の紋は梅を具象したようで、嵌め込んである。

**306** : 筭。胴の地板は **305** 同様に七七五を蒔き、中央の紋は金メッキの草花透かし文様である。蕨手・眉形の切込は明瞭にみられ、木瓜形の部分に漆状の黒い付着物がみられる。

**307** : 小柄。 **262** と同じもので、前述している。

**338** : 小柄の柄。鶴や花卉状の文様を施しているようだが、摩耗が激しく詳細不明。

**308** : 小柄の柄。光沢のある地板に梅文と X 状文が区画された状態で彫り込まれている。

**318** : 鎧。厚さ 1 mm 弱の薄いもので、長径が 3.8 cm もあることから大型の太刀、刀のものか。

**319** : 返角あるいは折金と言われるもので、刀の鞘に装着するものである。

**322** : 目貫金具。銹化が激しく文様等不明。

**323** : “ ” 。黒色に光沢をはなち、文様も浮き彫りの製品である。

**324** : 木葉状に細かい彫り込みを入れるが、目貫金具以外のものかもしれない。

**326** : 透かし彫りの金具で、目貫的なものか。

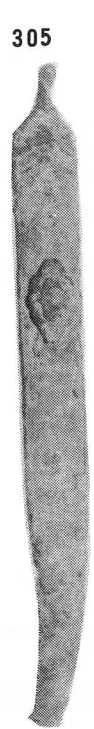
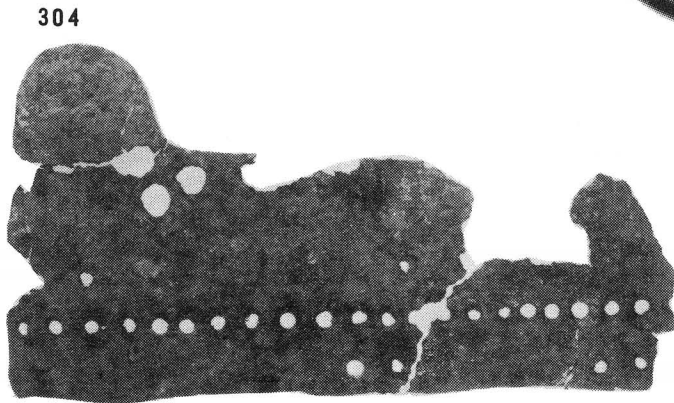
**346** : 目貫金具。

**334** : 赤銅製と考えられる切羽。木瓜形で猪目の透かしが特徴的である。

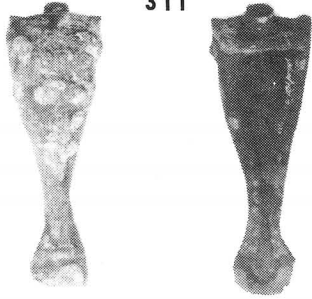
**335** : 筭。縦に二分してあったものの一方で、接合のための穴釘が残っている。胴の地板は七七五蒔きで文様も残るが明瞭でない。

### [ 生活具 ]

#### 3. 銅錘



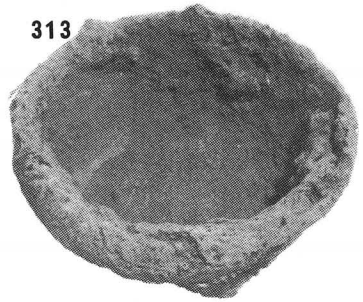
311



312



313



314



317



318



319



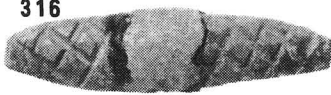
315



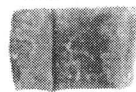
320



316



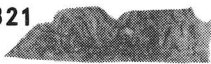
328



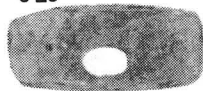
331



321



325



330



322



329



332



326



323



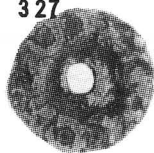
333



324



327



334



317:円錐形の形状で、頂部は面取りした上で1孔を穿ち、下部上端に凹を一条まわし三角のきざみをついている。重量は46.5gある。

#### 4. キセル

340:雁首の部分で、細身であることから吸口部分まで銅製の可能性がある。女性用か。

341:吸い口の部分で、接合痕が明瞭に残る。

342:雁首の部分で、肉厚な重量感のあるものである。

#### 5. 耳搔き

333:長さ7.5cm、全体に金メッキが施され、耳搔き部分の反対もL字状に折れ曲っている。

〔宗教具関係〕

#### 6. 六器

336:赤銅製の碗あるいは皿で、破損して出土したため復元実測である。口縁は端反りし、高台部は真直ぐ立ち上がり、口縁に一個穿孔状の凹がみられる。前年度の調査では同種の高台が出土しており、密教法具の六器的要素が強い。

#### 7. 香炉

345:おそらく香炉等の上端部と推定される。隆帯2条と七七五状の文様がみられる。

311:香炉あるいは盤の脚。人面状で取り付け部分は丸く突起になっており、下部には一条の凹がみられる。前年度も類似した脚が出土している。

339:小片のため明確でないが、円形状を呈し、隆帯などの存在から香炉的なものであろう。

#### 8. 鏡

鏡を宗教具として扱うか、生活用具として扱うか悩むところであるが、今回は二面が同一遺構から出土していること、同種の背面文様を有することから宗教的意味が強いと考えた。

302:外径9.8cm、厚さ0.8cmを計り、縁は0.2cmの幅で真直ぐに立ち上がる。表面は内側がややへこんだ状態で鈍い光沢を有し、部分的に藁状のものが付着している。背面には内輪の中に20個の菊花と二羽の雀が対峙した状態で配置され、中央に亀紐が存在する。内輪外部は放射状に線刻され、隆帯部分に8~10個のこぶが間隔を置いて配置されている。

303:外径11.3cm、厚さ0.9cmを計り、縁は0.3cmの幅で外側がやや丸味をもった立ち上がりを呈する。表面は光沢を失っており藁状の植物繊維の付着が著しい。背面文様は、内輪の中に25個の菊花と二羽の雀、および中央に亀紐がみられ、外側にも25個の菊花が存在する。302ともに、菊花双雀文様である。

#### 9. 鈴

312:下方に割れ口を有する鈴で、上端に1個の穿孔がある。全長は2.8cmと小型のものであり、外面には光沢を有する。

Fig.84 銅製品実測図(1)

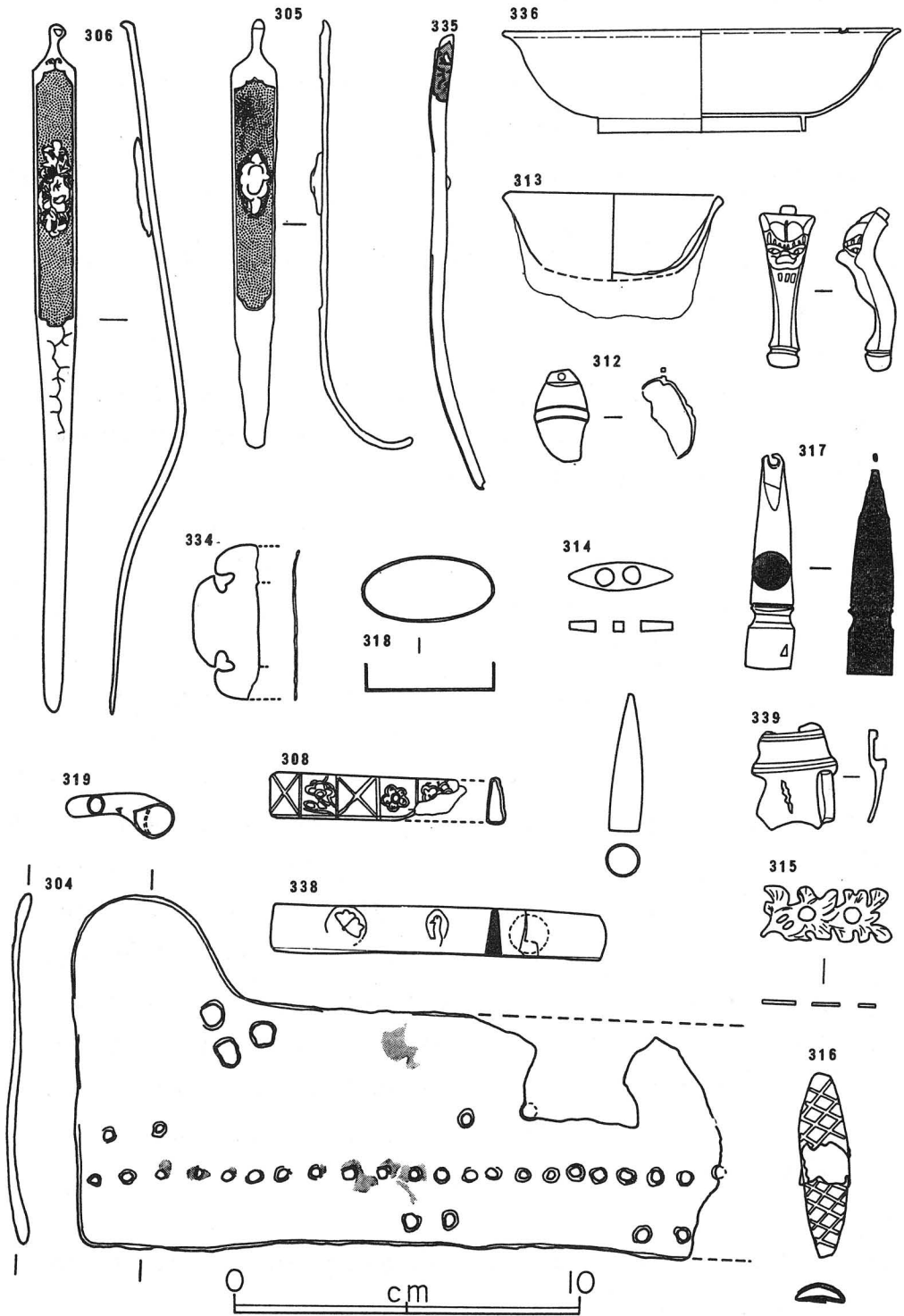
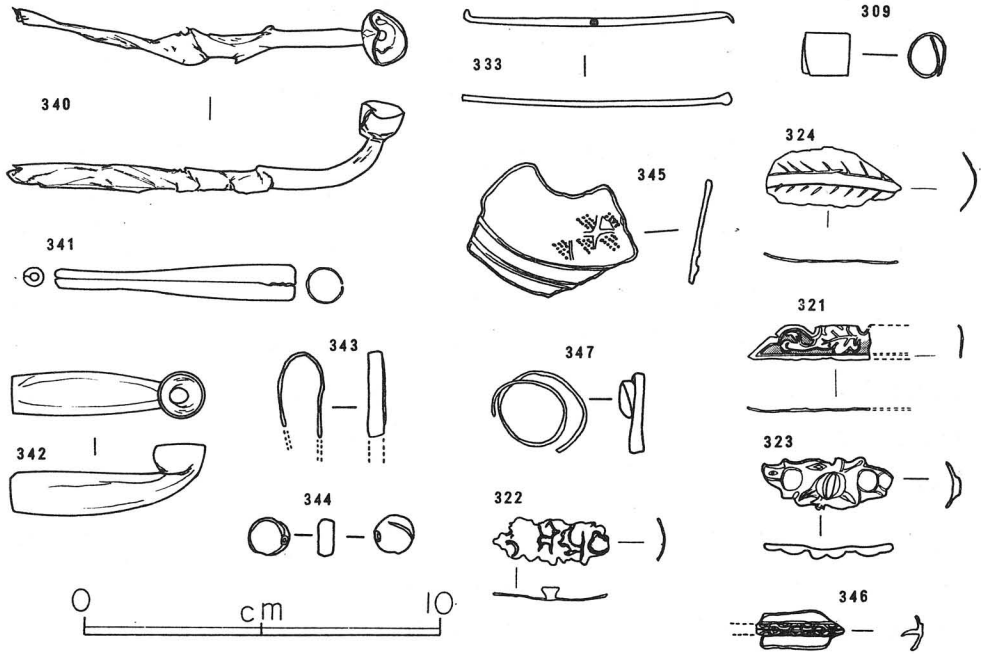


Fig.85 銅製品実測図(2)



[ その他 ]

316:表面に格子状の彫り込みがあり、中央に薄い銅板が巻かれている。目貫金具としては大きすぎるため、他の装飾に付属するものと考えられる。

320:円錐形で、キャップ状に空洞になっている。

325:表面は七七五状に蒔かれ、中央下端に楕円状の穴があいている。調度具類の金具か。

327:円形の金具。使用痕が激しい。

328-329:四角い板状を呈し、厚さ4~3mmで小形のため用途不明。

330:丸い頭に二股に割れた差し込み部を有する取手金具。調度具に使用するものだろうか。

331:白銅色に光沢を有し、背面に梅花状の浮き彫り文様がある。径は推定5cmである。

332:頭がきのこ状になった鉾である。

309:全面を金メッキした銅板で、丸く輪状になっているが、当初は平面的なものであろう。

313:銅滓等を付着した埴塼で、素地は鉄製らしい。口径6.3cm、高さ2.5cmの碗状を呈し、口縁は若干肉厚になっている。底部まで付着物が厚く覆っている。

343-347:細い銅板。用途不明。

344:径約1cm、厚さ0.5cmの円盤状を呈し、小さな切れ込みもみられるが用途等は不明。

(工藤清泰)

### ○浪岡城跡出土の銅製品とその製作について

浪岡城跡から出土している銅製品は、武具、生活具、信仰関係の用具などがあり、一部は溶解物付着土器（土製坩堝）、土製鋳型などの出土から本城跡で製作されている可能性がきわめて高いため、その製作について若干考察を加えてみたい。

第一に、粘土製坩堝の出土が総数 300 余個に及んでいることは、大集団の鋳物師の座が存在したことを証明していると考えられる。坩堝は加熱してその中の金属を溶解する炉であり、素材としては粘土坩堝、黒鉛坩堝、白金製、石英製、磁器製等があり、それぞれの役割があるとされ、一般に広く使用されているのは磁器製と粘土坩堝である。

第二に、鋳型の出土である。十二透鐸の鋳型〔車透に近い〕（240）と、お多福木瓜形と首肯される鋳型（243）の残片が、完全な姿で発掘されたのは稀例というべきか。鋳型に溶けた鉄（他の金属も）の湯を柄杓でくみ出して注ぎ、冷えたら鋳型を打ち壊し、出来た物を取り出すので、このため鋳型そのものが残ることは稀である。

我国では室町時代に入ると軍需・民需の鋳物が急速に発達し、全国にわたって鋳物師が往来するようになった。冶金業者は、東西どの国にあっても一定の村落に定住せず、諸国を転々と渡り歩き原料と需要を求めて生活していた。それは、冶金業者の造る物が農民たちの熱望するものであったにもかかわらず、農民の生活力が低かった中世にあっては、なお高価なもので職人を村に定着させ得なかったのであろう。

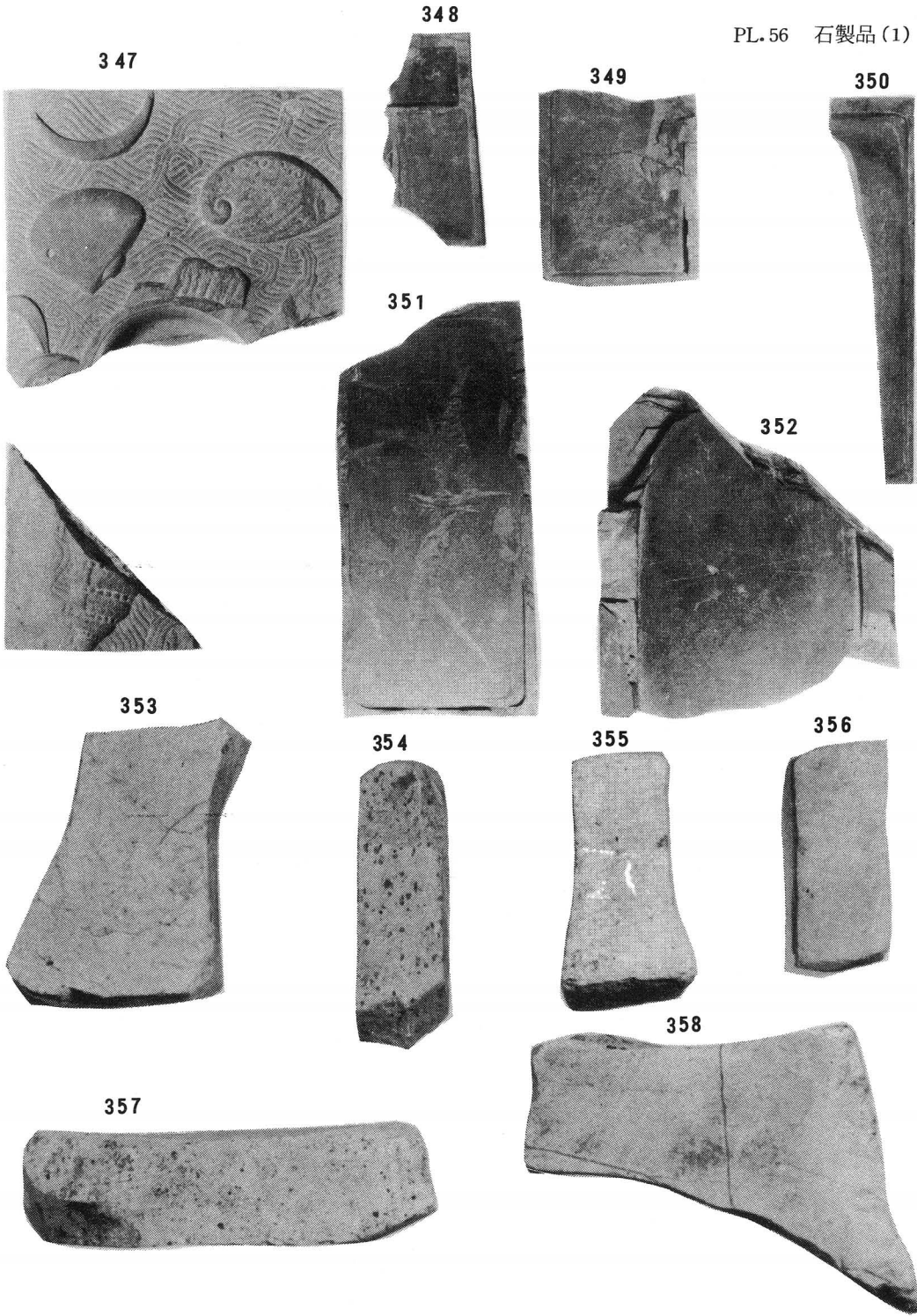
古く、鋳造をおこなう工人については、鋳物師・鋸師などと言われた。鎌倉時代になると鋳工は「いもじ」と呼ばれ、鍋釜、農具などを鋳造して営業するようになり、鋳物師には出職と居職があり前者は社寺などの招きに拠って梵鐘や仏像などを造り、後者は住居を作業所として注文に応じた仕事をしていた。室町時代には市場向けの商品生産をおこなうようになり、彼らは、座を結成して独占的営業権を持っていたとされる。

鍋釜などの銅鉄器類の水漏れを止める修理職人、ふいごを用いる特殊職人を近年まで（戦後初期）「いかげや」と呼び、年配の人々にはなじみの深いものである。この渡り職人は、古い鋳物師の座の特権につながる習俗を伝えていた。路上の自由使用や、軒先での作業などがそれである。特別に長い天秤棒を肩にして（戦後は自転車）、歩く範囲ならどこでも自由に往来を占拠して仕事ができと言われていたのも特権があったためである。「いかげや」の天秤棒は普通のものより長く、七尺五寸あり棒の端が荷物より先に長く出ていた。

以上、筆者の狭い知見から銅製品等の製作に関する資料を提示したが、浪岡城内における金属製品の製作は活発であったと推定され、前述出土品の中でもそれにあたるものが多数存在すると考えられる。特に、今回出土した銅鏡二面については、優品であることから北畠氏の文化水準を知る上でも絶好の資料である。

（宇野 栄二）





## D 石製品 ( PL.56、PL.57、Fig.86、Fig.87、Fig.88、Ch.72 )

石製品は132点の出土があった。機能的には、硯、砥石、臼、鉢、火打石などがあり、縄文・弥生時代の遺物は別項で説明する。石質はCh.72を参照していただきたい。

## 1. 硯 ( Fig.86 )

出土した硯に完形品はほとんどなく、長さや幅は図面上で復元しているものが多い。また残片のため紹介できなかったものもあるが、石質・器形上の特徴から約10個体分の出土と考えられる。

**347** : 色調は赤褐色を呈し、全長20cm弱と推定される大型のものである。側面・裏面ともにきれいに整形され、表面には波濤文の線刻に二枚貝や巻貝また三日月などをレリーフした意象がみられる。SE24底面からの出土である。

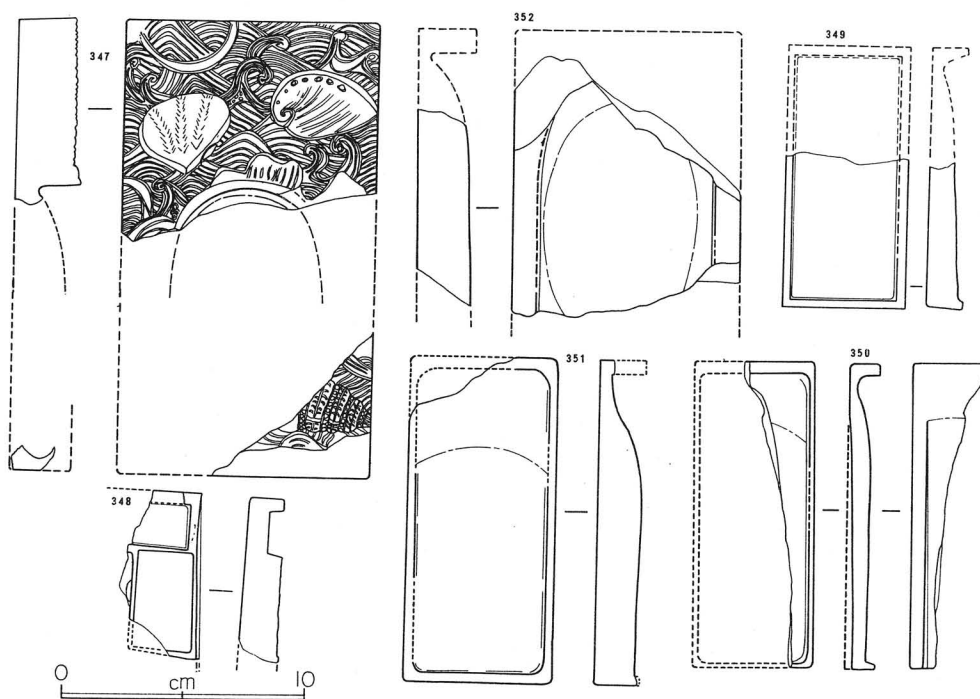
**348** : 暗灰色を呈し、表面には区画された掘り込みがあったようである。一部に墨痕の付着。

**349** : 暗赤黄色を呈し、表面は摺られたためにややへこんだ状態で、裏面には作爲的に削った痕跡があり凹凸している。

**350** : 淡緑色を呈し、海の部分と陸の部分が残っている。裏面も陸の方に向かって緩やかに削られており、全体の整形は丁寧におこなわれている。海の部分に墨痕が付着している。

**351** : 黒灰色を呈し、攪乱のためか破損している部分が多い。

Fig.86 石製品実測図 (1)硯



352:暗灰緑色を呈し、347と同じぐらいの大きさと考えられる。表裏面とも数多くの擦痕があり、石質が粗悪なためにひび割れが随所にみられる。

## 2. 砥石 ( Fig.87 )

砥石はすべて凝灰岩で造られ、小型のものが多い。今回、図等で示すことができなかった堀跡出土の中には二次加熱を受けたものも少なからずみられた。色調は黄白色を呈するものが一般的で、表面がザラザラしたものから滑かなものまで各種みられる。総数約30個の出土。

353:幅の広い方と狭い方の表裏どちらも使用し(四面)、広い一面を除いて中央がえぐられた状態になっている。

354:他のものにくらべると表面が粗く、色調もやや赤味を強い黄白色である。四面使用しているが、うち一面は二段階のえぐり部分がみられる。

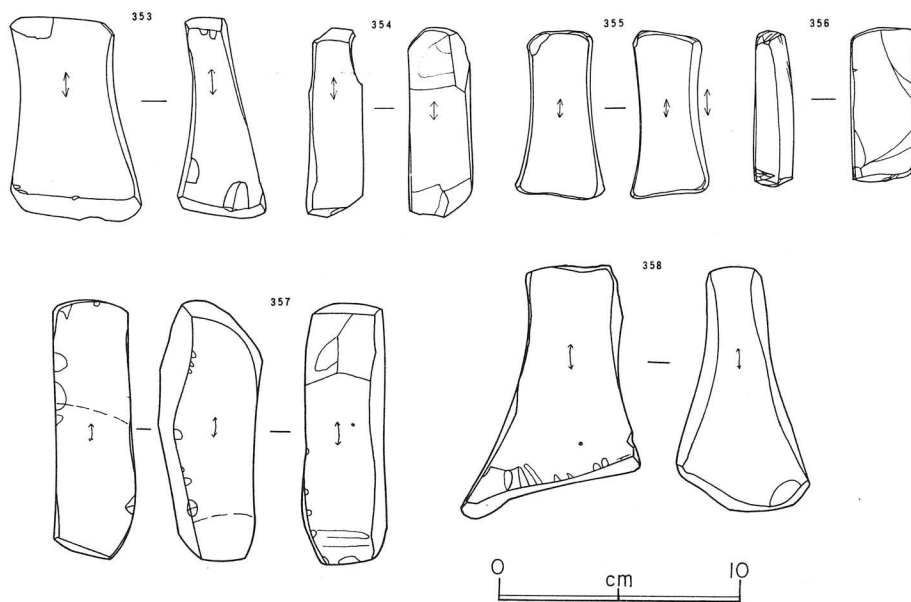
355:表面が非常に滑らかで、四面とも中央がえぐられている。

356:暗灰色に若干赤味のある色調を呈し、広い面については側面側が多く摩耗している。

357:やや変形しており、砥面が五面ある。表面はあまり滑らかと言えず中間的な粗さをもった砥石である。

358:砥面は三面しかなく、それ以外は石の地膚が露出して凹凸している。砥面の中央は大きくえぐられ、錐状になっている。

Fig.87 石製品実測図(2) 砥石



### 3. 石臼

出土した石臼には粉挽き臼と茶臼がある。いずれも安山岩を使用しており、茶臼については研磨加工したのもみられるなど、製作上みるべきところがある。

#### 1. 粉挽き臼

**362**:粉挽き臼の下臼で、丸い芯棒穴のところから割れている。臼の目は、だいぶ粗雑に削られ副溝については幅も一定せず、任意に製作されたものであろう。

#### 2. 茶臼

**359**:下臼の受皿の部分で、受皿の外径は約32cm、底径が約23cmを計る。表面はよく研磨され光沢をはなつぐらいである。

**360・359**と同一個体と考えられ、表面の研磨、底径が類似している。臼の目は、残存部だけから推定すれば24本となるが、どうも部分的に主溝を多くしているようで、明確に把握できない。副溝も3本の所が多く、茶臼としては納得のいかない面もある。

**361**:下臼で、受皿の部分は破損している。目は、主溝が8本、副溝6～7本と推定され、等間隔には施されていない。

**362**:上臼と推定されるもので、主溝8本、副溝12本と考えられる。くぼみ部分の面も残っており、出土した中では最も目の幅が狭い。

PL.57 石製品(2)

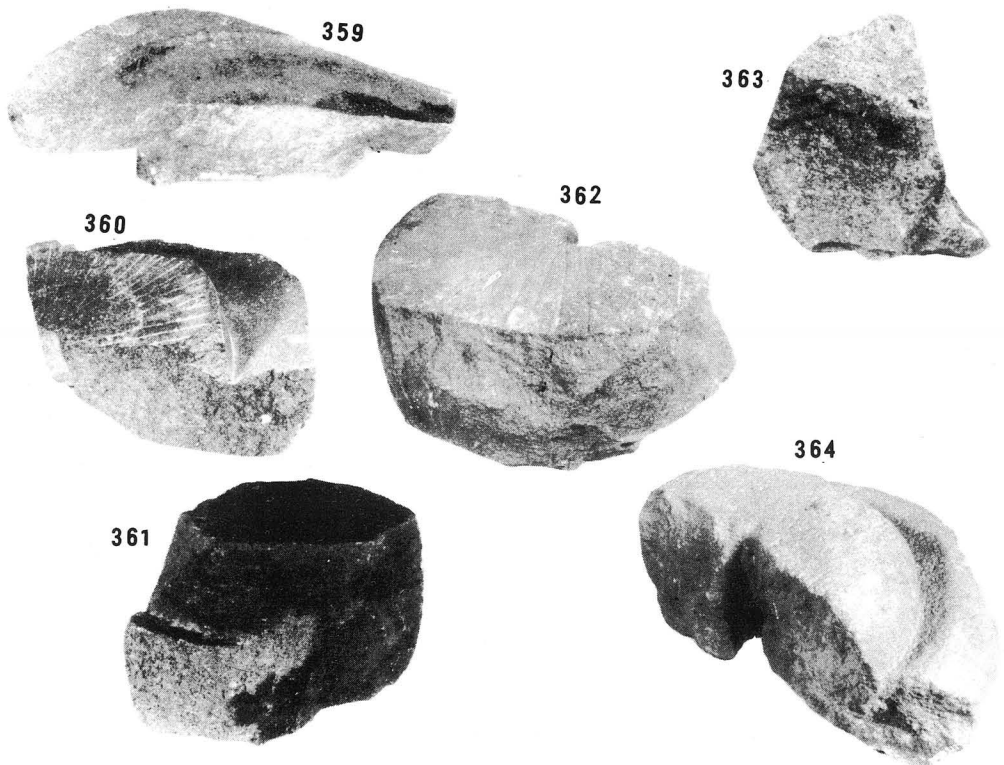
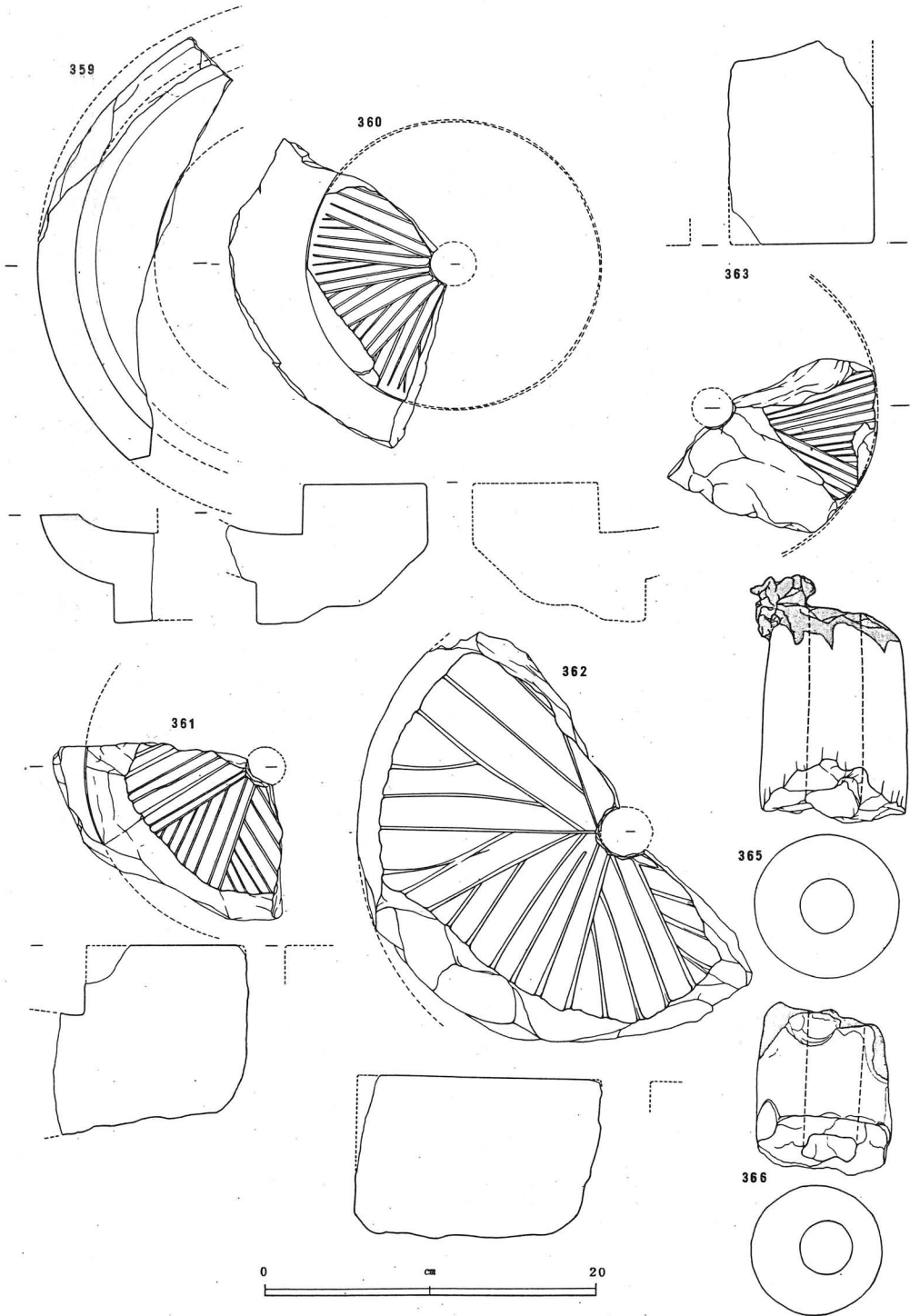


Fig.88 石製品実測図(3)白



**364** : 下臼で、摩耗のためか目の消滅し、受皿の部分もない。

以上、石臼について述べたが、今回出土した粉挽き臼、茶臼に関して若干のコメントを述べたい。石質の鑑定を受けた千葉先生に拠ると、石臼の素材となっている安山岩は浪岡周辺にも多数産出するというので、類似した特徴を有すると言う。もし、浪岡産の安山岩を使用しているとすれば、石臼の製作は城内でおこなわれた可能性が高く、それらの職人の存在も推定される。加工技術を見ても、出土した製品が一様に目の整形が粗雑であり、中央で製作されたものと考えられない点からも自家製の可能性が高い。また、茶臼としたものが、本当に茶臼として使用したのかも疑問な点が多い。たとえば、火薬の生産や糊臼など他の機能も一考する必要があるようだ。

(工藤清泰)

#### E 木製品 ( PL.58、PL.59、PL.60、Fig.89、Fig.90、Fig.91、Fig.92、Fig.93、Ch.73 )

木製品の主なものは、P・Q-55区の堀跡からの出土であり、若干井戸跡出土のものも含まれる。これらを機能別に分類すれば、食関係用具、衣関係用具、住関係用具、祭祀・信仰関係用具、その他となるが、大部分のものは破損廃棄されたものであるため一部品となっており、明確に名称のわからないものが多い。今回は、残存状態が比較的良好なものを紹介する。木製品の総出土点数は約400点以上である。

##### [ 食関係用具 ]

#### 1. 漆塗り椀 ( PL. 37 も参照 )

漆塗り椀の一般的形態は、内面が朱塗り、外面が黒漆地に朱でいろいろな文様を施すものである。個体数としては20個以上出土しているが、細片であったり漆が剥落しかかったりするもの( **384** )もあり、実測できたものは7個体である。

**383** : 口径13cm、高さ3.5cm、器厚が0.2cmと薄く、椀の蓋の可能性が高い。内面朱、外面黒地に朱色で中央が鶴、両側が楓葉の文様を1単位として、おそらく3単位施していたと考えられる。

**384** : 全形は破損・ゆがみ・漆の剥落が激しいため明確でないが、鶴の文様が3個1単位として施されているようである。

**385** : 口径13.5cm、高さ4cm、器厚約0.5cmを計り、高台部はやや外に広がる立ち上がりを呈する。外面文様は丸に竹葉状のもので、色彩が薄くなっているため明瞭でない。

**386** : 口径14cm、高さ5.7cm、器厚は底部が1cmで口縁部が0.3cmと口縁に近くなり次第薄くなる。外面文様は半分が剥落しているため明確でないが、雪の結晶状の文様(木枝状)である。高台部の整形は良好で、ロクロ使用が明瞭である。

**387** : 胴部片で、**384** と同様に鶴の文様が3個一単位でみられる。

Fig.89 木製品実測図(1)

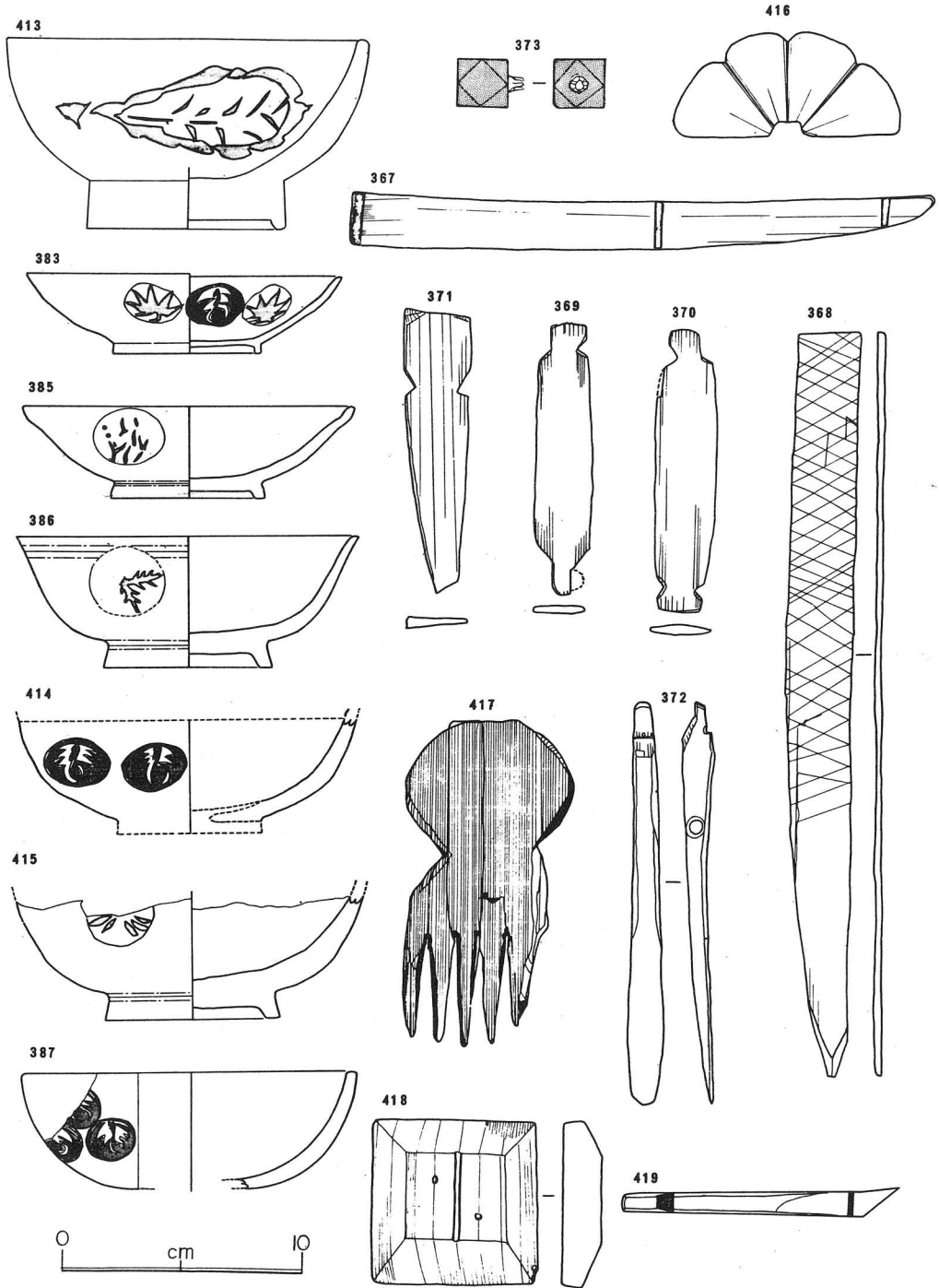
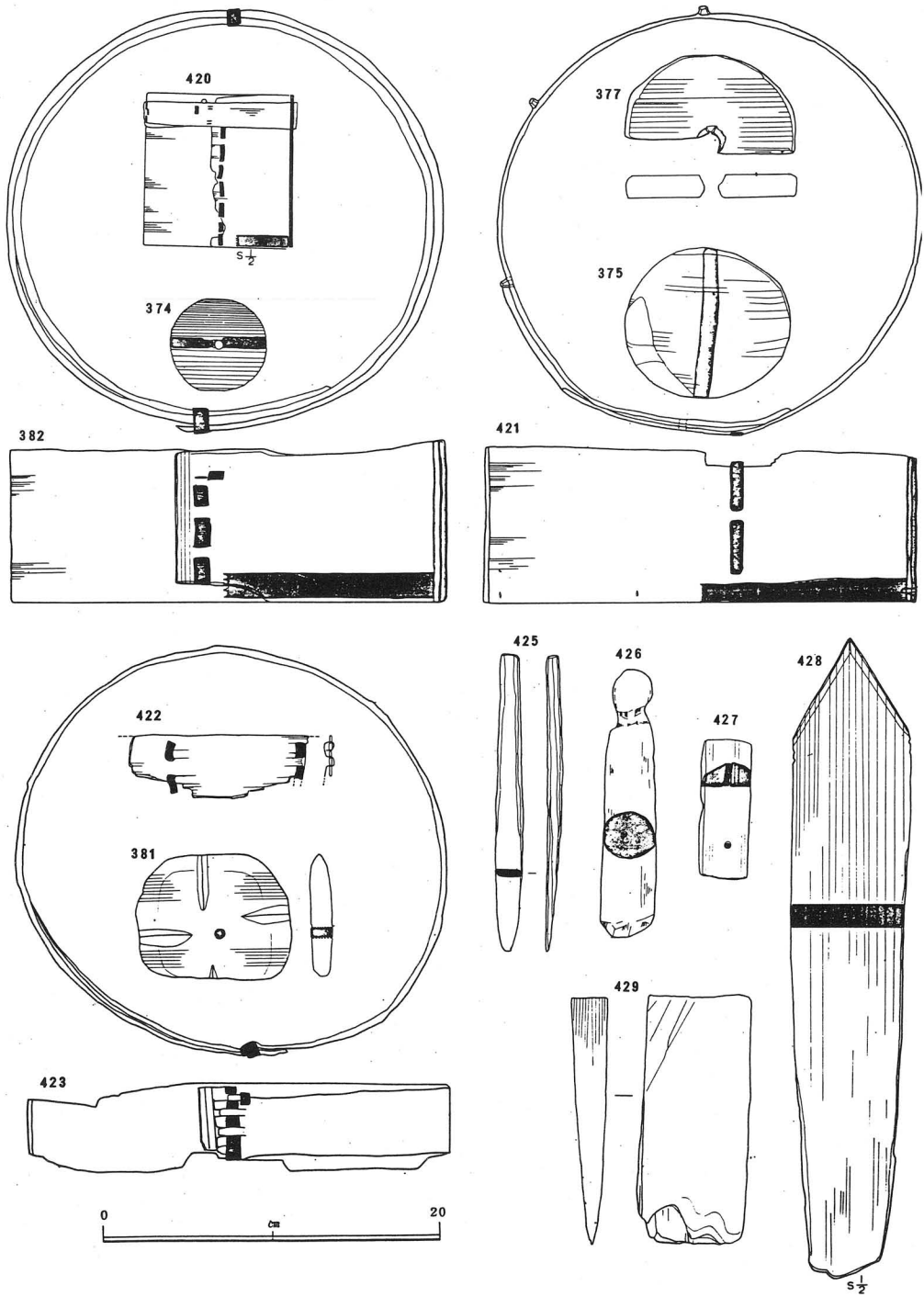


Fig.90 木製品実測図(2)





413 :口径15cm、高さ8.2cm、底の器厚は1.8cmと肉厚で胴部厚も1.0cm以上と全体にずんぐりした椀である。外面文様は草花状の文様であるが詳細不明。高台部が高い特徴を有する。

414 :推定口径14cmのもので、外面文様は鶴文が2個一対でみられる。(3個一対の可能性もある。)

415 :底径7.3cmを計り、外面文様は木葉状を呈すが詳細不明。

## 2. 曲物 ( Fig.90 )

曲物は、堀跡とともに井戸跡出土のものも多い。SE22出土品(420)、SE32出土品(382)などは完形品であり、どちらも木杵の底から検出されている。これらの曲物は、井戸跡に一般的な井筒として据え置くものでなく、日常生活で使用したものを廃棄したものである。

382 :外径25.5cm、高さ9.3cmを計り、厚さ3mm前後の側板を二重に回している。桜皮によって綴じる部分が2箇所、内面には黒漆を塗って水等が漏れないようになっている。底は木釘による接合がみられない。

420 :外径17.5cm、高さ18.5cmを計り、厚さ1mmぐらいの側板を2重に回す。さらに口縁部付近には幅3cmの帯をめぐらし、本体部と桜皮で3箇所にわたって接合している。本体部の綴じる箇所は内側の始まり部分と外側の部分の2箇所になっており、丁寧に接合している。底は木釘を用いていない。

421 :382と同一地点から出土したもので、蓋になるかとも考えたが外径は25.5cmと同規模で重ねることはできない。高さは9.5cmで、桜皮の綴じる部分は1箇所である。底の側面に木釘が回っており側板との接合を堅固にしている。

422 :桜皮の綴じる部分が2箇所にみられる側板の破片である。

423 :側板を一重に回し、桜皮による綴じる部分が1箇所のもの。外径25cmで底板は欠除している。422とともにSE31出土のものである。

曲物の機能には、灰を入れて暖房具として使ったり、食物を入れたり、井筒にしたり、物を収納したり、多方面に使用されるが、今回出土したものではお櫃的なもの(420)や収納的なもの(382・421)など、食関係のものが多いようである。また、375が曲物の底とすれば弁当なども推定される。

## 3. 折敷・膳

食器をのせる器具として、折敷・膳が考えられる。

379 :半形品で、一辺に桜皮で綴じた柁目状の側板が残っている。綴じる箇所は中央に1個である。内面はチョウナの痕跡が明瞭で、四角形のコーナーをカットしている。

432 :折敷と推定されるが、一箇所に桜皮による綴じた痕跡が残るだけで詳細不明。

376 :膳ないしはそれに類似するもの的一部分と考えられ、外面は斜めに削った部分を除いて

Fig.91 木製品実測図(3)

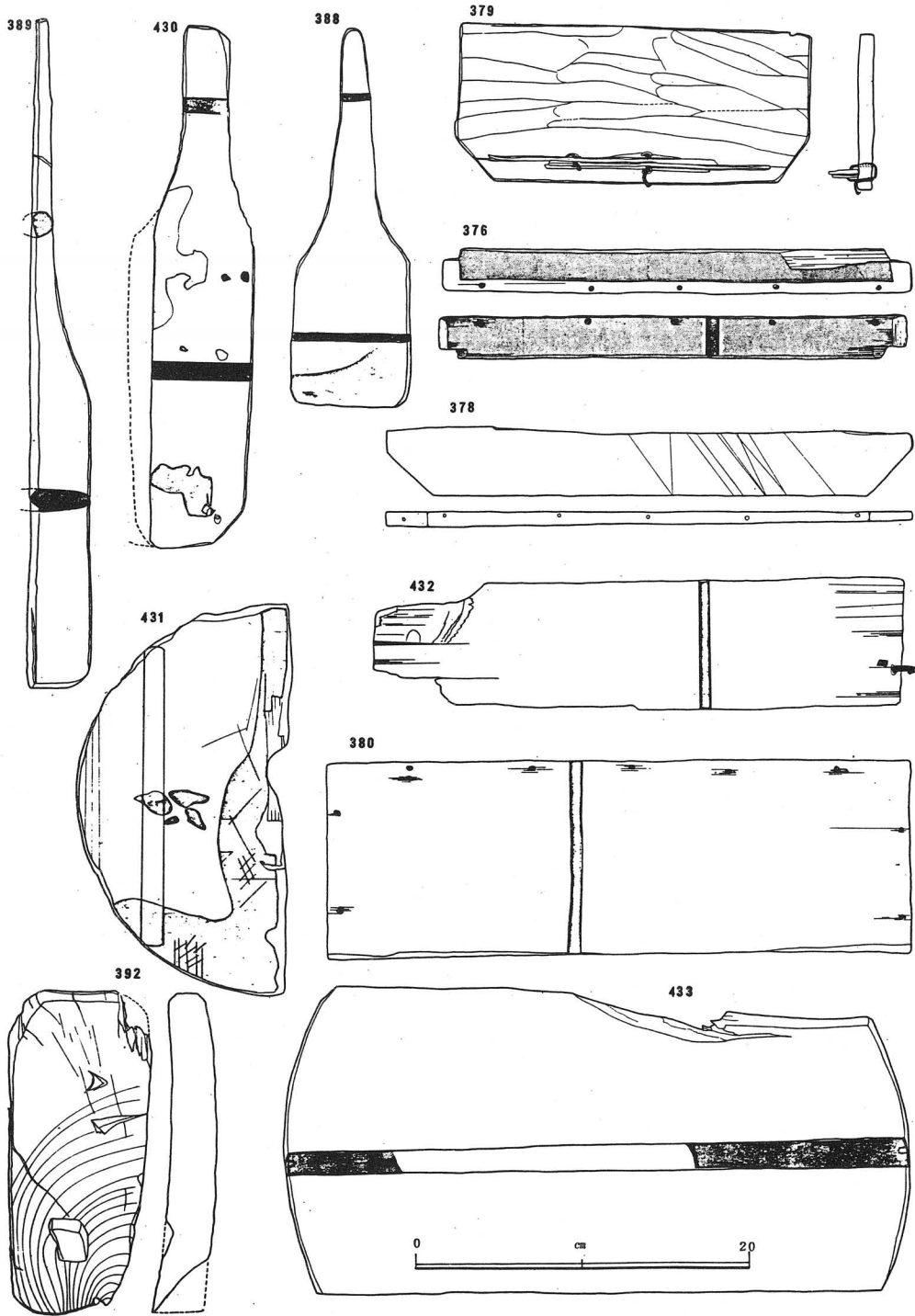
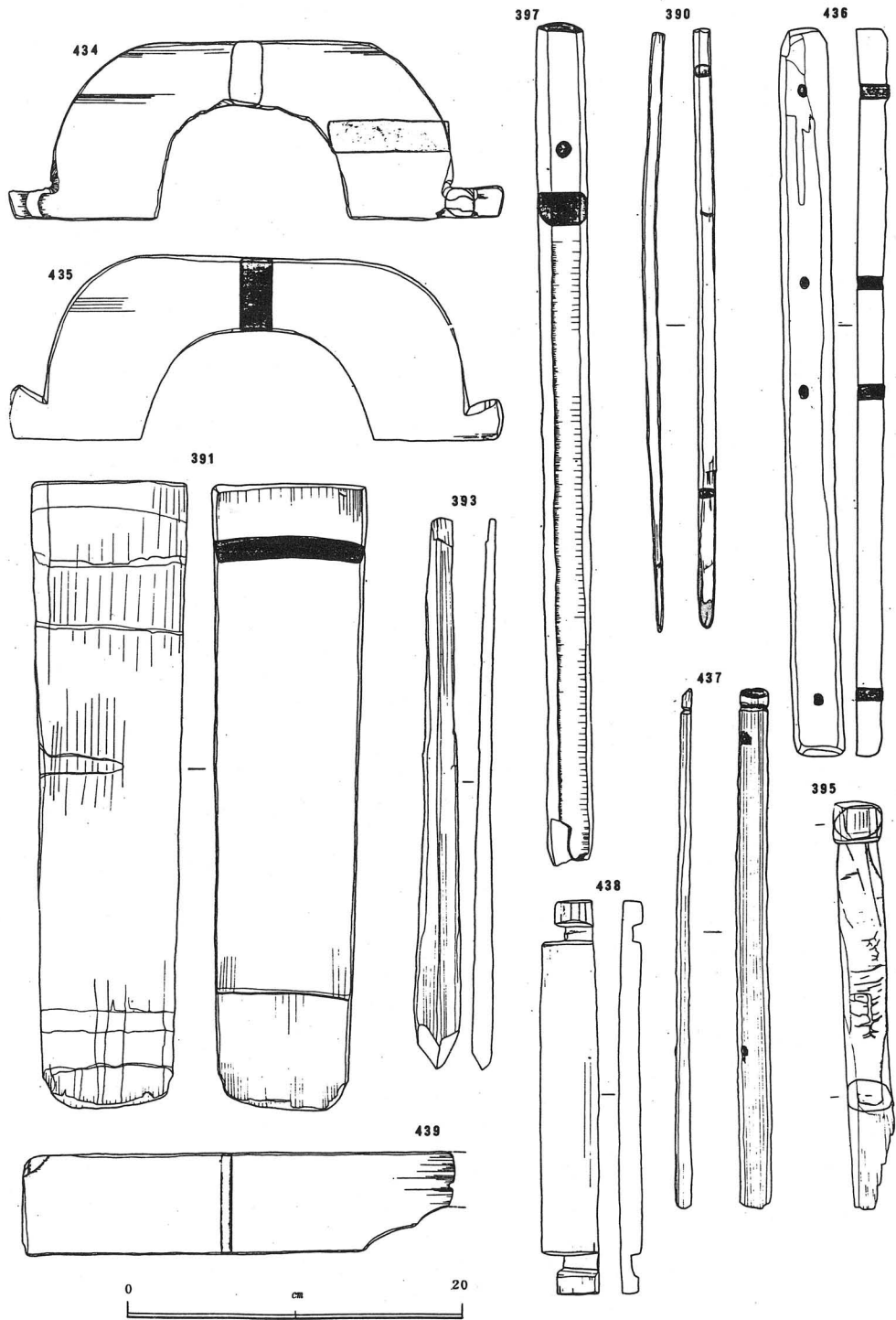


Fig.92 木製品実測図(4)



全面に暗赤灰色の漆が塗られ、内面は接合部（木釘が存在するため）以外に塗られる。

椀以外で漆塗りのものは少なく、膳・折敷の類では最初の例である。

**378**：側面に木釘の穿孔を有するもので、表面には擦痕もみられる。

**380**：各辺端に木釘が残存する板で、一辺の長さが35cmを計る大型のものである。他の機能も考えてみなければならないであろう。

この他にも折敷と推定されるものが残片でかなりの数出土している。しかし、全体の形状を推定できないので図・写真は割愛した。

#### 4. 筥

**388**：全長23cm、筥幅7.2cm、厚さ0.5cmを計り、先端部片面に二次加熱の痕跡があり炭化状態になっている。

**389**：取手・柄なども推定されるもので、縦位に2分された片方である。細味の部分は丸状の断面、幅広の部分は楕円状の断面を呈する。

**430**：肉厚な板状を呈するため筥とは考えられないかもしれない。表面に炭化状態の部分もあり、全体の形状も左右対称にならないようだ。

#### 5. 桶

**391**：桶の側板で、底のあたる部分、<sup>たが</sup>箍のあたる部分（上下2箇所）が摩耗してへこんでいる。口縁の部分はきれいに整形されているのに対し、底の部分はやや腐植気味で丸く摩耗している。

**400・431**：桶あるいは曲物の底板で、径25cm前後のものである。

**433**：形状が円形あるいは楕円状になる底板で、最大径は38cmを計る大型のものである。側面には対になる部分に木釘穴が存在し、桶底の他曲物の底も考えなければならない。

#### 6. 箸

箸は多量に出土したため、あえて図化しなかった。形状・特徴等は「浪岡城跡Ⅱ」P82で記述したものと同じである。

#### 7. つまみ

**373**：正六面体の各角を斜めに削ったもので、全面に黒漆が塗られ、接合部は木釘状を呈す。

これと同種のものが広島県草戸千軒町遺跡でも出土している。

この他、漆の塗られないつまみが2点ほど出土している。

#### 〔祭祀・信仰関係〕

明確に祭祀・信仰関係のものと断定はできないが、形状等からそのような機能も推定できるというものを紹介する。

**367**：刀形木製品。全長24.5cm、刃部は尖っておらず無調整である。S E31出土品。

- 368 :先端を削り、一面には図のような交錯した条痕がみられる。杵状のつくり。
- 369・370 :墨痕はみられないが、両端をくびれ状に削り、木筒状の形態を有する。
- 371 :表・裏面の調整は雑で、割った面が残っている。一方をくびれ状に削り、人形のような使い方をしたものでしょうか。
- 426 :腸物形木製品、全長16.2cm、幅3.2cmを計り、先端部はリアリティーに欠ける。
- 428 :塔婆。黒痕等は認められず、上部は面取りするなど整形が良好で、その下に2個の凹が両側に存在する。全長72cm、最大幅14cmを計る。下方は土に埋まっていたためか腐植気味である。

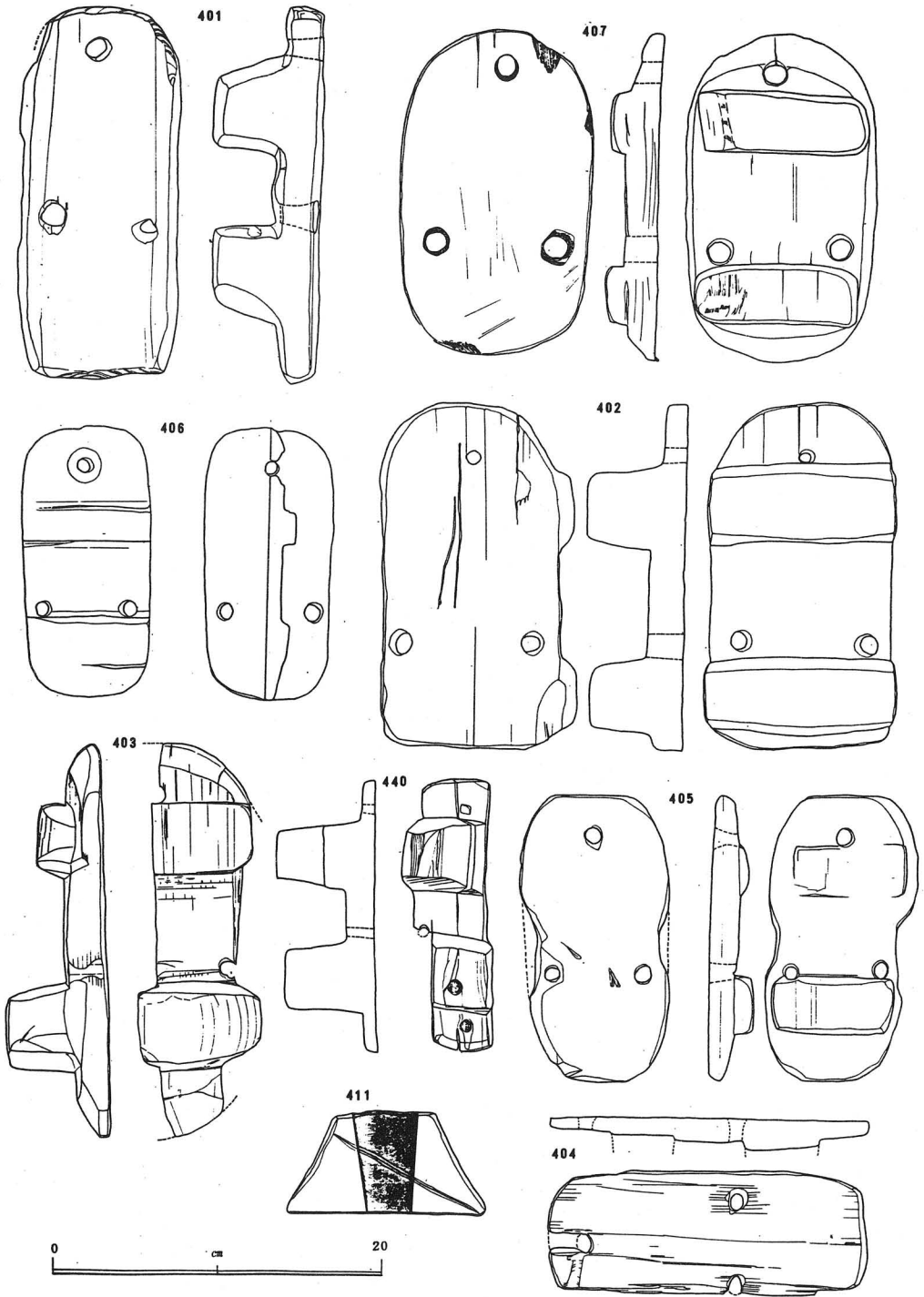
これらの木製品は、367の刀形木製品を除き堀跡から一括出土したもので、特に他の木製品との出土状況に相違はみられない。

〔衣関係〕

主として下駄について述べる。今回出土したものはすべて連歯下駄であり、一对で出土したものはまったくない。一部に露卯下駄の歯と推定されるものもあるが、その他は形状・整形ともバラエティーに富んだ連歯下駄である。

- 401 :歯の部分の彫り込みなど、整形は粗雑で調整はなされていない。歯の摩耗が少なく、残存状態は良好だが、後歯の位置がズレており主として右足用のものだろうか。
- 402 :幅広で厚味のある下駄。先端部両側を斜めに削り、若干丸味をつけて整形している。歯の摩耗は少なく、残存状態良好。
- 403 :長さが24cm以上もある大きいもので、楕円状の形状を呈すると思われる。歯の摩耗は少ないが、接地部分は丸味を有しており素材の耐用が強いと考えられる。
- 404 :歯の部分は摩耗が激しく、かなり使用されたものらしい。
- 405 :後歯の両側を故意に削っており、ひょうたん形を呈する。歯の摩耗も激しい。
- 406 :前歯の裏が丸い全具でも付けたためかへこんでおり、長さ16.6cmしかないことから幼児用の下駄であろうか。
- 407 :楕円形を呈し、表裏とも整形は丁寧におこなわれている。表面のへこみ状態から主として左足で使用していることがわかる。
- 408 :前歯の部分が欠損している。後歯の裏面は周囲を削った状態で凹んでおり、整形痕が明瞭にみられる。歯の摩耗は少ない。
- 409 :前歯の摩耗が著しく、チョウナの整形痕がみられる。
- 410 :全長25cmと出土品の中では最も大きい。
- 411 :露卯下駄と歯の部分と推定される。斜めに一本の削り痕が走っている。
- 412 :長方形の形状を呈し、前端部・後端部ともに無調整のため凹凸した状態である。

Fig.93 木製品実測図(5)



この他、衣関係の木製品としては、織物用具も考えられる。現実に、後述する麻布の残片が出土していることからとも言えるのであるが、出土品が一部品であることから断定できないものが多い。今後の整理に期待したいと思う。

〔住関係〕

住関係では、建物の角柱（大きなため図示できなかった。）、屋根に葺いた桁、その他建築部材があり、加工した板、杭なども関連するものとして出土している。

**394**：屋根桁。厚さ0.2cmで、他の出土品も同程度の厚さのものが多い。完形で出土することが少なく、大きさを把握できない状況にあるが、長さ30cm（約1尺）幅6cm（約2寸）程度のものが多いように思われる。

**429**：楔。長さ15cmを計る大型のものであることから建物等に使用されたものだろう。

**398**：板。長さ30cm、幅5.5cm（残存部）、厚さ1cmで、他の付属物、加工痕が認められないことから建物等の板と考えられる。

これらの出土品の中では屋根に葺いた桁が最も多く出土し、PL.36の木製品出土状態をみてもわかる通り、他の木製品と混在して出土するケースが多い。城館期における建物の屋根は、桁が主体を占め、一部は茅・藁などを併用していたようである。

〔その他〕

**372**：小型の筥状製品で、上部に一孔が穿たれている。類似するものに**425**がある。

**374**：外径約5.8cm、厚さ0.7cmで中央に0.5cmほどの穴があいている円盤状木製品。

**377**：外径約10cm、厚さ1.4cmで中央は丸い穿孔に焼成痕が残っている。

**381**：おそらく蓋状の製品と思われる、中央に木釘的な痕跡が残存し、四方に浅い削りを入れている。

**390**：棒状木製品。先端部が焼けており、火箸的な使用をしていたのかもしれない。

**392**：やや反りのある加工品で、表面は丁寧に整形されているが用途不明。

**393**：先端部が剣先状を呈する加工品。

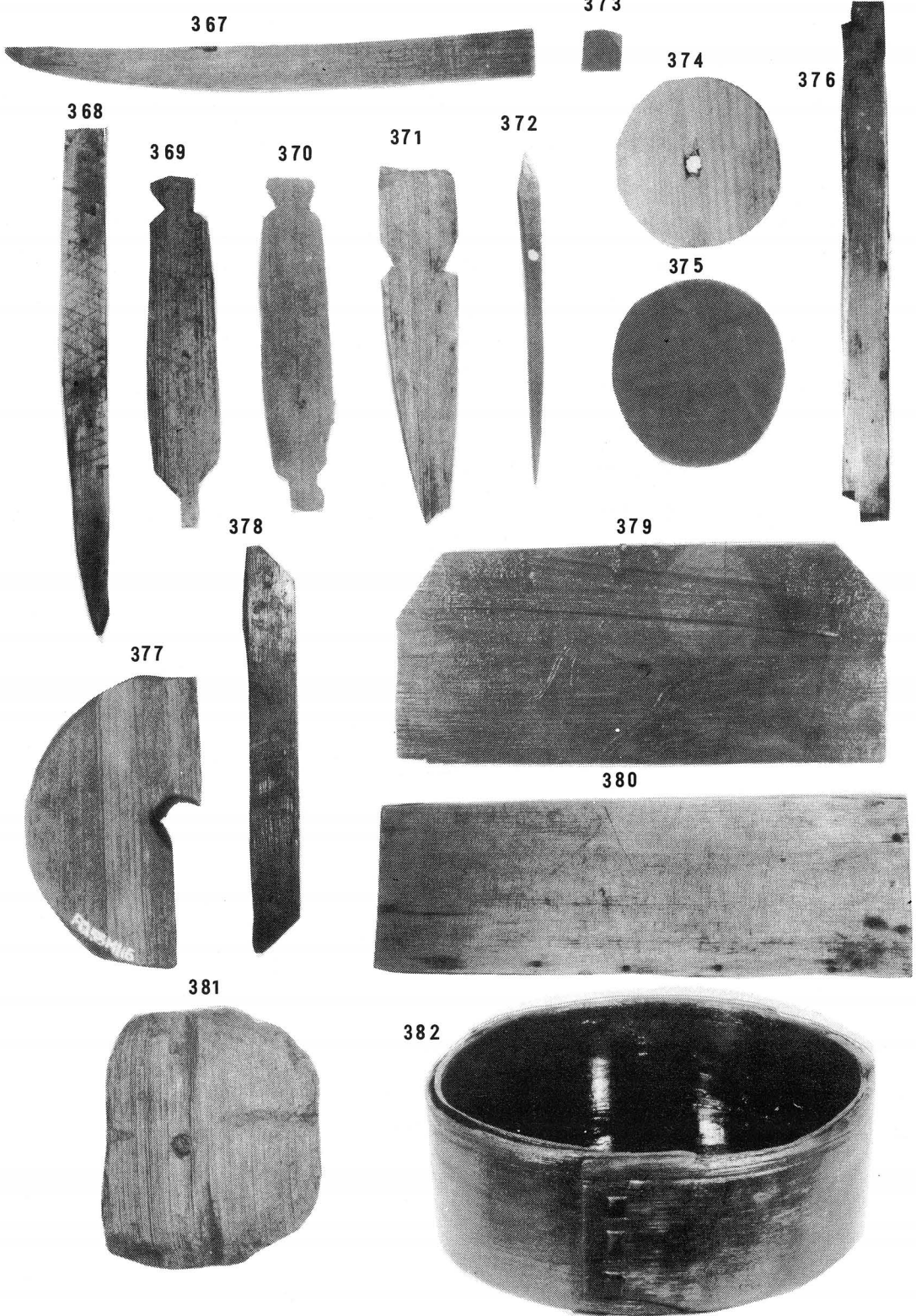
**395**：頭部に一条のくびれを有する棒状加工品で、断面形は楕円状を呈し全体に焼成痕がみられる。

**396**：頭部に一孔が穿たれ、部分的に焼成痕がみられる棒状木製品。

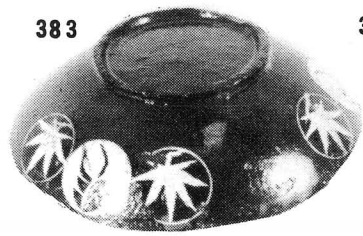
**397**：台形状の断面を有する棒状加工品で、木釘を挿入する一孔と横位の擦痕がものさし状にみられる。表面の整形は良好で使用のためか摩耗している。

**427**：二箇所にも木釘を有する加工品。引き出し等の取手とも考えられる。

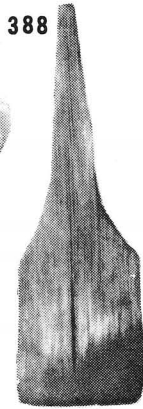
**434**：取手。農具として使用する升などの横に取り付けたりする。手で持つ部分は摩耗しており、着装部は丸くくびれを有している。



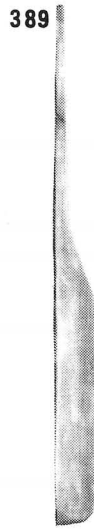




383



388

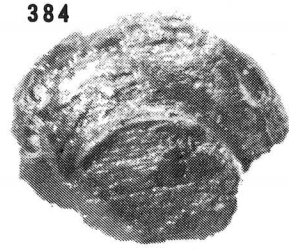
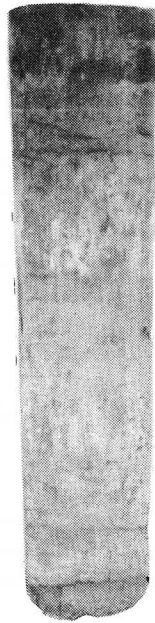


389

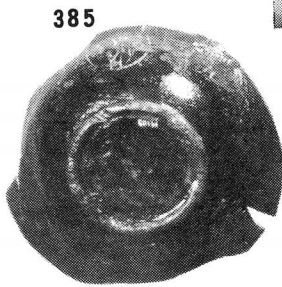


390

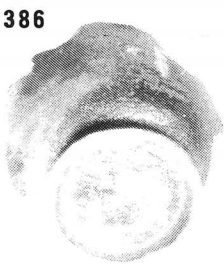
391



384



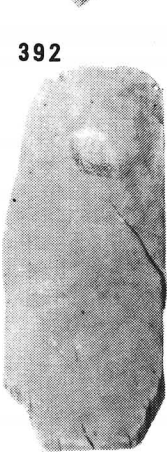
385



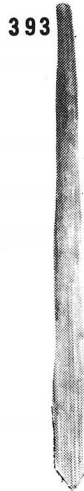
386



387



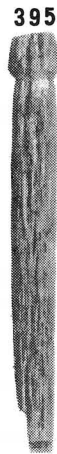
392



393



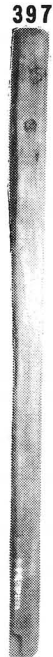
394



395



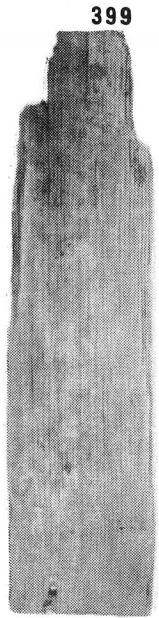
396



397



398

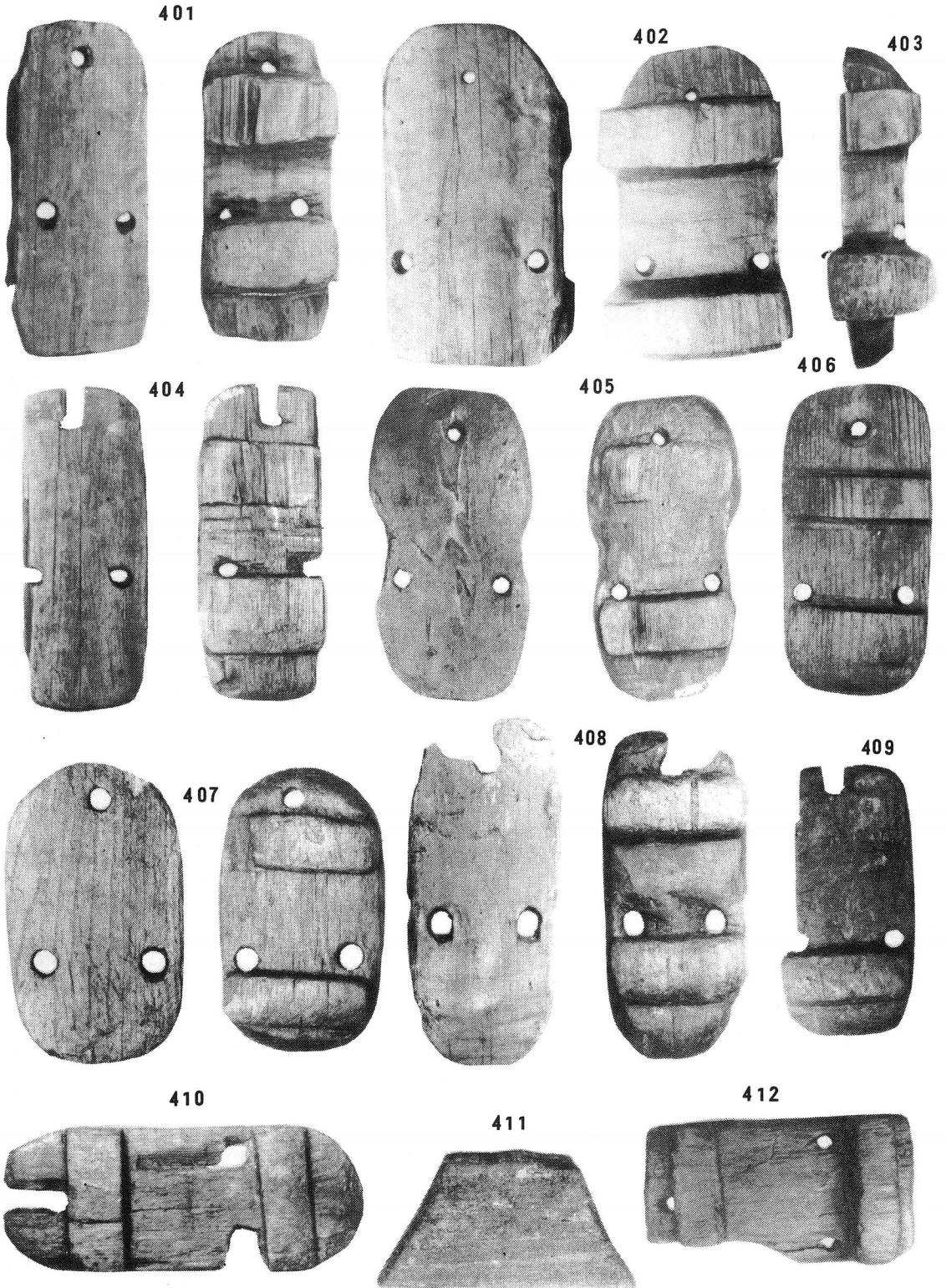


399

400



PL. 60 木製品(3)



- 435 :取手。434 より摩耗が少なく、断面形も角状を呈している。
- 436 :木釘を四箇所配し、表面は丸く、接合部は平らに整形されている。
- 437 :頭部に一条のくびれを有する棒状加工品。木目( 柁目) が明瞭に残り、半分に分れたためか、断面形は半月状を呈する。
- 438 :両端を削って柄状にしたもの。用途不明。
- 439 :板材ではあるが、中央( 残存部端) に二段になった三日月状の加工痕が残っている。
- 446 :花卉状加工品。室内あるいは建物の装飾の用途に使ったものだろう。
- 447 :櫛。歯が6本あったと思われ、使用痕が歯の先でしかみられないことから、食物等をかき混ぜる時に使用したと考えられる。
- 448 :小さな台状の加工品で、中央に一本の溝と斜めに対峙する小孔がみられる。整形は良好で面取りも規格的におこなわれている。
- 449 :小型の刀形加工品で、篋的な機能も考えられる。

( 工藤清泰)

#### ○木製品雑考( 1 )

##### 1. 下駄

履き物の種類は大変多く、城址生活でもいろんなものを材料にしたものがあつたと想像してもやぶさかではないと思う。

身近な材料を使って足部を保護し、生活を豊かにして活動したことは、縄文時代からあつたとされるから、木・藁のような繊維質のもの、竹・動物の皮や蔓性植物を使用して、履き物を作つたとしたら、それぞれの材料で鞋草や草履又は、足中草履に細工され、木や竹を利用して下駄に変化し、蔓性や、きつい繊維は横緒や鼻緒となり、動物の皮になると、今度は草履や下駄のように開放性のもから、足を袋状のもので包むものに発展していく。

城址からは数多くの下駄が出土した、下駄はその形態と夏期冬期によって、使用上でも区別されるのが現代感覚であるが、上代の下駄を履く理由は、雨天や汚物処理の時に用いるところから利用価値があり、中世になって一般的なことは、それが段々と監督的存在の人の履物に変化し、江戸時代も中期になると下駄は庶民の欠かせない生活用具となり、富裕人や芸人は金にものを言わせて贅<sup>ぜい</sup>をつくすようになったという。

城址からは20個以上もの下駄が出土した。

形の大小によって子どもおとなの区別は明らかになるが、どれとどれが一對となるかは判明できない。掲載用の写真でもわかり、複雑な形のものばかりであるが、塗りのついているもの

は認められず、痛み方もひどいもので、作り方においても精巧よりも幼稚、使い古びたという感が大きい。

鼻緒の穴の欠けや割れが目立ち、これは材質にも関係がある。

材質はとみるに、長い間の土中埋没に変色変質も大きく、確率云々となれば心もとないが、城址近辺の樹木で下駄として利用できるものは、こだわらなかつたろう。それだけの生活の知恵は昔の人にはあった筈だ。

柳・ドロ柳・松・杉・ヒバ・山桐・枋・桂・朴・樺等多彩であつたろうが丸印を付したのは確率が高いと思う。

## 2. 椀

ワンの字の音読は多くあるが、その中で盃・堦・椀・銃・鏡など、上代から使用されているから甚だ古い時代より使用されていたろう。

吾妻院の治承5年1月1日の条に千葉常胤が源頼朝に堦飯を献じたとあり、武士達は堦(椀)に飯を盛って食べている姿が見られる。

椀が城址から検出されるのも当然であり、今後の発掘にも出土の可能性は多い。

報告書(Ⅱ)P87には椀について「内面は朱・外面は黒の漆を塗って」とあるが、建物遺構や濠からは朱・黒色の漆質が度々検出されるが、木質部は既に腐敗か何かでその形は消滅している。

元来、東洋独得の色彩感覚からか、原始的感觉かはっきりしないが、漆椀は朱から始まり、その朱も同時に使ったが、特に黒椀を広めたのは茶の宗匠で有名な宗易(利久)からだとする資料があるが、黒椀の使用は身分的に低い田舎用としてさげすむ趣もあつたが、高倉天皇(1168～1180)の頃、というところ平清盛が全盛の時代であるが、当時陸奥南部の工人に、黒漆を素地にしてその上に赤やその他の漆で花鳥やその他の図案を施し、頗り雅趣に富んだ漆画をつくり、それが各地に流路をつないで「南部椀」の名で有名であつたとか。

木地職師には曲物を作る者、椀や鉢を作る職人を分けて前者は板木地師、後者はロクロ木地師といわれ、北畠氏が浪岡地方に登場した時代は既に板木地師もロクロ木地師も、大いに活躍していたことになるから、いくら出土しても驚くことはない。

ところが手元にある木材を利用して下駄を作ったように、椀の手作りをここ浪岡地方で行われたとは思われぬ。何故なら木地屋の住んだという地名も伝説もない。木地師は多量の水を使用するとかで住みつきそうな川の流域も狭小で、特にクリ・ナラ・ブナ・トチ・ホウ・白カバ・カエデ・サワグルミ等がふんだんに繁殖していなければならぬ。これが方地台になるからだ。

(葛西善一)

F 古銭 ( PL.61、Ch.75 )

総出土数は 549 枚 ( ナンバー付けしたもの。 ) であったが、運搬時に消失したもの、接合しているため名称等が不明のもの、現在使用している貨幣 ( 50円とか ) を除くと、総数 536 枚と認定できる。出土区は平場と堀跡に二分できるため、以下名称別個体数を記載しておく。

名 称	平場	堀跡	総計	出土率 (%)	名 称	平場	堀跡	総計	出土率 (%)
1 開元通宝	15	6	21	3.92	22 紹聖元宝	3	2	5	0.93
2 阜元重宝		1	1	0.19	23 元符通宝	3	1	4	0.75
3 唐國通宝		1	1	0.19	24 聖宋元宝	7	2	9	1.68
4 淳化元宝	1		1	0.19	25 大觀通宝	1		1	0.19
5 至道元宝	1	1	2	0.37	26 政和通宝	6	2	8	1.49
6 咸平元宝	1		1	0.19	27 淳熙元宝	1		1	0.19
7 景德元宝	4	2	6	1.12	28 紹熙元宝	1		1	0.19
8 祥符元宝	2		2	0.37	29 嘉泰〇宝	1		1	0.19
9 祥符通宝	3		3	0.56	30 至大通宝	1		1	0.19
10 天禧通宝	6	2	8	1.49	31 洪武通宝	28	21	49	9.14
11 天聖通宝	9	3	12	2.24	32 永樂通宝	19	5	24	4.48
12 明道元宝		1	1	0.19	33 宣徳通宝	1		1	0.19
13 景祐元宝		1	1	0.19	34 朝鮮通宝	2		2	0.37
14 皇宋通宝	5	5	10	1.87	35 嘉元通宝	1		1	0.19
15 至和元宝		2	2	0.37	36 洪徳通宝	1		1	0.19
16 嘉祐元宝	2		2	0.37	37 寛永通宝	7		7	1.31
17 嘉祐通宝	1		1	0.19	38 鉄 銭	1		1	0.19
18 治平通宝	1		1	0.19	39 五 厘	1		1	0.19
19 熙寧元宝	17	2	19	3.54	40 判読不能	146	18	164	30.60
20 元豊通宝	13	4	17	3.17	41 無 文 銭	100	31	131	24.44
21 元祐通宝	8	3	11	2.05	計	420	116	536	100.00

以上40種 536 枚の中で、判読不能を除けば無文銭 ( 鏹銭と記載しているもの。名称については検討の余地があると考えられるが今回は無文銭とした。 ) が24.44%の比率で最も多く出土している。舶載銭の中では、唐銭23枚 ( 9.87% )、北宋銭 130 枚 ( 55.79% )、南宋銭 4 枚 ( 1.71% )、明銭74枚 ( 31.75% )、朝鮮銭2枚 ( 0.85% )、他2枚となり北宋銭と明銭が圧倒的に多い。もちろん、文字があるからと言ってすべて舶載銭とは限らず、日本で铸造された可能性が

あるものも含まれることを特記しておく。

PL.61 古銭出土状態

古銭の出土状況を見ると、遺構やピットと共伴する少例を除いて、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層上面から散逸した状態で出土することが多い。また、竪穴遺構などの覆土から出土する場合は、廃棄というより埋め土の中に混じった状態が多く人為的な面は少ない。以下は人為的な所産と考えられるものである。

- S X 12 (土壙的性格) から13枚伴出。
- S X 31 ( " " ) から29枚伴出。
- F 54区Ⅱ層から13枚伴出。
- J 57区ピット覆土から17枚伴出。
- I 56区ピット覆土から4枚接合状態で伴出。

これらは、土壙的性格の遺構と掘立柱建物跡に伴う柱穴からの出土で、どちらも古銭をまとめて廃棄したような状態のものである。

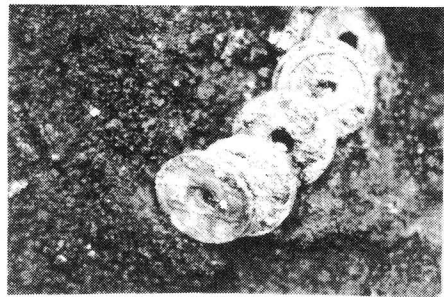
また、浪岡城跡落城の年代と共に「寛永通宝」には留意する必要がある。寛永通宝は堀跡からはまったく検出されないのに対し平場では7枚の出土をみている。特にS T 71とした竪穴遺構の覆土から出土していることは、本城跡の遺構がすべて落城以前のものであるという認識を改めなければならないと考えられる。そして、堀跡の機能が落城によって終わった後も、平場では何らかの居住者がいたことを推測できるのである。

古銭についての計測値は別表を参照していただきたいが、写真・拓影等は紙数の関係で掲載できなかったことをおわびする。

F 54区Ⅱ層



J 57区S X 31 フク土



(工藤清泰)

## G その他の出土遺物

これまでみてきた出土遺物の他に特色のある遺物を概観する。

### 1. 布 ( PL.62 ㊸ )

I 57区Ⅱ層上面から出土したもので、わずか2cmほどの細片であるにもかかわらず、表裏面に赤漆状の付着がみられたために残存していたものである。素材は麻の繊維で、平織りである。同一箇所から1cmにみたない細片も出土しており、10cm以上の製品と考えられる。

### 2. 漆器の被膜 ( PL.62 ㊹ など )

漆器の被膜は、各所から出土している。主な所では前述SE20覆土 ( PL.25 )、SX11覆土、SE28覆土、J54区柱穴内などがあり、竪穴遺構からは細片で出土するケースが多い。掘跡と違い平場の場合は湿性がなく、木部の残存は極めて稀であることから、被膜だけになるものである。被膜は一般にまとまって出土することは少ないが、同一箇所から出土したものをつなぎ合せてみるとPL.63 ㊺にもあるように文様等もわかるものがある。この場合は黒地に朱で草花文を施している。

### 3. 鉄砲玉

図示はできなかったが、I 57区、L 55区SX12覆土、堀跡の3個が出土している。

いずれも直径1cm前後の鉛玉で、8gほどの重量がある。

### 4. 鉄滓・銅滓

鉄滓は重いものになると1kg以上のものもあり、遺構とは共伴しないで出土することが多い。銅滓は、溶解物付着土器に接着した状態で出土することもあるが、いずれも少片で10g程度の重さしかない。

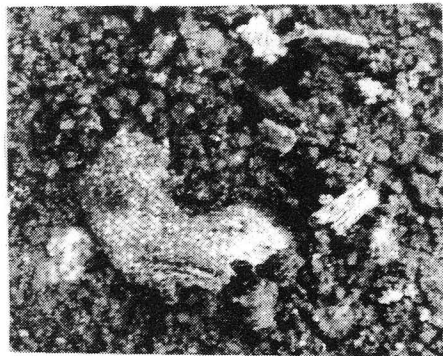
### 5. 自然遺物

主として堀跡から出土しているため、前述の部分参照されたい。

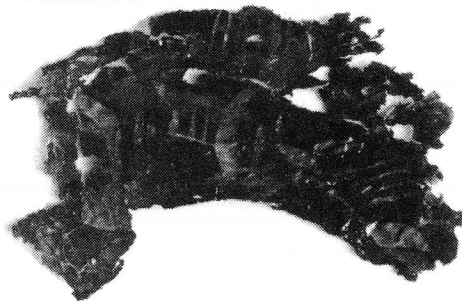
( 工藤清泰 )

PL.62 ㊸布出土状態 ㊹漆器の被膜

㊸布



㊹漆器被膜



## H 縄文時代・弥生時代の遺物 ( PL.63、Fig.94、Ch.75 )

縄文時代・弥生時代の遺物は、土器の少片と石器が出土している。土器は、散乱した状態でⅠ層とⅡ層からのみ出土し、石器はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層・遺構覆土と広い範囲にわたって出土している。本遺跡では、他所から運び込まれたと考えられる土砂がないことから、遺跡上に縄文および弥生時代の生活の場があったと推定して大誤はないであろう。以下、個別に紹介する。

### 1. 土器

441～443、447～450、452はいずれも甕の胴部片で、器体表面には沈線による区画文とRLかLRの単純な斜縄文がみられ、縄文部分は磨り消し状になっているものもみられる。

444・445・446の3片は沈線は認められず斜縄文だけであるが、前述した甕の胴部片とみてよいだろう。以上の土器は、縄文時代後期の土器群と考えられ、いずれも表裏面の摩耗が激しいことは、館内の地業による攪乱にあったと理解される。

451は小型壺形の土器で、4～5条の沈線をめぐらす肩部の破片である。縄文時代晩期頃のものとして推定される。

### 2. 石器

453：擦り切り両刃磨製石斧。石質は泥岩で黒色から青灰色の色調を呈する。先端部は使用による摩滅がみられ、側面にも無数の擦痕が観察される。縄文時代。

454：両刃磨製石斧。緑色凝灰岩製で、緑灰色の色調である。根元が欠損したものを再加工したようで、広い部分の中央に幅4mmほどの溝を縦位にめぐらしている。石錘としても使用したものであろうか。

455：縦型石ヒ。珪質頁岩製で、舟底形に片面だけ調整している。刃部は押圧剥離をくわえている。

456：片刃磨製石斧。泥岩を使用し黒色を呈する。刃部はほとんど摩耗しておらず、表面における擦痕観察では横位のものが多いようである。弥生時代。

※本資料は弥生時代に特徴的な遺物であると、青森県立郷土館鈴木克彦氏から教示を受けている。

457：縦型石ヒ。珪質頁岩製で黒色を呈する。片面だけ剥離調整し、一方はほとんど無調整である。リング痕が残っている。

458：柳葉型石鏃。珪質頁岩製で赤味のある黒色を呈する。両面に細かい剥離がみられる。

459：有舌型石鏃。珪質頁岩製で暗灰色を呈する。整形・調整とも良好な製品で両面中央の稜から刃部に向かって剥離痕が明瞭である。

460：横型石ヒ。珪質頁岩製で明灰色を呈する。調整は粗雑で、刃部の剥離は刃として使用できるか疑問なほどである。肉厚なところをみると未製品の可能性もある。



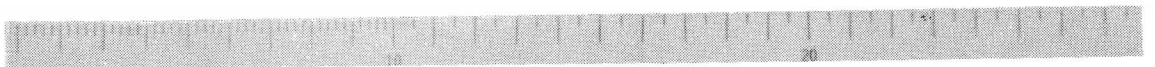
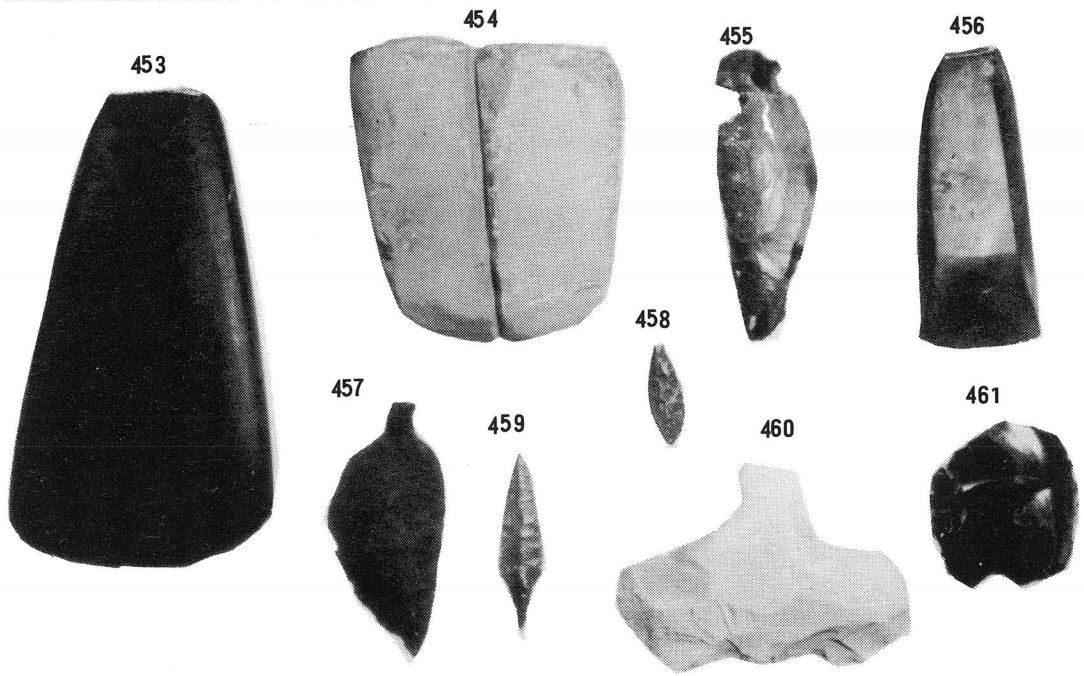
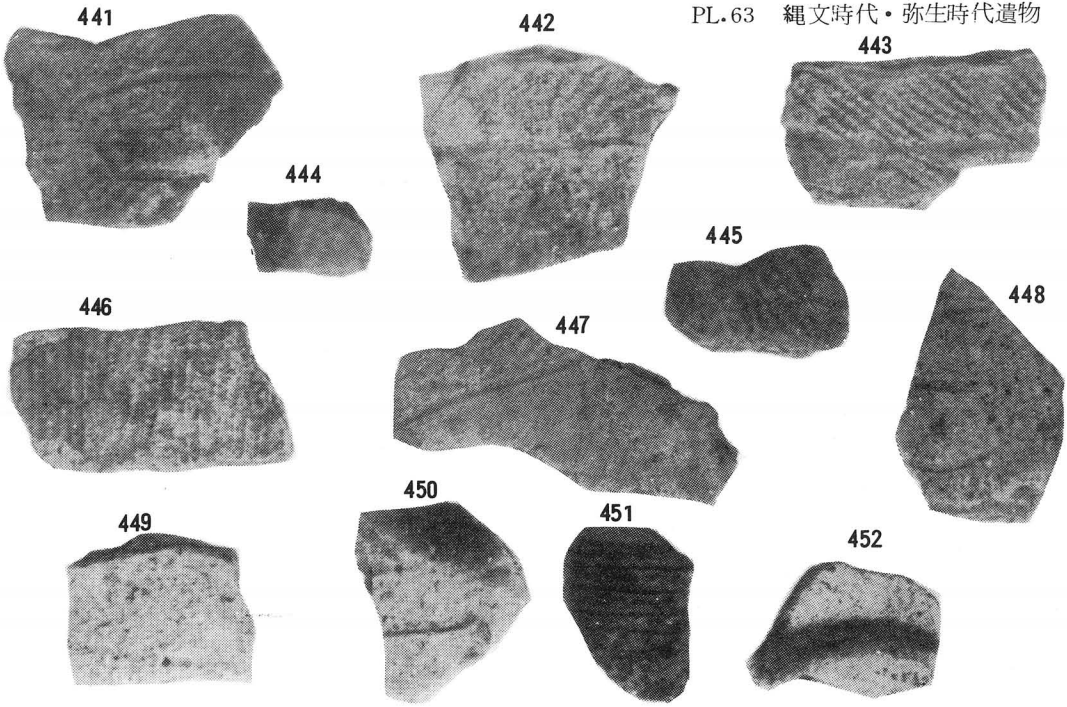
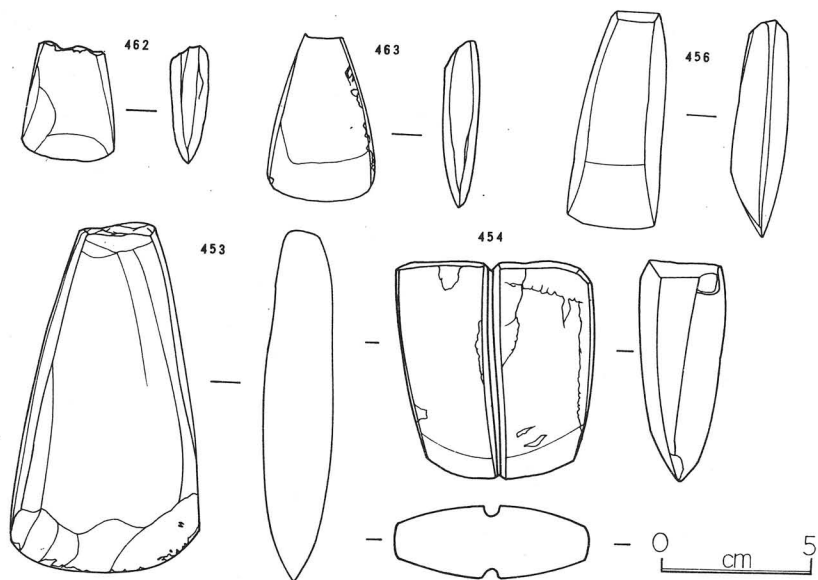


Fig. 94 縄文・弥生時代石器実測図



462：小型磨製両刃石斧。緑色凝灰岩製で暗緑色を呈する。刃部の摩耗は少ない。

463：小型磨製両刃石斧。珪質頁岩製で黒色を呈する。側面と根元がやや欠損している以外は良好な残存状態であるが、素材に使った石の形によるものか凹凸した面もみられる。刃部の摩耗はほとんどない。

以上、縄文・弥生時代の遺物について概観したが、現在まで同時期の遺構と認定されるものは1例も検出されていない。今後の調査で究明されると思われる。

(工藤清泰)

## Ⅶ 浪岡城跡出土の土師器と須恵器

### 1. 土師器 ( Fig.95、PL.44 )

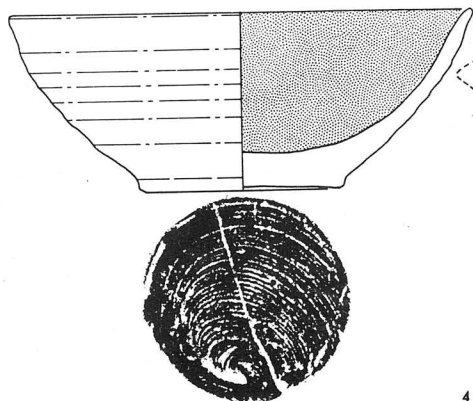
土師器の器形は、甕形、坏形である。出土品の内、大部分は正確に器形を断定できるものは少なく、層序、位置、遺構とは関係なく、発掘地点に散乱した状況で検出されている。量的には、坏形および甕形の底部と胴部が多く、全体的に焼成・胎土組成は良好なものが多い。実測、復元できる個体は少なく、完形に近いものは坏形の一個体しかない。以下、残存部の中で特徴のあるものを抽出し、坏形のものに限り図と写真によって説明する。

#### 坏形

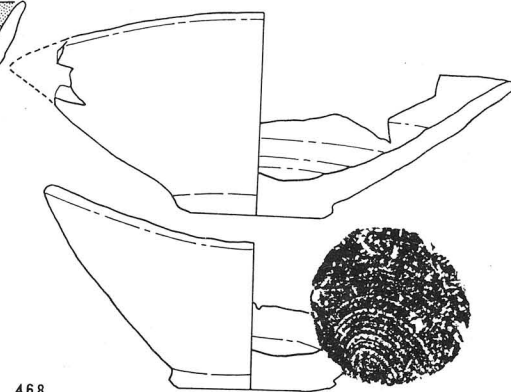
- Ⅰ類 内黒坏　ロクロ使用で、底部が広く、胴部は丸みをもった安定感の有る器である。外面には、特別な整形痕はみられないが、内面はヘラミガキによる技法がとられている。いずれも胎土はきめこまかく少量の微砂を含んでいる。カーボンの吸着は弱く、胎土も灰褐色で、カーボンの浸透は見られない。内面はミガキ技法を施しているため光沢がある。内外面とも摩滅している事から生活に使用された時間が長かったものと思われる。( 464 )
- Ⅱ類 粘土紐巻き上げ坏　口径が12.5cm、器高5.0cm、ほぼ完形の坏である。ロクロ使用の器よりも肉厚な為に、重量感があり、底部が特に厚く、内面はミガキの整形痕がある。底部内面と胴部に粒子が粗く胎土となじまない赤褐色の砂粒が混入し、砂粒がもろくくだけで中空になっている。器厚は口縁部に近づくほど薄く外反せず、底は菰編の圧痕である。焼成温度が低い為か、色調は灰褐色でソフトな感じの器である。( 465 )
- Ⅲ類 皿状の坏　(A)底部が小さく4.4cm、器高が高い所で5.6cm、低い所で3.8cmと高低差が1.8cmもあり、全体にゆがみ、口縁径も相当の差がある。楕円形に湾曲、肉薄で胎土に微砂を多く含み表面がザラザラした器である。器形の変形は意図的に変形させたものか、焼成時の失敗によるものかは不明である。( 467 )
- (B)底部が広くて肉厚な器で、皿としては若干深くて浅鉢のような形状である。胎土は粗いが焼成がきわめて良好で叩くと金属的な音を発する。器面は内外面とも切り離し後の整形痕は見られない。(A)(B)ともに色調は暗褐色を呈しているが、(A)の個体は二次焼成によるものが斑に灰褐色の部分がみられる。( 468 )
- Ⅳ類 碗状の坏　(A)ロクロ使用で切り離し後に横ナデによる整形痕がある。立ち上がり部にかけて丸みをもち、口縁部が外反している薄型の器で、焼成は良好。明褐色を呈する。胎土に混入している砂粒が焼成時に胎土から離反するのか、内外面ともに砂粒の部分が剥離している。残っている粒子も胎土よりやわらかく、強い赤褐色を呈している。

Fig.95 土師器実測図

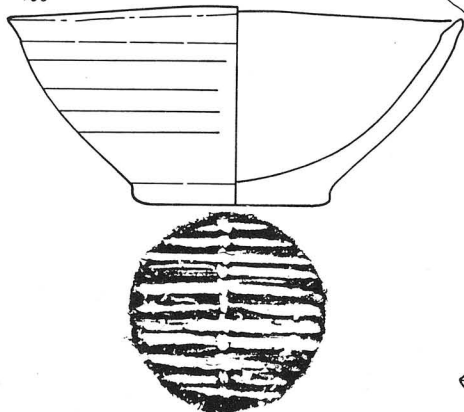
464



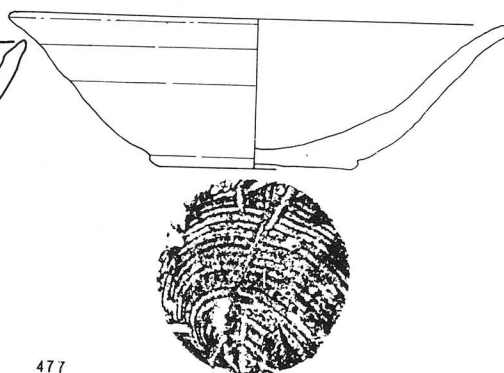
467



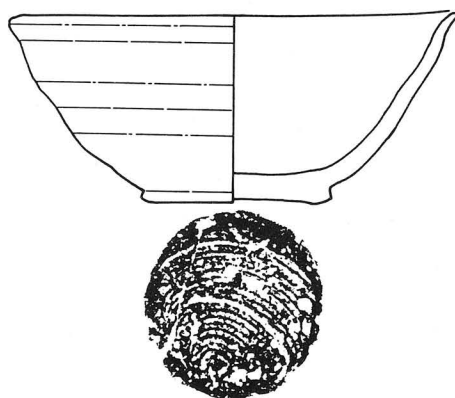
465



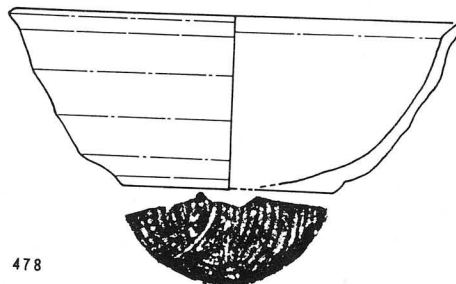
468



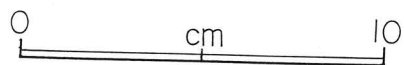
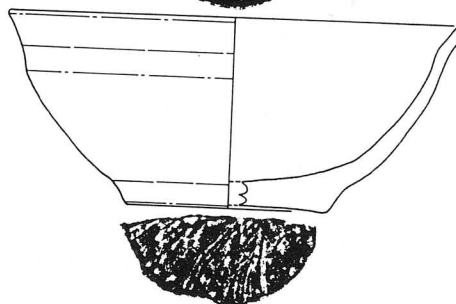
468



477



478



( 466 )

㊸ロクロ使用の器で外面に指四本による波状の起伏をもった回転調整痕がみられる。さらに口縁部内面は角度をもって切られている。胎土は、砂粒が細かく含量も少なく一見して緻密にみえるが、焼成温度が不足の為か器体も柔らかく、手で擦ると胎土がそのまま付いてくる。生活に供された時間が長かったためか全体が擦りへった状態で、特に内面底部は底が抜けたようになっている。( 468 )

㊹手づくね成形のもの。胎土の厚さに多少のむらがみられ、口縁部は薄く外反し胴部に丸みをもっている。底部は厚く内面に湿性布等による横ナデの整形痕がある。底部の切り離しはヘラに抛り、削り整形痕がみられる。色調は淡褐色で砂粒は石英質の小砂粒がみられる。( 478 )

#### 甕形他

小型の器以外は粘土紐巻き上げによるものとみられる。一般的に焼成は良好であるが、胎土中に粒子の粗い砂粒が混入している。整形としては、ヘラミガキ、湿性布、指によるナデ(主に横方向)が施されている。中型甕は胴部がゆるいふくらみをもち肩部でくびれ、口縁部がやや外反し、その広さ、角度に多少の差がみられる。

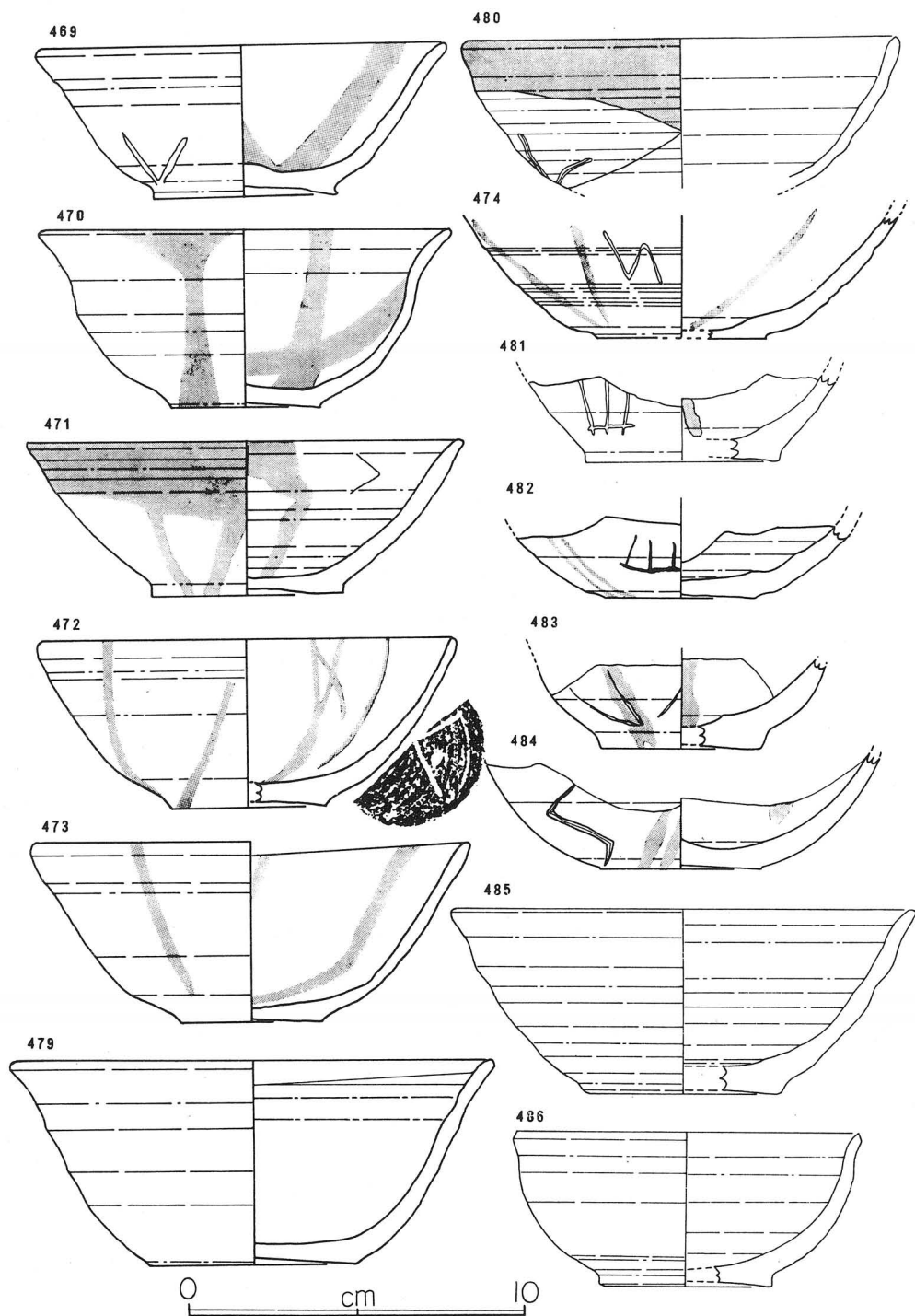
#### 2. 須恵器 ( Fig.96・97、PL.64 )

土師器同様に出土状況は一定せず、散乱した状態で検出されている。すべて大なり小なりの破片で完形品はない。器形は坏形、壺形、中・大型甕である。坏形および壺形はロクロ使用痕があり、大型の甕は肩部まで平行叩き目を持つものと、叩き目が交差して格子状になっているもの、無方向に交差し格子目のくずれているもの等がある。中型の甕には、肩部から口縁部に太い櫛目状の平行沈線が若干右方向に回りながら施されて、さらに沈線を横方向へのナデによって半分ほど埋め込んでいる器片がみられる。坏形以外は、胎土・焼成が良好で色調は青灰色を呈して、叩くと金属性の音を発し堅固である。大型甕、中型壺の一部に黒色の光沢を有するものと白色のツブツブをまぶしたような付着物がみられるもの( 475 )もある。偶然からくる自然釉としては、均一性を持っている。しかし当地方での須恵器の施釉技術体系が立証されていない現在、人為的に施釉を行っているのか、窯内での位置その他からくるのかは不明である。

#### 坏形

坏形には、大別すれば還元炎焼成のものと酸化炎焼成のもの二つがある。成形はロクロ使用で切り離し後にナデ、ミガキ等の整形技法をとっている。形状としては、口縁部が肩部から強い角度で外反するもの( 469 )、底部立ち上がりから丸みをもって外反せず口縁部が薄手になる皿状(浅鉢)のもの( 470 )、底部の広さに対して器高がなく、丸みをもって口縁部が内湾している碗状のもの等がある。なお、坏形には重ね焼きをしたとみられる火ダスキの器が多く、以

Fig.96 須恵器実測図(1)



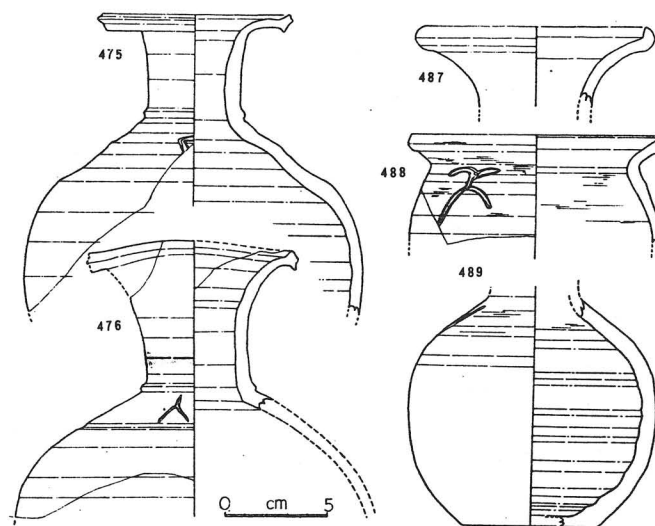
下それらについて述べよう。(469・470・471・472・473・474・480・481・482・483・484)

火ダスキのみられる器は、重ねの上下の関係かタスキが1本から多いもので3本が底部で交差している。また内面には2本、外面に3本入っているもの、タスキ巾の相違がみられるものなどがある。色調は、還元作用が不完全な為に土師器の色調に近似した明褐色なものと、中間的な灰褐色を呈するものとがある。胎土も内外面の色調より赤みを呈する。この火ダスキが小型の坏形に多い事はどういう理由であろう。還元作用が出る高火度まで耐える陶土、技術等が確立されていないのか、用途的に必要としないのか、いずれにしても意図的に製作したものと思われる。何故ならば、坏形等の小型器種は大型の甕、壺類とは別に、器にあった窯をつくり焼いていたものであろうし、同一窯内で位置を変えて焼いたとは思われなからである。

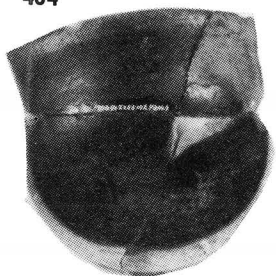
当地に供給されている窯元としては、当町郷山前地区に所在する窯場跡の製品とは相違がみられることから、現在報告されている前田野目系、持子沢系のものと考えられるのではなからうか。その理由として地理的に一番接近している事、出土品をみても近似している点が多い事、胎土・色調・口縁部外反の角度・広さ、特に自然釉の光沢と筧書記号の同一のものが何点かみられることがあげられる。

今回の調査で筧書記号の確認されている破片は19点である。内訳は坏形が12片(W、山、山、L、II、山、リ、V、V、IV、VI、V)であるが記号的には7種類である。(469・474・476・481・482・483・484)甕形、壺形は6片(ト、文、<、Ⅴ、ム、Ⅴ)で坏形と異なり同一の記号はみられない。刻まれている個所は坏形では胴部下位に10片、底部に2片である。甕形、壺形はすべて肩部から頸部にかけてである。今後の問題としては、低火度焼成の坏形の分類、筧書記号を施した器類の集計・整理、施釉類の分類をする必要がある。

Fig.97 須恵器実測図(2)



PL. 64 土師器・須恵器  
464



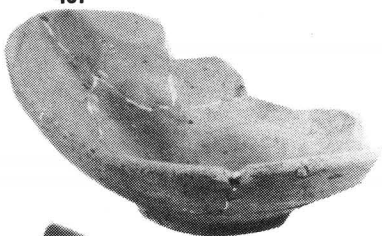
465



466



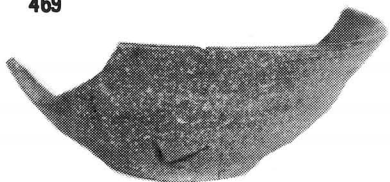
467



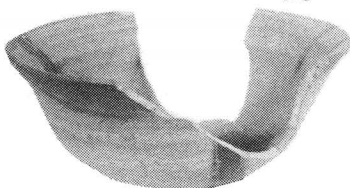
468



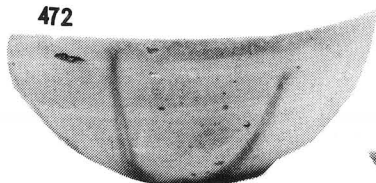
469



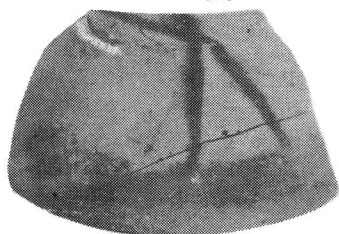
470



472



471



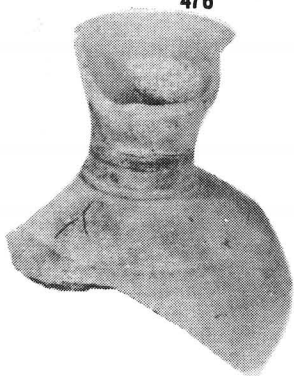
473



475



476



474





## Ⅶ 浪岡城の落城をめぐる諸問題

### ( 1 )

中世末—近世初頭の津軽地方史には解明の困難な部分が多い。その原因はこの時期の史料が少ないことにある。史料の不足は寛永4年(1627)9月10日弘前城の天守閣に落雷があり、その際1500挺の鉄砲をはじめ集められていた記録・系図等を失ったことによると考えられている。『津軽歴代記類』所載の「佐藤家記」はこの間の事情を、

此外、重器武器竝、古代之記録、諸之感状、系図、伝書迄、悉く焼失に及び<中略> 天守焼失以前より、御家中より差上候古記等、毎日御調、書記相認罷在候処、此節不残焼失仕候。

と述べている。

一方、この時期の津軽史と南部史の記述には多くの相違点が見られる。津軽藩側の史書の主張が正しいのか、南部氏の立場で書かれた史書に現われる津軽の状況が事実を伝えるものか、史料の不足とあいまって真実を知ることは非常に困難となっている。このような事情は発掘調査を進めている浪岡城についてもあてはまる。本稿では天正時代、落城頃の浪岡城に関する津軽史・南部史の記述状況を述べ、問題点にふれてゆくことにしたい。

### ( 2 )

浪岡城—それは北畠頼家の子孫が拠った城と考えられている。15世紀の後半に現在の浪岡城を築き土豪としての地盤を固めたと推定される北畠氏は、16世紀前半もなお安定期を持続したものと思われる。具永・具統・具運三代は『言継卿記』に「出羽国浪岡」の名で記され、京都と連絡を保ち官位を得ていたことが分かり、天文年間の北畠氏の積極性をかいま見ることができる。『津軽一統志』は「具永卿より以来、世以て尊称して諱を不云して御所と称しける」<sup>(1)</sup>と記しており、具永が時代を区切る人物であることをうかがわせる。

しかし、天文期の浪岡城にはすでに崩壊の要素が内在し、それは具永の死とともに本格化したと考えることも可能である。具永・具運が関与した寺社造営事業は、浪岡御所の経済力の豊かさをしのぶ手がかりとなるが、反面勢力の下降線を示す材料としててもとらえうる。寺社の造営費が浪岡御所北畠氏の経済力を圧迫したという推論も可能であり、神仏に頼り勢力の維持をはかったとする見方も成立する。また、北畠氏の衰退を示すより具体的なものとして、永禄5年(1562)に表面化した内訌、いわゆる「川原御所の乱」をあげることができる。この乱について『永禄日記』は、

四月五日川原之御所親子大御所江切入、大騒動ニ而城中ふせき兼、終に御所様を切殺、川原の御所親子も切られ申候間、川原御所之家中散り散りに罷成候。<中略>其節浪岡譜代之侍も多く勤落ニ而浪人仕候。

と記している。また『津軽一統志』も、

其頃御所の親戚叔父浪岡弾正大弼（姓名不詳）と云人あり、正敷氏族たる処に如何成宿意か有けん。父子其外同志の者を愷し城内へ切入忽御所を弑虐す。依之浪岡譜代の者ども則座に大弼父子討捕ける。＜中略＞ケ様の騒劇により諸士の心一和せず。爰彼に立退者も多かりける。＜（）内は割注＞

と述べており、両書とも川原御所の乱後、浪岡御所北畠氏が崩壊にむかい、家臣団を失ったことを記している。この乱は所領をめぐる対立が原因といわれるが、この事件を契機として浪岡御所北畠氏は一族の結束がゆるみ、滅亡期に入ったと考えられる。

### （ 3 ）

ここで、浪岡城攻撃に至る大浦為信（津軽藩祖）の軍事行動の主なものを、津軽藩の撰んだ史書『津軽一統志』により年代順に要約しあわせて若干の考察を加えることにしたい。

元龜2年（1571）5月5日、大浦為信は修補を終わった堀越城を拠点に石川大仏ノ鼻の南部高信を攻撃した。高信は安信（南部23代）の弟で『津軽一統志』は「智勇備りたる老功の主将」とほめたたえている。当時平川に臨む石川城に居住して津軽地方の支配に当り、

幕下には大光寺に瀧本播磨守重行田舎館には千徳掃部（実名不詳）和徳には小山内讃岐守（同上）浅瀬石には千徳大和守（同上）外の浜油川には奥瀬善九郎（同上）其外小城垣上の諸士高信の指揮に應じて、互に無二の忠志を競ひ盡す。＜（）内は割注＞

のように強い統制力を持っていた。なお、この記述の中には浪岡御所の支配についてふれていない。早暁の急襲に石川方は不意をつかれ、

僅の城兵共方々の矢倉多門に打揚りて、鉄砲を打出しけれども寄手の矢玉に比れば、九牛が一毛に異ならず

といった戦況で高信は自害、為信は石川城を入手して、

城は板垣兵部に御預け、番手の人数弓鉄砲の足軽どもを差副られ、<sup>キビシク</sup>稠敷是を守らせなどの処置をした後、堀越に引き揚げている。

こうして平川の西岸を入手した為信は、その日の内に岩木川東岸の和徳城をも襲撃した。かかる強行策は功を奏し、端午の節句の祝い酒に酔う和徳方は応戦のまいなく城主 小山内讃岐は討死、為信は一日のうちに石川・和徳両城を入手した。

一見無謀と見られる為信の作戦の裏には、大光寺・和徳・浅瀬石勢の連合による反撃を恐れたことと、せっかく入手した石川城や従来から保有していた堀越城と大浦城の間に和徳領が入り込んでいたため南部勢により分断される可能性があったことなど諸事情の存在が考えられる。

為信の軍が次の目標としたのは大光寺の勢力であった。当時大光寺には南部左衛門佐の死去の後、遺児六郎七郎にかわり政治をとるべく南部から派遣された瀧本重行がいた。為信は猿賀の領有をめぐる大光寺方と対立していた乳井福王寺の嫡子乳井大隅を味方に引き入れることに成功、一方の大光寺は浅瀬石・浪岡・外ヶ浜の勢力を集めていた。このような状況の

中で南部信直は津軽支配の強化をはかるべく、元亀3年(1572)軍事行動をおこし、先陣の勢多石隠岐は鹿角口から侵入して大鰐宿川原に陣をかまえた。しかし、大浦方と結ぶ九戸政実の不隠な動きに信直は後続の軍を送れず、勢多石の軍は津軽から引き揚げることとなった。一方、大浦為信は南部系の浅瀬石城主千徳大和と自らの家臣小笠原伊勢両家の縁組問題に関与し、これに圧力を加えて浅瀬石を味方とすることに成功、大光寺城を中心とする南部系の勢力のバランスは崩れはじめた。大浦-浅瀬石の連合、大浦-大光寺(滝本)の対立といった動きの中で、大光寺・浅瀬石両勢力にはさまれた新屋・尾崎などの館主は大光寺方の圧力もあって対応に苦慮し一時は浪岡に落ち行くなど、小館の土豪は嵐にもまれることとなった。

こうして天正2年(1574)8月(『永禄日記』は天正3年)、第一次大光寺攻撃の日を迎えたのである。為信側は堀越城を拠点に館田林まで前進、滝本方も大光寺城を出て対決した。この戦いは為信自身敵兵と戦い深田にはまり窮地におちいる場面もあった。夕刻までの対戦で双方とも討死や手負の者を多くしたが勝負は決まらず、日没により軍を引き揚げています。

なお、この戦いの際大浦為信は浪岡勢が大光寺滝本重行を応援することを防ぐため、大浦方に加わった浅瀬石の千徳大和の軍を浪岡口に配して大光寺-浪岡間の連絡を遮断した。また、新屋・尾崎両城の勢力に対しては葛原治部・下新岡出雲の軍勢を配置している。

第二次の大光寺攻撃は天正3年(1575)1月1日に行われた。大光寺城側は前回の合戦以来準備はしていたものゝ元旦ということで気を許し、不意を突かれた滝本重行は大光寺城を明け渡し、南部に退去する結果となった。滝本重行は平内小湊口から去ったとされ、その際大浦方は滝本の前後に下新岡出雲・葛原治部の軍を配したほか、浪岡口には浅瀬石の千徳大和の軍500余騎を配置した。

一方、『永禄日記』はこの合戦を天正4年(1576)のこととし、浪岡城に関しては、

滝本を送候節浪岡大手先、大浦より大勢詰置候得共、子細無御座候。

と記している。このようにして大浦為信は浅瀬石川流域から南側を入手し、次の攻撃の矛先は浪岡に向けられることとなった。天正6年(1578)7月20日為信の浪岡城攻撃の日が近づいていたのである。

#### (4)

以上『津軽一統志』を中心に、大浦為信の浪岡攻撃の前段階を見てきた。続いて天正時代まで津軽地方を支配した南部氏側の史書も繙き、その主張を考察することとしたい。

南部氏の始祖光行から26代信直時代に至る歴史的叙述『南部根元記』は「津軽騒動之事」の一項をたてて、南部氏の津軽入手の時期を23代安信時代とみ、安信の弟高信が津軽に出陣してこれを平定、安信の命により石川城に居住し、晴政の時代まで郡代の任に当たり津軽三郡を支配したとしている。

『祐清私記』は津軽に関する史的伝承を幾項か載せているが、「相川・西野逆意付」の項で、<sup>③</sup>24代晴政時代にそれまで南部一族を派遣していた津軽郡代に「津村何某」を任用し、堤浦の屋形に置いたことを記している。津村は関東侍の相川掃部、葛西氏関係の西野内匠を重く用いたため、「永禄甲申末より、元龜の始に至る迄津軽中何となく物騒々敷なり」という状態になり、元龜3年（1572）兩人はついで郡代を攻め津軽を支配した。同書は高信の津軽出陣に関する項をたてており、高信の軍は狩場沢から津軽に入り「みやうけん堂を跡にし大豆と云ふ処へ追詰」「柳久保之辺に野陣を張て人馬之足を被休」「戸川谷地と云処にて相川か乗たる馬ふけの中へ踏入」という順で、やがて兩人を討ち取って津軽を回復した。浪岡周辺の地名が出るが『津軽一統志』には「戸川谷地」に相当すると考えられる場所が、天正13年（1585）南部勢名杭日向守の軍が十川の大藪にはまったという形で登場する点関心を引く。なお、元禄11年（1698）の自序のある戸部一愨斎の『奥羽永慶軍記』は高信の石川入り、津軽三郡支配を「天文の始」としている。<sup>④</sup>南部氏側や秋田氏の活動を記す史書では、石川高信の津軽支配開始を天文初年と見る説や元龜3年とする説があり、その治世は天正時代に及ぶとみている。また、これらの書では大浦為信により浪岡城が攻撃される時点为天正18年（1590）と考えている。

#### （ 5 ）

ここで再び津軽史の立場から浪岡落城を考えることにしたい。前述のように津軽側の歴史は大浦為信の浪岡城攻撃の日为天正6年7月20日のこととしている。『津軽一統志』のこの日に至る記述は「浪岡落城御奇計付り御所殺害之事」の項にまとめられており、その構成を要約すると次のようになる。

- (1)浪岡御所は北畠顕家卿の末裔である。
- (2)永禄・元龜の頃高信の二男彦次郎某が浪岡に居住したが早世し、石川城落城で高信も生害したため浪岡家の勢力は回復した。
- (3)家臣団の配置は源常・軽井・強清水の三人が浅瀬石口を、大釈迦の奥寺万助は外ヶ浜を押さえていた。また、原子村の原子平内兵衛・白銀村の吉町弥右衛門は西根大浦口の守備に当たっていた。
- (4)浪岡弾正大弼が御所を弑害。浪岡譜代の武士が大弼父子を討つが、双方とも死傷者を多く出した。御所の弟秋忠はその後始末をしたが病により死し、息男秋則がこれに代わった。この乱により浪岡の家臣団に動揺がおきた。
- (5)大浦為信は浪岡攻撃を計画、白銀村の吉町弥右衛門を内応させた。
- (6)為信は忍者砂子瀬勘解由・小栗山左京を使って浪岡近辺の博奕盗賊を業とする“しれ者ども”を手なづけ、浪岡攻撃の計画を打ち明けた。
- (7)天正6年7月20日未明為信の軍は大浦を進発、本郷・竹ヶ鼻口、赤茶村、十川口3万より浪岡

城を攻撃した。(表参照)

(8)かねて手なずけておいた“しれ者ども”は城内に乱入、折りあしく左近秋則は外ヶ浜奥瀬の館に行っており、城内は混乱状態に陥った。

(9)自ら乗物に這い入った御所を“しれ者ども”は為信のもとにかつぎこんだ。こうして捕虜になった御所は西根の寺院に送られた。

(10)為信は城内に入り火を消して後始末をし、「上下安堵の掟」をだし、城番として5人の者を任命、22日大浦に帰陣した。

(11)御所は切腹、西根の禅院に葬られた。

このようにして浪岡城は落城するが、この項はさらに外ヶ浜奥瀬館にいた秋則が姉をさがしあて南部に去る話や、大浦為信に内応した吉町弥右衛門の処置、原子平内兵衛の召還などにもふれている。

『津軽一統志』の成立は享保16年(1731)のことである。ここで同書完成以前に成立していた歴史的記述の浪岡落城に関する部分の概要も紹介し、『津軽一統志』に見える浪岡落城の記事が成立する背景を考察したい。

まず、高屋豊前清永が津軽四代藩主信政の命により、寛文4年(1664)に編んだ『東日流記』の記す浪岡落城の過程をみたい。同書によると、

(a)浪岡御所は北畠頼家卿の末で具永卿の子である。

(b)大浦為信は両度にわたり出馬しているが、浪岡側は譜代の武士が強く防ぎ支配することはできなかった。また、浅瀬石大和も浪岡とたびたび競り合っていた。

(c)浪岡の家臣団を見ると源常・軽井・強清水の3人が浅瀬石を、奥寺萬助が大釈迦に住居して浜辺を押さえており、原子村には原子平内兵衛、杉村白銀村には吉町弥右衛門がいてそれぞれ西根大浦を押さえていた。

(d)大浦為信は吉町弥右衛門を内通させた。

(e)浪岡御所の叔父大弼が御所を討ち取るという事件がおきた。御所の子がそのあとを継ぐが、良い武士を失い浪岡方は弱体化した。

(f)大浦為信はこの機会に浪岡御所を倒すべく、天正6年浪岡辺のばくち打どもを忍者小栗山左兵衛・砂子瀬勘解由左衛門に命じて集め寄せ、これを味方として浪岡攻撃の計画を明かし当日の作戦を指示した。

(g)7月20日、約束の日限に為信は浪岡城を攻撃、御所は乗物にのるがそのまま捕虜となって為信に差出され、西根の寺院に送られた。

(h)為信は浪岡城を手に入れ、火を消して侍分のものは召し抱えるなどの戦後処理をすませ、城番5人を置いて帰陣した。

(i)浪岡の侍は大浦の門前まで来てお礼を申し上げ、御所は切腹させられた。

という順になっている。(a)～(i)の記述の多くは『津軽一統志』の内容に含まれている。本書の中で注意すべきは(b)項でその部分は、

両度御馬を御出し被成候得とも浪岡普代の武士たち歴々御座候ニ付つよくふせき御手に入不  
申候 浅瀬石大和守も浪岡とたびたびせり合申候

と記されており、浪岡側の抵抗の状況が描かれている。このほか(f)に相当する部分に、

- ・汝等浪岡二ノ丸口へ五人三人宛馳込馳込西根勢唯今大勢ニて参已に西の畑中に陣取罷有候…
- ・本丸へ走込女子共の衣裳……………

などの文があり、浪岡城の「二ノ丸」「本丸」など『津軽一統志』にない呼称がみられる。(後述)

『東日流記』に遅れること10年、延宝2年(1674・寛文年間説もある)添田儀左衛門貞俊が著した『愚耳旧聴記』は「浪岡責之事」の章を設けて、

(d)浪岡の城主は北畠秋家卿の子孫で浪岡の御所様と呼ばれていた。

(e)大浦為信は浪岡城下の“あぶれ者”を忍びの者小栗山佐助・砂子瀬勘解由左衛門に命じて  
召し出し、これを手なずけて味方とし浪岡攻撃の計画を打ち明けた。

(f)天正6年7月20日為信は出陣、浪岡城を三方から攻撃した。(表参照)計略通り“あぶれ  
者ども”は城に走り入り、城内を混乱に陥れた。

(g)浪岡殿は乗物にのるが、そのまま為信の陣にかつぎ込まれ捕虜として西根の寺に送られた。

(h)為信は城内に入り、火を消して住民を安堵させ、侍には従来通りの扶持を与え、浪岡城には  
馬持ちの侍5-6人を配置して帰陣した。

(i)浪岡譜代の侍は大浦まで行き大手門外で家老に礼を申し上げた。

(j)浪岡御所は切腹させられた。

という内容を記している。本書には浪岡の家臣団の配置や大浦為信の吉町切り崩し策、川原御所の乱などの記述がないかわり、“あぶれ者ども”をめぐる描写は長く、御所の最期の歌のほか『津軽一統志』に記載のない浪岡城下の落書も記載され、読物としての性格を強く打ち出している。それだけに浪岡御所および城内の状況については興味本位で厚意的な表現はあまり感じられない。しかし、大浦為信についても『津軽一統志』ほど配慮をしていない。いずれにせよ『津軽一統志』は『愚耳旧聴記』の内容も多く取り入れている。

所で『津軽一統志』の編纂の際、浪岡に関する史料は少なかつたものと見られる。享保12年(1727)藩主信寿から編纂の命を受けた喜多村校尉政方は領内をめぐる資料を集めるとともに、同年11月家中に藩史編纂の資料提出を命じた。提出すべきものとしては、瑞祥院(為信)時代

に功績のあった人物や征伐された人物に関する事柄があり、その中には北畠左近、北畠左衛門など浪岡関係者の名が多く含まれている。また、

一、浪岡領主之名苗字由緒聞伝候者有之候はゞ可申出候

の如きのような条文があって浪岡御所に関する資料も求めている。この触れが領内に廻ったことは『永禄日記』に記されており、ほかに同年5月27日の頃には前述の校尉親子の現地調査について、

国中村々不<sup>レ</sup>残御廻被成、寺と金持と帳面ニ付候。色々之風説御座候。滝井袋、古館跡帳面ニ御記。

と記し館野越の古館にも来たことを知ることができる。喜多村校尉政方の努力にもかかわらず、浪岡北畠氏関係の記録はあまり得られなかったものと見られ、<sup>(5)</sup>『津軽一統志』の浪岡落城に関する部分の構成は17世紀後半に成立していた『東日流記』や『愚耳旧聴記』<sup>(6)</sup>などの内容を参照し、それに中央から得た北畠氏関係の歴史や南部系の文献を反映させて体裁を整えたものと推測される。

こうして出来上った『津軽一統志』の浪岡城攻撃の記事をもう一度見直すと、この攻撃は藩祖大浦為信の独力による軍事行動として扱われ、浪岡御所については、

- ・今浪岡家主甚弱にして将士又不和……………
- ・主柔弱たるによりて奉行頭人専ら邪欲を恣にして、民甚だ及困窮之間……………
- ・弱将の下に強兵なかりけん。
- ・御所は元来甚だ懦弱の将なりければ……………

のような表現がとられ、浪岡御所の柔弱と失政を強調する一方、津軽藩祖という立場を考えて大浦為信の人柄がより高適に見えるよう表現に配慮が加えられている。津軽藩が撰んだ史書であり止むを得ぬものであろうが、浪岡関係の記述に関してはかかる点を考えて読む必要がある。なお、『愚耳旧聴記』は軍記物語としての性格から記述を直ちに信ずることは、難点があるろうし、『東日流記』についても検討を要する部分があると思う。また、『津軽一統志』も含めその記述には江戸時代の概念が含まれていると考えられる。しかし、『東日流記』や『愚耳旧聴記』は落城後100年以内の成立であり、親や祖母からの<sup>(7)</sup>伝承が強く残る時期の事柄だけに、記述されていることすべてを否定することは出来ない。貴重な部分も含まれていると考えられる。

( 6 )

それでは南部側から見た浪岡城の落城はどのような過程をたどるのだろうか。『南部根元記』の記述から略述しよう。

石川城において津軽三郡を支配した南部高信の死後、南部氏を継いで三戸城にあった信直は

弟の彦次郎政信を郡代として浪岡の城に配し、後見として大光寺左衛門・大浦右京亮を添えた。両後見役の仲は悪く大浦は政信に大光寺の讒言をしたので、大光寺は大浦と勝負すべく合戦の準備をするが、かえって政信から疑われ攻撃される立場となり比内に逃れた。一方、政信は天正16年(1588)3月に急死し、代わって楢山剣帯・南右兵衛佐の兩名が派遣された。政信の死は大浦右京亮の毒殺であると専らうわさされ、比内に逃れた大光寺も三戸の信直から赦されたので大浦右京亮の立場は悪化した。そこで大浦右京亮は秋田実季に加勢を求め、天正18年2月下旬両郡代のいる浪岡城を包囲した。城内は小勢の上兵糧も乏しく長く持ち堪えることができなかったので三戸に注進し出兵を求めた。しかし、南部氏は内部抗争により対応が遅れ、両郡代は防ぎきれず浪岡城を引き払い三戸に帰った。

以上が『南部根元記』の述べる浪岡城撤退の状況である。他の南部氏関係の史書もおおむねこの線をとっている。『奥南旧指録』は高信の死を天正9年(1581)とし、浪岡にあって津軽を支配した政信の後見役には大光寺・大浦のほか「<sup>(7)</sup>浅石隠岐正吉」をあげ、この人物が早世したことを記している。『聞老遺事』も「<sup>(8)</sup>汗石隠岐正吉」の名を加え、大浦右京為信と大光寺光愛の対立を高信の死の翌年、天正10年(1582)の項で扱っている。また、『奥南旧指録』は浪岡の政信の没後、郡代南右兵衛・楢山帯刀兩名に桜庭兵助を添えたことを述べ、大浦方の浪岡城攻撃を三月下旬としている。

所で『聞老遺事』は寛永9年5月21日の日付を持つ「石井三庵手簡」を載せている。この記録は石井三庵政満が弘前で書写したもので、その内容については石井三庵自身が「右此書付真偽不存候得共」と記しているが、「波岡館」に関する部分があるのでとりあえずこれを記載する。政信の死後南部氏は、

- 一 帯刀・右兵衛直に津軽郡代に被仰付、三戸より御意にて波岡館本丸をは破り、二ノ丸に右兩人居なり。

の如き処置をした。(後述) その後大浦方は浪岡攻撃を計画、秋田実季と結び、

- 一 翌年<天正18年(1590)>三月秋田へ助勢の儀申入る、式百五拾人大将分秋田紅因斎。富南将監式人指添、扇の紋の旗を持たせ来る、為信勢合て七八百人にて三月下旬波岡館へ取懸。館の内不思寄周章騒防くといへとも其甲斐なく、同く廿八日の早旦に波岡館被押破候、寄手の内に討死は外記子鶴沼庄助(年廿一)、富南将監子織部(年十九)右式人、其外雑兵共七八拾人討死す、館の内は雑兵ともに八九十人被討、帯刀・右兵衛は三戸へ退帰。<内は詳注>のような過程で浪岡城が落成したとしている。『祐清私記』は両郡代が退いた後、大浦為信が地方の小城を手に入れたことについて、

- 一 斯而大浦右京為信は波岡郡代南右兵衛を易々と追散し、既に津軽の根城を手に入上は枝々之小城共は物数にも有なんと勇進んで居たりけり、郡代方の人々には汗石・波岡・乳井・



今淵・岩館・石川を始其外餘多居館居館に籠けるが、為信馳向と伝聞家に火を懸落るも有、  
敵を引受城を枕とするも有、皆悉く滅亡しければ<下略>

と記している。「郡代方の人々の」中に「波岡」が加わっている点注目すべき記述と考えられる(後述)。同書は郡代のいた浪岡城を「津軽の根城」と見、その落城によって大浦為信の津軽支配が進められたという見方をしている(後述)。

(7)

浪岡城の落城に至る過程を津軽・南部それぞれの史書から見て来たが、そこにはいくつかの問題点がみられる。

第一は浪岡城の落城の時点である。前述のように『津軽一統志』に代表される津軽側の史書は、天正6年7月20日を大浦為信の浪岡攻撃の日と見るのに対し、南部および秋田関係の史書は天正18年2月(又は3月)下旬を大浦為信の攻撃の時期と見ている。両者の食い違いについて『奥南落穂集』は七代目の浪岡御所を具家とし、

<sup>(9)</sup>  
叛臣等、時に乗り、天正六年七月廿日押籠、密に殺害せり

と述べて天正6年を北畠氏系の浪岡御所の没落、そのあと政信が北畠氏の臣を服従させて浪岡にいたことを記し、浪岡御所の一族の者が南部信直に仕えるなど津軽に変動があったと推定される時期を天正18年とするなど、津軽史と南部史の食い違いを合理的に説明しようとしている。所で落城の時期は天正6年と18年、共に寅年である点が注目される。そう見てゆくと津軽側の石川落城は元亀2年(1571)、南部系の史書における石川高信の死は天正9年(1581)で両者の開きは10年共に「辛」の年に当たり何らかの作為があったと受取ることもできる。しかし、仮に南部側の記述を認めて、天正18年に浪岡城をめぐる攻防戦があり、津軽の独立が始められたとすれば、南部信直・大浦為信ともこの年小田原の陣で秀吉のもとに行っており、不安定な所領を置いて参陣ができたか否か、新しい疑問が生じてくる。南部・津軽どちらかの歴史が書きかえられたものと見るべきか、天正6年にも18年にも浪岡城をめぐる戦いがあったと考えるべきか、このことについては(8)で外交史の立場から再度検討することとしたい。

第二の問題点は落城期の浪岡城の主である。津軽側の記述では、浪岡御所顕村をもって最後の城主と見ている。『津軽一統志』は浪岡御所一族の左近秋則が南部に逃れたとし、三春浪岡氏の家譜は先祖慶好が浪岡御所一族で、天正6年出羽に逃れたとしている。津軽側の史書は浪岡城の主を浪岡御所と見ているのに対し、南部系の歴史的記述では浪岡に彦次郎政信や楡山・南などの郡代を置いたことになっており、浪岡御所は表面に現われて来ない。しかし『奥南旧指録』は付録に南部一族家臣団の出自を載せその中に、

奥寺氏。平氏也、高杉氏・高田氏・乳井氏・蒔内氏・浪岡或は北岡とも云、北畠顕家の末、昔津軽浪岡の御所とも云、以上六家津軽浪人也。

と記しており、浪岡御所一族のうち南部氏のもとに逃れたものがあることがわかる。また、『参考諸家系図』の「波岡氏」の系譜は先祖が「津軽波岡城」にて天正18年大浦為信の乱を遁れて三戸<sup>(10)</sup>に來たとしており、『系胤譜考』の「波岡六左衛門顯教」の家系には、その祖先が北畠氏で浪岡殿と呼ばれ、顯則まで21代浪岡館に居住し為信に追われたことを記している。<sup>(11)</sup>⑥でもふれたが南部方の史書を総合すると郡代のもとに浪岡御所の系統が天正18年までいたことになる。

一方、浪岡城を攻撃した人物については、津軽側・南部側両者とも後の津軽藩祖為信としている。しかし、津軽を南部の支配から切り離す手順や浪岡城の位置付けに違いがある。津軽側の史書は③で述べたように石川城を南部勢の根拠と見て攻撃を加え、次いで大光寺を入手し、その後浪岡城に目を向けこれを占領する。南部史に描かれる為信の独立活動では、⑥で指摘したように浪岡城が「津軽の根城」として扱われ、こゝから統一の波紋が広がったと見、『津軽一統志』の叙述とは趣きを異にする。また、浪岡城の攻撃を戦略的に見ると、津軽史側の記述は三方から攻めて城内を混乱させ、北側「東北の口」をあけてここから南部方面へ追い出す方法をとったとしており大浦方の戦力は別表の通りである。『奥羽永慶軍記』は大浦右京亮の攻撃について

馬武者七百余騎・雑兵四、五千人にて、天正十八年二月中旬波岡に押寄せ、城の三方を囲んで関を作りて、弓・鉄炮を打ちかけ、喚き叫んで攻たりける。

と述べている。また『秋田古戦記』は秋田城介の派兵について

究竟の兵式百余騎雑兵式千余人津軽へつかわしける頃、天正十八年二月中旬波岡城へ押寄せ三方より囲て責たりける

と記し、『奥羽永慶軍記』と同様浪岡城を三方から攻撃したとしている。攻撃の年が違い一率に考えるのは無理であろうがこれらの史書の攻め方は『津軽一統志』と似ている。

次に鉄砲の使用についてみてゆきたい。前掲の『奥羽永慶軍記』には、天正18年の浪岡攻撃の際鉄砲を大浦方が使用したことを記しており、これを迎えた浪岡方も

弓・鉄炮雨霰のごとく打出せば、寄手大勢といへども左右なく攻入る事能はずという具合に応戦したとしている。また、『奥南旧指録』には、

城中大に騒動し有合人数弓・鉄炮を放し爰を先途と防ぎければと浪岡城側の防戦状況や鉄砲の使用を述べている。

また、根城南部氏の『八戸系図』は、政義(政栄)が天正18年為信の浪岡攻撃の際に出陣し、為信が占拠していた浪岡城の回復を図ったことを記し、同氏に関する『八戸家系図伝記写附録』には、天正18年春津軽出陣の際の手負の者に西沢右近光広・田中左馬の名をあげ、兩名とも鉄砲による負傷と記している。

『津軽一統志』では、大浦為信の軍事行動の初期一元龜2年の石川城攻撃の際鉄砲使用の記

事があり以後の戦いでも使われている。浪岡城攻撃の際には策略をもって城内を混乱に陥れ落城させたとしているが、鉄砲の準備があつて当然の時期と思われる。なお、津軽に鉄砲が伝来したのは『木立日記』によると、大浦為信が最上義光に誼を通じたのが永禄12年(1569)で、その翌年最上氏から30挺の鉄砲と長刀2振が贈られたことになっている。

ここで当時の史料として注目すべきもの、卯月廿五日付『大湯殿宛秋田愛季書簡』をあげねばならない。この書簡には、

糠野部進発付而波岡大光寺御難儀之由候先以自其郡一勢力与力可被申候而可然候従是も  
々鉄放討共可差越候

と見えており、浪岡・大光寺をめぐる戦いがあつたことや、秋田方から鉄砲打ちの者が軍事行動を起そうとしていることなどを知ることができる。書簡の年代は分らないが、秋田愛季は天正15年(1587)に死亡しているからそれ以前の戦争ということになる。

天文12年(1543)に伝来したといわれる鉄砲は、長篠の戦いで戦略上の優位性が示された。この間戦国大名は争つて鉄砲を入手し自らの力の強化を計つたものと考えられる。北辺とはいえ津軽地方の戦国武将にとつても無関心ではいられないことだつたと思われる。浪岡御所が天文年間京都との連絡を保っていたことは(1)で述べて来たが、この行動を通じて鉄砲の存在を知っていたと考えられる。『言継卿記』にはほかに永禄12年3月奥州津軽之南部弥左衛門(南部但馬守)が訪れたことを記録している。また、『信長公記』には天正6年8月に「奥州津軽の南部宮内少輔」が鷹を進上して安土にいたことが記されている。南部を名のる者がいかなる人物であるかはさておき、これらの人物が最新の知識を国元に持ち帰つたことは当然のことと考えられ、その際鉄砲の入手などの活動をしたことも充分考えられる。『津軽一統志』『奥南旧指録』『奥羽永慶軍記』などは後世の編纂であり、その記述をそのまま信頼することは出来ないとしても、16世紀後半浪岡落城の頃鉄砲があつたということは文献上認めても良いと思う。本年度の発掘調査に際し、遺構から鉄砲玉が出土したことは、文献による推論と結びつくものとして意義深い。なお、湊・松山両家の合戦の際松山城側の保有した鉄砲の数は300挺といわれる。このことから津軽の武将が保有した鉄砲の数は想像がつく。

ここで終末期の浪岡城の施設についてふれるならば、『愚問日聴記』に「追手の御門」「矢倉」などの文字が見え、『津軽一統志』が「虎口」「東北の口」「土蔵文庫」「北の門」などの文字を記している。また、前者は城の四方に火をかけたとし、後者も所々の役所に火をかけたと記しており、両書とも落城後大浦為信が火の始末をしたと述べている。また、『東日流記』にも焼いた所を消させた旨記述がある。しかし、これらの記述からは火災の発生した場所やその程度などをうかがうことは無理である。なお、(5)で指摘したように『東日流記』には「二ノ丸口」「本丸」などの文字が使用されている。その位置が浪岡城のどの館にあたるのか更に研究を要するが、『高

『照宮御遺鑑』に含まれる『御領分三庄道範』には浪岡城の状況として「東ノ丸」「二ノ丸」の文字がみえている。また、『聞老遺事』所載の「石井三庵手簡」には「本丸」「二ノ丸」の存在と本丸を破り二ノ丸に郡代がいたことが記されている。これらの記事は江戸時代の概念による記述とも見られるが、かかる呼称を用いた江戸前期の記述がいくつか存在することは検討に値する。

落城後の処置について考えてみたい。津軽側の史書によると浪岡城には落城後大浦為信が城番を置いており、大浦軍の駐留は当然考えられることである。しかし、駐留期間や施設の変化などについては不明である。為信の義弟五郎六郎は天正13年6月藤崎川で溺死したとされるが、『津軽紀譚』は五郎を「波岡の城代大浦五郎殿」と記している。もしそうだとすればこの年の3月に行われた油川城攻撃の際に浪岡城は前進基地として使用されたものと考えられる。また、『津軽一統志』はその際浪岡が拠点となったと記している。五郎が城代でなくても城が利用される可能性は充分あると思われる。

## ( 8 )

以上、天正期の浪岡城について、南部・津軽両氏の歴史的記述を中心に、その状況を見て来た。ここで説明の過程で散発的に現われた浪岡落城をめぐる外交関係をまとめて本稿を終わることにしたい。

『津軽一統志』など津軽藩側の立つ史書は大浦為信が出羽の最上義光と結んだことをあげている。このことに関しては最上ではなく大宝寺(武藤)氏と結んだとする見解もある。また、為信は南部氏の内部抗争を利用している。反信直(南部26代)勢力の九戸政実と結んでいたのである。南部側の記述もこの点は明白に認めている。このほか安土桃山期の津軽に関しては、(7)であげた史料のように秋田氏の力も働いており、浪岡城落城とも何らかのかかわりあいがあったことは既に言及した。さらに、松前の蠣崎氏も浪岡には関心を寄せている。『奥村文書』に含まれる正月17日付(年代不明)の蠣崎入道阿陀から奥村宗右衛門尉に宛てた書簡には、

将又波岡御弓矢之事候間

波岡口へ可参と存候

などの文が見え、同一便で送られた松前慶広の書簡にも、

老父波岡口へ可罷越之由申候條、自津軽口委可申上之由申候

と見えている。『秋田県史』はこれを天正18年大浦為信の浪岡城攻撃に関する文書と推定している。また、蠣崎入道阿陀は松前慶広の父と考えている。この様に浪岡城をめぐる松前・秋田両氏の動きが存在した。所で、秋田氏のもとには浪岡御所北畠氏一族が身を寄せている。『湊・松山両家合戦覚書』に「北畠<sup>(3)</sup>弾正・同右近」の名が見え、割註に、

コレハ太閤様権現様も御存ノ者也ツルガヨリ秋田へ来波岡ノ御所ト云テ奥州国司源中納言<sup>(マ)</sup>

之顯家卿ノ末孫也

とある。また、浪岡御所一族が天正17年(1589)の湊合戦以前に湊家の許に逃れ、更に湊側から桧山側に移ったことがこの覚書により知りうる。前述の如く江戸時代三春秋田氏に仕えた浪岡氏はこの子孫といわれる。同氏の家譜は慶好が天正6年出羽に逃れたとしており、これらの史料から見ると津軽側の文献が主張する天正6年浪岡御所の没落は支障ないことになる。なお、秋田氏のもとに逃れた浪岡氏はかなり厚遇されている。これに対し天正18年浪岡落城により南部氏のもとに逃れたとする浪岡関係者の石高は全般に低い。浪岡御所没落後有力者は秋田氏の許に去ったとも見る事ができるのではなかろうか。

以上外交面から浪岡城の終末を見て来た。北奥の小城とはいえ、浪岡は津軽平野から外ヶ浜を経て松前・南部に続く道を押さえる重要な地点にある。それだけに臨接する戦国大名の関心は大きかったと思われる。大浦為信の独立という下剋上の嵐の中で、浪岡落城の陰には、大浦・南部・秋田・浅利・松前(蠣崎)など北奥の戦国武将達の利害関係がからみ合っていた。今後周辺諸国や中央との結びつきという面から浪岡城の研究をすすめ、落城の時点の食い違いをはじめ不明な点を埋めてゆく必要があると思う。

本稿では文献の面から天正時代の浪岡城について若干の考察を行い、問題点をあげて来たが、紙数の関係から単なる羅列にとどまった感がある。また、史料の不足から推測に当る部分が多い。今後更に史料の分析と検討をすすめるとともに、発掘調査の成果を踏まえて、本稿の改訂と補充を行うことにしたい。大方の御教示・御指導がいただければ幸いである。

<注>

- (1)昭和52年度浪岡城跡発掘調査報告書『浪岡城跡』I 浪岡城の歴史的経緯参照。
- (2)著者不明。この種の記録としては最も古いものの一つである。
- (3)伊藤祐清(寛延2年=1749没)の著作。
- (4)秋田県雄勝郡雄勝町の人。
- (5)『永禄日記』は館野越(北津軽郡板柳町)の北畠氏の記録である。同氏は顕忠の子顕佐の系統で、江戸時代山崎を名のり館野越古館で過ごした。
- (6)喜多村校尉政方は『津軽一統志』の完成をみずに享保14年(1729)に没した。
- (7)著者不明。南部光行の入部から33代利視の時代まで歴代の事績を記述している。
- (8)梅内祐訓、文政5年(1822)の著作である。
- (9)『岩手県史』は本書を「元禄頃の書か?」と考証している。
- (10)南部藩の系図集。文久年間(1861-1864)の編。
- (11)南部藩の系図集、寛保元年(1741)の成立。
- (12)『青森県史』はこの書簡を天正13年4月の項で扱っている。

⑬ 本稿では便宜上秋田氏と記したが安倍・安東姓を改めたのは天正末のことである。

<表>

大浦為信の浪岡攻撃

愚耳旧聴記 天正6年	津軽一統志 天正6年	奥羽永慶軍記 天正18年	石井三庵手簡 (聞老遺事) 天正18年
<ul style="list-style-type: none"> <li>・西の野山のすそより 浅瀬石大和 ) 700人 同 安芸 )</li> <li>・赤茶口へ 兼平中書 ) 750人 森岡金吾 )</li> <li>・本道より 御旗元……………1300人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本郷竹ヶ鼻口より 浅瀬石大和 ) 700余 乳井大隅 )</li> <li>・赤茶村より 森岡金吾 ) 600余 兼平中書 )</li> <li>・十川口より 御旗下……………1000余</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>馬武者 700余騎</li> <li>雑兵 4～5000人</li> <li>秋田よりの応援 200余騎 (秋田古戦記は他に雑兵2000余)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>7～800人</li> <li>秋田よりの応援 250人</li> </ul>

本稿作成にあたり下記の機関が所蔵する史料を利用させていただいた。厚く謝意を表する次第である。

弘前市立弘前図書館・岩手県立図書館・秋田県立図書館・盛岡市公民館。

(佐藤仁)

## VIII 浪岡城跡堀跡の火山灰について

弘前大学教育学部 地学研究室

西野 緑

本報告は、昭和55年度浪岡城跡発掘調査における堀跡（P・Q55区）の土層堆積状態から火山灰を抽出し、重鉱物分析を行なった結果である。

### 1. 堆積状態

- A層は堀の基盤とみられる（青）灰白色火山灰で5mm程度の白色パミスを含む。中に植物の根とみられるものを含む。ローム化はしていない。（Fig.62の50層）
- B層は3層のうち下位のもので2mほど下に位置する。右側にいくにしたがい漸移的に消滅する。（Fig.62の44層）
- C層は中間層で70cm下のもの。青灰白色。左端の下部が不鮮明に消滅。（Fig.62の36層）
- D層は上層で40cm下。青灰白色。右端が黒色土と互層を為すように不鮮明に消滅。（Fig.62の33層）
- 4サンプルとも褐色を帯びた部分がある。

### 2. 分析法

火山灰層の特徴は、その中の重鉱物（比重2.8以上）組成に反映することが多いので、重鉱物分析法に拠った。

#### ○手順

- ①攪拌試料を30ml蒸発皿に取り、水を少量加え、親指の腹で軽く蒸発皿の底に押しつけるようにしてつぶす。これに水を静かに注ぎ、指先で蒸発皿のにごりをかきまわして流し去る。再び水を加え、にごりがなくなるまでこの作業をくりかえす。
- ②# 0.125～0.25のメッシュでふるい分け、乾燥させる。
- ③乾燥した試料をテトラブromエタン（比重2.9）により重鉱物、軽鉱物に分離させ、それぞれ、エチルアルコールで洗い乾燥させる。
- ④重鉱物試料をバルサムでプレパラートを固定し、カバーガラスで封じる。
- ⑤顕微鏡下で300個体の鉱物を種類別に個数を数え、統計を出す。

### 3. 統計

#### ①重鉱物含有率

重鉱物と軽鉱物を分離後重さを測ったもので、その比を%で表わした。

## ②重鉱物中磁鉄鋼含有率

重鉱物をプレパレートにしたところ、磁鉄鉱の多さが目だったため磁鉄鋼とその他の重鉱物とを分離させ重さを測ったもので、その比を%で表わした。

## ③重鉱物組成表

普通角閃石と普通輝石と紫蘇輝石と不明のもの個数を1サンプルにつき合計300個体まで数え、その個体比を%で表わした。

④羽黒平遺跡にみられる火山灰について、教育センターの沢田庄一郎先生がおこなったものに対比させて作製したグラフ。

火山灰の同一性を目的とした。

## 4. 分析結果

### ①重鉱物含有率

Bの重鉱物含有率の少なさが他と比べて目立つ。

他はほぼ同量

### ②重鉱物中Mg含有率

BのMg含有率の少なさが他と比べ目立つ。

他はほぼ同量。

### ③重鉱物組成

Bの普通輝石の量が他と比べ少ない。

Aの普通角閃石の多さも気になる。

④A・C・Dは、近野遺跡の黄褐色火山灰や羽黒平遺跡の黄褐色火山灰とグループを同じにする。

Bは、どちらのグループにも属さないようである。

## 5. 考察

④のダイアグラムより、A・C・Dは同じ火山灰である可能性がかなり高い。又それは、近野遺跡と羽黒平遺跡でみられる上位に位置する方の黄褐色火山灰と同じものとみられそうである。

三層の堆積状態は、不自然にプツリと切られていたり、その火山灰層の端の方で黒色土と互層をなすことなどから、自然堆積とは考えにくい状態と推定される。特に、この場所に三層が分布するのであれば、それは人為的堆積であろう。しかし、黒色土には十分な注意を払わなかったので一概にはいえない。

また、三層のうち下位の火山灰のみの重鉱物組成やその風化度において変化がみられること



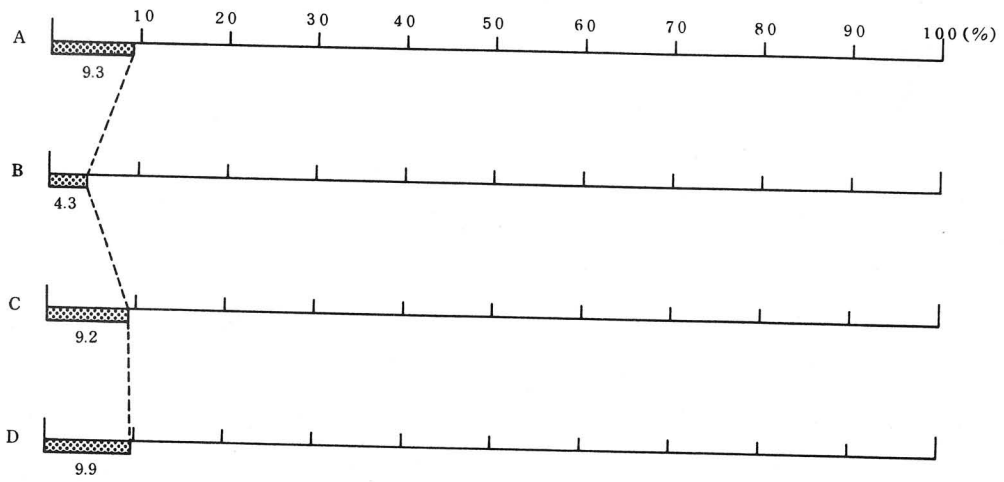
も問題を含んでいる。しかもそれは、ダイアグラムによると黄褐色火山灰や(青)白色火山灰ともグループを異にしている。

その起源についてみると、浪岡地域は十和田・八甲田の可能性もあるし、岩木山も考えられる。重鉱物組成のみでは判断できかねる。今度、浪岡全域の調査から追い求めることが必要とされる。

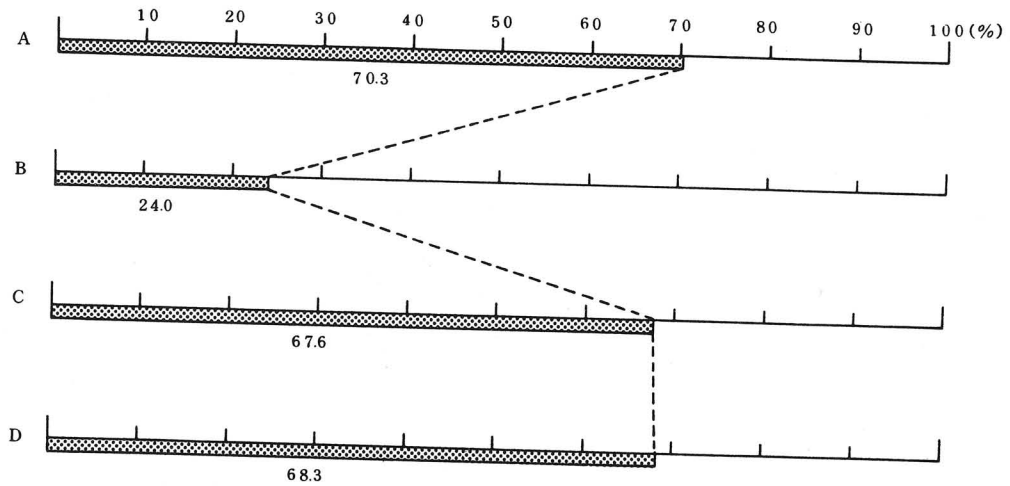
## 6. 参考文献

- |                   |             |
|-------------------|-------------|
| ○「地学の調べ方」         | コロナ社 奥村 清編  |
| ○「青森県の第四系」        | 中川 久夫       |
| ○「火山灰は語る」         | 蒼樹書房 町田 洋   |
| ○「北海道5万年史」        | 郷土と科学編集委員会編 |
| ○浪岡城跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ | 浪岡町教育委員会    |
| ○羽黒平遺跡発掘調査報告書     | 青森県教育委員会    |
| ○近野遺跡発掘調査報告書      | 青森県教育委員会    |

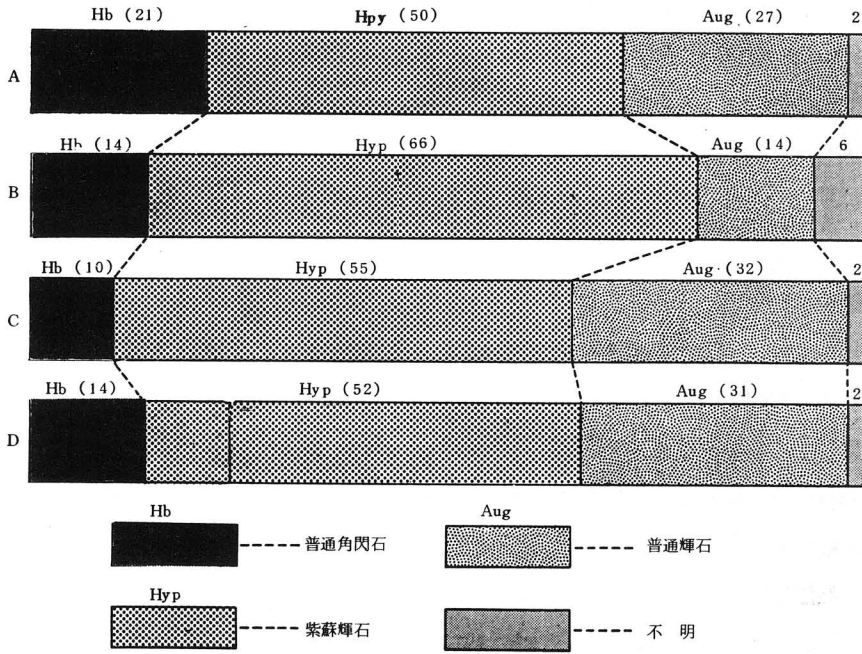
① 重鉱物含有率（軽鉱物：重鉱物の重量比）



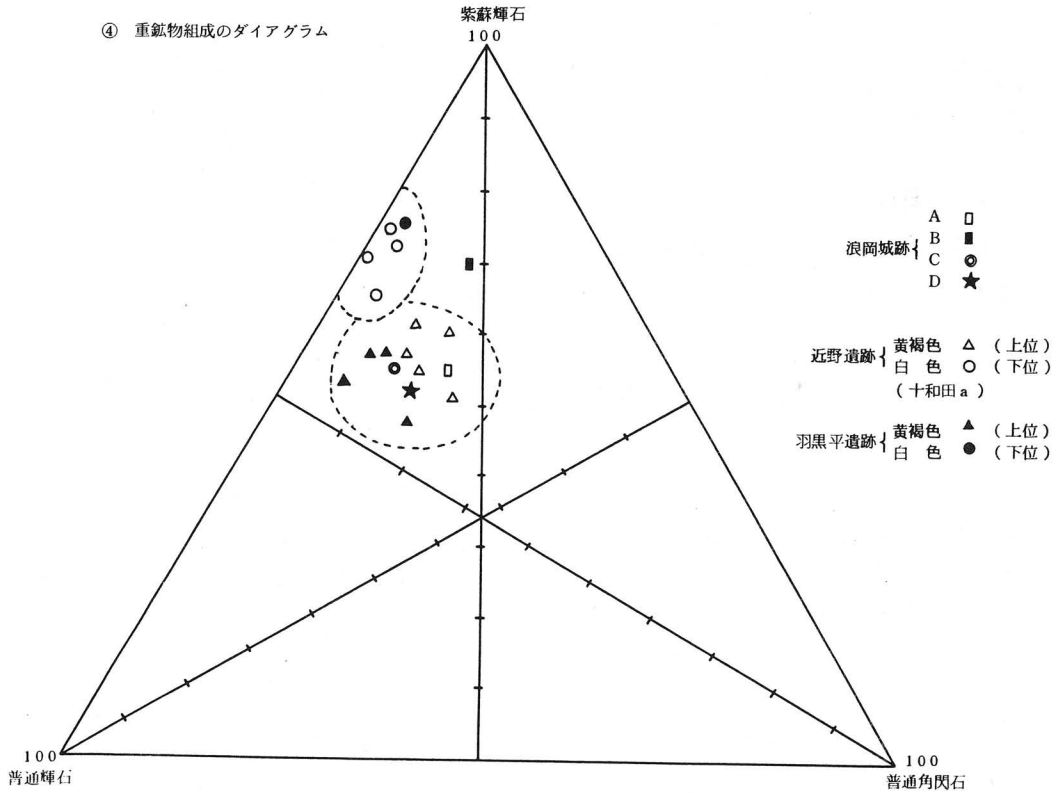
② 重鉱物中磁鉄鋼含有率（重量比）



③ 重鉱物組成表 (Mg を除く)



④ 重鉱物組成のダイアグラム



## Ⅸ まとめ

今回の調査で検出された遺構と出土遺物については、各項目の中で簡単なまとめをおこなっているのですが、概括的に今後の諸問題をまとめてみたい。特に、本報告書の編集にあたっては、遺物の項目で銅製品製作を宇野調査員、木製品の民俗学的考察を葛西調査員、城館期以前の主要な遺物としての土師器・須恵器を奈良岡調査員、浪岡落城における諸問題を佐藤調査員、火山灰分析を弘前大学学生西野緑の諸氏に執筆していただき、より充実した内容になったと思っている。

### 〔浪岡城跡の年代観〕

浪岡城跡が北畠氏によって築城された年代は15世紀中頃とされる。しかし、北畠氏が南北朝期の動乱以後、浪岡地域に居をかまえたのはそれ以前であり、さらに平安時代あるいは縄文・弥生時代においても城跡の上で生活を営んでいた人々が居たことは出土遺物からも明らかである。それでは、浪岡城跡を広義の遺跡として年代観を設定するとどのようになるか。

I 期	縄文・弥生時代		
II 期	城館期以前(古代)	～12世紀	
III 期	城館期前段(中世)	～14世紀	
IV 期	城館期		
IV a 期	城館期前半	15世紀	城館形成期
IV b 期	城館期後半	16世紀	全盛期
V 期	城館期後段	17世紀	落城以後
VI 期	近代・現代	～20世紀	

以上から、本報告で主体を占める部分はIV期であるが、出土遺物はIV b期のものが圧倒的に多く、北畠氏の全盛期として文献と符合する。しかし、IV期前後ははなはだ問題となる事が多い。出土遺物の中で13～14世紀とした白磁片、同じく二面の銅鏡などはIII期に属するものであり、伝世品と考えた場合同種の遺物が浪岡町吉内に所在する杉ノ沢遺跡からも出土していることに注目しなければならない。杉ノ沢遺跡周辺には五輪塔群も残り、北畠氏が最初に入府した地域と目されている所であるが、出土遺物の面からも可能性が高くなったことを指摘しておく。さらに、II期と設定した古代の遺物が城内から多量に出土している点について、集落跡と考えた場合かまどを有する竪穴住居跡が一基も検出されない事実は、単なる集落跡ではなく館あるいはそれに近い機能がすでに浪岡城以前にも造築されていた可能性があることを予想できる。掘跡の調査でも、最下層には自然木がよくみられ、15世紀に北畠氏が城内全域を構築したと考えるよりは、以前から築城に有利な地形であったと考えられるのである。

また、浪岡城の終末について佐藤調査員の論考と考え合わせ、竪穴遺構（S T71）覆土から寛永通宝が出土していること、井戸跡底（S E33）から唐津皿が出土していることは、文献上における落城以後も某かの人々が居住していたことを推測させるに十分な資料と考えられる。V期における浪岡城のあり方は今後の問題として残っている。

#### 〔浪岡城跡の生活〕

居住空間は、掘立柱建物と竪穴遺構を併用していることが認められる。それらが住居と倉庫あるいは住居と作業場というように機能分化していたかは出土遺物が明確に把握できない現状では無理があり、竪穴遺構もその形態の多様性から広義に解釈してさしつかえないと考えられる。建物の素材は井戸枠からみてもわかるように桧が多く用いられ、屋根は葎葺きが主体である。

衣類は、芋引金の出土や残片ながら出土した麻の布によって、麻の織物を着用したことがわかり、木製品の中でも機織り具とみられるものもあることから自家製作していたとみられる。

食膳関係では、漆塗り碗をはじめ青磁・白磁・染付・赤絵・美濃・唐津等の碗と皿を使用し、木製の箸と折敷・膳が併用される。さらに播鉢、おろし皿、ねり鉢、石臼などによって食料を調理し、鉄鍋で煮沸している。食料や水の貯蔵は、瀬戸・越前の壺や甕と木製桶を使用し、曲物はお櫃や弁当として活用する。灯明には、かわらけ（少数）や囲炉裏の火を使い、暖房には瓦器や火鉢・行火のような移動式のものが多くみられる。

この他、天目茶碗と茶臼から喫茶の習慣があり、硯の出土から文筆、銅製香炉・鈴・鏡・鏡などから信仰、毛抜き・耳搔から化粧等の各生活ぶりが知られる。

また、埴埴・羽口とともに鋳型が出土したことは、城内で銅製品を製作していた事を裏付け、刀・鏃・小柄・鐔・切羽等の武具を自給できる体制にあったと予想される。この事は、船載陶磁器などを大量に搬入する経済力の問題とともに北畠氏の支配構造を解明する一因と考えてさしつかえないであろう。

（工藤清泰）

#### ○主な参考文献

1. 日本出土の中国陶磁器 1978 東京国立博物館編
2. 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ 1979・1980 八戸市教育委員会
3. 史跡浪岡城発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 1978・1980・1981 浪岡町教育委員会
4. 史跡上之国勝山館跡Ⅱ—昭和55年度発掘調査整備事業概報— 1981 上ノ国町教育委員会
5. 日本やきもの集成3 瀬戸・美濃・飛騨 1980 平凡社
6. “ “ “ 11九州Ⅰ 1980 平凡社
7. 図録日本の甲 武具事典 1981 笹間良彦 柏書房
8. 浪岡町杉の沢遺跡発掘調査報告書 1979 青森県教育委員会
9. もの与人間の文化史25 白 1978 三輪茂雄 法政大学出版局

付 表

Ch. 1 H-53~57南壁  
D~H-55東壁層序 Fig.3 対応

1	暗褐色土。部分的に根によって攪乱されている。しまりなし。(表土)
2	暗褐色土に全般的に炭化物を含む。しまりはあまりなし。
3	黒色土。しまりなし。
4	黄褐色砂質土(地山)
5	暗褐色土に黄色粘土と黄褐色砂質土を含む。
6	白灰。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。しまりなし。
8	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に、炭化物を部分的に含む。
9	黒色土。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。
11	黒褐色土に小石を若干含む。しまり強し。
12	暗褐色土に黄褐色砂質土を大ブロック状に、灰と炭化物を部分的に含む。
13	暗褐色土。しまりなし。
14	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。
15	7に同じ。
16	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
17	黒色土に、黄白色粘土と黄褐色砂質土を粒子状に含む。
18	黒色土と黄褐色砂質土の混層。
19	暗褐色土と黒色土の混層。しまりなし。
20	暗褐色土に黒色土を若干含む。
21	黒色土。しまりなく湿性強し(SD-07覆土)
22	暗褐色土に灰と黄白色粘土を多量に含む。
23	暗褐色粘質土。
24	黒色土に黄褐色砂質土を粒子状に強く含む。
25	明褐色土に黄褐色砂質土塊を多量に含む。しまりなし。
26	黒色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。湿性、粘性あり。
27	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む。部分的に大ブロックあり。
28	暗褐色土と黄灰色粘土の混層。
29	暗褐色土に白砂を多量に含む。
30	黒色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。炭化物をやや含む。しまりなし。
31	黒褐色土と黄褐色土の混層。粘性あり。しまりあり。
32	黄褐色土にやや暗褐色土を含む。(SX-48覆土)
33	暗褐色土に灰を多量に含む。

Ch. 2 I~M57西壁層序 Fig.4 対応

1	暗褐色土に小石を多量に含む。しまりあり(表土)
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。部分的に灰を含む。
3	暗褐色土に灰を含む。部分的に炭化物有り。
4	黄褐色砂質土(地山)
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を部分的に大ブロック状に含む。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量、小石を多量に含む。炭化物あり。
8	3より灰が少なく、炭化物を含む。
9	黄褐色砂質土に灰を含む。下部に暗褐色土有り。
10	暗褐色土に炭化物を含む。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量、小石を多量に含む。しまりなし。
12	暗褐色土。下部になるにつれて、黄褐色砂質土を含んでくる。
13	12に同じ。
14	12に同じ。
15	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。灰も少し含む。(SX-32覆土)
16	暗褐色土に焼土と炭化物を含む。(SX-32覆土)
17	暗褐色土。
18	12に同じ。
19	灰
20	焼土に灰を含む。
21	15に同じ。
22	12に同じ。
23	暗褐色土に炭化物を含む。
24	黄色砂質土。
25	暗褐色土に黄白色粘土と焼土をレンズ状に含む。(SX-32覆土)

Ch. 3 I~M-55西壁層序 Fig. 5 対応

1	暗褐色土に小石を多量に、炭化物を少々含む。 (表土)
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。しまり強し。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土と灰を含み、湿性あり。 しまりなし。
4	黄褐色砂質土(地山)
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を部分的に大ブロック 状に含む。(ST-63覆土)
6	焼土。
7	暗褐色土。しまりなし。
8	7に同じ。
9	7に同じ。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。少量 の炭化物有り。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を少々含む。炭化物有 り
12	黄褐色砂質土に暗褐色土を含む。
13	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。 炭化物あり。
14	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
15	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。
16	15に同じ。
17	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。 しまりなし。下部になるにつれて黄褐色砂質土 が少なくなってくる。
18	灰
19	暗褐色土に黄色砂質土を含む。
20	7に同じ。
21	暗褐色土に黄褐色砂質土を大ブロックにレンズ 状に含む。しまりなし。
22	11より黄褐色砂質土を多く含む。
23	11に同じ。
24	暗褐色土に黄褐色砂質土を少々含む。炭化物。 灰あり。
25	14に同じ。
26	暗褐色土に黄褐色砂質土を部分的に含む。

Ch. 4 SB-02 柱穴計測表 Fig. 9 対応

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	34 × 27	57	
2	円	42 × 40	61	
3	方	54 × 46	63	
4	方	38 × 33	43	
5	方	42 × 34	65	
6	円	48 × 47	66	
7	方	32 × 30	43	
8	方	42 × 38	73	母屋
9	方	40 × 38	85	母屋
10	方	53 × 50	91	母屋
11	方	45 × 45	58	
12	不	38 × 36	44	
13	方	47 × 43	85	母屋
14	方	55 × 51	90	母屋
15	方	45 × 40	49	
16	円	42 × 42	48	

17	方	53 × 45	73	母屋
18	方	40 × 35	73	母屋
19	方	43 × 36	76	母屋
20	方	46 × 45	85	母屋
21	不	35 × 30	45	
22	楕	42 × 32	41	
23	方	53 × 43	89	母屋
24	方	43 × 42	67	母屋
25	方	33 × 33	42	
26	方	60 × 52	83	母屋
27	方	60 × 60	84	母屋
28	方	54 × 49	86	母屋
29	方	48 × 45	48	
30	方	30 × 26	42	
31	方	42 × 35	78	
32	円	36 × 33	31	
33	方	46 × 38	85	
34	楕	42 × 33	87	
35	方	35 × 35	55	

Ch. 5 SB-03 柱穴計測表 Fig. 10 対応

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	43 × 43	59	
2	不	50 × 37	24	
3	方	38 × 35	27	
4	楕	33 × 26	48	
5	楕	60 × 47	46	
6	方	60 × 45	55	
7	円	30 × 30	40	
8	方	53 × 50	36	
9	方	52 × 47	38	
10	不	72 × 53	42	
11	不	80 × 55	40	
12	不	50 × 50	51	
13	方	38 × 32	38	
14	方	50 × 50	41	
15	方	65 × 43	44	
16	不	37 × 35	39	
17	方	60 × 45	60	
18	方	48 × 40	53	
19	方	48 × 48	34	
20	方	48 × 38	40	
21	方	45 × 38	40	
22	方	40 × 38	38	
23	不	70 × 35	34	
24	円	52 × 50	55	
25	方	40 × 36	21	
26	楕	50 × 42	36	
27	方	56 × 53	78	
28	楕	50 × 38	14	



Ch. 6 SB-04 柱穴計測表 Fig. 10 対応

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
38	方	44 × 38	70	
39	楕	55 × 50	85	
40	不	36 × 34	64	
41	楕	66 × 28	65	
42	方	28 × 26	46	
43	方	55 × 35	28	
44	方	46 × 36	40	
45	楕	28 × 23	30	
46	方	48 × 40	45	
47	不	40 × 30	44	
48	方	33 × 28	39	

Ch. 7 SB-09 柱穴計測表 Fig. 10 対応

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
29	方	60 × 50	62	
30	方	50 × 42	58	
31	円	85 × 85	70	
32	方	46 × 44	65	
33	方	53 × 50	55	
34	楕	50 × 45	37	
35	方	26 × 26	55	
36	方	53 × 48	66	
37	方	65 × 58	63	

Ch. 8 ST-50 計測表 Fig. 11 に対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。 (全般的に炭化物を含む。)
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。 1に比べ灰を多く含む。
3	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	22 × 22	26.1	
2	円	20 × 17	29.9	
3	方	36 × 30	14.2	
4	不	23 × 7	7.9	
5	方	20 × 18	11.9	

Ch. 9 ST-51 計測表 Fig. 12 に対応

a 覆土層序

1	灰の中に暗褐色砂質土を多量に含む。
2	白灰
3	灰の中に暗褐色土を部分的に、黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
4	暗褐色土に灰と炭化物を少量と黄褐色砂質土を含む。
5	暗褐色土に白灰を多量に含む。
6	暗褐色土に小ブロック状黄褐色砂質土を多量に含む。
7	暗褐色土に小ブロック状黄褐色砂質土を若干含む
8	暗褐色土に大ブロック状黄褐色砂質土を多量に含む。
9	暗褐色土に粒子状黄褐色砂質土を含む。
10	9より暗褐色土が強い。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。
12	ローム
13	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	24 × 22	59.5	
2	方	31 × 28	50.9	
3	楕	28 × 22	58.5	
4	方	32 × 22	23.3	
5	楕	35 × 25	62.2	
6	円	26 × 20	25.8	
7	方	28 × 26	30.7	
8	不	40 × 30	20.3	
9	不	21 × 18	42.2	
10	楕	28 × 20	54.8	
11	不	20 × 18	17.3	
12	楕	38 × 25	38.0	
13	楕	36 × 20	21.1	
14	楕	27 × 21	20.2	

Ch. 10 ST-52 計測表

a 覆土層序

1	黄白色粘土
2	暗褐色土に黄褐色砂質土と若干の焼土を含む
3	焼土
4	暗褐色土
13	地山

b 柱穴計測値 Fig. 12 対応 (a・b 共)

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	18 × 17	21.1	
2	方	26 × 25	13.2	
3	方	20 × 18	8.4	
4	不	30 × 20	15.2	
5	方	22 × 20	14.4	
6	不	30 × 20	21.9	
7	方	32 × 25	24.2	
8	方	27 × 23	43.6	
9	円	20 × 18	66.8	

Ch. 11 ST-53 計測表 Fig. 13 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。(全般に炭化物有り)
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。(炭化物有り)
3	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	32 × 22	20.8	
2	円	17 × 15	25.4	
3	方	30 × 27	15.2	
4	方	38 × 35	18.3	

Ch. 12 ST-54 計測表 Fig. 14 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土
2	上部に黄褐色砂質土、下部に暗褐色土がある。
3	黄白色砂質土(しまりが全くなし)
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む
5	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	23 × 22	22.6	
2	楕	26 × 20	15.3	
3	楕	28 × 22	12.9	
4	方	30 × 25	17.4	
5	不	60 × 50	12.0	
6	楕	36 × 31	14.7	

Ch. 13 ST-55 計測表 Fig. 14 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を大ブロック状に含む
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む(柱穴覆土)
3	黒褐色土に黄褐色砂質土を部分的に大ブロック状に含む(しまりあり)
5	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	40 × 32	52.9	
2	楕	24 × 21	24.1	
3	方	18 × 18	6.9	
4	方	25 × 23	4.5	
5	円	38 × 36	20.6	

Ch. 14 ST-56 計測表 Fig. 15 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を1より多く含む。全般に炭化物有り
3	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。全般に炭化物有り。
4	灰
5	暗褐色土に黄褐色砂質土を2より多く含む。全般に炭化物有り。
6	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	38 × 38		
2	楕	30 × 26	14.8	
3	方	26 × 20	16.8	
4	方	30 × 30	32.6	
5	不	28 × 20	8.8	
6	方	34 × 22	26.7	

Ch. 15 ST-57 計測表 Fig. 15 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。全般に炭化物あり。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。炭化物有り。
3	暗褐色土に黄白色砂質土を含む。
4	黄白色砂質土に炭化物を小ブロック状に黄褐色砂質土を含む。
5	暗褐色土に黄白色砂質土、黄褐色砂質土、炭化物を含む。
6	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	20 × 20	27.5	
2	楕	36 × 12		
3	方	22 × 22	24.0	
4	円	30 × 30	19.5	
5	円	32 × 32	15.2	
6	円	30 × 26	47.9	
7	方	44 × 30	41.9	
8	方	24 × 16	53.0	

Ch. 16 ST-58 計測表 Fig. 16 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。炭化物あり。
2	暗褐色土に多量の灰と少量の炭化物を含む。
3	黄褐色砂質土に暗褐色土を少量含む。
4	黒色土と灰の混層
5	黒色土に黄褐色砂質土を少量含む。
6	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	28 × 25	45.1	○
2	方	18 × 16	22.7	○
3	円	28 × 28	50.4	○
4	方	33 × 26	53.1	○
5	楕	36 × 32	39.8	○
6	方	28 × 28	33.8	
7	方	24 × 22	14.5	
8	方	24 × 18	29.0	○
9	方	21 × 16	14.8	
10	不	35 × 32	42.8	○
11	不	42 × 27	29.0	
12	方	30 × 30	21.8	
13	楕	33 × 30	15.0	
14	方	26 × 19	39.5	○
15	方	27 × 26	29.7	
16	不	22 × 22	9.0	
17	方	21 × 18	8.5	
18	方	21 × 21	11.4	

Ch. 17 ST-78 計測表 Fig. 16 対応

a 覆土層序

1	明褐色土に黄褐色砂質土を多少含む。粘性あり。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多少灰を少量含む。床面に粘性あり。
3	灰色砂質土
4	暗褐色土に多量の灰を含む。粘性あり。
5	明褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に多量に含む
6	明褐色土に灰を多量に含む。粘性強し。
7	黄褐色砂質土
8	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	楕	37 × 25	42.9	○
2	方	34 × 24	18.1	
3	方	23 × 22	39.7	○
4	不	54 × 40	39.7	
5	円	28 × 28	22.4	○
6	方	24 × 24	20.3	
7	方	22 × 19	11.8	
8	方	30 × 28	25.3	○
9	方	26 × 26	22.8	
10	不	36 × 28	33.0	
11	不	54 × 30	29.9	
12	不	29 × 24	23.0	
13	方	18 × 18	12.7	
14	方	30 × 25	56.5	○
15	方	34 × 26	38.3	○
16	不	40 × 34	49.0	○
17	不	45 × 35	23.8	

18	楕	27 × 23	41.2	○
19	方	23 × 23	18.3	
20	不	43 × 23	30.4	
21	不	40 × 30	28.4	
22	方	22 × 20	11.2	
23	方	24 × 23	14.5	○

Ch. 18 SE-23 計測表 Fig. 16 対応

a 覆土層序

1	明褐色土に炭化物を部分的に上部にロームを含む。しまり余りなし。
2	黒灰
3	赤褐色土。しまりあり。
4	黒褐色土に黄色砂質土を粒子状に含む。しまりあり。
5	暗褐色砂質土。しまりなし。
6	暗褐色土に黄色砂質土を含む。しまり弱く粘性ややあり。
7	黄褐色土に赤褐色砂を多量に含む。しまり全くなし。
8	地山

Ch. 19 ST-60 計測表 Fig. 17 対応

a 覆土層序

1	明褐色土に灰を粒子状に含む。しまりあり。
2	灰褐色土に灰を多量に、黄褐色砂質の小石を微量に含む。
3	暗褐色土黄色砂質土を斑点状に含む。しまり強し。
4	明褐色土に灰を多量に、小石を粒子状に含む。しまりなし。
5	褐色土に黄色砂質土が点在している。しまりあり。
6	暗褐色土に黄色砂質土を斑点状に含む。
7	褐色土に黄色砂質土を斑点状に含む。
8	灰褐色土に黄色砂質土を粒子状に含む。灰が大部分を占めている。しまり弱し。
9	褐色土に黄色砂質土を全体的に小石を斑点状に含む。
10	明褐色土に黄色砂質土を粒子状に含む。しまり強し。
11	明褐色土に黄色砂質土を全体的に含む。しまりなし。
12	黄褐色土に多量の斑点状黄色砂質土を全体的に含む。しまり弱し。
13	褐色土に黄色砂質土の小塊を若干含む。しまり弱し。
14	暗褐色土に黄色砂質土を小ブロック状に含む。しまり弱し。
15	茶褐色土に黄色砂質土を多量に含む。しまり弱し。
16	黒褐色土に黄色砂質土を斑点状に含む。
17	地山
18	明褐色土に灰、黄色砂質土の小塊を含む。
19	砂質の暗褐色土に黄褐色砂質土の小塊を含む。
20	灰褐色土に灰を多量に含む。しまりなし。
21	暗褐色土に灰、粒子状黄色砂質土を含む。しまりなし。

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	楕	48 × 40		
2	方	36 × 30	46.4	
3	方	30 × 28	38.5	
4	不	34 × 20	9.1	
5	楕	47 × 40	19.4	
6	不	48 × 32	67.4	

Ch. 20 ST-61 計測表 Fig. 18 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む。
2	暗褐色土に黒色土を多量に、炭化物と黄褐色砂質土を若干含む。
3	黄褐色砂質土。しまりなし。
4	暗褐色土に焼土を多少含む。
5	焼土に暗褐色土を多少、炭化物を若干含む。
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。
7	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	26 × 26	6.3	
2	不	50 × 40	34.2	
3	不	35 × 27	11.3	
4	不	25 × 25	21.7	
5	楕	28 × 24	46.7	
6	楕	30 × 25	50.1	

Ch. 21 ST-62 計測表 Fig. 19 対応

a 覆土層序

1	灰褐色土に灰色粘土、炭化物、ロームの小ブロックを含む。
2	黒色土に炭化物、ロームの小ブロックを多量に含む。
3	黒灰色土
4	黒色で固くしまりがあり、ロームの小ブロックを少量含む。
5	黒灰色土
6	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	28 × 25	32.7	○
2	方	35 × 25	27.7	
3	円	24 × 22	10.4	
4	円	16 × 13	29.4	○
5	円	30 × 30	47.9	○
6	方	28 × 26	52.4	○
7	方	26 × 22	42.1	○
8	方	35 × 33	21.8	
9	円	26 × 24	29.2	○
10	楕	29 × 21	38.5	○
11	方	45 × 42	12.9	
12	方	28 × 22	46.1	○

Ch. 22 ST-63 計測表 Fig. 20 対応

a 覆土層序

1	明褐色土で上部に灰の塊があり、黄褐色砂質土の小塊や小石が点在する。しまりあり。
2	赤褐色土に灰を含む。しまりなし。
3	赤褐色土に黄色砂質土の塊がある。しまりなし。
4	褐色土に炭化物が点在し、黄色砂質土を含む。
5	明褐色土。しまりあり。
6	暗褐色土に小石を含む。しまりあり。
7	暗褐色土に黄色砂質土を多量に含む。粘性あり。
8	黒褐色土に黄褐色砂質土の粒子が点在し、灰を多少含む。
9	暗褐色土。しまりなし。
10	褐色土に黄色砂質土が点在する。しまりあり。
11	地山
12	灰褐色土に灰を含む。しまりなし。
13	明褐色土。しまりなし。
14	黄褐色土に黄色砂質土を含む。しまりあり。
15	灰褐色土に赤色土を含む。しまりなし。

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	楕	70 × 54	44.2	
2	不	39 × 34	42.1	
3	方	33 × 34	19.4	
4	方	18 × 18	50.7	

Ch. 23 ST-65 計測表 Fig. 15 対応

a 覆土層序

1	黒褐色土。しまり弱し。
2	暗褐色土。
3	褐色土にロームが小ブロック状に点在し、一部に灰褐色土を含む。やや粘性あり。しまりなし。大きい砂礫あり。
4	暗褐色土に灰を若干と、ロームを大ブロック状に部分的に強く含む。しまりなし。
5	灰褐色土に灰を多量に含む。やや粘性あり。しまり弱し。
6	暗褐色土
7	黒褐色土に部分的に黄色砂質土を粒子状に若干含む。
8	黄褐色土
9	黒褐色土
10	地山
11	灰褐色土。しまりなし。
12	暗褐色土にロームを粒子状に少量、下部に黒色土を若干含む。

b 柱穴計測値

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	48 × 46	32.1	
2	方	40	22.8	
3	不	28	16.5	
4	楕	40 × 36	37.0	
5	楕	40 × 34	40.9	
6	楕	58 × 54	21.9	
7	方	44 × 28	10.2	
8	不	30	16.3	
9	方	28 × 28	28.3	
10	方	38 × 30	41.2	
11	円	50 × 48	60.0	
12	円	34 × 34	37.9	
13	方	23	23.7	

Ch. 24 ST-66・67、SX-29

計測表

Fig. 22 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を含み、部分的に炭化物を含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む。
3	暗褐色土に黒色土を部分的に少量含む。しまりなし。
4	黄褐色砂質土の大ブロック。
5	暗褐色土に多量の灰を含む。
6	暗褐色土に灰を少量、炭化物を若干含む。
7	暗褐色土に黒色土と灰を含む。
8	5より灰が少ない。しまりあり。
9	暗褐色土に小ブロック状黄褐色砂質土と灰を含む。
10	2と同じ。
11	地山

b 1. 柱穴計測値(ST-66)

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	26 × 18	32.4	○
2	円	36 × 36	60.3	
3	方	30 × 24	4.0	
4	不	26 × 20	76.8	○
5	不	20 × 16	61.0	○
6	方	36 × 32	65.9	○

b 2. 柱穴計測値(ST-67)

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	楕	28 × 20	14.2	
2	方	22 × 20	22.3	
3	楕	30 × 24	27.0	
4	円	24 × 22	10.3	
5	楕	24 × 16	61.3	
6	方	24 × 20	33.6	
7	方	28 × 24	22.8	
8	方	30 × 30	23.6	
9	楕	38 × 28	4.3	
10	楕	26 × 20	27.5	
11	楕	28 × 20	12.8	
12	方	22 × 22	18.2	
13	方	22 × 18	6.6	
14	方	20 × 16	4.7	
15	楕	24 × 16	16.4	
16	方	24 × 20	50.1	
17	方	20 × 20	6.4	

Ch. 25 ST-68 計測表

Fig. 23 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を部分的に炭化物を少量含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む。
3	暗褐色土に黒色土を部分的に少量含む。しまりなし。
4	黄褐色砂質土
5	地山

b 柱穴計測値

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	28 × 26	55.5	
2	楕	28 × 20	60.8	
3	不	22 × 16	62.7	
4	不	60 × 40	54.9	
5	方	30 × 30	60.7	
6	方	30 × 24	68.1	
7	方	34 × 28	55.5	
8	不	40 × 40	61.9	

Ch. 26 ST-70 計測表

Fig. 24 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に灰を多量に含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を斑点状に含む。
3	明褐色土にブロック状黄褐色砂質土と礫を含む。
4	地山

b 柱穴計測値

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	30 × 30	32.6	
2	方	43 × 42	8.5	

Ch. 27 ST-71 計測表 Fig. 25 対応  
a 覆土層序

1	暗褐色土に黄色砂質土を含む。しまりなし。
2	黒色土。1よりしまりあり。
3	黒褐色土に灰を含む。しまりなし。
4	褐色土に黒色土を少量と、黄色砂質を斑点状に含む。しまりなし。
5	茶褐色土に黄色砂質土少量の黒色土と灰を含む。しまりなし。
6	暗褐色土に炭化物を含む。しまりややあり。
7	褐色土に黄色砂を含む。
8	暗褐色土にロームが点在し、炭化物を少量含む。しまりややあり。
9	暗褐色土にロームを多量に含む。しまりややあり。
10	暗褐色土に黄色砂質土を含む。
11	明褐色土。しまりなし。
12	黒褐色土に白色砂と黒色土を含む。しまりややあり。
13	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	26 × 24	39.5	
2	方	26 × 18	26.3	
3	円	30 × 28	28.9	
4	不	23 × 22	23.4	
5	方	23 × 21	11.3	
6	方	38 × 20	61.6	
7	方	24 × 17	26.7	
8	方	32 × 15	23.2	
9	円	31 × 24	23.8	
10	方	31 × 21	14.1	

Ch. 28 ST-72 計測表 Fig. 26 対応  
a 覆土層序

1	褐色土に黄色砂をブロック状に多量に含む。しまりややあり。
2	暗褐色土。しまりややあり。
3	暗褐色土に黄色砂を少量含む。しまり弱し。
4	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	楕	14 × 12	26.4	
2	方	16 × 14	25.0	
3	楕	22 × 16	20.0	
4	不	12 × 12	22.9	
5	方	20 × 19	28.9	
6	楕	28 × 21	29.8	
7	楕	19 × 13	28.5	
8	不	26 × 10	8.0	
9	不	40 × 30	11.0	

Ch. 29 ST-75 SD-10 計測表 Fig. 27. 対応  
a 覆土層序

表土	黒色土
1	暗褐色土にロームの小ブロックを多量に含む。しまり強し。
2	暗褐色土に灰を多量に含む。
3	暗褐色土にロームの小ブロックと炭化物を少量含む。
4	黄褐色砂質土。しまりなし。
5	3に同じ。
6	暗褐色土に炭化物と黄色ロームを少量含む。
7	暗褐色土に黄色のロームのブロックを多量に含む。
8	黒色土に黄色ロームを少量含む。
9	黒色土。しまり強し。
10	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	楕	40 × 28	56.6	
2	楕	34 × 26	50.5	
3	楕	40 × 32	65.0	
4	方	26 × 26	44.2	張り出し部分
5	方	30 × 24	51.0	〃
6	楕	44 × 38	54.2	
7	楕	30 × 30	59.8	
8	方	30 × 28	47.9	
9	不	50 × 44	64.5	
10	楕	32 × 28	47.7	

Ch. 30 ST-76 計測表 Fig. 28 対応  
a 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	楕	25 × 17	32.0	
2	円	25	50.0	
3	円	16	71.0	
4	円	14 × 13	38.8	
5	方	22 × 20	33.5	
6	方	25 × 21	15.0	
7	方	30 × 30	29.6	
8	方	12 × 8	28.8	
9	楕	24 × 18	9.0	
10	方	42 × 41	18.8	
11	方	35 × 33	26.8	
12	楕	34 × 22	22.5	
13	不	34 × 30	33.5	
14	円	25 × 24	33.0	
15	方	34	42.3	
16	方	48 × 32	17.6	

Ch. 31 ST-77 計測表 Fig. 29 対応  
a 柱穴計測値

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	楕	38 × 26	56.5	
2	方	28 × 26	41.9	
3	方	32 × 28	55.0	
4	方	24 × 24	43.1	
5	円	28 × 27	46.6	
6	方	17 × 17	42.5	

Ch. 32 ST-80 計測表 Fig. 30 対応  
a 覆穴計測値

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を部分的に炭化物を少量含む
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む
3	暗褐色土に黒色土を部分的に少量含む。しまりなし
4	地山

Ch. 33 ST-81 計測表 Fig. 31 対応  
a 覆土層序

1	暗褐色土に黄白色粘土を若干と小石を含む。炭化物あり。しまりややあり。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土と黄白色粘土を含む。炭化物あり。しまりあり。
3	暗褐色土に小石を少量と黄褐色砂質土を粒子状に含む。炭化物あり。しまりなし。
4	暗褐色土に炭化物を少量と黄褐色砂質土を含む。しまりあり。
5	暗褐色土と白灰の混層に黄褐色砂質土を少量含む
6	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に多量に部分的にブロック状に含む。炭化物あり。しまり全くなし。
7	暗褐色土。しまりあり。
8	黒色土に部分的に黄褐色砂質土塊を含む。
9	6より黄褐色砂質土が少ない。
10	黄褐色砂質土
11	黄褐色砂質土に暗褐色土を粒子状に含む。
12	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層
13	黒褐色土
14	暗褐色土
15	黄褐色砂質土
16	地山
17	黄灰色粘土

b 柱穴計測値

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	40 × 40	64.5	B
2	方	26 × 24	57.5	B
3	不	50 × 40	65.2	A B
4	方	26 × 26		
5	方	46 × 34	49.5	B
6	方	30 × 26	61.7	
7	方	34 × 30	40.6	A
8	不	70 × 20	22.0	
9	楕	40 × 30	58.0	

10	方	44 × 32	57.0	A
11	方	38 × 34	55.5	B
12	不	46 × 32	54.7	B
13	不	42 × 40	49.0	B
14	不	44 × 36	61.5	B
15	方	50 × 36	72.0	A
16	方	30 × 30	55.5	A
17	不	30 × 28	59.5	A
18	不	44 × 36	63.9	A
19	楕	28 × 24	63.6	
20	楕	34 × 25	54.2	A
21	方	28 × 26	52.7	A
22	不	40 × 26	33.5	
23	不	38 × 26	40.2	

Ch. 34 ST-81 出土遺物注記表

No.	F・P - No.	名称	出土区	計測値(長さ×巾×厚さ)cm	重さ(♯)	備考
A	F 794	銅鏡	1-57 ST-81ツ土	9.85 × 9.84 × 0.80	160.0	
B	F 822	銅鏡	"	11.30 × 11.29 × 0.91	355.0	
C	P 1123	瓦器	"	手摺りの底部		
D	P 1159	瓦器	"	巴文あり		
D	P 1145	瓦器	"	黒褐色の粘面		
E	P 1150	天目	"	松葉文あり		
F	P 1189	瓦器	"	表面研磨		
G	P 1186	瓦器	"	行次・霞文・巴文あり		
H	P 317	瓦器	"	表面研磨		
H	P 1174	瓦器	"	内外面黒色研磨		
I	P 1128	瓦器	"	内外面黒色研磨		

Ch. 35 ST-82 SE-24 計測表 Fig. 32 対応  
a 覆土層序

1	暗褐色土 (SE-24 覆土)
2	暗褐色土。しまりあり。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に多量に含む。
4	黄褐色土に暗褐色土と黄褐色砂質土塊を多量に含む
5	暗褐色土に炭化物を多量に黒色土と黄褐色砂質土を若干含む
6	黒色土
7	黄褐色土に暗褐色土を多量に含む。
8	暗褐色土。しまりなし。
9	地山
10	赤灰色土。若干粘性あり。

b 柱穴計測値 (ST-82)

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	28 × 20	27.9	
2	不	24 × 16	25.3	
3	楕	25 × 20	24.2	

Ch. 36 ST-84 SX-27-47

計測表 Fig. 33 対応

a 覆土層序

1	明褐色土に黄褐色砂質土を斑点状に強く含む。黄褐色砂質土塊あり。(ST-84覆土)
2	明褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に多量に含む。しまりなし。(SX-47覆土)
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。部分的に黄褐色砂質土塊を含む。(SX-27覆土)
4	暗褐色土に灰、炭化物を少量含む。(SX-27覆土)
5	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	25 × 20	50.6	
2	円	25 × 25	49.7	
3	方	22 × 18	9.4	
4	方	19 × 16	7.4	
5	方	20 × 17	39.8	
6	方	53 × 51	61.4	
7	方	23 × 21	37.2	
8	方	23 × 18	34.2	

Ch. 37 SE-20 覆土層序 Fig. 34 対応

1	暗褐色土に部分的に黄褐色砂質土、黄白色粘質土を若干含む。
2	暗褐色土と暗灰色土の混層に炭化物を若干含む。
3	明灰色土に灰を多量に、炭化物を若干含む。
4	暗褐色土、灰、黄褐色砂質土の混層。
5	暗褐色土に炭化物を部分的に、黄褐色砂質土をレンズ状に含む。
6	暗褐色灰
7	暗褐色灰、焼土、黄白色灰の混層。部分的に炭化物あり。
8	暗褐色土に暗灰色灰を含む。
9	暗灰色灰に部分的に白色灰を含む。
10	黄褐色砂質土と暗灰色灰の混層。
11	黄褐色砂質土に暗褐色土を若干含む。
12	暗灰色灰
13	暗褐色土に暗灰色灰と炭化物を部分的に含む。
14	暗褐色土に白色灰を全体に含む。部分的に炭化物あり。
15	暗褐色土
16	白色灰に暗褐色土を若干含む。
17	暗褐色土。しまりなし。
18	黄褐色砂質土に、暗褐色土、暗灰色灰、炭化物を若干含む。
19	暗灰色灰
20	暗褐色土に黄褐色砂質土、炭化物を微量に含む。
21	暗褐色土、暗灰色灰、黄褐色砂質土の混層。
22	黄褐色砂質土に暗褐色土を部分的に含む。
23	暗褐色土と暗灰色灰の混層。
24	黒色土。
25	暗褐色土に黒色土を部分的に含む。
26	黄褐色砂質土(ローム)崩壊土。

Ch. 38 SE-20 出土遺物対比表 Fig. 35 対応

No	遺物No	Fig.	PL	名称	出土区	細目	文様	胎土	備考
A	P 1028	35		青磁	R55 SE20フク土				(29)
B	P 939	"		"	"				
C	P 895	"		"	"				(31)
D	P 1032	"		染付	"				(90)
E	P 967	"		"	"				
F	P 984	"		白磁	"				(64)
G	P 1000	"		"	"				
H	P 1031	"		瀬戸	"				(59)

Ch. 39 SE-22 覆土層序 Fig. 36 対応

1	暗褐色土、上部はしまり強く黄褐色砂質土を微量に含む。下部は炭化物を含む。部分的に川原石を含む。
2	暗褐色土にロームを若干含む。
3	明褐色土。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。しまり強し。
5	明褐色土に黄褐色砂質土を斑点状に含む。
6	暗褐色土に小石を含む。しまりなし。
7	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に含む。しまりなし。
8	暗褐色土。粒子が細かく若干粘性がある。
9	暗褐色土に砂質土を多量に含む。
10	褐色土に小石を多量に含む。下部に炭化物を若干含む。
11	褐色土。粒子が細かい。
12	暗褐色土。粒子が粗い。
13	黄褐色砂質土と灰褐色砂質土の混層に黄褐色砂質土塊を含む。
14	暗褐色土。粒子が粗い。
15	茶褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
16	明褐色土に黄褐色砂質土の小塊と灰褐色砂質土を含む。
17	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。粘性があり粒子が細かい。
18	明褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。上部に灰褐色砂質土を若干含む。
19	黄褐色砂質土
20	明褐色砂質土。しまりなし。
21	暗褐色土に黄色砂質土塊を多少含む。しまりあり。
22	灰色砂に小石を多量に含む。
23	凝灰質浮石層



Ch. 40 SE-30 覆土層序 Fig. 38 対応

1	明褐色土。しまりあり。
2	赤味を帯びた灰質土。
3	褐色土にロームを斑点状に含む。
4	明褐色土に少量のロームを含む。
5	褐色土に砂質土をブロック状に含む。
6	黄褐色砂質土に炭化米を少量含む。
7	暗褐色土にロームを斑点状に含む。
8	暗褐色土にロームを部分的に強く含む。
9	灰黄色砂質土に暗褐色土をレンズ状に含む。

Ch. 41 SE-31 覆土層序 Fig. 39 対応

1	明褐色土。しまりあり。
2	褐色土に黒色灰質土を含む。しまりあり。
3	黒色灰質土と褐色土がレンズ状に混在している。
4	黒色灰質土と灰褐色土がレンズ状に混在している。

Ch. 42 SF-01・02 覆土層序 Fig. 42 対応

a 1. SF-01 覆土層序 (西壁)

1	焼土、粘土質である。
2	白色灰
3	黒色土に炭化物を多量に含む。
4	黒色土に炭化物を3より少なく含む。
5	暗褐色土
6	暗褐色土に黒色土を多量に焼土を若干含む。
10	地 山

a 2. SF-02 覆土層序 (南壁)

1	焼土に暗褐色土を多少含む。
2	黄褐色砂質土に暗褐色土を多少含む。
3	暗褐色土に白灰を多量に炭化物を含む。
4	焼 土
5	暗褐色土
10	地 山

Ch. 43 SX-17 計測表 Fig. 42 対応

a 覆土層序

1	明褐色土。しまりあり。
2	黄白色砂質土。しまりなし。
3	暗褐色土に若干砂を含む。しまりあり。
4	黄白色砂質土に灰を多少含む。
5	暗褐色土にロームを斑点状に含み、下部には炭化物が点在する。黄色ロームあり。やや粘性あり
6	褐色土にロームを含む。
7	暗褐色土にロームを少量含む。しまりあり。
8	黒色土にロームを微量含む。粘性あり。
9	焼 土
10	地 山

b 柱穴計測値

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備 考
1	方	28 × 20	20.2	
2	方	28 × 26	23.6	

Ch. 44 SF-03 覆土層序 Fig. 43 対応

1	焼土
2	灰褐色粘土
3	黒色土に灰と焼土を若干含む。
4	褐色砂質土に灰を若干含む。
5	暗褐色土に焼土を多量に含む。
6	暗褐色土に炭化物を多量に含む。
7	暗褐色土に灰を若干、炭化物を多少含む。
8	暗褐色土に黒色土を多量に、黄褐色砂質土を若干含む。
9	暗褐色土に焼土を多量に、炭化物を少量含む。
10	焼土。赤黒く砂質の状態である。
11	暗褐色土に焼土と炭化物を多量に含む。
12	暗褐色土に焼土と炭化物を若干含む。
13	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に少量含む。
14	黒色土に暗褐色土と焼土を多少含む。
15	地 山

Ch. 45 SF-04 覆土層序 Fig. 44 対応

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。
2	暗灰色土に部分的に焼土と炭化物を含む。
3	暗褐色土に部分的に灰と焼土と炭化物を含む。1より暗い。
4	炭化物層
5	暗褐色土に焼土と炭化物を若干含む。
6	炭化物層に灰と焼土を多量に含む。
7	焼土
8	焼土に暗褐色土と炭化物を多少含む。
9	褐色土に焼土を若干、黄褐色土を小ブロック状に多量に含む。
10	暗褐色土に焼土を部分的に、黄褐色砂質土を若干含む。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を大ブロック状に多少含む。
12	黒色土に若干黄褐色砂質土を大ブロック状に多少含む
13	地 山

Ch. 46 SX-10 計測表 Fig. 45 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。灰、炭化物有り。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む。1より灰、炭化物多し。
3	暗褐色土に灰、炭化物を少量含む。
4	地 山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	25 × 24	15.5	
2	円	57 × 31	5.8	
3	円	44 × 33	35.6	
4	円	23 × 22	1.4	

Ch. 47 SX-11 覆土層序 Fig. 46 対応

1	灰の中に暗褐色土有り。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。
3	暗褐色土。若干の灰有り。
4	黒色土に黄褐色砂質土を多量に含む。
5	4より黄褐色砂質土が多い。
6	黄褐色砂質土に暗褐色土を含む。
7	地山

Ch. 48 SX-12 計測表 Fig. 47 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄色砂質土を若干ブロック状に含む。炭化物、灰有り。しまりあり。
2	暗褐色土に黄色砂質土を含む。焼土、炭化物、灰有り。しまりなし。
3	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	34 × 28	38.5	
2	方	22 × 20	21.9	
3	方	30 × 26	11.0	
4	楕	24 × 14	38.0	

Ch. 49 SX-13 計測表 Fig. 48 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄褐色砂質土を含む。
2	黄褐色砂質土に暗褐色土を含む。
3	暗褐色土に小石を少量含む。
4	暗褐色土に黄褐色砂質土を少量含む。
5	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	35	22.4	
2	方	27	38.0	
3	方	16 × 14	20.2	

Ch. 50 SX-14 計測表 Fig. 49 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に黄色砂質ロームを大ブロック状に含む。しまりなし。
2	暗褐色土。しまりなし。
3	暗褐色土に黄色砂質ロームを粒子状に、一部に小ブロック状に含む。しまりなし。
4	暗黄褐色土に黄色砂質ロームを小ブロック状に含む。しまり強し。
5	黒色土。しまりなし。
6	暗褐色土。しまりなし。
7	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	35 × 28	21.7	
2	不	52 × 46	35.6	
3	楕	30 × 25	12.3	
4	方	46 × 45	46.3	

Ch. 51 SX-21 柱穴計測値 Fig. 52 対応

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	楕	30 × 25	39.2	
2	楕	20 × 13	34.8	
3	円	25 × 13	38.7	
4	方	20 × 10	28.5	
5	楕	20	18.5	
6	方	42 × 37	50.4	
7	方	24 × 22	19.0	
8	方	29 × 27	20.0	
9	方	56 × 46	44.7	

Ch. 52 SX-26 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	28 × 28	35.9	
2	方	22 × 20	15.5	
3	楕	34 × 29	39.0	

Ch. 53 SX-31 計測表 Fig. 54 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層
2	暗褐色土に焼土、炭化物、黄褐色粘土を多量に含む。粘性強し。
3	暗褐色土に黄白色粘土を多量に含む。
4	黒色土に黄白色粘土を含む。
5	白色粘土。
6	黒色土。粘性強し。
7	暗褐色土に炭化物、黄褐色砂質土を斑点状に含む。
8	明灰色粘質土
9	7より粘性強し。
10	黄褐色砂質土に黒色土を若干含む。
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
12	灰(暗灰色)に暗褐色土と黄褐色砂質土を部分的に含む。南側には稲籾(炭化)が部分的に含まれる。
13	暗褐色土に焼土、炭化物を部分的に含む。
15	暗褐色土に黄褐色砂質土を粒子状に炭化物をレンズ状に含む。
15	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層
16	炭化物
17	地山

b 柱穴計測値

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	26	49.1	
2	円	24	52.8	
3	円	29	46.3	
4	円	28	48.8	

Ch. 54 SX-31 出土遺物計測表 Fig. 55 対応

No	F-No	名称	出土区	計測値(cm) (長さ×巾×厚さ)	重さ(g)	備考
A	F 779B	槍	J57S×31床面	345×158×0.8	830	
B	F 781	刀(著)	"	136×34×0.5	109.2	
C	F 782	小刀	"	158×12×0.5	26.3	
D	F 783	鉄鏃	"	127×07×0.6	21.2	
Ea	F 777A	不明	"	73×0.5×0.5	10.6	
Eb	F 777B	"	"	10.9×0.8×0.5	19.8	
F	F 780	小礼	"	6.8×2.1×0.3	8.7	
G	F 784	不明	"	5.7×1.5×0.4	12.9	

Ch. 55 SX-32 計測表 Fig. 56 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に灰を含む。部分的に炭化物有り。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土を多量に、灰を少量含む。
3	暗褐色土に焼土、炭化物を含む。
4	暗褐色土に黄白色粘土、焼土をレンズ状に含む。土師器(甕、坏等)片を多量に含む。
5	地山

b 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	55×50	66.1	
2	方	35×30	28.5	
3	方	24×20	10.5	
4	不	42×36	23.4	
5	方	40×32	36.9	
6	方	44×40	7.7	
7	方	18×15	11.3	
8	方	48×44	13.5	
9	方	28×25	35.4	

Ch. 56 SX-33 柱穴計測表 Fig. 57 対応

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	33×31	6.1	
2	方	22×21	10.5	

Ch. 57 SX-37・38・39、SD-11

計測表

Fig. 58 対応

a 覆土層序

1	暗褐色土に炭化物を含む。
2	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に多量に含む。
3	暗褐色土に黄褐色砂質土を小ブロック状に含む混層
4	白灰
5	暗褐色土に炭化物と灰を多量に、部分的に黄褐色砂質土を粒子状に含む。
6	灰
7	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。鉄分が非常に多い。しまり強し。
8	黒色土に黄褐色砂質土を部分的に含む。
9	暗褐色土に炭化物を部分的に含む。
10	黄褐色砂質土
11	暗褐色土に黄褐色砂質土を若干含む。
12	地山

b 柱穴計測値(SX-39)

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	19×19	21.7	
2	楕	23×18	63.4	
3	方	17×17	84.4	

Ch. 58 SX-46 覆土層序 Fig. 60 対応

1	暗褐色土に炭化物を多量に、黄色砂質土を粒子状に含む。
2	暗褐色土
3	灰、植物繊維質遺存体
4	暗褐色土に黄色砂質土を小ブロック状に少量含む
5	4より黄質砂質土が多い
6	暗褐色土に焼土を少量含む。
7	灰に塵を含む
8	黒色土
9	茶褐色土
10	地 山

Ch. 59 SX-48 覆土層序 Fig. 61 対応

1	明褐色土に炭化物を若干含む。
2	暗褐色土に灰と炭化物を多量に含む。
3	暗褐色土に炭化物を全般に含む。ややしまりあり。
4	黄褐色砂質土
5	黒色土に炭化物を多量に含む。しまりなし。部分的に鉄分の痕跡が見える。
6	暗褐色土に全般に黄褐色砂質土を粒子状に含む、炭化物と灰も小範囲ながらみられる。更に、鉄分のためか赤褐色を呈する部分もある。
7	暗褐色土と灰と黄褐色砂質土の混層に黄白色粘土を全粒に、炭化物を若干含む。部分的にしまりあり。
8	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
9	明褐色土に黄褐色砂質土を部分的に含む。ややしまりあり。
10	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。しまり全くなし
11	暗褐色土に若干の黄褐色砂質土と凝灰質浮石層（青灰色）を含む。
12	地 山

Ch. 60

PQ 55 北館・猿楽館間の掘跡層序

Fig. 62 対応

1	明茶褐色土
2	茶褐色土で部分的に乳白色砂質土、炭化物を若干含む、粘性がある。
3	暗茶褐色土で炭化物と小石を若干含む。
4	暗褐色土で、褐色粘土、乳白色砂質土を部分的に含む、灰を少量含む。
5	暗褐色土で、炭化物と灰を多少含む、下層に粘性有り。
6	暗褐色粘層
7	暗褐色土で、上層に灰と炭化物を多量に含む。粘性あり。
8	暗褐色粘土と灰色砂質土との混層。灰を少量含む
9	凝灰質浮石層。
10	暗褐色土に凝灰質浮石層を含む。
11	暗灰色粘土と黄色砂質土の混層。部分的に炭化物と灰を若干含む。
12	黄褐色砂質土に暗褐色粘土を含む。
13	暗褐色泥土に、灰色砂質土と凝灰質浮石層とパミスを含む。しまりなし。
14	2に黄褐色砂質土をブロック状に少量含む。

15	2に粘性有り、灰を帯状に含む。
16	灰色粘土で、鉄分を多量に含む。
17	暗褐色土と黒色土の混層。粘性有り。
18	暗褐色土、炭化物を若干含む。しまりあり。
19	暗褐色土で、若干粘性あり灰を多量に含む。
20	暗褐色粘土層。
21	暗褐色土層。粘性若干有り。暗褐色砂質土と、もみがらをブロック状に少量含む。小石を若干含むしまりなし。
22	暗褐色土層。粘性若干有り。木片ともみがらを多量に含む。しまりなし。
23	暗褐色土。下層粘性強し。
24	黒褐色土。粘性強し。
25	黒褐色土。粘性あり。
26	暗褐色土。乳白色砂質土を小ブロック状に、炭化物を若干含む。
27	暗褐色土と黒褐色土の混層。左下層が粘性強く、しまりあり。若干灰色砂質土を含む。
28	褐色土で黄褐色砂質土と灰色凝灰質土を小ブロック状に多少含む。炭化物を含む。
29	暗褐色土に灰色凝灰質土と黄褐色砂質土が多量に含まれ、しまりが非常に強い。炭化物が下層に多少含まれる。
30	暗褐色土と暗灰色砂質土の混層。しまりなし。
31	30に、黄褐色砂質土塊を含む。
32	明茶褐色粘土に、灰色粘土を斑点状に含む、灰色凝灰質浮石層をブロック状に多量に含む、下層に暗褐色土が若干混入（鉄分が多少含まれる）しまり強し。
33	暗褐色土に灰と灰色凝灰質土を小ブロック状に含む。
34	暗褐色土に灰色砂質土を少量含む。
35	灰色粘土。褐色粘土を若干含む。
36	暗褐色土の中に多量に黄褐色砂質土を含み、凝灰質浮石層が斑点状に含まれる。
37	黄褐色砂質土
38	13と同じ。灰色凝灰質土をブロック状に多少含む
39	灰色凝灰質土に暗褐色土を多少含む。
40	暗灰色砂質土
41	36と同じ。
42	青灰色砂質土に小石を多量に含む。黒色鉄分を多量に含む。
43	灰色凝灰質浮石層
44	暗褐色土に暗灰色砂質土、凝灰質浮石層の混層
45	黒色土、植物遺存体→生木
46	青灰色粘土
47	暗褐色土に、凝灰質浮石層。下層になるに従い砂質が多くなる。
48	灰色砂質土
49	青灰色凝灰質浮石層
50	青灰色粘土

Ch. 61 青磁注記表

No	遺物 No	PL	Fig.	器形	出土区	釉調	胎土	文様	備考
1	P 647	39	69	碗	F54ST77フク土	深緑色	暗灰色	雷文	
2	P 1057	"	"	"	I57Ⅱ上	青緑色	白色	雷文・劃線文	
3	P 7525	"	—	"	I53Ⅰ	青色	"	雷文	
4	P 978	"	—	"	I54SE24フク土	淡青色	"	劃線	
5	P 388	"	—	"	L57Ⅱ	"	"	"	
6	P 70	"	69	"	G54Ⅰ	黄緑色	黄白色	雷文(スタンプ)	
7	P 501	"	"	"	K57SX17フク土	深青緑色	青白色	雷文・劃花文	
8	P 41	"	—	"	L55ST51フク土	"	"	"	
9	P 443	"	69	"	L56SX17フク土	深緑色	"	便化雷文?	二次焼成
10	P 480	"	—	"	I55ST63フク土	青緑色	黄灰色	なし	
11	P 1387	"	—	"	G55SBO3Pitフク土	淡青緑色	暗灰色	"	
12	P 1337	"	—	"	K54 フク土	深緑色	白色	劃線	
13	P 228	"	—	"	PQ55 フク土	淡緑色	暗灰色	なし	
14	P 331	"	—	"	K56ST59aフク土	黄緑色	"	"	
15	P 1080	"	—	"	J56Ⅱ上	深青緑色	灰色	"	
16	P 5182	"	—	壺?	L56Ⅰ	淡青灰色	"	鑄文	45と同じ
17	P 16	"	69	香炉	I56Ⅰ	青緑色	暗灰色	鑄蓮弁文	
18	P 41	"	"	碗	PQ55 フク土	淡青緑色	"	なし	
19	P 776	"	"	"	F55ST726フク土	深青緑色	"	蓮弁文	
20	P 540 P 1359	"	"	"	F55Ⅱ	淡青緑色	灰色	"	
21	P 250	"	—	"	PQ55 フク土	淡青灰色	"	"	二次焼成
22	P 367	"	—	"	L57ST57床面	暗青灰色	暗灰色	"	焼成不良
23	P 1219	"	69	"	I57SE24aフク土	淡青緑色	白色	"	
24	P 176	"	"	"	PQ55 フク土	淡青緑色	灰色	"	
25	P 262	"	"	"	L54Ⅱ	灰青色	暗灰色	"	二次焼成
26	P 591	—	69	"	SX21 フク土	暗緑色	"	なし	
27	P 59	—	"	"	ST51 フク土	深緑色	暗灰褐色	蓮弁文	釉溜り有り
28	P 2	—	"	"	I55Ⅱ	淡青緑色	暗灰色	"	
29	P 1028	—	"	"	SE20 フク土	"	灰色	" (劃線化)	二次焼成
30	P 1116	40	70	大皿	J57SX31フク土	"	白色	劃線	破壊
31	P 895	"	"	皿	I55SE20フク土	赤褐色	褐色	"	
32	P 988	"	"	"	K55SE20フク土	赤黄色	"	"	
33	P 144	"	"	"	L55SX12フク土	灰緑色	暗灰色	劃花文	
34	P 963 P 1104	"	"	"	K55SE20フク土	淡青緑色	"	"	
35	P 1221	"	"	"	L54ST83フク土	深緑黄色	"	櫛目状流水文	
36	P 232	"	—	"	J57Ⅱ上	淡青緑色	"	劃花文	
37	P 1505	"	—	"	F54Pitフク土	"	灰色	"	
38	P 8499	"	—	"	K54SE32フク土	灰色	赤褐色	?	二次焼成
39	P 1245	"	—	"	J55 フク土	淡青緑色	暗灰色	なし	
40	P 223 P 479	"	—	"	I57ST62フク土	薄黄緑色	灰色	"	
41	P 537	—	70	大皿	F55Ⅱ	淡青灰色	灰褐色	櫛目状流水文・劃花文	
42	P 306	—	"	皿	L57ST57フク土	淡青色	灰色	劃花文	漆接合痕
43	P 4271	—	"	"	K56Ⅰ	深緑色	暗灰色	印花文	
44	P 4567	—	"	小皿	北館表採	"	"	なし	
45	P 5182	—	"	"	L56Ⅰ	淡青灰色	灰色	鑄文	
46	P 8130	—	"	壺?	L57Ⅰ	"	"	なし	二次焼成
47	P 4367	—	"	盤?	J54Ⅰ	青緑色	"	"	

Ch. 62 白磁注記表

No.	遺物 No.	PL.	Fig.	器形	出土区	釉	調	胎	土	備考			
48	P 47	41	71	皿	K57I	暗	灰	色	暗	灰	色	楯目状沈線文	
49	P 1254	"	"	碗	I54II	黄	白	色	黄	白	色	軟質	
50	P 253	"	"	皿	L54II	白		色	白		色	硬質	
51	P 392	"	"	"	L56Pit119	青	白	色	"			"	
52	P 884	"	—	"	I55ST67	"			"			"	
53	P 69	"	71	"	PQ55	灰	白	色	"			見込み無釉	
54	P 816	"	—	小	I53II	白		色	淡	白	色	見込み蛇の目	
55	P 1074	"	71	皿	K57ST61	暗	白	色	暗	白	色	硬質	
56	P 1269	"	"	"	I53Pit	青	白	色	白		色	"	
57	P 1370	"	—	"	H54SE31	白		色	"			"	
58	P 839	"	—	"	J57ST62	暗	灰	色	"			"	
59	P 1000	"	71	"	K55SE20	白		色	"			"	
60	P 76	"	"	壺	G55I	暗	灰	緑	色	暗	灰	色	"
61	81P141	—	"	皿	81K53II	黄	白	色	灰		色	軟質	
62	P 3196	—	"	"	I56I	白		色	白		色	硬質	
63	P 183	—	"	"	L57地山	"			"			"	
64	P 984	—	"	"	SE20	"			"			"	

Ch. 63 染付・赤絵注記表

No.	遺物 No.	PL.	Fig.	器形	出土区	釉	調	胎	土	文	様	備考		
65	P 1049	42	72	碗	J57II上	暗	青	色	白	色	波涛文、蕪葉文			
66	P 1325 P 1329	"	"	"	J54SE28	"		灰	色		?			
67	P 1328	"	"	"	J54SE28	青	白	色	白	色	牡丹唐草文			
68	P 433	"	"	"	K57SE22	青	緑	色	"		草花文			
69	P 726	"	"	"	H55II	青	白	色	"		人物文(?)			
70	P 758	"	—	"	F54ST77	青	緑	色	黄	白	色	不明		
71	P 7797	"	—	"	F54SX22	青	白	色	白	色	波涛文			
72	P 5694	"	—	"	J57I	"			"		雷文(?)			
73	P 768	"	72	"	J57ST62	暗	緑	色	"		牡丹唐草文			
74	P 575	"	"	"	H54II	青	白	色	灰	色	蕪葉文			
75	P 1327	"	"	"	J57ST62	"			"		"			
76	P 3198	"	"	"	I56I	"		白	色		?			
77	P 275	"	—	皿	PQ55	暗	黄	灰	色	黄	白	色	吉祥文	軟質
78	P 232	"	72	碗	"	青	灰	色	白	色	牡丹唐草文			
79	P 223	"	—	皿	"	青	白	色	"		"	二次焼成		
80	P 230	"	—	"	"	"			"		"			
81	P 335	"	74	"	"	白	色	"	"		圈線	底に「福○康○」銘有り		
82	P 113	"	—	"	"	青	白	色	"		獅子文(?)			
83	P 44	42 44	73	"	"	"		灰	色		吉祥文			
84	P 45	42	—	碗	"	"		白	色		蕪葉文			
85	P 177	"	—	"	"	"		"	"		不明			
86	P 237	"	—	皿	"	暗	青	灰	色	"	玉取獅子文	墨痕、擦痕		
87	P 207	—	72	碗	J56II	青	白	色	"		花鳥文(?)			
88	P 6	—	"	"	K56I	暗	灰	青	色	灰	色	不明		
89	P 982	43	73	皿	M54Pit内	青	白	色	"		羯磨文 牡丹唐草文			
90	P 1032	"	—	"	K55SE20	青	黄	色	黄	白	色	草花文、牡丹唐草文		
91	P 1299	"	74	中皿	I53	青	白	色	白	色	桃花文			
92	P 1361	"	73	皿	H54SE31	暗	青	灰	色	"	草花文 牡丹唐草文	墨痕有り		
93	P 9848 P 10213	"	"	"	I53I	青	白	色	"		唐草文	底に「洪○○○」銘有り		
94	P 1365	"	"	"	L54SD16Pit	"			"		羯磨文			
95	P 414	"	—	"	K57SE22	緑	灰	色	"		玉取獅子文			

No.	遺物 No.	PL.	Fig.	器形	出土区	釉調	胎土	文様	備考
96	P 1004	43	74	皿	L54Pitフク土	青白色	白色	獅子文	底に福銘有り
97	P 882	44	73	"	D55I	黄灰青色	黄白色	吉祥文	
98	P 5	"	"	"	L56I	青灰色	灰色	桃花文(?)	
99	P 843	"	"	"	I55ST64フク土	黄灰青色	黄白色	吉祥文	
100	P 1348	"	73	"	J54SE28	緑灰色	白色	羯磨文	
101	P 99	"	"	"	L55ST51フク土	青白色	灰色	不明	
102	P 482	"	"	"	K57SE22フク土	"	白色	獅子文	
103	P 863	"	"	"	I54ST80フク土	"	"	"	
104	P 82	"	73	小坏	H54I	"	"	山水画?)・唐草文	
105	P 281	"	"	皿	K54II	黄灰青色	黄灰色	桃花文	
106	P 498	"	"	碗	J57ST62フク土	"	灰色	不明	} 赤絵
107	P 1426	"	"	小碗	H55II上	"	"	牡丹唐草文	
108	P 245	"	73	小坏	PQ55フク土	暗青白色	灰色	不明	見込み蛇の目
109	P 1331	"	"	皿	J57I	青白色	白色	ばんち文	
110	P 704	"	74	"	H54SE21	"	"	折枝文・四方禪文	
111	P 4110	"	"	"	SE22フク土	藍白色	"	飛雲文	

Ch. 64 美濃・瀬戸注記表

No.	遺物 No.	PL.	Fig.	器形	出土区	釉調	胎土	特徴	備考
112	P 26	45	75	皿	L55SX12フク土	黄緑色	黄白色	なし	
113	P 917	"	"	"	L56ST78Pitフク土	"	"	底に輪ドチ有り	
114	P 193	"	"	"	PQ55フク土	"	灰色	"	二次焼成
115	P 389	"	"	"	L57II	"	黄白色	見込みに印花文	
116	P 1124	"	"	"	I57ST81フク土	黄白色	灰色	見込み無釉	二次焼成
117	P 179	"	75	"	PQ55フク土	黄緑色	"	なし	
118	P 1462	"	"	"	J57	"	黄白色	見込みに印花文有り	
119	P 309	"	"	"	L57ST59フク土	黄白色	"	"	
120	P 1375	"	"	"	F54SE33フク土	黄緑色	"	底に輪ドチ有り	
121	P 910	"	"	碗	I55ST64フク土	淡黄緑色	"	櫛目状劃線有り	
122	P 546	"	"	大皿	G54II	黄緑色	暗灰色	なし	
123	P 1382	"	"	壺	I57SE24フク土	淡緑色	灰色	輪積み痕有り	二次焼成
124	P 1438	"	"	碗	F54Pitフク土	淡黄緑色	黄白色	底無釉	
125	P 546	"	"	大皿	G54II	黄緑色	暗灰色	見込みに劃線有り	
126	P 513	"	"	壺	E55II	黒褐色	"	外面だけ施釉	
127	P 1371	"	"	"	D55ST75フク土灰層	"	"	外面に5本の沈線有り	
128	P 48	46	75	小壺	J57I	黄緑色	灰色	外面だけ施釉	二次焼成
129	P 1315	"	"	鉢	I53Pitフク土	淡黄緑色	黄白色	外面下半無釉	
130	P 9811	"	"	大皿	G54II	黄白色	"	なし	黄瀬戸手
131	P 934	"	"	碗	I54ST64フク土	緑灰色	灰色	見込みにドチ有り	
132	P 1350	"	"	壺	K54SE32フク土	灰緑色	"	釉溜り有り	
133	P 1477	"	75	"	J56SX46フク土	緑灰色	"	なし	二次焼成
134	P 899	"	"	小皿	L56ST78フク土	"	"	外面底面無釉	
135	P 1031	"	"	瓶子・壺	K55SE20フク土	暗緑色	"	糸切痕有り	二次焼成
136	P 310	"	75	皿	K54II	白色	黄白色	見込みにドチ痕有り	志野

Ch. 65 天目・堀跡出土の陶器注記表

No	遺物 No	PL	Fig.	名称	出土区	釉調	胎土	特徴	備考
137	P 1307	47	76	天目	J54Pitフク土	黒色	灰白色		二次焼成
138	P 408	"	"	"	157SX33床面	黒褐色	黄白色		
139	P 941	"	"	"	L57ST78フク土	"	"	底部上端に鉄分付着	
140	P 112	"	—	"	PQ55フク土	褐色	"		
141	P 1344	"	—	"	J54SE28フク土	黒色	灰色		
142	P10301	"	—	"	1561	黒褐色	暗灰色		
143	P 976	"	—	"	155ST68フク土	"	黄白色		
144	P 100	"	76	"	1531	黒色	暗灰色	底部上端に鉄分付着	
145	P 131	"	—	瀬戸	PQ55堀フク土	黒褐色	"	内面に釉の流れ有り	甕
146	P 321	"	—	瀬戸	"	黄緑色	灰色		"
147	P 262	"	—	越前	"	赤褐色	暗灰色		"
148	P 282	"	—	瓦器	"	黒色	黄灰色	黒色研磨	行火
149	P 95	"	—	瀬戸	"	黒褐色	暗灰色	肩部上端	四耳壺
150	P 135	"	—	施釉陶器	"	暗緑色	赤褐色	須恵器質	甕
151	P 287	"	—	越前	"	赤褐色	暗灰色		"
152	P 100	"	—	瓦器	"	黄褐色	黄灰色	手焙り	
153	P 158	"	—	土製品	"	—	—	片側をV字状に削る	
154	P 1150	23	76	天目	157ST81フク土	黒褐色	暗灰色	部分的に二次焼成痕有り	

Ch. 66 唐津注記表

No	遺物 No	PL	Fig.	器形	出土区	釉調	胎土	特徴	備考
155	P 1415		76	皿	F54SE33フク土	暗緑褐色	黄褐色	焼成不良	
156	P 105	48	"	"	J541	暗緑色	灰色	胴部外面に重ね焼痕有り	
157	P 1414	"	"	"	FJ54SE33フク土	灰緑色	黄褐色	見込みにドチ痕有り	
158	P 507	"	"	"	E541	暗灰緑色	暗灰色		
159	P 104	"	—	"	J541	灰緑色	赤褐色		
160	P 382	"	—	大皿	157フク土	"	"		
161	P 975	"	—	皿	154SE24フク土	"	"		
162	P 4358	"	—	"	J541	"	"		
163	P 34	"	—	"	K561上	暗灰緑色	"	見込みにドチ痕有り	
164	P 21	"	—	"	K571	暗緑色	"		
165	P 68	"	76	碗	PQ55フク土	深緑色	暗灰色	底部付近に鉄分付着	

Ch. 67 瓦器注記表

No	遺物 No	PL	Fig.	器形	出土区	特徴	文様	備考
166	P 1119	50	—	手焙り	157ST81フク土	須恵器質	波状隆帯文	
167	P 180	"	77	行火	PQ55フク土	外面黒色研磨	一条の隆帯	
168	P 218	"	"	手焙り	1571上	外面研磨		脚
169	P 1394	"	"	"	157SX33フク土	外面黄色研磨	松葉文・十字文・巴文	
170	P 243	"	"	"	M54フク土	外面黒色研磨	松葉文・巴文	
171	P 1379 P 1380	"	71	壺形	F55SB03フク土	輪積み痕有り	左三つ巴文・櫛目状波状文	同一個体
172	P 550 P 655 P 1507	"	—	"	F55ST72フク土	"	"	
173	S 15	"	—	行火	L55SX12フク土	中央に穿孔有り		
174	P 1062	"	—	手焙り	1571上	外面研磨・輪積み痕有り		
175	P 3875	"	—	"	79SE10フク土		算木状の帯文	
176	P 71	"	—	壺形	F551		巴文・十字文	
177	P 1376	"	77	手焙り	G55SD11フク土	外面研磨	雷文	
178	P 1190	"	"	"	157SX34フク土	外面研磨	巴文	
179	P 1699 P 1532	"	"	"	H55SX48フク土	外面黒色研磨	"	



No	遺物 No	PL	Fig.	器形	出土区	特徴	文様	備考
180	P 1374	50	77	手焙り	I57SE24フク土	外面研磨	十字文	
181	P 1217	—	"	"	I57ST82フク土	外面黒色研磨	なし	
182	P 1186	23	"	行火	I57ST81フク土	"	雷文・巴文	
183	P 1061	—	"	手焙り	I57Ⅱ上	外面研磨	なし	
184	P 690	19	"	"	G54ST71フク土	部分的に黒色を呈する	彫り込み文様	(脚)形状四角
185	P 631	—	"	"	F55ST72フク土	外面黒色研磨	松葉文	
186	P 1479	—	"	"	J55フク土	"	松葉文・巴文	
187	P 51	—	"	壺形	F55I	外面研磨	雷文・巴文	

Ch.68 挿録注記表

No	遺物 No	PL	Fig.	類別	出土区	色調	胎土	特徴	備考
189	P 545	50	78	Ⅱ a	G54Ⅱ	赤灰色	赤灰色	九条の櫛目	
190	P 127	51	"	Ⅷ	K54I	暗赤褐色	暗灰色		
191	P 332	"	"	"	PQ55フク土	"	"	片口	
192	P 215	"	—	Ⅲ a	I57Ⅱ上	黄灰色	"		
193	P 1105	"	—	"	I57SX33フク土	赤黄色	赤黄色		
194	P 553	"	—	"	F55Ⅱ	"	暗灰色	六条の櫛目	
195	P 8388	"	—	"	K57I	"	"		
196	P 439	"	—	Ⅲ b	K56SX16フク土	黒色	赤褐色		
197	P <sup>7262</sup> <sub>597</sub>	"	78	Ⅲ a	E54SE25フク土	赤黄色	赤黄色・暗灰色		
198	P 37	"	"	V	J55ST50フク土	暗灰色	暗灰色	六条の細い櫛目	
199	P 879	"	"	I	I55ST79フク土	青灰色	"	口縁部に櫛目波状文をもつ	
200	P 5720	"	—	Ⅶ	H54SE31フク土	赤褐色	赤褐色		
201	P 3379	"	78	I	K56SE22フク土	赤灰色	暗灰色	口縁部に櫛目波状文をもつ	
202		"	"	"	E54Pitフク土	"	"	注記不備のため遺物No消滅	
203	P 1163	"	—	甕	I57ST81フク土	暗灰色	"	口縁くの字形に外反	
204	P 968	"	—	"	K55SE20フク土	赤灰色	"	横位の叩き目をもつ	
205	P 1215	"	78	Ⅲ b	K54SE26フク土	黒色	赤褐色	九条の櫛目	
206	P 45	"	"	"	J57Ⅱ	暗灰色	暗褐色		
207	P 1175	"	"	Ⅱ b	I57SX34フク土	灰色	赤灰色		
208	P 5185	"	—	"	I57Ⅱ上	"	"		
209	P <sup>1384</sup> <sub>1157</sub>	"	78	"	I57SE24フク土	赤灰色	"	十三条の櫛目	
210	P 908	"	"	Ⅱ a	K55SE20フク土	赤褐色	黄灰色	九条の櫛目	炭素付着
211	P <sup>1331</sup> <sub>1353</sub>	"	—	"	J54SE28フク土	赤黄灰色	"	"	
212	P 912	"	—	"	L56ST78フク土	暗灰色	黄白色		
213	P 208	"	—	"	PQ55フク土	赤褐色	暗灰色		
214	P 1405	52	—	Ⅵ	I57SX36フク土	黄褐色	黄褐色	内面摩耗	
215	P 861	"	78	"	M54ST65フク土	淡灰色	淡灰色	片口、六条の櫛目	
216	P 185	"	—	Ⅳ	I57ST81フク土	黒色	黒色		
217	P 1148	"	—	"	"	"	暗灰色	片口部	
218	P 568	"	78	"	G55Ⅱ	暗灰色	"	櫛目左回り	
219	P 286	"	—	Ⅲ b	PQ55フク土	赤褐色・黒色	"		
220	P 350	"	—	Ⅱ a	PQ55フク土	赤灰色	灰色		
221	P 119	"	—	甕	"	暗褐色	暗灰色		越前
222	P 42	"	—	Ⅱ b	"	暗灰色	"	十条の櫛目	
223	P 202	"	78	Ⅱ a	"	赤褐色	黄白色	九条の櫛目	
224	P 321	"	—	?	"	黄緑色	灰色		
225	P 6189	"	—	甕	79K59Ⅱ	灰褐色	"		越前
226	P 95	"	—	"	PQ55フク土	黒褐色	暗灰色		
227	P 282	"	—	"	"	黒色	黄灰色		
228	P 52	"	—	甕	"	暗黒褐色	暗灰色		越前
229	P 255B	"	—	"	"	暗褐色	"	内面研磨有り	"

No.	遺物 No.	PL.	Fig.	類型	出土区	色調	胎土	特徴	備考
230	P 90	52	78		PQ55フク土	赤褐色	暗灰色		
231	P 262	"	"	甕	"	暗黒褐色	灰色	灰釉有り	越前
232	P 33	"	"	"	"	"	暗灰色		"

Ch. 69 溶解物付着土器(埴埴)・鑄型注記表

No.	遺物 No.	PL.	Fig.	用途	出土区	特徴	備考
233	P 1385	53	79	埴埴	H54SE31フク土	溶解物(銅滓など)付着	
234	P 50	"	—	"	J57I	"	
235	P 888	"	79	"	M54II	"	
236	P 1381	"	—	"	G54SBO3Pitフク土	"	
237	P 487	"	—	"	J57ST62フク土	"	
238	P 492	"	—	"	"	"	
239	P 503	"	—	"	"		未使用
240	P 7529	"	79	鑄型	I55II	胎土に矽など含む。焼成は埴埴の作りに似ている。	透し鑄
241	P 7788	"	"	"	G55SX37フク土	"	鑄あるいは切羽
242	P 156	"	"	"	PQ55フク土	"	
243	P 5351	"	—	"	79M58 ST34フク土	"	透し
244	P 9257	"	—	"	E55II	"	
245	P 301	"	79	"	I56ST63フク土	"	
246	P 524	"	—	"	E55II	"	
247	P 1246	"	—	"	J55Pitフク土	"	
248	P 1071	"	—	"	I57II上	"	
249	P 1696	"	—	"	I56II	"	
250	P 1695	"	—	"	"	"	
251	P 4952	"	79	埴埴	J56SX46フク土	溶解物(銅滓など)付着	
252	P 1419	"	"	"	G55SX37フク土	"	
253	P 1466	"	"	"	J55	"	
254	P 859	"	"	"	M54ST65フク土	"	
255	P 1420	"	"	"	G55SX37フク土	"	
256	P 52	"	"	"	J57I	"	
257	P 523	"	"	"	E55II	"	

No-258・259・260はかわらけである。

Ch. 70 鉄製品計測表

No.	F - No.	Fig.	名称	出土区	計測値(長さ×巾×厚さ)cm	重さ	備考
261	122	81	刀	L56II上	2.63 × 2.3 × 0.5	—	
262	537	"	小柄	I55ST66フク土	2.03 × 1.5 × 0.6	—	307と同じ
263	887	"	小刀	I53SE27フク土	2.06 × 1.5 × 0.6	—	
264	978	"	"	J57攪乱層フク土	1.72 × 1.6 × 1.1	—	
265	959 960	"	"	F54SD09フク土	1.80 × 2.10 × 0.8	—	
266	956	"	槍	E55II	2.31 × 1.6 × 0.6	—	
267	236	"	鉄 鍔	K57SE22dフク土	1.00 × 0.9 × 0.7	—	
268	920	"	"	I54ST84bフク土	0.97 × 1.0 × 0.6	—	
269	789	"	"	I57ST81aフク土	1.12 × 1.3 × 0.7	—	
270	505	"	"	M54SX14フク土	0.97 × 1.0 × 1.2	—	
271	1012	"	鱗尾 鍔	H55SX48フク土	0.61 × 0.37 × 0.6	—	
272	523	"	打 根	I56ST66フク土	0.73 × 0.8 × 0.7	—	
273	600	"	小 札	I56SX30フク土	0.69 × 0.39 × 0.3	—	
274	666	"	"	I57II上	0.62 × 0.21 × 0.16	—	
275	199	"	"	M57ST55フク土	0.63 × 0.22 × 0.3	—	
276	48	"	"	PQ55 フク土	4.85 × 2.1 × 0.2	—	

No	F - No	Fig.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)cm (高さ)	重 さ (g)	備 考
277	3	82	鍋	K55SX10bフク土	11.5 × 25.0 × 0.6	—	
278	910	"	苧 引 金	J54SE28フク土	8.5 × 2.1 × 0.7(0.2)	24.6	
279	1015	"	"	H55SX48フク土	10.0 × 3.6 × 0.2	21.5	
280	911	"	"	J54SE28フク土	8.7 × 2.3 × 0.3	21.1	
281	942	"	火 箸	I54SE21フク土	9.4 × 7.1 × 0.8	28.7	
282	18	"	"	PQ55フク土	13.1 × 0.6 × 0.6	13.0	
283	823	"	"	J57ST81dフク土	8.5 × 0.5 × 0.5	12.8	
284	914	"	"	J54SE28フク土	10.7 × 0.9 × 0.7	13.2	
285	606	"	"	K55SE20aフク土	20.9 × 0.7 × 0.7	22.6	
286	572	"	不 明	K55SE20bフク土	11.4 × 1.7 × 0.7	14.5	
287	1019	"	毛 抜 き	I57SX36フク土	7.8 × 1.0 × 0.4	4.1	
288	863	"	不 明	I54Ⅲ上	5.8 × 4.4 × 0.8	44.1	
289	233	"	"	K57Ⅲ	9.1 × 2.0 × 1.1	69.8	
290	49	"	"	PQ55 フク土	7.9 × 2.0 × 0.9	34.9	
291	50	83	樽 ?	"	17.9 × 2.3 × 0.7	38.0	
292	259	"	かすがい	K57SX17フク土	4.3 × 0.7 × 0.3	5.3	
293	51	"	不 明	I67I	15.4 × 1.8 × 1.7	55.0	
294	198	"	鎌	M57ST55 床面	13.1 × 3.6 × 0.5	38.0	
295	56	"	釘	PQ55 フク土	8.9 × 0.5 × 0.6	9.7	
296	7	"	"	"	6.3 × 0.7 × 0.5	6.7	
297	119	"	"	K57Ⅱ	8.0 × 0.7 × 0.7	19.1	
298	55	"	"	PQ55 フク土	5.3 × 0.6 × 0.5	5.4	
299	434	"	不 明	F54ST77フク土	6.5 × 1.2 × 0.6	11.8	
300	389	"	"	G55Ⅲ	22.2 × 1.4 × 1.2	79.5	
301	388	"	"	"	10.8 × 2.0 × 0.7	30.5	

Ch. 71 銅製品計測表

No	F-No	PL.	Fig.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)cm	重 さ (g)	備 考
302	794	55	—	銅 鏡	I57ST81フク土	9.9 × 9.8 × 0.8	160.0	
303	822	"	—	"	I57ST81フク土	11.3 × 11.3 × 0.9	355.0	
304	1	"	84	鋳 鉛	PQ55フク土	18.3 × 9.9 × 3.9	66.1	
305	988	"	"	筭	I55Pitフク土	12.7 × 1.3 × 0.7	21.0	
306	13	"	"	"	PQ55 フク土	20.0 × 1.2 × 0.2	28.2	
307	537	"	—	小 柄	I55ST66フク土	23.8 × 1.5 × 0.6	28.0	
308	149	"	—	小柄(柄)	L54Ⅲ	5.7 × 1.3 × 0.6	5.4	
309	47	"	85	金 板	PQ55 フク土	1.3 × 1.2 × 0.6	1.6	
			—	鞋				
311	764	56	84	銅 脚	I57ST81フク土	4.7 × 1.5 × 1.1	22.5	
312	339	"	"	銅 鈴	F54ST77フク土	2.8 × 1.5 × 1.5	5.5	
313	608	"	"	埴 塙	K54SE20フク土	6.6 × 6.2 × 3.5	65.8	
314	448	"	"	鑑	E54SE30フク土	2.9 × 0.8 × 2.8	2.3	
315	847	"	"	飾金具	J54 フク土	3.7 × 1.5 × 1.2	3.2	
316	568	"	"	不 明	I55ST64フク土	5.3 × 1.4 × 0.5	10.0	
317	713	"	"	銅 錘	I57Ⅱ上	6.4 × 1.4 × 1.3	46.5	
318	508	"	"	鑑	I55Ⅱ	3.8 × 1.9 × 0.9	6.4	
319	580	"	"	逆 角	I54SE21フク土	3.2 × 1.1 × 0.1	2.9	
320	1016	"	"	不 明	H55SX48フク土	4.0 × 1.0 × 1.0	4.4	
321	267	"	85	装飾品	K57SX17フク土	3.3 × 1.0 × 0.1	0.5	
322	260	"	"	飾金具	L56SE23フク土	3.1 × 1.2 × 0.1	1.6	
323	17	"	"	"	PQ55 フク土	3.6 × 1.2 × 0.3	4.4	
324	1017	"	"	"	H55SX48フク土	3.7 × 1.6 × 0.1	2.6	
325	1024	"	—	装飾品	C55I	3.2 × 1.4 × 0.2	4.0	

56号地録

No.	F-No.	PL.	Fig.	名称	出土区	計測値(長さ×巾×厚さ)cm	重さ(g)	備考
326	500	56	85	装飾品	I55ST66フク土	2.6 × 1.3 × 0.1	1.3	
327	85	"	"	"	M541	2.3 × 0.4 × 0.3	7.0	
328	630	"	"	不明	I55ST80フク土	1.7 × 1.2 × 0.4	4.5	
329	598	"	"	"	I54SE21フク土	1.8 × 1.2 × 0.3	3.1	
330	250	"	"	"	J57ST62フク土	3.3 × 1.8 × 0.7	8.0	
331	936	"	"	鐘状銅製品	J54SE32フク土	- × - × 0.3	2.0	
332	735	"	"	銅の割銀	I57ST81フク土	1.5 × 0.8 × 0.1	0.8	
333	8	"	85	耳かき	PQ55 フク土	7.5 × 0.3 × 0.2	1.1	
334	33	56	84	装飾品	"	4.5 × 1.8 × 0.1	3.3	
335	51	"	"	筭	"	1.32 × 0.5 × 0.3	1.04	
336	16	"	"	銅皿	"	11.2 × 3.8 × 0.2	87.7	
338	729	"	"	小柄	J57SX31dフク土	9.6 × 1.4 × 0.4	9.6	
339	658	"	"	不明	I57II上	3.0 × 2.6 × 0.2	9.2	
340	33	"	85	キセル	K57I	5.4 × 1.2 × -	8.8	
341	5	"	"	"	PQ55 フク土	6.7 × 1.0 × -	5.2	
342	3	"	"	"	"	9.3 × - × -	5.2	
343	995	"	"	不明	J56II	4.2 × 0.5 × 0.1	1.7	
344	318	"	"	"	E55ST75フク土	1.1 × 1.1 × 0.5	4.1	
345	6	"	"	香炉	SE22 フク土	4.3 × 3.0 × 0.2	9.8	
346	256	"	"	飾金具	L56SE23bフク土	2.5 × 1.0 × 0.1	1.8	

Ch.7.2 石製品計測表

No.	S-No.	PL.	Fig.	名称	出土区	計測値(長さ×巾×厚さ)cm	石質	備考
347	S 91	57	86	硯	I57SE24フク土	(946+610+?) × 10.4 × 2.5	変成岩	
348	S 72	"	"	"	I57ST81フク土	6.8 × 3.1 × 1.6	頁岩	
349	S 49	"	"	"	F54ST73フク土	6.3 × 5.0 × 1.5	粘板岩	
350	S 30	"	"	"	K57SX17フク土	12.7 × 2.8 × 1.1	頁岩	
351	S 1	"	"	"	M57I	13.7 × 6.2 × 1.2	粘板岩	
352	S 36	"	"	"	E54SE25フク土	11.5 × 9.4 × 2.4	頁岩	
353	S 82	"	87	砥石	I54II	8.1 × 5.3 × 1.8	凝灰岩	
354	S 56	"	"	"	M54ST65床面	8.0 × 2.6 × 2.2	"	
355	S 100	"	"	"	G55II	6.8 × 2.6 × 2.4	"	
356	S 105	"	"	"	G54SX43フク土	6.3 × 2.3 × 1.2	"	
357	S 64	"	"	"	J57II上	10.8 × 2.9 × 3.2	"	
358	S 44	"	"	"	H55IV	11.0 × 3.7 × 2.6	"	
359	S 87	58	88	石臼	J54SE29フク土	5.6 × 2.62 × 6.6	安山岩	
360	S 31	"	"	"	F55II	12.1 × 20.0 × 8.2	"	
361	S 86	"	"	"	J54Pit フク土	10.9 × 16.7 × 11.3	"	
362	S 68	"	"	"	ST81 フク土	10.0 × 28.3 × 14.5	"	
363	NS 12	"	"	"	K56・57SE22フク土	12.5 × 14.0 × 8.8	"	風化が進んでいる
364	S 23	"	"	"	PQ55	12.1 × 2.62 × 15.5	"	
365	P 1535	"	88	羽口	H55SX48フク土	13.0 × 8.9 × 2.8	-	
366	P 1018	"	"	"	I55SX68フク土	7.5 × 7.9 × 3.0	-	

Ch. 73 木製品計測表

No.	M - No	PL.	Fig.	名 称	出 土 区	計 測 値 (長さ×巾×厚さ)cm	特 徴	備 考
367	SE 31 M 174	58	89	刀形木製品	SE31 フク土	245 × 2.3 × 0.5		
368	M 174	"	"	形代?	PQ55 フク土	32.0 × 2.8 × 0.3	格子状の切り痕有	
369	M 241	"	"	"	"	11.7 × 2.6 × 0.4		
370	M 255	"	"	"	"	12.2 × 2.7 × 0.4	両端をけずり人形に似せる	
371	M 14	"	"	"	"	12.2 × 2.8 × 0.5		
372	M 195	"	"	加工木製品	"	17.4 × 1.5 × 1.4	片方の先端を竇状に削り一方に ヒ下左右の穿孔有	
373	M 151	"	"	"	"	2.8 × 3.0 × 3.0	ふたのつまみ(漆がぬけている)	
374	M 240	"	90	円盤状木製品	"	5.7 × 5.9 × 0.7	中央に穴有	穴の直径 0.55
375	M 141	"	"	弁当底(曲物)	"	9.8 × 9.4 × 1.0	チヨウナ掛けしている	だけで別になし
376	M 192	"	91	膳	"	28.0 × 2.7 × 0.8	漆塗り、木釘有	
377	M 116	"	-	円盤状木製品	"	10.0 × 5.9 × 1.4	焼 痕 有	
378	M 85	"	91	膳	"	31.5 × 3.8 × 0.7	釘 穴 有	
379	M 45	"	"	折 敷	"	20.9 × 9.6 × 0.9	内面にチヨウナ掛けの痕跡有	
380	M 207	"	"	"	"	35.0 × 11.7 × 0.8	木 釘 有	
381	M 119	"	-	加工木製品	"	9.0 × 7.5 × 1.8	中央に穴、四方に削った痕	
382	SE 32 M 3	"	-	曲 物	SE32 フク土	25.0 × 25.7 × 9.3		
383	M 118	36 59	89	漆 器	PQ55 フク土	13.2 × 3.5 × -		
384	M 113	59	-	"	"	- × - × -		
385	M 103	"	89	"	"	13.8 × 4.0 × -		
386	M 175	"	"	"	"	14.1 × 5.7 × -		
387	M 43	"	"	"	"	14.0 × 5.0 × -		
388	M 87	"	91	木 篋	"	23.0 × 7.2 × 0.5		
389	M 143	"	"	"	"	40.7 × 3.6 × 1.4		
390	SE 31 M 7	"	92	棒	SE31 フク土	36.6 × 1.1 × 0.8	棒の先端に焼痕有	
391	M 213	"	"	桶の側板	PQ55 フク土	38.2 × 9.3 × 1.4		
392	M 142	"	91	加工木製品 剣先状	"	19.6 × 8.6 × 2.9	下駄のつくりかけ?	
393	M 140	"	92	加工木製品	"	33.6 × 2.8 × 1.2		
394	M 209	"	-	屋根 柱	"	23.0 × 6.0 × 0.2		
395	M 154	"	91	加工木製品	"	24.9 × 2.8 × 1.9	焼 痕 有	
396	M 144	"	-	棒 状 加工木製品	"	30.6 × 3.9 × 1.9	一部焼痕有、穴があいている	
397	M124A	"	91	棒(定規)	"	51.4 × 2.9 × 1.9		
398	M 126	"	-	板	"	30.1 × 5.5 × 1.0		
399	M 166	"	-	折 敷	"	31.9 × 8.0 × 0.7	桜の皮付着	
400	M 72	"	-	桶 底	"	19.9 × 7.0 × 1.1	全体に塗有(外面)	
401	M 246	60	93	下 駄	"	22.7 × 9.4 × 6.5		
402	M 65	"	"	"	"	21.3 × 11.7 × 6.0		
403	M 254	"	"	"	"	24.1 × 7.5 × 6.3	前竈 0.9 後左 1.0 } 直径	
404	M 28	"	"	"	"	19.2 × 7.5 × 1.9	前竈 0.9 (直径) 後右 0.75 左 0.75	
405	M 100	"	"	"	"	17.5 × 9.0 × 2.7		1.0 × 1.0
406	M 242	"	"	"	"	16.6 × 7.7 × 1.7		
407	M 196	"	"	"	"	20.0 × 11.5 × 3.2		1.3 × 1.4
408	M 136	"	-	"	"	20.2 × 8.9 × 3.6		前竈 1.4 後右 1.4 左 1.1
409	M 203	"	-	"	"	14.2 × 2.5 × 1.2		0.75 × 1.0
410	M 75	"	-	"	"	25.0 × 10.8 × 3.5		1.8 × 1.4
411	M 168	"	93	下駄の歯	"	12.1 × 6.2 × 4.0		
412	M 74	"	-	下 駄	"	- × - × -		
413	M 202	37	89	椀	"	15.0 × 8.2 × 1.40		
414	M 38	-	"	"	"	14.0 × 4.4 × -		
415	M 176	37	"	"	"	14.3 × 5.2 × -		
416	M 3	36	"	形代(花形)	"	9.5 × 4.4 × -		
417	M 4	"	"	櫛	"	14.0 × 7.0 × 1.5		
418	M 201	-	"	加工品	"	7.1 × 6.9 × 1.6	中央にみぞ有、釘痕有	

No	F - No	PL	Fig.	名称	出土区	計測値 (長さ×巾×厚さ)cm	特徴	備考
419	M 161	—	89	木 篋	PQ55 フク土	11.7 × 1.1 × 0.7		
420	SE22M1	—	90	曲 物	SE22 フク土	17.3 × — × 185		
421	SE32M5	—	"	"	SE32 フク土	9.5 × 25.5 × —	木の皮でつないでいる	
422	SE31M13	—	"	"	SE31 フク土	10.3 × 3.8 × 0.2	"	
423	SE31M6	—	"	"	"	5.3 × 25.2 × —		
424	M 116	—	"	内盤加工品	PQ55 フク土	10.0 × 5.9 × 1.4	焼 痕 有	
425	M 211	—	"	加工品	" "	18.0 × 1.6 × 0.5		
426	M 2	—	"	小形篋形 陶物形木製品	"	16.2 × 3.2 × 3.2		
427	M 203	—	"	加工品	"	8.5 × 2.9 × 1.45	鉄釘有、釘痕有	
428	M 25	—	"	塔 婆	"	7.20 × 1.40 × 2.3		
429	M 170	—	"	加工品	"	1.50 × 6.3 × 2.1		
430	M 135	—	91	篋	"	3.18 × 6.0 × 2.5		
431	M 104	—	"	桶 底	"	23.6 × 12.2 × 1.4	使用痕あり、焼痕あり	
432	M 166	—	"	折 敷	"	3.19 × 8.0 × 0.7	桜の皮付着	
433	M 132	—	"	桶 底	"	3.75 × 19.8 × 1.6	木釘穴有	
434	M 220	36	92	取 手	"	2.96 × 3.9 × 2.0		
435	M 99	—	"	"	"	2.95 × 4.5 × 1.9		
436	M 188	—	"	加工品	"	3.45 × 3.2 × 1.9	四穴に木釘痕あり	
437	M 251	—	"	木製品(棒状)	"	3.17 × 1.8 × —	断面図無し	
438	M 210	—	"	加工品	"	2.39 × 3.5 × 1.2		
439	M 123	—	"	"	"	2.61 × 6.1 × 0.6		欄間か?
440	M 71	—	93	下 駄	"	1.66 × 4.7 × 6.0		0.5×0.55

Ch. 74 古銭計測表

No	C - No	名称	出土区	計測値(外径×内径×厚さ)(cm)	重さ(g)	備考
1	1	五 厘	I57I	1.88 × — × 0.11	2.0	
2	2	繁 ○ ○ 宝	J55II上	2.48 × 0.79 × 0.14	1.3	
3	3	寛 永 通 宝	I56表採	2.46 × 0.63 × 0.10	2.0	
4	4	判 読 不 能 表 採		2.265 × 0.63 × 0.12	2.4	
5	5	寛 永 通 宝	J57I	2.48 × 0.55 × 0.14	3.1	
6	6	開 元 通 宝	L57I	2.30 × 0.68 × 0.10	2.6	
7	7	洪 武 通 宝	J56ST50フク土	— × — × 0.14	1.0	
8	8	判 読 不 能	L55II上	2.37 × 0.66 × 0.14	3.2	
9	9	開 元 通 宝	L57I	2.24 × 0.74 × 0.08	0.9	
10	10	寛 永 通 宝	M57II上	2.215 × 0.7 × 0.085	1.9	
11	11	判 読 不 能	L55ST51フク土	2.145 × 0.74 × 0.11	1.6	
12	12	"	"	2.22 × 0.63 × 0.09	1.9	
13	13A	○ ○ 通 宝	H57II上	2.35 × 0.58 × 0.15	3.7	
14	13B	元 豊 通 宝	"	2.57 × 0.06 × 0.15	2.9	
15	14	判 読 不 能	"	2.30 × 0.67 × 0.11	1.8	
16	15	景 徳 元 宝	"	2.42 × 0.58 × 0.14	2.8	
17	16	判 読 不 能	L57I	2.47 × 0.58 × 0.18	2.9	
18	17	無 文 銭	J57I	2.16 × 0.72 × 0.09	1.4	
19	18	熙 ○ ○ 宝	"	2.42 × 0.58 × 0.115	1.3	
20	19	無 文 銭	"	1.50 × 0.74 × 0.06	0.4	
21	20A	○ ○ 宝	"	— × — × 0.12	0.9	
22	20B	判 読 不 能	J57I	— × — × 0.15	0.2	
23	21	○ ○ 通 宝	I56II上	2.34 × 0.64 × 0.10	1.4	
24	22	無 文 銭	L55ST51フク上	1.66 × 1.0 × 0.08	0.4	
25	23	天 聖 元 宝	"	2.48 × 0.70 × 0.14	2.6	
26	24	判 読 不 能	I57II上	2.31 × 0.55 × 0.24	5.7	2枚重ね

No.	C-No.	名称	出土区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重さ(g)	備考
27	25	判読不能	I57Ⅱ上	2.30 × 0.58 × 0.11	2.3	
28	26	景德元宝	L55ST51フク上	2.46 × 0.7 × 0.13	3.1	
29	27	判読不能	"	— × 0.55 × 0.06	0.8	
30	28	景德元宝	"	2.44 × 0.69 × 0.12	2.7	
31	29	寛永通宝	G54I	2.30 × 0.66 × 0.16	2.5	
32	30	永楽通宝	L54ST52フク上	2.56 × 0.55 × 0.16	3.7	
33	31	天聖元宝	H54I	2.49 × 0.665 × 0.15	3.7	
34	32	〇元通宝	I54I	2.36 × 0.67 × 0.115	2.2	
35	33	判読不能	"	2.04 × 0.60 × 0.12	1.9	
36	34	"	L55ST52フク土	2.37 × 0.68 × 0.15	2.5	
37	35	熙寧元宝	K55SX10床面	2.44 × 0.65 × 0.12	3.6	
38	36	聖〇元宝	J54I	2.385 × 0.65 × 0.14	—	欠
39	37	無文銭	"	2.21 × 0.57 × 0.14	1.3	
40	38	判読不能	L55SX12フク土	2.17 × 0.65 × 0.13	—	
41	39	"	"	2.36 × 0.65 × 0.12	2.2	
42	40	寛永通宝	L54I	2.28 × 0.70 × 0.10	2.2	
43	41	元〇〇宝	J55ピットフク土	— × — × 0.14	0.6	
44	42	〇元通宝	L55SX12フク土	2.46 × 0.68 × 0.11	2.8	
45	43	無文銭	"	2.15 × 0.76 × 0.10	1.5	
46	44	元豊通宝	"	2.32 × 0.60 × 0.09	1.8	
47	45	無文銭	"	2.22 × 0.675 × 0.10	1.6	
48	46	"	F55I	2.29 × 0.68 × 0.12	1.7	
49	47	元〇通宝	L55SX12床面	2.11 × 0.68 × 0.10	1.7	
50	48	判読不能	" フク土	2.27 × 0.74 × 0.10	1.8	
51	49	寛永通宝	M54地山	2.37 × 0.595 × 0.08	1.8	
52	50	判読不能	K56Ⅱ上	1.695 × 1.40 × 0.40	—	
53	51	"	L55SX12フク土	2.33 × 0.60 × 0.12	3.0	
54	52	天〇通宝	L56Ⅱ	2.48 × 0.60 × 0.12	2.7	
55	53	無文銭	L55SX12フク土	2.28 × 0.52 × 0.125	2.3	
56	54	"	" "	1.60 × 0.43 × 0.20	0.8	
57	55	〇〇通宝	" "	2.25 × — × 0.13	—	
58	56	判読不能	" 床面	2.24 × 0.165 × 0.08	2.0	
59	57	"	" "	2.12 × 0.455 × 0.09	2.2	
60	58	〇〇通〇	M54地山	2.22 × 0.64 × 0.09	0.9	
61	59	判読不能	L55SX12床面	— × — × 0.12	—	
62	60	〇〇〇宝	M57地山	— × — × 0.16	—	
63	61	無文銭	"	2.11 × 0.69 × 0.07	1.4	
64	62	熙寧元宝	L57地山	2.385 × 0.64 × 0.115	2.8	
65	63	洪武通宝	L57ST56フク土	2.13 × 0.55 × 0.13	2.5	
66	64	無文銭	"	1.83 × 0.77 × 0.06	0.5	
67	65	洪武通宝	M57ピットフク土	2.25 × 0.62 × 0.13	—	
68	66	判読不能	I56Ⅱ	2.33 × 0.81 × 0.16	3.6	2枚接合
69	67	"	"	2.46 × 0.80 × 0.20		
70	68	〇〇通宝	K56Ⅱ	— × — × —	1.1	
71	69	無文銭	I57Ⅱ上	2.215 × 0.60 × 0.075	1.2	
72	70	元符通宝	L57ST56フク土	2.33 × 0.685 × 0.11	2.1	
73	71	〇〇〇宝	L56Ⅱ上	2.48 × 0.66 × 0.14	3.0	
74	72	判読不能	M54ピットフク土	— × — × 0.125	0.4	
75	73	"	M57ST54フク土	— × — × 0.11	—	
76	74	無文銭	"	2.17 × 0.69 × 0.07	1.4	
77	75	判読不能	"	2.79 × 0.66 × 0.15	1.9	
78	76	皇宋通宝	J57ピットフク土	2.48 × 0.65 × 0.145	3.1	
79	77	嘉元通宝	L54Ⅱ	2.21 × 0.645 × 0.095	2.1	
80	78	無文銭	"	1.86 × 0.65 × 0.05	0.5	

No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)mm	重 量 (g)	備 考
81	79	判 読 不 能	M57ST56床面	2.20 × 0.63 × 0.13	1.6	
82	80	"	" フク土	2.155× 0.54 × 0.09	1.9	
83	81	無 文 銭	" "	2.14 × 0.52 × 0.08	1.4	
84	82	"	" "	2.135× 0.50 × 0.10	1.3	
85	83	"	L57ST57フク土	2.06 × 0.65 × 0.08	—	
86	84	判 読 不 能	" "	2.11 × 0.73 × 0.15	1.5	
87	85	皇 宋 通 宝	M57ST55フク土	2.43 × 0.70 × 0.11	2.0	
88	86	開 元 通 宝	" "	2.335× 0.75 × 0.10	1.5	
89	87	"	K57Ⅱ	2.42 × 0.67 × 0.12	2.3	
90	88	元 祐 通 宝	"	2.5 × 0.60 × 0.14	—	
91	89	無 文 銭	M57ST55床面	1.88 × 0.66 × 0.10	0.7	
92	90A	天 聖 元 宝	I56ST63フク土	2.54 × 0.53 × 0.20	3.4	
93	90B	判 読 不 能	I56ピットフク土	2.46 × 0.525× 0.07	0.4	
94	90C	判 読 不 能	"	2.46 × 0.525× 0.07	2.2	
95	90D	洪 武 通 宝	"	2.43 × 0.60 × 0.20	2.4	
96	90E	無 文 銭	"	1.90 × 0.60 × 0.20	2.4	
97	90F	"	"	1.76 × 0.62 × 0.12	0.8	
98	90G	"	"	1.86 × 0.835× 0.09	0.7	
99	91	—	—		—	
100	92	—	—	( 遺物運搬時に消失 )	—	
101	93	—	—		—	
102	94	無 文 銭	J56 ST60フク土	1.92 × 0.75 × 0.07	0.8	
103	95	"	"	1.85 × 0.68 × 0.07	0.7	
104	96	"	"	1.80 × 0.67 × 0.055	0.7	
105	97	判 読 不 能	K54Ⅱ	— × — × —	0.9	
106	98	無 文 銭	M57ST57フク土	2.15 × 0.68 × 0.09	0.9	
107	99	"	H54Ⅱ	2.27 × 0.60 × 0.13	2.0	
108	100	判 読 不 能	K57SE22フク土	— × — × 0.135	0.4	
109	101	無 文 銭	J55ピットフク土	1.91 × 0.80 × 0.06	0.6	
110	102	"	J56Ⅰ	1.78 × 0.90 × 0.075	0.2	
111	103	"	K57SE22フク土	1.90 × 0.68 × 0.10	—	
112	104	"	K56ピット床面	— × — × 0.07	0.4	
113	105	判 読 不 能	I56ST63フク土	2.96 × 0.43 × 0.26	3.6	
114	106	無 文 銭	K57SE22フク土	1.74 × 0.92 × 0.055	0.5	
115	107	"	"	— × — × 0.07	0.3	
116	108	〇 〇 〇 宝	I55ST63フク土	2.34 × 0.66 × 0.10	2.2	
117	109	元 豊 通 宝	L55Ⅱ	2.50 × 0.6 × 0.14	2.8	
118	110	無 文 銭	L56ピットフク土	2.0 × 0.79 × 0.095	0.8	
119	111	判 読 不 能	"	2.39 × — × 0.15	1.5	
120	112A	"	K57SX17フク土	2.37 × 0.66 × 0.10	1.6	
121	112B	淳 熙 元 宝	"	— × — × 0.13	0.5	
122	113	判 読 不 能	I56ST63フク土	— × — × 0.315	0.8	
123	114	無 文 銭	K57SX17フク土	2.27 × 0.65 × 0.09	2.0	
124	115	判 読 不 能	F54Ⅱ	2.265× 0.64 × 0.11	2.4	
125	116	無 文 銭	J57SX32フク土	— × — × —	0.6	
126	117	永 樂 通 宝	I56ST63フク土	2.40 × 0.58 × 0.16	—	
127	118	天 聖 元 宝	K56SD04フク土	2.44 × 0.68 × 0.12	2.9	
128	119	熙 寧 元 宝	K57SX17フク土	2.32 × 0.60 × 0.19	3.2	
129	120	判 読 不 能	"	— × — × 0.10	0.5	
130	121	"	E55Ⅱ	2.17 × 0.69 × 0.08	1.6	
131	122	洪 武 通 宝	"	2.35 × 0.57 × 0.14	1.5	
132	123	永 樂 通 宝	F54ST76フク土	2.35 × 0.60 × 0.14	4.0	
133	124	開 元 通 宝	F54Ⅱ	2.41 × 0.675× 0.12	2.4	共伴 (No.133 ~No.136
134	125	洪 武 通 宝	"	2.38 × 0.58 × 0.12	2.6	



No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×円径×厚さ)cm	重 量(g)	備 考
135	126	〇〇〇宝	F54Ⅱ	— × — × 0.11	0.7	
136	127	判読不能	〃	2.30 × 0.57 × 0.10	1.4	
137	128	元豊通宝	〃	2.98 × 0.73 × 0.20	3.0	共伴
138	129	永楽通宝	〃	2.98 × 0.55 × 0.10	2.7	(No133
139	130	〃	〃	2.55 × 0.55 × 0.13	3.6	~136)
140	131	〃	〃	2.60 × 0.59 × 0.15	3.3	
141	132	判読不能	〃	2.97 × 0.67 × 0.13	2.9	
142	133	皇宋通宝	〃	2.69 × 0.65 × 0.20	3.5	
143	134	元豊通宝	〃	2.50 × 0.63 × 0.14	—	
144	135	判読不能	〃	2.52 × 0.54 × 0.16	—	
145	136	〇〇元宝	〃	2.45 × 0.59 × 0.16	—	
146	137	至道元宝	L56ピット316フク土	2.37 × 0.55 × 0.11	2.5	
147	138	無文銭	G55Ⅱ	2.25 × 0.74 × 0.09	1.1	
148	139	熙寧元宝	〃	2.36 × 0.63 × 0.08	1.7	
149	140	開元通宝	〃	2.35 × 0.61 × 0.12	2.2	
150	141	判読不能	H55Ⅱ	— × — × 0.15	—	
151	142	50円玉	F55Ⅱ	2.10 × 0.40 × 0.18	4.0	
152	143	判読不能	E54SX21フク土	— × — × 0.13	0.7	
153	144	開元通宝	E54ピットフク土	2.26 × 0.60 × 0.10	1.8	
154	145	判読不能	E54SE25フク土	2.37 × 0.57 × 0.11	1.9	
155	146	洪武通宝	〃	2.25 × 0.56 × 0.16	3.2	
156	147	判読不能	E55ST75フク土	2.37 × 0.66 × 0.22	1.1	
157	148	〃	E54SE30フク土	2.39 × 0.595 × 0.18	2.6	
158	149	永楽通宝	F54ST76フク土	2.48 × 0.60 × 0.14	2.9	
159	150	開元通宝	〃	2.26 × 0.62 × 0.08	1.8	
160	151	判読不能	〃	— × — × 0.10	—	
161	152	〃	G54ST73フク土	0.17 × 0.43 × 0.33	0.7	
162	153	〃	G54Ⅱ	2.20 × 0.60 × 0.14	1.3	
163	154	〃	G54ST73フク土	2.16 × 0.675 × 0.12	2.2	
164	155	判読不能 $\frac{1}{4}$ 片	F54ST73フク土	1.62 × 0.67 × 0.155	0.4	
165	156	無文銭	F54ST77フク土	1.55 × — × 0.04	0.1	
166	157	判読不能	〃	— × — × 0.12	0.1	
167	158	無文銭	G54ST73フク土	1.81 × 0.75 × 0.13	0.9	
168	159	永楽通宝	F55ST72フク土	2.36 × 0.55 × 0.15	3.0	
169	160	判読不能	H54SE31フク土	— × — × 0.12	0.9	
170	161	寛永通宝	G55ST71フク土	2.40 × 0.60 × 0.13	2.6	
171	162	無文銭	E55ST75フク土	— × — × 0.08	0.2	
172	163	〃	G54ST73フク土	1.80 × 1.90 × 0.08	0.4	
173	164	〃	〃	2.24 × 0.69 × 0.10	1.7	
174	165	判読不能	M54ST65フク土	— × — × 0.01	0.7	
175	166	洪〇通〇	M54ST64フク土	— × 0.49 × 0.13	—	
176	167	洪武通宝	E55Ⅱ	2.40 × 0.58 × 0.17	4.1	
177	168	紹聖元宝	〃	2.45 × 0.66 × 0.14	3.3	
178	169	永楽通宝	I55ST68フク土	2.42 × 0.54 × 0.15	—	欠
179	170	無文銭	I55ST67フク土	1.72 × — × 0.10	—	
180	171	皇宋通宝	I55ST68フク土	2.49 × 0.70 × 0.16	2.9	
181	172	洪武通宝	I55SX29フク土	2.25 × 0.50 × 0.14	2.9	
182	173	判読不能	I55ST68フク土	2.36 × 0.68 × 0.14	2.5	
183	174	無文銭	I55ST79フク土	0.89 × 0.74 × 0.04	0.5	
184	175	開元通宝	M54ST65フク土	2.39 × 0.69 × 0.13	1.4	
185	176	聖宋元宝	〃	2.43 × 0.58 × 0.14	2.1	
186	177	〇元通宝	〃	2.32 × 0.635 × 0.16	2.2	
187	178	無文銭	I55SX29フク土	1.82 × 0.755 × 0.06	0.7	
188	179	天聖元宝	I55ST79フク土	2.32 × 0.66 × 0.13	2.7	

No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 さ(g)	備 考
189	180	○ 泰 ○ 宝	I55ST66フク土	— × — × 0.10	0.8	
190	181	無 文 銭	〃	1.86 × — × 0.09	—	
191	182	〃	I55ST67フク土	— × — × 0.08	1.3	
192	183	判 読 不 能	〃	2.15 × 0.61 × 0.06	1.2	
193	184	無 文 銭	I55ST67フク土	— × — × 0.08	—	
194	185	〃	M54SX14床面	— × — × 0.12	—	
195	186	判 読 不 能	D55 地山	2.30 × 0.11 × 0.13	2.6	
196	187	〃	I55ST64フク土	2.27 × 0.65 × 0.10	2.6	
197	188	無 文 銭	〃	2.16 × 0.68 × 0.09	1.2	
198	189	淨 化 元 宝	I55ST66フク土	— × — × 0.12	—	
199	190	判 読 不 能	M54ST65フク土	2.19 × 0.76 × 0.09	1.3	
200	191	元 祐 通 宝	M54SX14フク土	2.38 × 0.71 × 0.12	2.5	
201	192	永 樂 通 宝	M54ST65フク土	2.48 × 0.54 × 0.15	3.2	
202	193	元 祐 通 宝	〃	2.44 × 0.58 × 0.14	3.2	
203	194	〃	〃	2.36 × 0.164 × 0.13	2.3	
204	195	祥 符 通 宝	〃	2.36 × 0.63 × 0.13	3.0	
205	196	天 聖 元 宝	〃	2.37 × 0.60 × 0.145	2.4	
206	197	熙 寧 元 宝	〃	2.35 × 0.65 × 0.17	3.7	
207	198	〃	〃	2.35 × 0.74 × 0.125	2.9	
208	199	天 聖 元 宝	〃	2.42 × 0.55 × 0.14	2.5	
209	200	開 元 通 宝	〃	2.22 × 0.65 × 0.14	3.7	
210	201	洪 武 通 宝	M54ST65フク土	2.35 × 0.58 × 0.17	2.0	
211	202	朝 鮮 通 宝	〃	2.44 × 0.54 × 0.22	3.8	
212	203	判 読 不 能	L56ST78フク土	2.42 × 0.64 × 0.22	1.7	
213	204	〃	L57ST58フク土	2.26 × 0.175 × 0.14	2.1	
214	205	無 文 銭	I55SX29フク土	— × — × 0.05	—	
215	206	〃	I55ST68フク土	1.68 × 0.79 × 0.04	0.5	
216	207	元 祐 通 宝	I55ST66フク土	2.435 × 0.685 × 0.12	1.3	
217	208	○ ○ 通 宝	〃	2.43 × 0.74 × 0.16	1.4	
218	209	無 文 銭	I55ST67フク土	— × — × 0.16	—	
219	210	〃	I55ST68フク土	2.12 × 0.68 × 0.08	1.0	
220	211	○ ○ 元 宝	M54ST65フク土	2.48 × 0.60 × 0.14	—	
221	212	元 ○ 通 宝	〃	2.275 × 0.64 × 0.15	2.3	
222	213	判 読 不 能	〃	— × — × 0.12	0.7	
223	214	熙 寧 元 宝	L57ST78フク土	2.415 × 0.78 × 0.95	0.9	
224	215	洪 武 通 宝	I55ST64フク土	— × 0.59 × 0.17	1.3	
225	216	判 読 不 能	I55ST67フク土	2.26 × 0.70 × 0.07	1.5	
226	217	〃	K55SE20フク土	2.30 × 0.59 × 0.23	1.6	
227	218	永 樂 通 宝	I55ST67フク土	— × — × 0.13	1.2	
228	219	○ 宋 元 宝	I55ST68フク土	2.45 × 0.67 × 0.16	1.1	
229	220	無 文 銭	I55SX30フク土	1.78 × 0.72 × 0.06	0.5	
230	221	判 読 不 能	I55ST67フク土	2.30 × 0.67 × 0.10	1.6	
231	222	無 文 銭	I55ST66フク土	2.15 × 0.70 × 0.19	1.3	
232	223	〃	I55ST68フク土	1.98 × 0.70 × 0.10	0.5	
233	224	大 觀 通 宝	M54ピットフク土	2.43 × 0.62 × 0.17	3.3	
234	225	熙 寧 元 宝	L57 ■	2.385 × 0.58 × 0.12	2.8	
235	226	政 和 通 宝	I55ST64フク土	2.4 × 0.52 × 0.12	2.2	
236	227	無 文 銭	I54SE21フク土	1.83 × 0.67 × 0.11	0.9	
237	228	判 読 不 能	K55SE20フク土	2.53 × 0.59 × 0.18	3.6	
238	229	〃	I55SX30フク土	2.08 × — × 0.17	1.7	
239	230	永 樂 通 宝	K55SE20フク土	2.56 × 0.335 × 0.15	1.8	
240	231	○ ○ 通 宝	〃	2.52 × 0.55 × 0.21	2.6	
241	232	熙 寧 元 宝	K55SE20フク土	2.36 × — × 0.11	—	欠
242	233	天 禧 通 宝	I55SX29フク土	2.55 × 0.58 × 0.10	—	欠

No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 量(g)	備 考
243	234	〇 〇 〇 宝	155SX29フク土	— × — × 0.10	0.5	
244	235	聖 宋 元 宝	K55SE20フク土	2.49 × 0.50 × 0.16	3.3	
245	236	永 樂 通 宝	155SX29フク土	2.49 × 0.555 × 0.16	3.9	
246	237	無 文 銭	"	1.79 × 0.70 × 0.12	—	
247	238	治 平 元 宝	154SE21フク土	2.27 × 0.59 × 0.10	1.7	
248	239	永 樂 通 宝	155ST68フク土	2.50 × 0.55 × 0.19	3.3	
249	240	洪 武 通 宝	155SE21フク土	2.21 × 0.63 × 0.13	1.6	
250	241	判 読 不 能	155ST68床面	2.34 × 0.65 × 0.18	1.2	
251	242	朝 鮮 通 宝	155ST79フク土	2.40 × 0.56 × 0.15	2.5	
252	243	祥 符 元 宝	155ST68フク土	2.43 × 0.58 × 0.15	3.4	
253	244	永 樂 通 宝	K55SE20フク土	2.495 × 0.55 × 0.21	2.3	
254	245	無 文 銭	155SX29フク土	2.07 × 0.70 × 0.10	1.7	
255	246	熙 寧 元 宝	J57Ⅱ上	3.44 × 0.53 × 0.145	2.1	
256	247	元 豊 通 宝	"	2.51 × 0.65 × 0.15	2.6	
257	248	判 読 不 能	157Ⅱ上	2.44 × 0.54 × 0.31	3.6	
258	249	祥 符 元 宝	"	2.25 × 0.64 × 0.08	1.3	
259	250	嘉 祐 通 宝	"	2.43 × 0.70 × 0.11	2.7	
260	251	判 読 不 能	"	2.32 × 0.59 × 0.11	1.0	
261	252	無 文 銭	"	2.12 × 0.81 × 0.60	0.6	
262	253	判 読 不 能	"	2.335 × 0.625 × 0.11	1.5	
263	254	元 聖 元 宝	"	2.35 × 0.59 × 0.10	1.9	
264	255	無 文 銭	"	2.25 × 0.66 × 0.10	1.1	
265	256	紹 熙 元 宝	157SX33フク土	2.41 × 0.615 × 0.17	2.9	
266	257	判 読 不 能	"	2.32 × 0.67 × 0.11	1.8	
267	258	熙 寧 元 宝	157SX33床面	2.385 × 0.71 × 0.12	2.8	
268	259	無 文 銭	J57ピットフク土	2.4 × 0.69 × 0.60	0.9	
269	260	"	"	1.81 × 0.59 × 0.11	0.7	
270	261	"	"	2.17 × 0.71 × 0.12	2.8	
271	262	洪 武 通 宝	"	2.30 × 0.575 × 0.12	2.7	
272	263	熙 寧 元 宝	"	2.46 × 0.68 × 0.12	3.9	
273	264	天 豊 通 宝	"	2.43 × 0.66 × 0.17	4.1	
274	265	洪 武 通 宝	"	2.38 × 0.55 × 0.20	3.1	
275	266	"	"	2.22 × 0.58 × 0.15	1.9	共 伴
276	267	無 文 銭	"	2.12 × 0.69 × 0.08	1.1	
277	268	元 豊 通 宝	"	2.16 × 0.71 × 0.13	2.1	
278	269	祥 符 通 宝	"	2.25 × 0.68 × 0.10	—	
279	270	洪 武 通 宝	"	2.17 × 0.56 × 0.11	1.9	
280	271	—	"	— × — × —	1.5	
281	272	無 文 銭	"	2.13 × 0.77 × 0.80	2.4	
282	273	元 豊 通 宝	"	2.17 × 0.63 × 0.13	—	
283	274	無 文 銭	"	1.93 × 0.70 × 0.06	1.0	
284	275	"	"	1.80 × 0.68 × 0.05	0.5	
285	276	判 読 不 能	J56ピットフク土	2.33 × 0.50 × 0.16		
286	277	"	"	— × — × —		
287	278	"	"	— × — × —	14.5	4 枚接合
288	279	"	"	— × — × —		
289	280	無 文 銭	157ST81フク土	1.92 × 0.50 × 0.06	0.5	
290	281	"	"	1.80 × 0.78 × 0.10	0.8	
291	282	"	"	1.92 × 0.75 × 0.07	0.4	
292	283	"	"	1.82 × 0.69 × 0.11	0.9	
293	284	"	"	1.92 × 0.64 × 0.07	0.7	
294	285	"	"	2.06 × 0.79 × 0.07	—	
295	286	判 読 不 能	J57S 31フク土	— × — × 0.10	1.4	
296	287	洪 武 通 宝	"	2.295 × 0.57 × 0.19	3.6	

No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 さ(g)	備 考
297	288	無 文 銭	J57SX31フク土	0.78 × 0.80 × 0.06	0.7	
298	289	天 禧 元 宝	"	2.16 × 0.59 × 0.15	1.4	
299	290	洪 武 通 宝	"	2.265 × 0.56 × 0.135	3.1	
300	291	無 文 銭	"	1.89 × 0.77 × 0.06	0.8	
301	292	洪 武 通 宝	"	2.20 × 0.62 × 0.11	1.0	
302	293	"	"	2.05 × 0.57 × 0.10	2.2	
303	294	元 符 通 宝	"	2.26 × 0.68 × 0.90	-	
304	295	無 文 銭	"	1.73 × 0.88 × 0.06	0.8	
305	296	"	"	1.85 × 0.81 × 0.10	0.5	共 伴
306	297	"	"	1.56 × 0.76 × 0.05	0.5	
307	298	元 ○ 通 宝	"	2.38 × 0.66 × 0.155	3.3	
308	299	開 元 通 宝	"	2.36 × 0.66 × 0.15	3.5	
309	300	"	"	2.37 × 0.62 × 0.12	2.6	
310	301	判 読 不 能	"	2.23 × 0.63 × 0.15	2.8	
311	302	"	"	2.235 × 0.13 × 0.14	2.8	
312	303	"	"	- × - × -	2.6	
313	304	元 祐 通 宝	"	2.36 × 0.645 × 0.155	3.0	
314	305	判 読 不 能	"	- × - × 0.12	0.8	
315	306	"	"	2.37 × 0.66 × 0.13	1.7	
316	307	"	"	2.20 × 0.56 × 0.13	2.6	
317	308	○ ○ 通 宝	"	- × - × 0.11	-	
318	309	無 文 銭	"	1.66 × 1.16 × 0.70	0.2	
319	310	洪 ○ ○ ○	J57ST81フク土	- × - × 0.10	0.4	
320	311	判 読 不 能	"	2.18 × 0.685 × 0.10	1.7	
321	312	"	J57SX31フク土	1.84 × 0.44 × 0.10	-	
322	313	無 文 銭	"	1.94 × 0.63 × 0.11	0.3	共 伴
323	314	"	"	1.81 × 0.80 × 0.11	0.4	
324	315	洪 德 通 宝	"	2.42 × 0.53 × 0.135	3.7	
325	316	咸 平 元 宝	"	2.42 × 0.59 × 0.14	2.2	
326	317	洪 武 通 宝	I57ST81フク土	2.25 × 0.57 × 0.18	2.9	
327	318	元 豊 通 宝	"	2.52 × 0.74 × 0.12	2.3	
328	319	無 文 銭	J57ST82フク土	2.10 × 0.75 × 0.13	2.4	
329	320	判 読 不 能	I57ST81フク土	2.34 × 0.72 × 0.13	2.6	
330	321	○ ○ 通 宝	K54SE26フク土	2.43 × 0.60 × 0.16	1.2	
331	322	洪 武 通 宝	J54Ⅱ	2.14 × 0.60 × 0.10	-	
332	323	"	K54SD16フク土	2.24 × 0.54 × 0.16	2.6	
333	324	聖 宋 元 宝	"	2.39 × 0.62 × 0.16	2.6	
334	325	判 読 不 能	I55ピットフク土	2.00 × 0.58 × 0.08	1.3	
335	326	元 ○ 通 宝	I54Ⅱ	2.48 × 0.66 × 0.18	2.2	
336	327	元 ○ ○ ○	"	2.44 × 0.62 × 0.19	2.4	
337	328	無 文 銭	I54Ⅱ上	2.05 × 0.66 × 0.10	0.8	
338	329	景 德 元 宝	I53Ⅱ上	2.43 × 0.62 × 0.13	2.9	
339	330	無 文 銭	"	- × 0.69 × 0.13	0.6	
340	331	判 読 不 能	"	2.44 × - × 0.12	-	
341	332	○ ○ 通 宝	"	- × - × 0.13	0.6	
342	333	無 文 銭	J54ピットフク土	1.70 × 0.79 × 0.08	0.4	
343	334	"	"	1.92 × 0.91 × 0.11	0.7	
344	335	熙 寧 元 宝	"	2.38 × 0.71 × 0.14	3.1	
345	336	判 読 不 能	I53SE27フク土	2.78 × 0.57 × 0.11	2.0	
346	337	無 文 銭	"	- × 0.92 × 0.07	0.2	
347	338	"	"	1.64 × 0.95 × 0.06	0.5	
348	339	"	"	1.76 × 0.82 × 0.07	0.5	
349	340	紹 聖 元 宝	I54Ⅱ上	2.385 × 0.59 × 0.135	3.5	

No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 さ (g)	備 考
350	341	判 読 不 能	J57Ⅱ上	— × — × 0.12	0.7	
351	342	“	I54ST84フク土	2.36 × 0.72 × 0.16	2.9	
352	343	嘉 祐 元 宝	J54ピットフク土	2.35 × 0.57 × 0.17	3.7	
353	344	聖 宋 元 宝	I53ST84フク土	2.43 × 0.55 × 0.12	2.5	
354	345	熙 寧 元 宝	I53SE27フク土	2.26 × 0.61 × 0.14	1.4	
355	346	判 読 不 能	J54SE28フク土	2.44 × 0.65 × 0.20	1.9	
356	347	無 文 銭	I54ST84フク土	2.15 × 0.63 × 0.095	1.5	
357	348	洪 武 通 宝	I53ピットフク土	2.335 × 0.565 × 0.15	2.3	
358	349	判 読 不 能	I53ピット床面	— × 0.545 × 0.17	1.7	
359	350	○ 元 通 宝	“	2.40 × 0.64 × 0.10	0.9	
360	351	洪 武 通 宝	I54SE21フク土	2.24 × 0.48 × 0.17	2.7	
361	352	○ ○ ○ 宝	I54ST84フク土	2.41 × 0.62 × 0.13	1.6	
362	353	開 元 通 宝	H54SE31フク土	2.35 × 0.55 × 0.11	2.5	
363	354	至 大 通 宝	“	2.355 × 0.56 × 0.195	3.1	
364	355	判 読 不 能	E55Ⅱ	2.30 × 0.63 × 0.12	2.7	
365	356	○ ○ 通 宝	I57SX33フク土	2.30 × 0.57 × 0.18	4.2	2枚接合
366	357	“	“	2.48 × 0.64 × 0.095		
367	358	○ 平 通 宝	F54SB03フク土	— × — × 0.14	0.9	
368	359	○ ○ 元 宝	G55SX39フク土	2.30 × 0.66 × 0.12	1.2	
369	360	天 禧 通 宝	H55SD18フク土	2.25 × 0.67 × 0.075	1.6	
370	361	“	“	2.48 × 0.63 × 0.16	2.8	
371	362	熙 寧 元 宝	F54ST76フク土	2.48 × 0.70 × 0.14	2.8	
372	363	洪 武 通 宝	J57ピットフク土	2.07 × 0.50 × 0.17	2.8	
373	364	判 読 不 能	“	2.28 × 0.58 × 0.11	1.6	
374	365	無 文 銭	“	1.92 × 0.73 × 0.80	0.7	
375	366	○ ○ 通 宝	“	2.16 × 0.67 × 0.22	—	
376	367	洪 武 通 宝	“	2.05 × 0.60 × 0.14	1.7	
377	368	元 豊 通 宝	“	2.42 × 0.68 × 0.12	3.0	
378	369	○ ○ ○ 宝	“	2.335 × 0.61 × 0.10	2.1	
379	370	無 文 銭	“	2.18 × 0.76 × 0.10	1.9	
380	371	熙 寧 元 宝	“	2.43 × 0.66 × 0.12	2.7	
381	372	永 樂 通 宝	H54SX23フク土	2.50 × 0.54 × 0.15	2.3	
382	373	無 文 銭	J55ピットフク土	1.72 × 0.96 × 0.06	0.4	
383	374	判 読 不 能	“	1.81 × 0.91 × 0.70	0.6	
384	375	無 文 銭	“	0.74 × 0.70 × 0.05	0.6	
385	376	元 ○ 通 宝	“	2.385 × 0.72 × 0.15	3.3	
386	377	聖 宋 元 宝	I55ピットフク土	2.40 × 0.59 × 0.135	2.7	
387	378	○ 武 ○ ○	J55Ⅱ	— × — × 0.13	—	
388	379	元 豊 通 宝	J55フク土	2.48 × 0.80 × 0.10	2.0	
389	380	政 和 通 宝	“	2.94 × 0.61 × 0.11	2.1	
390	381	無 文 銭	“	1.67 × 0.99 × 0.075	0.3	
391	382	○ ○ 通 宝	I56ピットフク土	— × — × 0.16	0.9	
392	383	判 読 不 能	K56ピットフク土	— × — × 0.12	0.3	
393	384	開 元 通 宝	I56ピットフク土	2.33 × 0.62 × 0.14	3.0	
394	385	○ ○ ○ 宝	G54SX44フク土	2.41 × 0.62 × 0.14	2.3	
395	386	洪 武 通 宝	G54ピットフク土	2.18 × 0.50 × 0.17	2.8	
396	387	無 文 銭	G55ピットフク土	1.635 × 0.86 × 0.07	0.5	
397	388	“	“	1.72 × 0.82 × 0.05	0.4	
398	389	判 読 不 能	“	2.38 × 0.65 × 0.14	3.4	
399	390	熙 寧 元 宝	F54ピットフク土	2.40 × 0.70 × 0.12	2.5	
400	391	永 樂 通 宝	H55SX48フク土	2.50 × 0.52 × 0.18	3.2	
401	392	政 和 通 宝	“	2.44 × 0.62 × 0.15	2.6	
402	393	宣 德 通 宝	“	2.50 × 0.52 × 0.13	3.4	
403	394	天 聖 元 宝	“	2.51 × 0.68 × 0.13	3.0	

No	C-No	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 さ(g)	備 考
404	495	嘉祐元宝	H55SX48フク土	2.41 × 0.70 × 0.13	2.9	
405	496	紹聖元宝	"	2.41 × 0.58 × 0.125	2.9	
406	497	聖宋元宝	"	2.42 × 0.63 × 0.13	2.9	
407	498	聖和通宝	E55■	2.42 × 0.56 × 0.12	3.3	
408	499	開元通宝	E55ピットフク土	2.34 × 0.63 × 0.14	3.4	
409	400	永樂通宝	"	2.53 × 0.57 × 0.18	3.8	
410	401	祥符元宝	"	2.38 × 0.62 × 0.12	2.9	
411	402	元祐通宝	"	2.30 × 0.77 × 0.12	2.7	
412	403	元符通宝	"	2.33 × 0.60 × 0.13	3.4	
413	404	政和通宝	"	2.38 × 0.61 × 0.15	3.1	
414	405	聖宋元宝	"	2.36 × 0.61 × 0.13	3.8	
415	406	天禧通宝	"	2.43 × 0.60 × 0.12	3.0	
416	407	皇宋通宝	"	2.38 × 0.71 × 0.12	2.9	
417	408	元祐通宝	E55■	2.38 × 0.56 × 0.11	2.9	
418	409	"	H55SX48フク土	2.46 × 0.67 × 0.18	3.0	
419	410	洪武通宝	"	2.42 × 0.56 × 0.16	2.2	
420	411	祥○通宝	"	2.49 × 0.65 × 0.16	-	
421	412	判読不能	M54地山	2.92 × 0.51 × 0.18	2.8	
422	413	洪武通宝	北館表採	2.24 × 0.55 × 0.12	1.5	
423	414	政和通宝	K56・57SE22フク土	2.41 × 0.56 × 0.14	1.8	
424	415	無文銭	L56ST58フク土	1.55 × 0.94 × 0.08	-	
425	416	"	"	1.75 × 0.74 × 0.60	0.5	
426	417	-	-	- × - × -	-	
427	418	○平通宝	F54ST76床面	- × - × 0.08	0.5	
428	419	○○通宝	I54SE21フク土	2.37 × 0.62 × 0.12	1.4	
429	420A	判読不能	北館表採	- × - × -	-	欠
430	421A	無文銭	I55ST67フク土	- × - × 0.055	-	
431	422A	鉄製古銭	L55SX12フク土	1.94 × 0.63 × 0.11	-	
432	420B	唐国通宝	PQ55フク土	2.45 × 0.605 × 0.12	3.1	
433	421B	元豊通宝	"	2.34 × 0.70 × 0.10	2.9	
434	422B	元祐通宝	"	2.26 × 0.68 × 0.11	2.7	
435	423	聖宋元宝	"	2.34 × 0.645 × 0.13	3.5	
436	424	元符通宝	"	2.48 × 0.62 × 0.13	3.4	
437	425	聖宋元宝	"	2.17 × 0.62 × 0.11	3.2	
438	426	元豊通宝	"	2.46 × 0.69 × 0.14	3.4	
439	427	天○○宝	"	2.49 × 0.62 × 0.145	1.2	
440	428	洪武通宝	"	2.30 × 0.59 × 0.15	2.5	
441	429	"	"	2.00 × 0.54 × 0.11	2.5	
442	430	無文銭	"	1.86 × 0.71 × 0.16	0.7	
443	431	"	"	1.69 × 0.85 × 0.09	0.7	
444	432	洪武通宝	"	2.17 × 0.785 × 0.10	1.3	
445	433	○○元宝	"	2.42 × 0.55 × 0.14	2.3	
446	434	判読不能	"	2.15 × 0.62 × 0.10	2.0	
447	435	無文銭	"	1.485 × 0.755 × 0.05	0.3	
448	436	洪武通宝	"	1.70 × 0.70 × 0.09	0.6	
449	437	判読不能	"	- × - × 0.11	0.4	
450	438	無文銭	"	1.91 × 0.73 × 0.10	0.7	
451	439	"	"	1.485 × 0.88 × 0.09	0.6	
452	440	至和元宝	"	2.36 × 0.64 × 0.16	3.3	
453	441	熙寧元宝	"	2.14 × 0.65 × 0.12	3.0	
454	442	判読不能	"	2.00 × 0.54 × 0.04	1.1	
455	443	天聖元宝	"	2.25 × 0.60 × 0.13	3.7	
456	444	無文銭	"	2.14 × 0.77 × 0.10	1.4	
457	445	"	"	1.95 × 0.69 × 0.055	0.9	

No.	C-No.	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 量(g)	備 考
458	446	洪 武 通 宝	PQ55 フク土	2.13 × 0.585 × 0.13	—	欠
459	447	無 文 銭	"	1.89 × 0.75 × 0.07	0.9	
460	448	紹 聖 元 宝	"	2.12 × 0.675 × 0.105	1.7	
461	449	洪 武 通 宝	"	2.33 × 0.56 × 0.18	3.4	
462	450	判 読 不 能	"	2.09 × 0.56 × 0.10	1.6	
463	451	無 文 銭	"	2.08 × 0.74 × 0.07	1.1	
464	452	阜 元 重 宝	"	2.53 × 0.15 × 0.13	3.1	
465	453	〇 元 通 宝	"	2.27 × 0.69 × 0.12	3.1	
466	454	洪 武 通 宝	"	2.00 × 0.60 × 0.11	1.0	
467	455	天 禧 通 宝	"	2.295 × 0.70 × 0.17	1.8	
468	456	無 文 銭	"	1.87 × 0.68 × 0.06	0.5	
469	457	元 豊 通 宝	"	2.12 × 0.64 × 0.13	3.7	
470	458	皇 宋 通 宝	"	2.45 × 0.76 × 0.11	2.6	
471	459	洪 武 通 宝	"	2.35 × 0.55 × 0.215	3.3	
472	460	無 文 銭	"	1.92 × 0.78 × 0.07	0.7	
473	461	"	"	1.72 × 0.87 × 0.09	0.7	
474	462	永 樂 通 宝	"	2.50 × 0.58 × 0.16	4.2	
475	463	洪 武 通 宝	"	2.24 × 0.60 × 0.13	2.8	
476	464	判 読 不 能	"	2.05 × 0.60 × 0.08	1.4	
477	465	皇 宋 通 宝	"	2.23 × 0.68 × 0.11	3.1	
478	466A	無 文 銭	"	2.085 × 0.74 × 0.09	0.9	
479	466B	洪 武 通 宝	"	1.85 × 0.58 × 0.09	1.1	
480	466C	無 文 銭	"	1.82 × 0.72 × 0.08	1.5	
481	467	元 豊 通 宝	"	2.06 × 0.56 × 0.10	2.7	
482	468	皇 宋 通 宝	"	2.20 × 1.00 × 0.11	2.7	
483	469	洪 武 通 宝	"	2.12 × 0.655 × 0.10	0.9	
484	470	〇 〇 通 宝	"	2.06 × 0.69 × 0.10	2.6	
485	471	至 和 元 宝	"	2.17 × 0.60 × 0.14	3.0	
486	472	無 文 銭	"	1.53 × 0.95 × 0.06	0.4	
487	473	判 読 不 能	"	2.20 × 0.74 × 0.10	1.7	
488	474	"	"	1.99 × 0.62 × 0.12	1.8	
489	475	洪 武 通 宝	"	2.05 × 0.54 × 0.14	3.0	
490	476	"	"	2.26 × 0.54 × 0.17	3.7	
491	477					欠 番
492	478	判 読 不 能	PQ55 フク土	2.34 × 0.67 × 0.11	2.3	
493	479	洪 武 通 宝	"	1.78 × 0.67 × 0.05	0.7	
494	480	皇 宋 通 宝	"	2.44 × 0.69 × 0.16	2.9	
495	481A	無 文 銭	"	1.55 × 0.74 × 0.04	0.5	
496	481B	"	"	1.68 × 0.72 × 0.04	0.5	
497	482					欠 番
498	483	判 読 不 能	PQ55 フク土	2.16 × 0.63 × 0.10	2.1	
499	484	天 禧 通 宝	"	2.34 × 0.62 × 0.12	3.5	
500	485	無 文 銭	"	0.74 × 0.67 × 0.07	0.9	
501	486	判 読 不 能	"	2.24 × 0.67 × 0.13	2.3	
502	487	洪 武 通 宝	"	2.02 × 0.56 × 0.14	2.8	
503	488	明 道 元 宝	"	2.29 × 0.62 × 0.11	3.8	
504	489	開 元 通 宝	"	2.20 × 0.60 × 0.13	3.5	
505	490	皇 宋 通 宝	"	2.40 × 0.66 × 0.11	3.1	
506	491	開 元 通 宝	"	2.28 × 0.67 × 0.11	3.1	
507	492	判 読 不 能	"	— × — × 0.11	—	
508	493	景 徳 元 宝	"	2.35 × 0.62 × 0.12	3.0	
509	494	洪 武 通 宝	"	1.92 × 0.69 × 0.14	1.7	
510	495	熙 寧 元 宝	"	2.26 × 0.65 × 0.10	3.5	
511	496	判 読 不 能	"	2.12 × 0.71 × 0.08	1.3	

No.	C-No.	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)cm	重 さ(g)	備 考
512	597	政和通宝	PQ55 フク七	2.24 × 0.645 × 0.11	3.5	
513	598	"	"	2.24 × 0.70 × 0.12	2.8	
514	599	景祐元宝	"	2.29 × 0.61 × 0.10	2.9	
515	500	洪武通宝	"	2.05 × 0.57 × 0.11	2.8	
516	501	無文銭	"	1.74 × 0.67 × 0.05	0.7	
517	502	"	"	1.93 × 0.66 × 0.05	0.8	
518	503	永楽通宝	"	2.28 × 0.54 × 0.12	2.9	
519	504	"	"	2.29 × 0.55 × 0.13	3.5	
520	505	元祐通宝	"	2.20 × 0.71 × 0.12	2.8	
521	506	判読不能	"	2.05 × 0.71 × 0.08	1.3	
522	507A	"	"	— × — × —	—	接着のため計測 不可能
523	507B	"	"	— × — × —	—	
524	507C	"	"	— × — × —	—	
525	507D	"	"	— × — × —	—	
526	507E	"	"	— × — × —	—	
527	507F	"	"	— × — × —	—	
528	508	景德元宝	"	2.28 × 0.60 × 0.12	2.9	
529	509	〇〇元宝	"	1.95 × 1.67 × 0.08	1.3	
530	510	無文銭	"	2.00 × 0.73 × 0.08	1.8	
531	511	"	"	1.94 × 0.79 × 0.08	1.7	
532	512	永楽通宝	"	0.30 × 0.54 × 0.14	4.6	
533	513	至道元宝	"	2.24 × 0.70 × 0.12	2.2	
534	514	永楽通宝	"	2.27 × 0.54 × 0.12	3.6	
535	515	天聖元宝	"	2.48 × 0.70 × 0.14	4.0	
536	516	洪武通報	"	1.12 × 0.57 × 0.10	1.9	
537	517	元祐通宝	"	2.18 × 0.61 × 0.14	4.2	
538	518	無文銭	"	2.01 × 0.75 × 0.08	1.1	
539	519	"	"	1.57 × 0.75 × 0.08	1.0	
540	520	紹聖元宝	"	2.18 × 0.66 × 0.08	3.2	
541	521	開元通宝	"	2.12 × 0.66 × 0.08	2.0	
542	522	洪武通宝	"	0.86 × 0.67 × 0.08	1.2	
543	523	開元通宝	"	2.18 × 0.71 × 0.09	2.3	
544	524	"	"	2.25 × 0.65 × 0.09	3.0	
545	525	天聖元宝	"	2.41 × 0.72 × 0.11	3.5	
546	526	洪武通宝	"	2.13 × 0.54 × 0.17	3.0	
547	527	無文銭	"	2.14 × 0.77 × 0.10	0.8	
548	528	洪武通宝	"	1.94 × 0.61 × 0.14	1.4	
549	529	開元通宝	"	2.20 × 0.70 × 0.12	1.6	



Ch. 75 縄文・弥生時代遺物注記表

No	F - No	PL	Fig.	名称	出土区	特 徴			備 考
441	P10067	63	-	縄文土器	E54Ⅱ	磨り消し縄文			後 期
442	P10123	"	-	"	"	"			"
443	P 9699	"	-	"	K55Ⅱ	"			"
444	P 9385	"	-	"	K57Ⅰ	"			"
445	P10143	"	-	"	E54Ⅱ	"			"
446	P10119	63	-	"	"	"			"
447	P10141	"	-	"	"	磨り消し縄文			"
448	P10136	"	-	"	"	"			"
449	P10117	"	-	"	"	"			"
450	P10071	"	-	"	"	磨り消し縄文			"
451	P10069	"	-	"	"	沈 線 文			晩 期
452	P 9700	"	-	"	K55Ⅱ	"			不 明
						計 測 値 (cm)	特 徴	石 質	備 考
453	S 89	63	94	石 斧	I54SE21フク土	11.5×6.1×2.2		泥 石	
454	S 14	"	"	"	L54Ⅰ	7.5×6.5×2.2	二次加工痕有り	緑色凝灰岩	
455	S 85	"	-	石 匙	I54Pitフク土	7.2×2.5×0.8		珪質夏岩	
456	S 104	"	94	片刃製 石 斧	G54SX23フク土	7.3×2.8×1.6	弥生時代	泥 石	
457	S 17	"	-	石 匙	H54Ⅱ	6.2×2.8×0.6		珪質夏岩	
458	S 101	"	-	石 鏃	J56Ⅱ	2.5×1.0×0.35		"	
459	S 46	"	-	"	K56Ⅱ	4.3×0.9×0.3		"	
460	S 94	"	-	石 匙	J57Ⅱ	7.1×5.0×1.6		"	
461	S 27	"	-	フレーク	K56Pit470フク土	4.5×3.9×0.4		黒 燧 石	
462	S 55	-	94	石 斧	I55ST64フク土	3.6×2.8×1.2		緑色凝灰岩	
463	S 23	-	"	"	PQ55 フク土	10.1×6.0×2.7		珪質夏岩	

Ch. 76 土師器・須恵器注記表

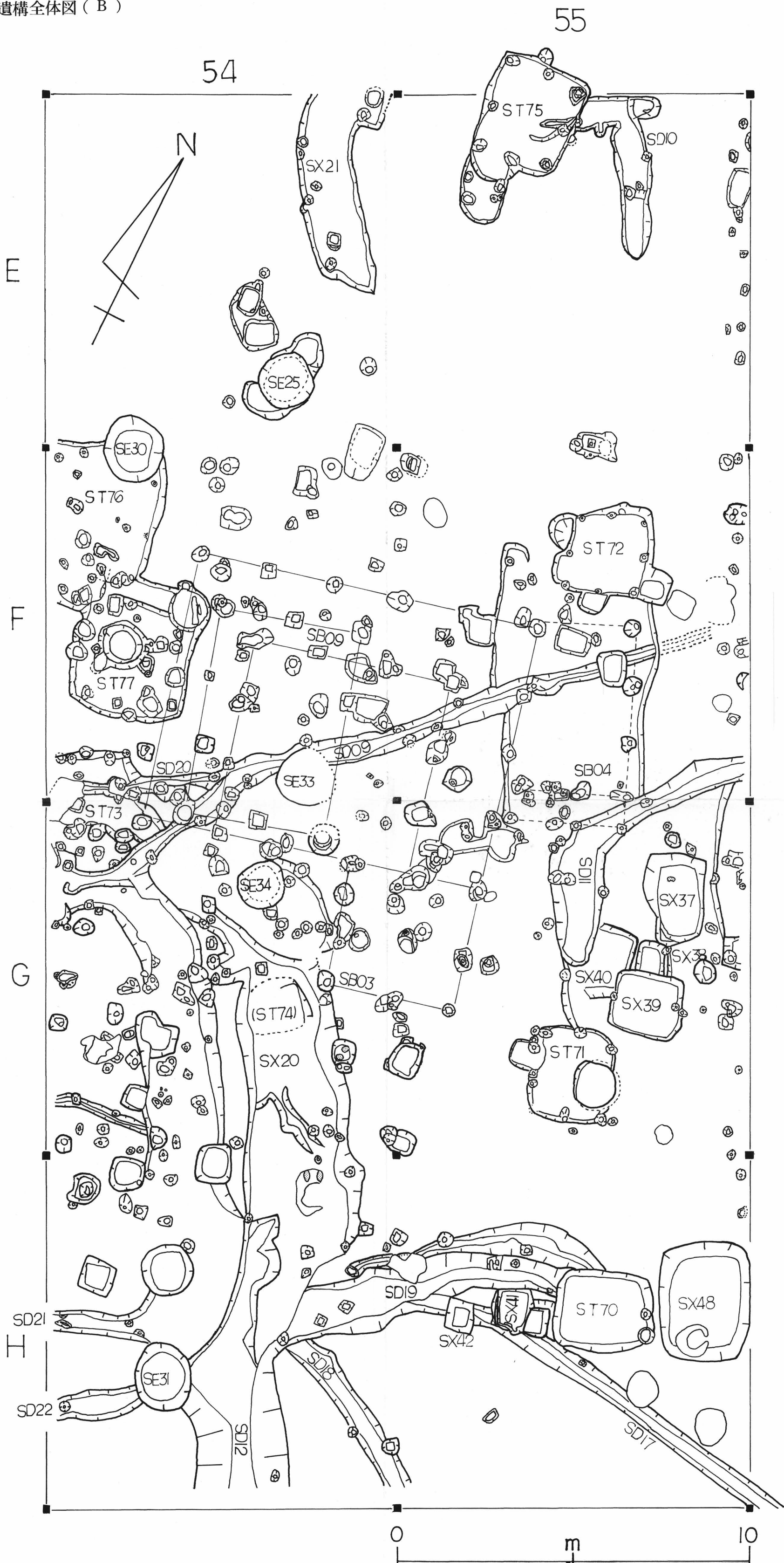
No	遺物 No	PL	Fig.	器 形	出土区	特 徴			備 考
464	P 2043	64	95	坏	G54SX23フク土	内黒。糸切底			
465	P 1220	"	"	"	K54SD16フク土	"			
466	P 1480	"	"	"	H54SX20フク土	糸切底			
467	P 819	"	"	皿 形	E54Ⅱ	"			
468	P 1516	"	"	"	H55Ⅲ	"			
469	P 1452	"	96	坏	G54SX20フク土	篋書記号有り			
470	P 1199	"	"	"	K54SD16フク土	火ダスキ有り			
471	P 1209	"	"	"	L54SD16フク土	"			
472	P 610	"	"	"	E55SD10床面	"			
473	P 2147 659	"	"	"	F55SD09フク土 G55SD11フク土	"			
474	P 587・731	"	"	"	H55Ⅱ	"			篋書記号有り
475	P 1177	"	97	壺	K57SX32床面	篋書記号有り			
476	P 1444	"	"	"	G54SX43フク土	"			
477	P 1481	-	95	坏	H54SX20フク土	糸切底			
478	P 251	-	"	"	L54Ⅱ	"			
479	P 1509	-	96	"	H54SX46	"			
480	P 3420	-	"	"	L54SD16フク土	篋書記号有り			
481	P 722	-	"	"	H55ST70フク土	"			火ダスキ有り
482	P 2163	-	"	"	G54SX23フク土	"			"
483	P 552	-	"	"	F55Ⅱ	"			"
484	P 2428	-	"	"	K54Ⅱ	"			"
485	P 5666	-	"	"	G54ST74フク土	"			
486	P 748	-	"	"	ST73 フク土	"			
487	P 314	-	97	壺	K54Ⅱ	"			

No	遺物 No.	Pl.	Fig.	器形	出土区	特徴	備考
488	P 821	—	97	小甕	F55Ⅱ	隆書記号有り	
489	P 6879	—	〃	甕	H54SX20フク土		

Fig.7 遺構全体図(A)



Fig.8 遺構全体図 ( B )





---

浪岡城跡Ⅳ

昭和57年3月25日印刷

昭和57年3月31日発行

発行 浪岡町教育委員会

印刷 鎌田綜合印刷

---